子規と節と左千夫

子規と節と左千夫

橋田東聲著

東京
富士書房版

子規の肖像

越後佐渡の旅よりの歸途下妻光明寺なる大銀杏の前にて

ハガキは三浦義晃氏宛

凡例

一、私は前に日本橋春陽堂から「土の人長塚節」及び正岡子規全傳の二書を刊行した。又紅玉堂から正岡子規歌集及び長塚節歌集の二小册子を出版した。それについては江湖多數の親切なる反響に接したが、本書の述作は、概ねそこに原因するものといつてよい。即ち本書の子規篇並に節篇は右諸著の增補を目的として執筆されたものである。

一、左千夫篇はすべて新しく書いた。一體、私は左千夫は、子規並に節と異り、生前その人から交誼を得てをり、比較的よく知つてゐる譯であるが、緣がなくてこれまで書いたことも、講演したこともない。その爲、今度の記述も不備である。小說のこと、歌論のことなど、紹介したいことは多々あるが、本書のページもすでに豫定を超過してゐる。一先づこゝに筆を擱く。併し左千夫篇だけは他日增補したい希望をもつてをる。七高時代に左千夫の小說に感激して手紙を送り返信を貰つた時などの嬉しさはこれを忘れることが出來ない。

一、去年の歲晚に脫稿するつもりのところ、近時公私すこぶる多忙、ついつい遲延してしまつた。

第一篇の子規篇を校正しつゝ、第三篇の左千夫篇を書いてゐる始末である。ちよつと、圖書館まで行けば、この疑問が解かれるものを、と思ひながら、時がないのである。全く、寸陰を惜んで書いてをる。しかも世事多く、日の過ぐる、徒に早くして、おもふに任せぬ。定めし不備が多いであらう。誤謬脫漏もあるであらう。希くば、大方の讀者諸賢、示敎を惜まれざらんことを。

一、口繪の寫眞の一部は千葉の蕨直治郎氏、茨城の三浦義晃氏、福田政信氏、倉持泉秋氏の寄贈にかゝる。なほ手紙をよせて私を激勵して下された江湖未知已知の諸君、親切な示敎を惜まれなかつた多くの諸氏があつた。今一々その名をこゝに擧げないが、記るして謝意を表したい。

昭和四年紀元節

東京市外大森に於て

著　者　識

子規と節と左千夫　目次

子　規　篇

節　篇

左千夫篇

補遺篇

子規篇

第一章　生地獄

一　生命の創造

病氣のために苦しんだ文人學者は古來少くない。近いところでも、樗牛、兆民、梁川、獨步、啄木、節など皆さうである。夫れぞれ苦しい病床生活の後に死んで行つた。けれども正岡子規のやうに悲慘な病床生活を送つたのではなかつた。子規にくらぶれば物の數でもない。

子規の病氣は病氣そのものの疼痛がひどかつたばかりでなく、その期間があまりにも長かつた。明治二十八年、日清戰爭の歸途、船中に喀血し、翌年三月に結核性脊髓炎の診斷をうけてから三十五年九月に死ぬるまで、前後七年の長きにわたり、しかも三十一年頃からは彼のいはゆる「六尺の病床」に釘付にせられ、足一步も門外にいづる能はざる身となつてしまつたのである。その苦しみは以下に引用する彼の記述によりて明かであるが、彼がみづから阿鼻叫喚の生地獄だといつたのも決して言ひ過ぎではない。

私はおもふ。子規はその强靱な意力を以て病魔と戰ひつゝ、自分で『自分の生命を創造』したのであらうと。自分で、自分の生命を創造するといふが如きは醫學的に考へても、奇とするに足らぬ事實であらうと私はおもふのであるが、私は子規の生活をつく〴〵考へて、どうしても斯く考へざるを得ぬのである。みづから創造したのだ！　みづからいのちを生きのばしたのだ!!　私はかう考へてゐる。でなくては、あの日に月に朽ち死んで行く肉體の中に、生きのいのちの宿り存してあるべき道理がないとおもふ。

二『十月十五日記事』

彼が晩年の隨筆に「墨汁一滴」「病床六尺」「仰臥漫錄」等のあることは、更めていふまでもないであらうが、彼の悲慘な病床生活は遺憾なく、之等の日記風の隨想錄中にあらはれてゐる。「墨汁一滴」は三十四年、「病床六尺」は三十五年の記であるが、「仰臥漫錄」は年月がはつきりしない。但し三十四年から三十五年へかけてであらうと推定せられてゐる。其外三十三年のものに、「十月十五日の記事」があつてこれが又その頃の病狀をよく說明してゐる。以下、之等の隨筆から摘錄する。

三十三年(死の前三年)の記事。

「十月十五日記事」より。

予が病體の衰へは一年一年と漸く甚しく、この頃は睡眠の時間と睡眠ならざる時間との區別さへ明瞭に判じ難き程なり。

○

予は右向に臥し帯を解き繃帯の紐を解きて用意す。繃帯は脊より腹へ卷きしもの一つ、尻を蔽ひて足につなぎたるもの一つ、都合二つなり。

妹は予の後にありて臀部をやはらかき綿にて拭ふも殆んど堪へ難し。もし少しにても強くあたる時は死聲を發す。

○

膿を拭ひ終れば油藥を塗り、脱脂綿を掩ひ、その上に油紙を掩ひ、又其上に只の綿を掩ひ、其上を又清潔なる木綿の繃帯にて掩ひ、それにて事すむなり。此際は浣腸するを例とす、今日は浣腸せず。便通よし。

○

繃帯後のくたびれにて又枕につく。今日は暖かなれば此室の掃除をなさんかと母問ふ。余同

意す。母は座敷に床を設けて移れといふ。僅に一間ばかりなれど千里を行く思ひして、容易には思ひたたれず、やつとの思ひにて四つ這ひになる。されど左の脚痛みて動かず。左の膝に節の下に足の布團といふ一尺ばかりの小布團をしきて、そのまゝ一分刻みにずり行く。敷居の難所を越えて、一間の道中恙なく座敷の寐床につく。蒲團の上に這ひ上りて今度は足を障子に向けて北枕に寢ぬ。珍しき運動に腹倦にへりたる心地してうれし。母は掃除せんと箒持ちしまゝ、病室の端に佇みて、外をながめながら、上野の運動會の聲が聞えるよと獨り言をいふ。

たゞこの一節だけよんでも子規の病床生活はわかるであらう。「僅に一間なれど千里をゆく思ひして」などよくよく翫味すべきである。「上野の運動會の聲が聞えるよ」と母の獨り言いふところ、何といふ巧みな寫生であらうか。

この「十月十五日の記事」は相當に長い文章である。このあとに尙庭の寫生、室内の寫生があり、さて最後に次の文が附記されてをる。

喀痰一晝夜の量、二個のコップに六七分位宛、睡眠の時は仰臥なり。

ねむる時は左向きよりも右向きの方よろしけれど苦し。

左足かゞまりて立てず。

沐浴せず。アルコールにて一日に三度位宛拭ふ。但し足さきのあかはアルコールにてはとれず。

斬髪は一月に一度位づゝ呼んでして貰ふ。

食器は家人のものと別にす。客人のは勿論の事なり。

郵便は日に二三通あるべし。

此の日熱平常なり。此の日、平日よりも仕事餘計に出來たる也。いつもよりも氣持よかりし爲めなるべし。

この病苦にあつてなほ仕事の進捗せしことを喜んでをる。そこに彼の面目がある。又斯様な病氣に罹つては病人のつらいことはいふまでもないが、家人の看護も並大抵の辛勞ではない。よくもこんなに世話されたものだと私はいつも母堂や妹さんのことを思ふ。

三 『墨汁一滴』

三十四年になると病氣は漸く惡化し、遂に腰から臀部にかけて七つの瘻口が出來、そこから出る膿汁がたえず衣や蒲團をよごした。激しい疼痛は殆んど病人を狂せんばかりに苦しめた。彼は

苦しさのあまり、叫び、おらび、はては聲をあげて泣いた。

それでも病間筆をとつて短文を草し、新聞に出して自らの慰めとした。三十四年一月二十日から新聞に出た。かの「墨汁一滴」がそれである。今この中から二三を摘錄する。

○

ガラス玉に金魚を十ばかり入れて机の上に置いた。余は痛みをこらへながら病床からつくづくと見てゐる。痛いことも痛いが、綺麗なことも綺麗ぢや。（四月十五日）

○

可笑しければ笑ふ。悲しければ泣く。併し痛みの激しい時には仕様がないから、うめくか、叫ぶか、泣くか、叉は默つてこらへるかする。其中で默つてこらへるのが一番苦しい。盛んにうめき、盛んに叫び、盛んに泣くと少しく痛が減ずる。（四月十九日）

○

諸方より手紙下され候諸氏へ一度に御返事申上候。小生の病氣につきいろ〳〵御注意下され、或は深山にある何やらの草の根を煎じて呑めば病立どころになほると言はるゝあり、或は人膽は萬病にきく故チャン〳〵の膽もて練りたる人膽丸をやらうかといはるゝもあり、或は何がし

の神を信ずれば病氣平癒疑ひなしといはるゝあり、或はこの病にきく奇體の灸點あり幸にその灸師唯今田舍より上京中なれば來て貰ふては如何などいはるゝあり或は……（中略）など、わざわざ書を寄せられ、兎角の御配慮にあづかることまことに有難き次第にてそゞろ感涙にしづみ申候。乍併、遠地の諸氏は勿論、在京の諸氏すら小生の容體を御存じなき方多き故却つて種々の心配をかけ申候事と存じ候。小生の病氣は單に病氣が不治の病なるのみならず病氣の時期がすでに末期に屬し最早如何なる名法もいかなる妙藥も施すの餘地無之、神樣の御力も或は難及かと存居候。小生今日の容體は非常に復雜にして小生自身すら往々誤解致居る次第故とても傍人には說明致し難く候へども先づ病氣の種類が三種か四種か有之、發熱は每日、起つことも坐ることも出來ぬは勿論、この頃では頭を少しもたぐることも困難に相成り、又疼痛のため寢返り自由ならず蒲團の上に釘付けにせられたる有樣に有之候。疼痛烈しき時は右に向きても痛く、左に向きても痛く、仰向けになりても痛く、まるで阿鼻叫喚の地獄もかくやと思はるゝばかりのことに候。かつ容體には變化極めて多く、今日明日をはからず今朝今夕をはからずといふ有樣にてこの頃は引續いてよろしいと申す樣な事は無之それ故人に容體をたづねられたる時、答辭に窮し申候。「この頃はよい方です」とは普通に人に答ふる挨拶なれども何の意味もなき語に

イタ」の叫び聲が屢々戸外に洩れ、道ゆく人の耳に聞えたといへば、彼がいかに大聲をあげてアイタを叫んだかゞ想像される。「はては泣くこと例の如し」苦痛にたへかねて、遂に泣くのである。疊に麻紐の環をつくり、天井よりは力紐の綱を下げ、これを寢返る時の便に供したといふ、いかに彼の病臥の生活の悲慘なものであつたかを察すべしである。

○

「墨汁一滴」の中には隨筆の中に、歌もある。

佐保神の別れかなしも來ん春にふたゝび逢はんわれならなくに

以下十首のうたには、「しひて筆とりて」といふ題のやうな、前書のやうな一句がそへてあるが、このみじかい句にも、彼の苦しい病床生活はうかがはれる。「しひて」といふ一語を玩味すべきである。

この一聯は、歌としても子規の作中最も秀れたものに屬する。次に之を記るして置く。實に、あはれな、氣の毒な歌である。

いちはつの花咲きいでて我目には今年ばかりの春行かんとす

病む我をなぐさめがほに開きたる牡丹の花を見れば悲しも

世の中は常なきものと我愛づる山吹の花散りにけるかも
別れゆく春のかたみと藤波の花の長ふさ繪にかけるかも
夕顔の棚つくらんと思へども秋まちがてぬ我いのちかも
くれなゐの薔薇ふゝみぬ我病いやまさるべき時のしるしに
薩摩下駄足にとりはき杖つきて萩の芽つみし昔おもほゆ
若松の芽だちの緑長き日を夕かたまけて熱いでにけり
いたつきの癒ゆる日知らにさ庭べに秋草花の種を蒔かしむ

四 『病 床 六 尺』

三十五年に入ると、病勢は益昂進して、彼は晝夜をわかたず襲ひ來る激痛のために惱み、苦しんだ。この消息は五月五日にはじまり、死の前々日まで書きつゞけた日記的隨筆「病床六尺」によくあらはれてゐる。「病床六尺」は「墨汁一滴」「仰臥漫錄」と共に、最も秀れた子規の文章であるが、今この中から、彼の病狀を知るに足る部分を左に拔萃する。

○

爰に病人あり。體痛み且つ弱りて身動き殆ど出來ず。頭腦みだれ易く、眼くるめきて書籍新聞など讀むに由なし。まして筆を執つて物を書くことは到底出來得べくもあらず。而して傍に看護の人なく、談話の客なからんかいかにして日を暮すべきか、いかにして日を暮すべきか。

（六月十九日）

○

病床に寢て、身動きの出來る間は、あへて病氣をつらしとも思はず、平氣で寢ころんで居つたが、この頃のやうに、身動きが出來なくなつては、精神の煩悶を起して、殆んど毎日氣狂のやうな苦しみをする。この苦しみを受けまいとおもふと、色々に工夫して、或は動かぬ體を無理に動かしてみる。愈煩悶する。頭がムシャ〳〵となる。最早たまらんので、こらへにこらへた袋の緒は切れて、遂に破裂する。もう斯うなると駄目である。絶叫。號泣。益絶叫する。益號泣する。その苦、その痛、何んとも形容することは出來ない。むしろ眞の狂人となつてしまへば樂であらうと思ふけれどそれも出來ぬ。もし死ぬることが出來ればそれは何よりも望むところである。しかし死ぬることも出來ねば殺してくれるものもない。一日の苦しみは夜に入つて漸く減じ、わづかに眠氣さした時にはその日の苦痛が終ると共に、早や翌朝寢起きの苦痛が思

ひやられる。寢起ほど苦しい時はないのである。誰かこの苦を助けてくれるものはあるまいか。誰かこの苦をたすけて呉れるものはあるまいか。（六月二十日）

○

「いかにして日を暮すべきか」「誰かこの苦を救ふてくれる者はあるまいか」玆に至つて宗教問題に到着したと宗教家はいふであらう。しかし宗教を信ぜぬ余には宗教も何の役にも立たない。基督教を信ぜぬものには神の救ひの手はとゞかない。佛教を信ぜぬ者は南無阿彌陀佛をくりかへして日を暮らすことも出來ない。或は晝本を見て苦痛をまぎらしたこともある。併しいかに面白い晝本でも毎日毎日同じものを繰り返してみたのでは、十日もたたぬうちに最早陳腐になつて再び苦痛をまぎらかす種ともならない。或は雙眼寫眞を弄んで日を暮らすこともある。それも毎日見てはだん〳〵に面白味が減じて、後に頭のいたむ時など却つて頭を痛める料になる。何よりもうれしきは親切なる友達の看護してくれることであるが、それも屢出會ふては割に新しき話もないので、病人も看護人も兩方が差し向うて一はたゞ苦しむ一はその苦しみを見て心に苦しむやうになる、去年頃までは唯一の樂みとしてをつた飲食の慾も、今は殆んど消え去つたのみならず、飲食そのものが却つて身體を煩はして、それがために晝夜もがき苦しむことは

近來珍しからぬ事實となつて來た。或は謡をきく。或は義太夫を聽いて樂んだのは去年のことであつたが、今は軍談師をよんで來やうか、活動寫眞をやらして見やうかとの友達の親切なる慰めは却つて聞くさへも頭を痛めるやうになつた。大勢の人を集めて、これと室を共にすることも苦しみの種である。謡の聲、三味線の音、はるかの遠音をきけばこそ面白けれ、枕元近くにては其音が頭に響き、甚しきはわが呼吸さへ他の呼吸に支配せられて非常に苦痛を感ずるやうになつてしまふた。畢竟自分と自分の周圍と調和することが甚だ困難になつて來たのである。痲痺劑の十分に効を奏した時はこの調和がやゝ容易であるが、今はその痲痺劑が十分に効を奏することが出來なくなつた。余は實に斯樣な境界に陥つてゐるのである。何時見ても同じ病苦談、聞く人には馬鹿々々しくうるさいであらうが、苦しいといふより外に仕方もなき凡夫の病苦談「いかにして日を暮すべきか」「誰かこの苦を救ふてくれる者はあるまいか」情ある人わが病床に來つて余に珍らしき話など聽かさんとならば、謹んで余はために多少の苦を救はるゝことを謝するであらう。余に珍らしき話とは必ずしも俳句談にあらず、文學談にあらず、宗敎、美術、理化、農藝、百般の話は知識なき余にとつて、悉く興味を感ぜぬものはない。たゞ斷つて置くのは差し向ふて坐り乍ら何も話のない人である。(六月二十一日)

○

彼の病氣は次第に彼の生命に食ひ込みつゝあつた。けれども、彼は「病床六尺」を書くことを唯一の慰安としてゐたもの〻如く、六月から七月にかけても、毎日のやうに文をつゞつた。それには芝居のこともあれば、盆裁のこともあり、俳句の批評もある。或日の記には、生活費と收入との關係を論じて、これをいかにすべきか、乞ふ世の經濟學者に問へなどと書いてある。又病氣の看護のことから、女子に常識の必要を論じて女子敎育に及んでゐる項もある。

併し八月に入つてからは日記をあまり書いて居らぬ。書けなかつたのであらう。

九月十一日卽ち永眠七日前の記に

一日のうちに我痩足の先俄に腫れ上りてブクブクとふくらみたる其の樣、火箸のさきに德利をつけたるが如し。醫者に問へば病人には有勝の現象にて血の通ひの惡しきなりといふ。兎に角に心持よきものにあらず。

とあるが、もうこの頃になると脚に水をもつやうになつてゐた。しかも彼は「病床六尺」の筆をたゝぬ、遂に死ぬ前々日までつゞけてをる。九月十二日以後の記事を左に拔いて置く。

○

支那や朝鮮では今でも拷問をするさうだが、自分はきのふ以來晝夜の別なく五體隙なしといふ拷問をうけた。このことは話にならぬ苦しさである。（九月十二日）

○

人間の苦痛は餘程極度へまで想像せられるが、併しそんなに極度にまで想像したやうな苦痛が自分のこの身の上に來るとは一寸想像せられぬことである。（九月十三日）

○

足あり、仁王の足の如し。足あり、大盤石の如し。わづかに指頭を以てこの脚頭に觸るれば天地震動、草木號泣。女媧氏未だこの足を斷じ去つて五色の石を作らず。（九月十四日）

五『仰臥漫錄』

子規の日記風の漫畫入り隨筆に「仰臥漫錄」といふのがある。題名の示す通り、仰臥したまゝで、おもふまゝ、感ずるまゝを書きとめた隨想錄である。晩年のものであることは、その文によつて明かであるが、年月ははつきりしない。併し凡そ死の前の年、即ち明治三十四年から翌年へかけてのものであらうといふことになつてゐる。

病中の子規は門弟や客人が來て、めづらしい話をしてきかせることをよろこんだが、三十四年、三十五年になると、漸く來客をいとふ風が見える。食べ物は、彼が唯一の慰安であり、養生法であると自ら稱してゐるほどで、死に近づいてもなかなか衰へてゐず、その健啖驚くべきであるが、それでも三十五年に入ると、だん／＼に衰へて、どうかすると腸をこはしてゐる。

病魔は次第々々にその力を逞しうして、彼の痩軀に食ひ入つて行つた。殆んど生ける屍を床の上に横へてゐたのである。「仰臥漫錄」は斯うしたみじめな病床生活裡の産物で、殆んど卒讀に堪へないところがある。次の如きはその著しい一例である。

十月十三日　大雨恐シク降ル　午後晴

今日モ飯ハウマクナイ晝飯モスギテ午後二時頃天氣ハ少シ直リカケル律ハ風呂ニ行クトテ出テシマウタ母ハ默ツテ枕元ニ坐ツテ居ラレル余ハ俄ニ精神ガ變ニナツテ來タ「サアタマラン／＼」「ドウシヤウ／＼」ト苦シガツテ少シ煩悶ヲ始メルイヨ／＼例ノ如クナルカ知ラント思フト益亂レ心地ニナリカケタカラ「タマラン／＼ドウシヨウ／＼」ト連呼スルト母ハ「シカタガナイ」ト靜カナ言葉、ドウシテモタマランノデ電話カケウト思ツテ見テモ電話カケル處ナシ遂ニ四方太ニアテヽ電信ヲ出スコトトシタ母ハ次ノ間カラ賴信紙ヲ持ツテ來ラレ硯箱モヨセラ

逆上スルカラ目ガアケラレヌ、目ガアケラレヌカラ新聞ガ讀メヌ、新聞ガ讀メヌカラ只考ヘル、只考ヘルカラ死ノ近キヲ知ル、死ノ近キヲ知ルカラソレ迄ニ樂ミヲシテ見タクナル、樂ミヲシテ見タクナルカラ突飛ナ御馳走ヲ食フテ見タクナル、突飛ナ御馳走モ食フテ見タクナルカラ雜用ガ欲シクナル、雜用ガ欲シクナルカラ書物デモ賣ラウカトイフコトニナル……イヤ〳〵書物ハ賣リタクナイ、サウナルト困ル、困ルトイヨ〳〵逆上スル

このところの連想は餘程落ちつきが出來、自らを客觀する位の餘裕は出來てゐるが、併し突飛な御馳走が食ひたかつたり、書物を賣らうかと思ひついて、イヤ〳〵書物は賣りたくない、書物を賣れば困ると思ひかへすところなど、いかにも子規らしく、又その突きつめた心根がいぢらしくも、氣の毒に文字の上ににじみ出してゐる。

そしてその後に

小刀と

千枚通しの錐

とのスケッチを並べて描き、（この畫がまたなか〳〵うまい）、畫の上の方に

古白曰來

の四字をかいてある。これは「古白曰ク來レ」と訓むのだらうと思ふ。古白といふのは藤野古白のこと、子規の郷友であり俳友であり、また、彼の從弟である。非常な秀才で子規と共に郷黨から將來を囑目されてゐたが、子規が從軍記者として滿洲に出征中東京で自殺してしまつた。原因はよくわからない。

子規はこれを歎いて「藤野古白」といふ一篇の追悼文を草し、又その遺稿を編んでゐるが、とにかく少年時代からの深い間柄であつた。で、病氣に苦しみ、思ひが亂れては、今はあの世にゐる彼れ古白が、手招きして自分を、早く來い〱と呼ぶやうに聞えたのであらう。この心持を、ふと、書き記したのが、この「古白曰來」の四文字であらうと思ふ。

戰慄なくしては讀み難き一節である。

「仰臥漫錄」については、述べたいことも、まだ多いが、今は右だけに止める。中に、俳畫風のスケッチをしては傍らに詠みッ放しの句を書いたところが數ケ所あるが、畫もおもしろく、句も亦おもしろい。

蓋し珍品である。原稿は根岸子規庵に保存せられてある。私は今年（三年）九月、三越で催された子規の遺品遺墨展覽會で、その一部を見たことである。

第二章　子規の死

一　大往生

さすがに勇猛なる子規の意力も「時」の力には勝てなかつた。いかに鬪ひ、いかにあらそふとも、執拗な病魔の手は遂に驅逐することが出來なかつた。

かくて彼は、人の世の病苦のかぎりを嘗めつくした後に、遂に、明治三十五年九月十九日の早曉眠るが如く、むしろ眠より覺むることなく、そのまゝに逝いてしまつたのである。

それは、まことに昔の英雄や大智識の死にも見出し難い程の雄々しくも、靜かな、立派な死であつた。子規は既成宗敎には佛敎にも基督敎にも、その他の宗敎にも信仰をもたなかつたが、今かゝる安らかなる死を遂ぐるを見れば、彼はあきらかに信仰に活きてゐたのであらう。その信仰は何であるか。私はおもふに、それは藝術文學に對する彼の信念であつたにちがひない。何の屈托もなく、苦しみもなく、文字通り眠るが如くに、大往生を遂げたのは、わが子規子の最後であ

つた。

前後七年の病苦は、彼に於ては苦難の限りであつたが、それがために彼は信念を深め、彼の人格を高くした。彼の藝術や事業は實にこゝに出發する。

二　辭世の句

死に先立つ十時間、子規は妹さんと碧梧桐に手傳はせて、枕頭の畫板の上に、かの辭世の三句を書き遺した。即ち

糸瓜咲て痰のつまりし佛かな
痰一斗糸瓜の水も間にあはず
をとゝひのへちまの水もとらざりき

これは有名な句であるから誰でも知つてゐるが、これを書いた時の子規の樣子は碧梧桐の文によりて知るに如くはない。それは碧梧桐の「君が絶筆」なる一文であるが、こまかい寫生の筆でその日の子規子の面影を躍如たらしめてゐる。左に轉載する。

○

十八日（九月）の朝の十時頃であつたか。どうも樣子が惡いといふ報知に胸を躍らせながら、早速馳けつけたところ、丁度枕邊には陸氏令兄と妹君がゐられた。余は病人の左側近くへ寄つて、「どうかな」といふと、別に返事もなく、左手を四五度動かしたばかりで、しづかにいつもの儘仰向けに寢てゐる。あまり騷々しくては、わるいであらうと、余は口をつぐんで、そこに坐り乍ら、妹君と醫者のこと、藥のこと、今朝は痰のきれないで困つたこと、宮本へ痰のきれる藥をとりにやつたこと、高濱をよびにやつたかどうかといふことなどを話をしてゐた時に

「高濱もよびにおやりや」

と病人が一言いつた。よつて余はすぐに陸氏の電話口へ行つて高濱へ大急ぎで來いといふて歸つてみると、妹君は病人の右側で、墨を磨つてをられる。やがて例の畫板に唐紙のはりつけてあるのを、妹君がとつて、病人に渡されるから何かこの場合に、書けるのであらうかと、苦心しながらも、余はいつも病人の使ひなれた軸も穗も細長い筆に十分墨をふくませて、右手へわたすと、病人は左手で板の左下側を持ちそへ、上は妹君にもたせて、いきなり中央へ

「へちま咲て」

とすら〳〵と書きつけた。然し「咲て」の二字はかすれて少し書きにくさうにあつたので、こゝで墨をついで、又渡すと、今度は「へちま咲て」より少し下げて

「痰のつまりし」

まで一息に書いた。字がかすれたので、又墨をつぎながら、次ぎは何と出るかと、暗に好奇心に驅られて板面を注意してゐると、同じ位の高さに

「佛かな」

と書かれたので、余はおぼえず胸を刺されるやうに感じた。書き了つて投げるやうに筆をすて乍ら、横を向いて、咳を二三度續けざまにして、痰がきれぬので、いかにも苦しさうに見えた。妹君は板を横へ片づけながら、そばに坐つて居られたが、病人はなんともいはない。無言である。又咳が出る。こんどは切れたらしく、反古でその痰を拭ひとり乍ら妹君にわたす。痰はこれまでどんなに苦痛の烈しい時でも必らず設けてある痰壺を自分でとつて、吐き込む例であつたのに、今日はもうその痰壺をとる勇氣もないと見える。この間四五分經つたとおもふと、無言に前の畫板をとりよせる、余も無言で墨をつける。今度は左手を畫板に持ち添へる元氣もなかつたのか、妹君に持たせたまゝ、前句「佛かな」と書いたその横へ

「痰一斗糸瓜の水も」

と、「水も」を別行に認めた。こゝで墨をつぐ。すぐつぎへ

「間にあはず」

と書いて、やはり抛げ棄てるやうに筆を置いた。咳は二三度出る。いかにもせつなさうなので、余は以前にまして動悸が打つて胸がわく〳〵してたまらぬ。又四五分も經てから、無言で板をもたせたので、余も無言で筆をわたす。今度は板の持ちかたが、少し具合がわるさうであつたが、そのまゝ筋違ひに

「をとゝひの糸瓜の」

と、「糸瓜の」は行をかへて書く。余は墨をこゝでつぎながら、「と」の字の上の方が、「ふ」の字のやうに、その下の方が、「ら」の字の略したものゝやうに、見えるので、「をふらひのへちまの」とは何の事であらうと聊か怪みながら見てゐると、次ぎを書く前に自分で「ひ」の上へ「と」と書いて、それが「い」の上へはいるものゝやうなしるしをした。それで始めて「をとゝひの」であると合點した。そのあとは直ぐに「へちまの」の下へ

水も

と書いて

取らざりき

はその右側へ書き流して、例の通り筆を抛げすてたが丁度穂の方が先きに落ちたので、白い寢床の上へ少しばかり墨の跡をつけた。余は筆を片づける。妹君は板を障子にもたせかけられる。しばらくは病人自身もその字を見てゐる樣子であつたが、余はこの場合、その句に向つて何といふべき考へも浮ばなかつた。が、もうこれでお終ひであるか、紙には書く場所はないやうであるけれども少し心待ちにして硯のそばを去ることが出來なかつたが、その後再び、筆を持たうともしなかつた………。

何んといふ靜かな光景であらう。これが死に直面してゐる人の動作と思へるであらうか。彼には今や少しの焦躁もなく、悶えもない。たゞたゞ靜かに瞑目してゐるのみである。この辭世の三句の實物を私は今年（三年）九月二十日に三越の子規遺品展覽會で見たのであるが、それは實に、確かな、しつかりした運筆であつた。決して死に直面せる人の筆とは見えない。この落着はどこから來たものであらうか。それは前後七年にわたる病苦のたまものであらう。あの恐しい試練の後に得られた靜觀の深さでなくてはならぬ。この沈着、この平靜、あのやうな酷い境涯に身

を置きながら最期にあたつて少しも周章狼狽しなかつた子規のえらさは藝術即ち宗教の域におのづから到り得たものでなければ期し難いものであらうと思はれる。

子規はたしかに病氣を克服してゐた。

三　臨　終

いよ〳〵臨終が來た。その時の有様は虛子の筆によつて、いかにもあり〳〵と、今眼前に見るやうに描かれてゐる。それは虛子の「子規居士と余」の中に揭げられてあるが、右の碧梧桐の文と相俟つて、二大門弟による、この文豪の最後を飾る二大文獻であらうとおもふ。ぜひとも、これ無くては叶はぬ底の意義ある文章である。煩をいとはず、之をこゝに轉載するゆゑんは、あまりによくその夜の有様を寫し出してゐる爲である。

〇

十五日から十七日までのことは記憶が朧氣であるが、十八日の午前であつたか、午後であつたか、余等が枕頭に控へてゐると居士は數日來同じ姿勢をとつたまゝで音もなく眠つてゐた。そこへ宮本仲氏――醫師――が見えて

「どの邊が苦しいのですか」

と聞いた。

「この邊いちめんに……」と居士は左の手で胸のあたりを教へた。胸部には水が來て居つたが手の方はやせたまゝであつたので、殆んど骨に皮を着せたやうな大きな手をひろげるやうにしてその胸部を教へた時の光景が身にしみこんでゐる。

「さうですか。それでは樂にして上げますよ」

と宮本氏は子供にでもいつて聞かすやうな調子でいつて、何か粉藥を服用させた。それもガラス管で水を吸ひあげるやうにして呑んだのであつた。

それから居士も眠つたやうであつた。枕頭にゐる我等もだまりこくつて居た。沈鬱な空氣が室に漂つてゐた。それからしばらくして居士は又眼をさまして、口が乾くのであらう。

「水……」といつた。妹君は先刻吸用した時のやうに矢張ガラスの管で呑ませた。居士はそれを含んでから

「今誰が來ておいでるのぞい」ときいた。妹君は枕頭にかたまつてゐた我等の名をよみ上げた。

それからしばらくの間の事は記憶してゐない。たしかに余は他の人と交替して一應自分の家

に引取つたものかと思ふ。

その十八日の夜は皆歸つてしまつて、余ひとり坐敷に床をのべて寢ることになつた。どうも寢る氣がしないので、庭に下りてみた。それは十二時頃であつたらう。糸瓜の棚の上あたりに明るい月がかゝつてゐた。余はだまつてその月を仰いだまゝ不思議な心持に閉ざされてしばらく突立つてゐた。

やがて又坐敷に戻つて病床の居士をのぞいてみるとよく眠つてゐた。

「さあ淸さん、お休み下さい、又代つてもらひますから」と母堂がいはれた。母堂は少し前まで臥せつてゐられたのであつた。そこで今まで起きてゐた妹君も次の室に寢まれることになつたので、余も坐敷の床の中にはいつた。

眠つたか眠らぬかとおもふうちに

「淸さん、淸さん」といふ聲が聞こえた。その聲は狼狽した聲であつた。余が蹶起して病床にゆく時に妹君も次の室から出て來られた。

その時母堂が何といはれたかは記憶してゐない。けれども斯ういふ意味のことをいはれた。居士の枕頭に、鷹見氏の夫人と二人で話しながら夜伽をして居られたのだが、あまり靜かなの

で、不圖氣がついて覗いてみると、もう息はなかつたといふのであつた。妹君は泣きながら、「兄さん、兄さん」と呼ばれたが返事がなかつた。跣足のまゝで隣家に行かれた。それは電話をかりて醫師に急を報じたのであつた。

余はとにかく近所にゐる碧梧桐、鼠骨二君に知らせやうと思つて門を出た。

その時であつた。さつきよりもつと晴れ渡つた明るい舊暦十七夜の月が大空の眞ン中にあつた。恰度一時から二時頃の間であつた。當時の加賀邸の黒板塀と向ひの地面の竹垣との間の狹い道路である鶯横町がその月のために晝のやうに明るく照らされてゐた。余の眞黒な影法師は大地の上にあつた。黒板塀にあたつてゐる月の光はあまり明かで何者かゞそこに流れて行くやうな心持がした。子規居士の靈が今空中に上りつゝあるのではないかといふやうな心持がした。

子規逝くや十七日の月明に

さういふ語呂が口のうちにつぶやかれた。余は居士の靈を見上げるやうな心持で月明の空を見上げた。

兩君を起して歸つて來て見ると母堂と鳳兒夫人とは尙枕頭に坐つてをられた。妹君は次の室に泣いてをられた。殆んど居士の介抱のために生きて居られた妹君だもの、たとひ今日あるこ

とは數年前から豫期されてゐた事にせよ今夏別離の情の堪へ難いのは當然の事である。何事にもあきらめのいゝ女々しい事は一度もいはれたことのない母堂も今外から戻つて來た余を見ると急に泣き出された。余はいふべき言葉がなくつて、だまつてその傍に坐つた。

「升は淸さんが一番好きであつた。淸さんには一方ならぬお世話になつた」と母堂はいはれた。それは鷹見夫人に向つていはれたのであつた。余は何と答へていゝかをわきまへなかつた。相變らずだまつて坐つてゐるばかりであつた。碧梧桐君や鼠骨君や羯南先生などもみえた。何にせよ、天明をまたねばならなかつた。

羯南先生を中心にして一同で曉を待つた心持はしめやかであつた。醫師が來てから間もなく夜が明けた。羯南先生の宅を本陣にして葬儀其他についての評議が開かれてからは落ちついた心持はなかつた。

その夜の通夜は「談笑平日の如くなるべき事」といふかねての居士の意見に從つて自然に委せて措いた。余は前夜の睡眠不足のために堪へ難くて一枚の布團を柏餅にしてすこし眠つた。

四　臨終の新聞記事

子規の臨終について報導せし當時の新聞記事の一二を掲げて置かう。

報知新聞には「子規の臨終」と題して次のやうな記事が載つた。

……氏が文學に精勵する一例とも見るべきは日本新聞紙上に連載しつゝある「病床六尺」にて知るべし。この稿を起してより回を重ぬること百二十七回、その間殆んど休載せしことなく、始めの程は自ら筆をとり、仰臥しながら認めしが遂にはそれも意の如くならずなりてより或は令妹に口授し或は看護の門生に筆記せしめつゝ毎日稿を同社に送りしが十五日の紙上にてその第百二十六回のいでしより後は……續稿の掲げられざるに世人は何れもその病の革まりしを豫知し……ついに氏は昨曉一時……自宅に於て同人等がやさしき手に梅はられて世を去りぬ……今は只この畏敬すべき病人が臨終の狀を記すに留むべし。一昨日は氏が誕生日なり、この日恰も氏は朝より心地例ならず痰は喉に咳き入りて苦しさは心細さとなり、夜十一時頃近くに住へる虛子碧梧桐氏等に使を出して病床に呼びしが氏は命數の盡くるをすでに知りたるか辭世とおぼしき三句を自ら認め之を同人に示したり。一同も之を誦しては自ら涙を禁じ得ず默して病床の午夜に坐し上野の鐘の十二を聞き盡して目出度き誕生日なる十八日を送り十九日の午前一時といふに覺えざる夢に入れり……昨日は多年氏を師事せし門下の人々寄り集ひ……物語は亡き

人の上のみにして一人が庭前の秋草を切りて花瓶に挿せば一人が先生は賑やかに挿せしを好みしがといひさして聲曇らすも至情見えて亡き靈もこの手向をいかにうれしく受くるならん……

又、やまと新聞には「一晝夜半の記」なる一文が「竹の子」といふ人の名で載つてゐる。その一節に曰く、

……駈けつくれば門の鈴はいつもの音に鳴りてなつかしき影は早やたづぬべくもあらず、香烟立ち迷へるかげに唯だ子規居士の位牌の哀れげに立てるのみ。

　立ち迷ふ香の煙や秋の風

運座の座敷、さては曼陀羅、支那の團扇までありし日に變らざれども誰が業にや蓑笠に添へて氷嚢のつりしありしぞ堪へ難かりし。

　朝な／＼我世は寒くなりにけり

思へば三年前のことなりき。墨水、青々と我れとにて主人がさしづに起しやりし野分の松の今なほ緑滴るばかりに榮えるるこそ口惜しけれ、わけて不折が植ゑし鷄頭の今年も同じ色に咲けど送りし人は外國に受けし主人は世にあらず、庭の片への絲瓜のみ我は顏にほこれり。

　鳥籠に朝顏からむ小庭かな

斯くて日ねもす語り盡し夜はよもすがら通夜して、

燈して佛に隣る夜寒かな

通夜の灯に薄寒き顏の並びけり

明くれば二十一日の九時、鳴雪翁の先導に虚子、四方太、紅綠等と共に靈柩を護りやがて十一時頃事なく田端の大龍寺に葬り了んぬ。

したゝかに糸瓜の水を濺ぎけり

五　訃報節に至る

もう秋であつた。

節は、例年のやうに、新栗を子規に送らうと、彼の家から程遠からぬ山にわけ入つてゐた。その時子規の訃報が來て、彼を吃驚させたのである。

節は歎きうたふて曰く、

年のはに栗は拾ひてさゝげんと思ひし心すべもすべなき

捧ぐべき栗のこゝだもかきあつめ吾はせしかど人ぞいまさぬ

なにせむに今は拾はむ秋風に枝のみか栗ひたに落つれど

節は最も子規に愛せられ、左千夫の言葉をかりていへば、子規の「理想的愛子」であつた。その彼に師の訃報俄にいたる。落膽哀悼察すべきである。

翌日、彼は上京して子規庵へ行つた。

うつそみにありける時にとり着けむ菅の小蓑は久しくありけり

それは子規がかつて埼玉縣蕨で旅中雨に逢ひ、買ひ求め、久しく彼の部屋の壁にかけてあるものであつた。

田端大龍寺に子規の墓はあるが、節のそこにまうでてよめる歌

かくのごと樒の枝は手向くべくなりにし君は悲しきろかも

筩にもりてたむくる水はなき人のうまらにきこす水にかもあらむ

九月二十五日は初七日にあたる。節は再び師の墓にまうでた。寺のうら手より蜀黍のしげき畑中の徑をかへるとして

わが心はたも悲しもともずりの黍の秋風やむ時なしに

秋風のいい搖りなびかす蜀黍の止まず悲しも思ひし思へば

もろこしの穂ぬれ吹き越す秋風の寂しき野邊にまたかへりみむ

まことに挽歌の傑作である。微吟幾回、よむに從つて哀しき調である。十月九日は三七日にあたる。節は村にゐて、はるかに都の空を思ひやつた。

その時によめるの歌

まうですと吾行くみちにもえにける青菜は今かつむべからしも

いつしかも日はへにけるかまうで路の隈回にもえし菜はつむまでに

なぐるさの遠さかり居て思はずは青菜つむ野をまた行かむもの

青雲の棚引くなべに目かげさしふりさけ見れば都はとほし

第三章　子規歿後の根岸派

一　馬醉木、アカネ

子規在世時代には根岸短歌會の機關雜誌といふやうなものは無かつた。

馬醉木（アシビ）は子規の歿した翌年、卽ち明治三十六年六月に、始めて本所茅場町なる伊藤左千夫の家を發行所として生れたものである。三十六年といへば左千夫四十歲の年で、同人は左千夫、香取秀眞、結城素明、岡麓、平子鐸嶺、蕨眞、長塚節、安江秋水、森田義郎の九人であつた。馬醉木創刊號の裏表紙にはこの九人の名が列記せられてある。赤木格堂、拓植潮音、大橋約房等は準同人の格であつた。このうち、左千夫、鐸嶺、眞、節の四人はすでに故人になつた。秋水は今は不空氏、大阪天下茶屋に現住する。

馬醉木は五年間繼續したが、これは殆ど左千夫一人の仕事であつたといつてよい。併し四十一年一月第四卷第三號を最終號として遂に廢刊してしまつた。小雜誌であつたが、左千夫節等が大

に筆を振ひ、なか／＼賓のある雜誌であつた。今の歌壇の一つの勢力を成してゐるアラヽギの源流はこの馬醉木である。

馬醉木が廢刊になると、その翌月から三井甲之氏を中心として雜誌アカネが發行せられた。馬醉木の終刊號で、左千夫は次の如く述べてをる。曰く

歌道新興の發展上、子規子の活動はその第一期に屬し、馬醉木五年間の奮鬪はその第二期を劃したりといふべし。而してアカネの責任は第三期の成功を遂げんとするにあり。今や馬醉木の活動を終へんとするに臨み、馬醉木に最も重き責任を有したる余は馬醉木の成績について一言諸君に語らんと欲するの念を禁ぜず。子規子の研究的態度は文學は唯だ文學を目的とし、歌はたゞ歌を目的となせしといへる見地に立ちたるものと見るべく、從つてその作物のあとに就て見るも自然を親しみ、人生を傍觀せるの趣きあり。歌と他一切の文學美術との關係、もしくは宗教問題社會問題人生問題等の諸問題と文學との關係については殆ど意をそゝぐ所なかりしなり。いひ換ふれば歌の問題は單に歌なるものの範圍内に於てのみ解決を求めたるものなり、勿論研究の初期にあつては一意專心周圍を見るの暇なかりしはむしろ當然のことといはざるを得ず、子規子をしてなほ春秋に富ましめばいかなる發展を遂ぐべきかは固より臆斷し難きもの

ありといへども發端の精神を墨守して動かざるが如き子規子にあらざるや明かなり。

子規子の事業を繼承して起れる馬醉木の活動は甚だ遲鈍をまぬがれざりしといへども又私かに自ら安んずるに足るものあり、發展の進行は一日も停止せず、萬葉の研究に於ても漸次にその歩をすゝめ批評の範圍選擇の標準に於ても逐年且つ廣く且つ高まりつゝありしを信ず。趣味と信仰との關係、趣味と人生上の關係あり、歌と他の文藝との交涉等について漸く接觸の端緖を開けり。

文學美術上一切の問題が人間の硏究を根本とせる如く、歌に於ても勿論むしろ人間そのものに最も直接なるべきを論じ作歌理想は子規子時代と頗その中心を異にし、明確にその然るべき理由を自覺せり。故にその態度は自ら人生を親しみ、自然を傍觀するに至れり。馬醉木誌上に新體詩あらはれ小說いづるに至れるは全く系路に伴へる產物なりとす。新體詩小說の創作的精神は勿論人生問題宗敎問題及び一般藝術に對する精神交涉と悉く作歌の硏究によりて養ひ得たる趣味と理想とにその解決を求む。以上の精神によりて作られたる制作はまだこれを具體的に十分に確認し得るものなしといへども、馬醉木五年間の作物が竹乃里人選歌時代に比して非常なる變化と進步とを遂げたるは何人と雖も認め得る所ならん。

要之、第一期の活動は未だ灣内的にあるを免れざりしを馬醉木五年間の奮勵はとに角その活動中心を海洋にうつして各種の潮流と接觸をたもつの運動をなすに至れるなり。更に運動の實績を宏大し、明治の文運に新光彩を加ふるはアカネの責任にして卽ち第三期の事業たらずんばあらず。事の成否は一に同人諸君の奮勵如何に存す。云々。

これは決して左千夫の大言でなく、又自畫自讃でもない。馬醉木の功績は正にかくの如くであり、又アカネの責任は今後左千夫の言の如く極めて重いものがあつたのである。これ等のことは他日、明治の短歌史を編むものは心得てゐてよい言葉であらう。又曰く

蕨眞君長病根本よりいえて健康舊に加はり、益斯道につくさんとするの決心あり。今後諸同人の活動上必要の時機に際せば何時なりとも、獨力一切の經費を負擔して道のために盡すところあらんと誓はる。節君は年漸く三十にして精力更に加はりたるを覺ゆ。予亦萬葉新釋の外、あへて餘勇を鼓し、創作に於ても猶諸君と鞍を並べんことを期す。

と。これによれば左千夫以下舊馬醉木の同人はアカネを協力援助してその目的を達成すべき筈であるやうに見える。然るに左千夫等と三井甲之氏等とは遂に調和して行くことが出來ず、同じ年の十月上總睦岡の蕨眞氏宅を發行所としてアラヽギが發行さるゝに至つた。その主宰者は左千

夫であることいふまでもない。

二　左千夫對甲之のこと

三井氏とアラヽギとの論爭は久しいもので、今も齋藤茂吉氏あたりはしば〳〵論陣を構へる。島木赤彥氏もアラヽギ誌上數月にわたつて三井氏を難じたことがある。第三者には感情的にものを言つてゐる場合があるやうにさへ見える位である。が、その源は遡れば、アカネ創刊前後に於ける左千夫對甲之の關係にあるのである。

けれども私はその內容を詳かにしない。三井氏や茂吉氏にきけばすぐ解ることではあるが、その必要もないやうである。たゞこの頃長塚節全集中書簡集をよむに、その書簡中にこの事の見えてゐるところがある。こゝに引用して置くのも他日何等かの參考になるかも知れぬ。節が赤彥に送つた書簡に曰く、

拜啓。左千夫君に優越の長所あり、その長所を取つて交際せよとの仰せ御尤もの事に存じ申候。これは小生も從前よりしか思ひ居りし所にて今後も變るべき筈無之候へども只今回同君の恐ろしき猜忌の眼を以て小生を見つゝありしを發見して、一方非常に驚くと共に容易ならず不

快の念を禁ぜざりし故、大兄へももらし候次第に有之候。地方在住の人にしてかくの如きことを打明け申すべきもの大兄一人に有之候。事實は左の如くに候。

先月虚子君宅の文章會の歸途、兩人にて岡君方へ立ち寄り申候時種々の談話の間に、小生の友人に對する厚意の全く缺乏せるを責めたる上、更に小生の豫想外なる詰問を起し申候。尤も小生の冷靜なり、熱情に乏しとの注意はこれ迄も數次にて、これは小生の飜つてかゝるものあるべしと服從致居り候事とて何にも辯解も不致、自己の短歌の甚だ救ひ難きを歎ずるのみに候。三井君に對する小生の態度が以ての外にて、左千夫君の親友と見るべからずとの事に候。その以前も伊藤對長塚と三井對長塚とは何れが重きかとの詰問有之候て、不少小生を喫驚せしめ候。久しき前小生が三井君を訪問せしことを小生に禍心ありとのいづこよりかの聞き誤りにてこゝに出でしものに候。小生はアカネ發行當時の事情を知らず、すべて伊藤蕨兩君の方寸よりいでしものにて爾後に於て小生へ通知ありしに不過、從つて三井君との間に如何の契約ありしかも寸毫も知る所無之候。而も暫時にして兩君の交際は一變致し申候。これもその原因は小生のあづからざる所にして、左君に正せば、三井は我儘勝手の人物なり、度すべからずといふ。三井君にきけば、左千夫は慘忍酷薄の人物なりといふ。小生の觀察にては兩者は斯の如き人物にあ

らざるを思ひし故その衝突は單に一片の感情に基けるものと想像せしを以て、いつか氷解する時期の到達せんことを信じ居り候。中間に介在せる時は兩者何れにても隨分大人氣なき行爲も有之候。何故に惡人ならざる兩者の間に斯の如き暗鬪を生じたるかをむしろ怪しまざるを得ざる次第に有之候。小生の居住は常に東京を離れ居り候へば直接兩君の爭ひには參加せざる地位にも有之、小生には小生自身に甚しく感情を害し居る事實なき限り自らこしらへて三井君へ喧嘩を吹つかける譯にも參らず候。大兄の如きは遠隔の地にありて巨細のことを知るに難く、特に事情を語るものは一方の相手たる左千夫君のみに候へば一も二もなく、三井君を敵視さるべく候へども小生の如く幾分兩者の行爲を聞知し得るものは一方に偏りての判斷はとても出來申さずどう見ても兩君の間は我儘なり、慘忍なりとの一點張なれば到底奈何とも手の出し樣は無之候。加之、左千夫君の信州善光寺より寺中生といふ匿名にて三井君を罵りたる葉書を送りたるが如き、いかに左千夫君に同情あるものの眼にも左千夫君の大なる缺陷なることを認むべく候。左千夫君の小生に責むるところは何故に三井と喧嘩せざるかといふやうに聞え申し候へども事實を知れる二三の友人はしばらくその爭論の渦中に投ずる勿れと小生に注意致し吳れ候。それでも小生は兩三囘の手紙のために却つて三井君の感情を害し居り候は事實に有之候。（中略）

小生は左千夫君の責むるが如く、同君に叛きし事實を記憶致し居らず候。尤も以前左千夫君は×××××の說を用ゐて三井は根岸短歌會を標榜すといへども、根岸の眞の短歌會にあらずといふ旨を新聞雜誌に廣告せんとの事にて小生上京の折相談有之候故小生は以ての外、大人氣なき所爲なりとて極力反對致し申候。如何にしても廣告すべしとならば小生の名義を加ふることだけは、絕對に拒絕する旨申候て、それは沙汰止みに相成り申候。これも或は左千夫君の感情を害せずやと存じ候へども、もし以上の手段に及ばゝ天下の物笑には候はずや。その他くさぐさの話申上度候へども、手紙にはつくし難く候。(下略)

四十一年十一月三日附の手紙であるから、アカネと同時にアラヽギの出てゐた頃である。この手紙は偶然に左千夫對三井並に長塚の關係をいひあらはして好箇の資料を吾々に供するものであるが、これによれば、左千夫が甚だ人物小にして且つ猜疑心の深い人物である。とくに、匿名の葉書を以て三井氏を罵るごときは、最もその人物の小なるゆゑんを暴露するものにて、左千夫のために遺憾此上もない。

節は、左千夫に味方せざる故を以て、左千夫から不興を蒙つてゐる。併しこれは、節の手紙中にいへる如く、第三者として俄に何んとも爲し難い立場であつた。第三者にあらず、これまでの

友人たる關係に於ても、かゝる場合に積極的に一方のみの肩をもつといふことは、冷靜なる節の到底爲し能はざるところであらう。なほ、左千夫對節の關係については次に述べる。

三　アラヽギ

アラヽギが上總の蕨氏宅から發行せられたことは上に一言した。

左千夫が甲之と到底提携し得ざることを自覺し、經營上の負擔はすでに蕨氏にその心のあるのを幸ひに、計畫されたものである。アカネに對立した關係から、左千夫對三井の論爭は眼に立つて盛んになつた。齋藤茂吉氏が恰もこの頃から氣を負ふて起ち、三井氏の說を非難し、頗る手ひどく甲之の歌を攻擊した。

然るにアラヽギは四十二年四月、第一卷第三號を出して後、いかなる事由からであつたか、しばらく休刊した。けれどもその年九月に至り、發行所を東京本所なる伊藤左千夫宅に移して、再刊することになつた。たま〳〵島木赤彥（當時柿乃村人）平瀨泣崖（胡桃澤勘內）等信州人を同人とせる雜誌「比牟呂」の來り加はるあり、アラヽギはこゝに新生に入ることが出來た。

その後古泉千樫君が本所南二葉町の家で編輯發行してゐた時代があり、齋藤氏の青山の病院が

編輯所になつてゐた時代もある。中村憲吉君の本鄕の下宿が編輯所になつてゐたこともある。私は古泉君の時代には東小松川に寓居してゐたので、東京への往來のついでに、古泉君宅へ立ち寄つて、話し込んだりした。中村君とは高等學校以來の友人である。締切になつて原稿が足らず、君、何か書いてくれないか、などといはれて、まづい小品などを寄せたこともある。

赤彥氏の小石川富坂の下宿が發行所になつたのはずつとその後である。私もそこへも一二度赤彥氏を訪問したことがある。或時そこで、橫山重、加納曉、宇野喜代之介君等に會つた記憶がある。この頃はアラヽギがもう押しも押されもせぬ歌壇の勢力となつてゐた頃であるが、併し古泉君が本所の家で編輯してゐた頃の雜誌は三十頁位の翩々たるパンフレットで、編輯も氣の利かないものであつた。それの殘本を狹い玄關に積みかさねて、その上には塵埃がたまつてゐた。

今のアラヽギにもさうした時代があつたのである。私などの眼にも古昔の感がある。今はアラヽギとは絕緣してゐるが、石原純氏はその時分すでに熱心な、又有力な幹部としての同人であつた。堀內卓造君といふ人は私などと高等學校での同窓で、最も有望の人であつたが、京都の醫科大學へ通つてゐるうちに、カリエスを病んで亡くなつた。生きてゐたら、今のアラヽギでは中村憲吉土屋文明君あたりと同列にゐる人である。

第四章　子規の日柿の日

第二十七回の忌日に

一　唯だ食ふてばかり居り申候

病人の常ではあるが、ものを食ふことを何よりの、むしろ唯一のたのしみとする。子規は前後七年の長き、病床六尺の裡に病苦と闘つた。ものを食ふことを何よりのたのしみとするに至りしことは固より想像に難くない。しかも子規は非常な健啖家で、學生時代にも新聞記者時代にも、机の上には、常に菓子や燒芋などがあり、よく友人を誘つてはしるこなど食ひに行つたさうであるが、病中にも盛んに食べながら決して胃腸を害さなかつた。

墨汁一滴（三十四年）の中に

小生唯一の療養法は「うまいものを食ふ」に有之候、この「うまい物とは小生多年の經驗と一時の情況とによりて定まるものにて、他人の容喙をゆるさず候。珍らしきものは何にてもうまけれど、刺身は毎日食ふてもうまく候。果物、菓子、茶など不消化にてもうまく候

とある。三十三年巴里に留學中の淺井忠畫伯に送つた手紙には

小生この頃は何にも書けず、食ふてばかり居り申候と書いて

吳竹の根岸の豚はうまからずぱりすぱりす思へば涎し流る

とある。ぱりすが巴里であることはいふまでもないとして、「涎し流る」と正直にいつたところが、面白い。

二 くだもの品評

しかし彼の好物は果物でつた。二十九年に書いた隨筆に「松蘿玉液」といふのがあつて、中に「果物」といふ題で、梅、杏、枇杷、柿、栗、林檎、柚子、蜜柑、西瓜などを品評した文章がある。

果物ほど味の高く淸きものはあらじ。小兒は之を好み仙人も之を食ふとかや

といふ書き出しで、右各種の果物について批評してゐるのであるが、最後に

われ此夏頃よりわけて果物を貪り、物書かんとすれば必ず之を食ふ。書きさして倦めば又之を食ふ。食へば則ち心すゞしく氣勇む。氣勇めば卽ち想湧き筆飛ぶ。われ力を果物に借ること

多し。

といつて果物を禮讃し、

日毎々々十顆の梨を食ひけり

小刀や鉛筆をけづり梨を剝く

朱硯に葡萄のからの散亂す

書に倦みて燈下に柿を剝ぐ牛夜

柿食ふて洪水の詩を草しけり

といふ即興五句を添へてある。

果物個々の批評は

青梅は酸強く口を絞れども鹽少しばかりつけんには味いひ難し。うら若き女の人には隱れて眉あゝめたるもらうたげなり。杏はからびて賤しく、李は水多くしてあさはかなり。枇杷はうまけれど種子大きく肉少なきこそ飽かぬ心地はすれ。桑の實はすべての人に知られねども果物の中これを外にして甘き物はなし。梨は涼しくいさぎよし。南窓に風を入れて柱に倚り襟を披き片手に團扇を持ち乍ら一片を口にしたる氷にもまさりてすがすがしうこそ

の如くである。柿については

柿は野氣多く冷かなる腸を持ちながら味はいと濃かなり。多情の人、世を厭ひて野に隱れながら猶物に觸れて熱血を迸らすにもたとへんか。冷腹熱血吾れ最もこの物を愛すといつてゐる。この評言には多少首肯し難いところもあるが、「野氣多く」「冷かなる腸」などはまさにその通りで、これが子規の性格と通ふところであると私は思ふ。靑梅の條で、うら若き女の人には云々とあるは、子規が力を極めて賞揚した蕪村の、「靑梅に眉あつめたる美人かな」から、連想して來てゐることはたしかである。

とにかく、くだものを、「食へば則ち心すゞしく氣勇む」といふ子規は、實に『くだものの餓鬼』だつたのである。

三　柿　の　句

さて柿の句であるが、まづこれを子規の句集「寒山落木」中から、左に拔き書してみる。脚の數字は句のできた年である。

　臍さむし柿くふ宿の旅枕　　　　　二七

或る日夜にかけて俳句箱の底を叩きて

三千の俳句を閲し柿二つ　三〇

胃　病

柿あまた食ひけるよりの病かな　三二

胃　痛

柿も食はで隨問隨答を草しけり　三二

自ら自らの手を寫して

樽柿を握るところを寫生かな　三二

我好きの柿を食はれぬ病かな　三二

書きもらしがあるかも知れぬが、先づざつと斯くの如くである。中で、私の心をひく數句について、小見を附記する。句を解し、味ふ上に、多少の參考となるであらう。

柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺

二十八年の作。法隆寺茶店と前書がある。二十八年は子規が滿洲から從軍の歸途、病を得、しばらく神戸須磨などに療養し、鄉里松山にも歸り、病やゝ癒つて、京阪奈良等を經めぐつて、東

京に年末近くになつてから歸つて來た年である。これはその時大和の法隆寺に行き、見物して、疲れた足を茶店に腰かけて、休ませてゐた時に出來たものであらう。

この句は先頃句碑に刻されたやうである。どこに建てられたか知らぬが、大阪の某書店であつたか、書畫屋であつたか、拓本をとつて希望者に頒つといふ廣告の郵便をうけとつたことがある。もう二年ばかり前のことである。

　　町あれて柿の木多し一廓

　　澁柿や荒壁つゞく奈良の町

恐らく同じ時の句であらう。

　　澁柿は馬鹿の藥になるまいか

「馬鹿の藥」は古來馬鹿につける藥がないといふから、それを取つたのである。前書の「露月を罵る」は私にはわからない。露月は俳人石井露月で、「日本」新聞では、子規の下に働いてゐた人である。秋田縣の田舍に住んでゐたが、今年九月十七日（昭和三年）急病で死んだ。

　　柿に思ふ奈良の旅籠の下女の顏

この句の解は、子規の寫生文「くだもの」（三十四年四月作）の中、「御所柿を食ひし事」をよめば、

直ちにわかる。煩はしいが引用しやう。

明治二十八年神戸の病院を出て須磨や故郷とぶらついた末に東京に歸らうとして大阪まで來たのは十月の末であつたとおもふ。その時は腰の病のおこり始めた時で少しく步くのにも困難を感じたが奈良へ遊ばうと思ふて、病を推して出掛けて行つた。(中略)

或夜夕飯も過ぎて後宿屋の下女にまだ御所柿はくへまいかといふと、もう有りますといふ。余は國を出てから十年程の間は御所柿を食つたことがないので非常に慾しかつたから、早速澤山持つて來いと命じた。やがて下女は直徑一尺五寸もありさうな錦手の大丼鉢に山の如く柿を盛つて來た。さすが柿好きの余も驚いた。それから下女は余のために庖丁を取つて柿をむいてくれる樣子である。余は柿も食ひたいのであるが併し暫しの間は柿をむいてゐる女のやゝうつむいてゐる額にほれ〴〵と見とれてゐた。此女は年は十六七で、色は雪の如く白くて目鼻立まで申分ない樣に出來てゐる。生れは何處かときくと、月ヶ瀨の者だといふので余は梅の精靈ではあるまいかと思ふた。やがて柿はむけた。(下略)

この或夜の情景が、極めて無雜作に「柿に思ふ奈良の旅籠の下女の顏」となつたのである。句は上等でないかも知れない。

つりがねの蔕のところが澁かりき

これは京の愚庵から柿を貰つた返禮に送つた句で傑作なりとおもふが、あとで、柿の歌についていふ時に、併せ述べることにしたい。

我　死　後

柿食ひの發句好みと傳ふべし

わが死後、もしわれが傳記を書くものあらば、餘計な事は書くべからず、單に子規といふ男は柿が大好きで、又同時に發句が好きであつた、と唯だそれだけ書いて貰へばよろしい、その外にはなんにも要らぬ。況んや揣摩憶測によつて、ほめ過ぎたり、えら者に仕過ぎたりしては困るといふので、いかにも子規の面目がよくあらはれてゐる。

「柿くひの發句好み」はいゝ。發句となまつたままで、詠み込んだのが、一種の趣を示してゐる。

自　慰

柿食はゞや鬼の泣く詩を作らばや

「鬼の泣く詩」は古今集序にいわゆる目に見えぬ鬼神を泣かしめ云々とある、眞の大詩歌をさしていふのである。詩が天地を感動し、鬼神をも泣かしめるといふ意味のことは屢漢詩にも見え

てゐる。病中の子規がわづかに自ら慰むるところは、この鬼神を泣かしむる底の詩をつくることであつた。そして、それと相對してうまい柿をくふことであつた。何んぞその對照の妙なる。

なほ、子規がこゝに「鬼の泣く詩を作らばや」といへるは曙覧の戯れによめる

わが歌をよろこび涙こぼすらむ鬼の泣く聲する夜の窓

燈火のもとに夜な〳〵來たれ鬼我ひめ歌の限りきかせむ

などとも多少の脈絡があるであらう。

四　柿　二　つ

三千の俳句を閲し柿二つ

「或日夜にかけて俳句箱の底を叩きて」といふ前書がある。これは明治三十年の句であるが、三十二年の歌に

吉原の太鼓聞えて更くる夜をひとり俳句を分類すわれは

といふのがある。此歌は彼が畢生の大事業であつた古今俳人の全句集を季題別に分類した、か

の「俳句分類」の仕事をして夜をふかした時のものであらうが、句は新聞か雜誌の選句であらう。三十年といへばかの雜誌ホトヽギスが柳原極堂によつて松山から創刊せられた年である。さすればホトヽギスの選句などであつたかも知れない。虚子はかつて「柿二つ」といふ題で、子規及そのぐるりを小說にかいたが、その題は無論この句から來てゐる。

とにかく三千の俳句――數にかゝはる要なし――、非常に多數の俳句、それを選した後で、好きな柿を二つ食つたといふたゞそれ丈のことである。然り、たゞそれ丈の句である。しかもこれが何といふ、偉大な「たゞそれ丈」であらうか。

柿あまた食ひけるよりの病かな
柿も食はで隨問隨答を草しけり
我好きの柿の食はれぬ病かな

「隨問隨答」（三十二年）は問答體で書いた子規の俳論俳話である。彼れの俳論中最も重要なるものゝ一つである。子規の月並罵倒論など、この中にある。

柿食ふも今年ばかりと思ひけり

これは三十四年十一月栃木の小林宗平氏からきざ柿を貰つての返禮の句である。はたして子規

はこの翌年死んだ。もはや自分の死期を豫知してゐたのである。殆んど卒讀に堪へぬ句である。

こゝで、さきに預つて置いた釣鐘柿の一句を入れ、柿の歌を見る連鎖にしやう。

五　愚庵へ送りし柿の歌

明治三十年、子規は友人である京の愚庵からその地で名高い釣鐘といふ柿を貰つた。今も早稲田大學に教鞭をとつてゐる桂湖村氏がたま〳〵愚庵を訪ねたので、この人に釣鐘を托して、子規に屆けて貰つたのである。柿といつたら目のない子規である。大によろこび、早速一書を裁して禮を述べたが、その終りに

つりがねの蔕のところが澁かりき

外二句を書きつけたのである。釣鐘といふ柿の名もをかしく聞きすて難くて云々と前書にある通り、釣鐘の名から柿のへたと鐘の龍頭とを連想してよんだのであらう。その上、蔕のところが澁かりきと、平凡に正直に敍したところに、いかにもむしや〳〵と貪り食つたあとがあらはれて面白い。このとぼけた、平凡の面白味が實にこの句の生命である。出鱈目、御叱正下され度、と附記してあるが、どうして、決して出鱈目ではない。

その翌日（三十年十月二十九日）も子規は更に愚庵に歌をそへて手紙を書いた。即ち

みほとけに供へし柿のあまりつらん我にぞたびし十あまり五つ

柿の實のあまきもありぬ柿のみの澁きもありぬ澁きぞうまき

籠にもりて柿おくり來ぬふるさとの高尾の山は紅葉そめけん

世の人はさかしらをすと酒のみぬ吾は柿くひて猿にかも似る

おろかちふ庵のあるじがあれにたびし柿のうまさの忘らえなくに

あまりうまさに文書くことぞ忘れつる心あるごとな思ひ吾が師

の六首である。正直にいへば之等の歌はまだ左程秀れたものではない。子規自身も「發句よみの狂歌いかゞ見給ふらむ」といひ、又「俳諧歌とでも狂歌とでもいふべきもの二つ三つ出放題になり出し候。御笑ひ草までに」といつてゐる。それはさうであらう。三十年といへば、子規が歌の革正運動に着手する前で、まだかの「歌よみに與ふる書」を發表しない時に屬する。愚庵和尙に送つた手紙にも「この頃歌をはじめ候處あまり急激なりとて陸翁はじめ皆々に叱られ候へども」とあるは、翌年三十一年である。作品として彼の歌があまり秀れてゐないのも無理はない。

併し、右のうちで

柿の實のあまきもありぬ柿の實の澁きもありぬしぶきぞうまき

はさすがに光つてゐる。「澁きぞうまき」の如き表現は決して凡手の能ふところでない。しぶきがうまい、といふところに、一代の詩人と大德の禪門との間の默會がうかゞはれる。

愚庵からの釣鐘は、その翌年卽ち三十一年の秋にも、子規庵に屆いた。それは寒川鼠骨氏が托されて持ちかへつたのであつた。

愚庵と子規との關係については、書くべきこともあるが、今は柿についてより以外のことは省略する。(愚庵との柿の話は、また後に出るかも知れない。重複をわびる)

六　節と麓に送りし柿の歌

長塚節は子規の愛弟子であつた。この事はいふまでもない、伊藤左千夫はこの二人の關係を評して「理想的愛子」といつてゐるが、いかにもその通りであつた。節は下總國結城郡の人である。農家の生れゆゑ、柿や梨は自分の畑で豐富に出來た。で、屢之を根岸庵に送つて病床の子規を慰めた。三十四年の秋子規から節に送つた手紙にも

蜂屋柿四十速かに屆き申候。一つも潰れたるもの無之候。右御禮旁々、

病子規

長塚詞兄

とある。節の家には餘程澤山柿ができたと見えて、節の文章や歌俳句、消息の中には柿に關するものが少くない。例へば

柿の木に攀ぢて柿を食ふなど、近來子供らしく相成申候へども、其所にいふべからざる樂みは有之候。柿の梢のゆさ〳〵と搖れ申すに、手をのべて、もぎとる處、大兄にもさせて見たくと思ひをり候。即ちこゝらが田舍者の歌の種に有之候。（明治四十年十月、岡麓宛）

又例へば

近來小生しきりに歌心湧き（中略）これが四十首ばかりに相成り候。其うちに

柿の木に柿食ひをれば藪つゞき隣のやぶに柚子黃み見ゆ

稻を扱くをちの庭人驚かむとゞかばそこに柿投げて見む

四十年に島木赤彥に送つたものである。これは私にもおぼえのあることで、柿の木に攀ぢて、もぎ取つて食ふ柿のうまさは亦格別である。田畑のものが、青空の下に、照り輝き、よく實つてゐる。百舌鳥の高音がそこゝに聞えるといふ情景である。節が柿の木に攀ぢ上つてゐる姿まで

が見るやうである。そうしてもぎ取つた柿は毎年のやうに子規庵に送られた。

或時子規は歌をよんで節に送つてゐる。曰く

下總の節きたれりこれの子は蜂屋大柿われにくれし子

と、柿は蜂屋柿といふ名産であつたと見える。

又この柿を岡麓氏から貰つた時の禮狀には

只今失敬仕り候。御かへり後、御たまものを運び來り見せ候處最早我慢の緒がきれ、とうとう一つねだり取り申候。これは當地にては蜂屋と申し候やらん。わが鄕里にては祇園坊と申候。凡そ天下に柿多しといへども此柿にますは無之候處、根岸に無之ため、終に口に入らず、鄕をいでて二十年はじめて風味に接し申候。(下略)

十一月五日夜　　規

ふもとさま

鄙にては祇園坊といふ都にてはち屋ともいふ柿の王はこれ

味ひを何にたとへん形さへ濃きくれなゐの玉の如き柿

岡氏に送つた手紙の中「とうとう一つねだり申候」といふところに、彼の正直さがあらはれて

ゐる。「最早がまんの緒も切れ」は、無邪氣である。子供のやうで面白い。

（此章昭和三年九月十九日東京放送局にて放送）

第五章　子規雜感

一　大膽な斷定

子規は芭蕉の評價において、實に大膽なる臆斷を敢てした。芭蕉の俳句は過半は惡句駄句を以てみたされ、上乘と稱すべきものはその何十分の一に過ぎずといひ、「道のべの木槿」の句を以て教訓寓意の作と解し、文學上最下等の句なりときめつけた。何んと思ひ切つた斷定ではないか。

しかして淺い技巧家の蕪村をほめて、「俳人蕪村」の一書を著してゐる。これだけは子規宗の私なども辯護の仕樣のない彼の失敗であつた。

たゞこの大きな間違ひを堂々と發表して、「余はまづ劈頭に斷案を下さんとす、芭蕉の句は過半惡句にしてうんぬん」と出た。その度胸のよさには、まゐつてしまふ。かう大上段にふりかぶられては大がい辟易する。「俳句の神樣芭蕉」に向つて、斯くの如き冒瀆言をあへて吐く子規を見て、當時の宗匠連がいかに驚いたか。空谷の跫音位ではたとへきれない驚き方であつたにちがひ

ない。

それにしても

　　道のべの木槿は馬にくはれけり

を教訓の句とし、文學上最下位にあるものだなどは、子規もよつほど、どうかしてゐた。
これはこれ、野ざらし紀行、馬上西行の佳吟ではないか。

二　啓　蒙　言

もつとも子規が芭蕉を難じたには理由があつた。
當時の俳人達には文學としての俳句がわからず、たゞ芭蕉を偶像として崇拜してゐた。それゆゑ、芭蕉の句でさへあればそのことごとくが金科玉條であり、芭蕉とさへいへば神聖にして冒すべからざるものと考へてゐた。つまりみんな芭蕉宗の盲目信者だつたのである。
その盲信を打破して、「文學としての俳句」を樹立せんとするのが子規の意圖であつた。何にしても數百年の因襲であり、ひろく天下に普及せる宗匠臭味である。これを打破することのいかに困難なりしかは想像にあまる。子規の論鋒のあまりに鋭く、時に偏するは啓蒙運動のためだから

である。

和歌革正の運動についても同じことがいへる。彼が當時の歌よみどもに歌聖として尊敬せられし貫之、定家、景樹等を完膚なきまでに攻撃し、實朝、曙覽、宗武、元義等の無名歌人を地下に呼び起して、その業蹟を稱揚したのは、これまた一に眠れる歌よみどもをたゝきおこし、これに新たなる世界を見せしめんがためであつた。

寫生文の主張も新體詩の革正も同樣である。彼の道は荊棘をひらかんとする受難者のそれであり、勇ましい先驅者の叫びであつた。

今から、ざツと、三十年前のこと、日本思想の反動的混亂期であつた。

三　雜木山のしたしみ

子規の生涯はあまりに短かつた。みじかい生涯にその仕事はあまりに多かつた。當然の歸結として、どの仕事もおほむね、未完成に終つてゐる。

俳句のことは斷言しかねるが、歌の如き、寫生文の如き、とくにも長詩の如き、明白に藝術としては未完成のものである。歌は晩年の幾十首かは完璧に近いとしても、大部分はまだ〳〵遠く

至らぬものである。
壽命のせゐにする譯ではないが、それにしても三十六の一生はみじかすぎた。しかも仕事が多過ぎた。金槐集を讀むと、私はいつも、せめてもう十年、實朝を生かしておいたら、と残念に思はぬことはない。子規を讀むと、もう五年生きてゐるか、あるひはまた、俳句か歌かの一事に、力を集中することが出來たか、どちらかであつたならば、と、遺憾に思はないことはないのである。

しかしまた一方から考ふれば、この未完成が彼への愛着と親しさを増さしめるゆゑんでもある。ばうばくと、また雜然たるところに、近づきやすい親しみがあるのである。たんねんに手の入つた泉石の美でなく、一つの雜木山である。輪奐の美を極むる高樓でなく、いぶせきしづの伏屋であるといふところに彼への愛着が湧く。山はひろい。句を好むものは句の林に入れ、歌を愛するものは歌の泉に來よ。文もよし、畫もよし、隨想また可なり。好むにまかせて、自由に逍遙せよといふ風である。低いけれども、多樣であり、多趣である。しかも氣安く、のんきに樂しまれる。

これが、子規の人と藝術の特色である。
未完成ではあるが、實に偉大なる未完成である。小さく、小きれいに、まとまつてをるといふ

風のものではない。完成に至らなかつたのは、遺憾といへば遺憾であるが、しかしそれは、小さき、こましやくれた完成にまさること、萬々といふべきである。

又思ふ。夭折は惜い。業病は同情にたへぬ。

けれども、病や死は、藝術家にとつては一つの幸福であるといへないことはない。一葉の名も、啄木の名も、もし彼等が病のために早く世を去らなかつたならば、おもふに、今日の如く高くはないであらう。病や死にかこつけて、その本質を割引する意圖はないが、それにも拘はらず、子規の藝術を未完成のまゝにのこしたものも、又彼の名を不朽に高くしたものも、共に同じ「死」といふ原因であつたことは爭へない。

四　胃　の　腑

子規の胃の腑は實に丈夫であつた。彼は非常の大食であつたが、彼の胃腸はそれをことごとく消化して、かつて害することがなかつた。

彼の手紙には、この頃は食ふことばかり考へて居り候とか食ふことの外にたのしみは無之候、などと、よく書いてあり、また彼の日記「仰臥漫錄」を見ると、一々その食物の種類と數量など

を書いてあるが、實に健啖家である、例へば

朝　粥四椀、ハゼの佃煮、梅干砂糖ヅケ

晝　粥四椀、カツヲのサシミ一人前、南瓜一皿、つくだ煮

夕　飯四椀、カツヲのナマリ節、ナス一皿

二時過ぎ　牛乳一合コヽア交へて、せんべ、菓子、パンなど十個許

夕飯後梨一個

又の日

朝　ぬく飯三椀、佃煮、梅干、牛乳五勺、ネヂパン形菓子パン一ツ（一ツ一錢）

晝　イモ粥三椀、カツヲのサシミ、芋、梨一ツ、リンゴ一ツ、せんべ三枚

間食　枝豆、牛乳五勺紅茶入、ネヂパン形菓子一ツ

夕食　飯一椀半、鰻の蒲燒七串、酢牡蠣、キヤベツ、梨一ツ、リンゴ一きれ

これが晩年、死ぬ前の年の胃の腑であるから驚くの外はない。

子規の命を卅六までもたせたものも彼の胃の腑であり、子規の事業をあれまでに完成せしめたのもまた胃の腑であつたといへよう。

大政治家や大實業家の一資格は胃の腑の丈夫なことであるときくが藝術もまた胃の腑の問題らしい。

五 强い性格

子規言行錄にのつてゐる子規の横向きの肖像を見ると、いかにも、きびしい彼の性格がわかる。光線の具合かも知れないが、瘦せた顏の三角の眼が光つて、こわい相貌である。まるで羅漢のやうだ。しかしそこに强い自信とつめたい理性がはつきりとあらはれてゐる。子規の平生は柔かで、したしみのある性質だつたときくが、病にやつれた顏容はこの寫眞と同じであつたらうと思はれる。

强いところがある。きびしいところが見えてゐる。容易に他をゆるさないところが見える。「不審のある人はいつにても御來訪下され度、三日三晚なりとも議論可致候」とか、例の「鐵幹是なれば子規非なり、子規是なれば鐵幹非なり」などといふ傲岸と自信は、かうした彼の口から叫び出されたのである。

それゆゑ、一面には執拗で意地わるのところもあつたかも知れない。こまかいところによく氣

がついて、それをやかましくいふ、そんな所もあつたであらう。親や兄弟に持つとすれば、さびしくて、とても堪へ難い人物であらう。

俳句歌文章にわたつて子規の門下は非常に多かつた。蕉門十哲どころでない。多數の中には利巧なのもあれば、不遜なものもあらうといふもの、もし子規が健康でゐたら、必ず叛くもの、去るものが出來たであらう。孤峭な子規の性向から推して、左樣に、想像される。淸濁併せのむといふ雅量は子規には缺けてゐた。

それにも拘はらず、子規門があれだけに結束出來たのは、彼の病氣もその原因である。芭蕉が多くの門弟をひきつけてゐたのは、その大德のためであるが、この點において子規は病氣に幸ひされてゐる。

六　病氣の文學

子規の文學は病氣の文學である。病氣をうたへるもの、また病中囑目または感懷をよめるもの、皆佳い。これを除けば、さびしくなる。病氣が惡くなれば、惡くなるに從つて作品は冴えて來てゐる。

一つ二つの例

夏やせの骨にとゞまる命かな

伏してみる秋海棠の木末かな

植鉢の牡丹もらひし病かな

さみだれや上野の森も見あきたり

冬ごもり主人寢ながら客に會ふ

痰はきにたんのたまるや冬籠

寢て糞をひる時死出の子規

足の立つうれしさに萩の芽を檢す

また

いちはつの花咲きいでて我が目には今年ばかりの春行かんとす

病む我をなぐさめ顏に開きたる牡丹の花をみればかなしも

世の中は常なきものとわが愛づる山吹の花散りにけるかも

夕顏の棚つくらんとおもへども秋まちがてぬわが命かも

若松のめだちのみどり長き日を夕かたまけて熱いでにけり
くれなゐの薔薇ふゝみぬわが病いやまさるべき時のしるしに
いたつきのいゆる日知らにさ庭べに秋草花の種を蒔かしむ

歌は「しひて筆とりて」と題する一聯のもの、死の前の年の病床吟である。

七　寫生

子規の文學的貢獻は寫生の主張であつた。

寫生とは、有りのまゝを正直に寫すことである。あへて珍しいことではない。この平凡なことが、何故、彼の大貢獻であるかといふに、それは、從前の文學が——歌でも俳句でも文章でも——すべておしろいこツてりの虚飾文學であり、作者またそれを以て文學の能事終れりと解してゐたからであつた。

たとへば歌は有閑階級のひまつぶしであり、俳句は町内の隱居のあそびであり、あるひは宗匠連の生活のしろであり、文章は美辭麗句の行列にすぎなかつたのである。つまり文學は形式と技巧の末になづんで、少しも眞の生活にふれず、惰眠をむさぼつてゐたといふ譯である。浮華と輕

佻と安價な技巧のみ。少しも生命の要求がなかつた。

これに革命の烽火をあげたのが、子規の寫生の主張であつた。その結果、歌では古今以降の「たをやめぶり」が萬葉の「ますらをぶり」に還り、俳句では月並變じて新俳句となり、文章では、美文すたれて寫生文が新に創生せられたのである。

夢と空想の文學に現實の力を吹き込んだ子規の貢獻は劃時代的である。明治の文章が彼の主張のためにいかに現實味の多いものとなり、また裸のものとなつたことか。これは明かに後年の自然主義の文學運動の先驅をなすものである。

八　非常な勉強、異常な常識

子規は非常な勉強家であつた。彼が「小日本」を主宰してゐた時の如き、論文もかけば、編輯もやり、挿畫の注文もすれば、歌や俳句の選もした。それで決して疲れなかつた。門人に向つては常に讀書せよ、勤勉であれと諭した。ゆゑに、酒のみや女買ひや、だらしのない奴は片つぱしから叱り飛ばした、俳人新海非風は秀才であつたが、吉原の女郎をひかして同棲したりなどしたので、見捨てられてしまつた。

だから義務心がつよく、自分の義務は必ずはたした。フランクリンの自叙傳を死ぬ二三日前まで讀んでゐたといふのは、そのやうな本當の話である。

子規はまた大の野心家であつた。野心家といへばへんに聞こえるがわるい意味ではない。何んでも積極的にぐん〳〵やることである。執着がつよくて貫行することである。彼が日蓮を好んだのは、その野心の點であつたとおもふ。夏目漱石は江戸つ兒だけに執着がなく、野心がなかつたので、時々子規から忠告をうけてゐる、野心がなくては大事業は出來ない、とは子規の常に人に語る所であつた。

子規はまた、異常な常識の持主であつた。政治といはず、科學といはず、宗教といはず、敎育といはず、文學美術といはず、凡そ百般の社會的現象並びに學問については、實に驚くべき、該博の知識を有し、それが極めて圓滿に發達してゐた。大學を半途でやめた位の學歴で、あれだけの知識を有つてゐるのは、全く驚くべきである。晩年には、とりわけ、六尺の病床に寢たきりであつたが、彼は訪ねて來る人々の話をきいて、それから社會的の、また學問上のいろ〳〵の知識を吸收したのであつた。彼の日記や隨筆の面白いのは主としてこの知識のひろさにある。

しかも彼はその新しい見聞について、必ず自家一個の批判を下した。何でも批評することが好

きであつたが、またそれだけの洞察力判斷力をもつてゐた。その判斷はまた、冷靜で、決して溺れ、惑ふといふやうなことはなかつた。この冷靜な理智的の態度も、彼の一つの特性であつた。女についての話、情事に關することが、彼にほとんどないのは、この特性のためである。

陸羯南は子規を評して

もし彼がなほ二十年も長命したならば、まだ〳〵仕事をしたであらう。文學ばかりでなく、政治界にも飛び出して仕事をしたであらう。思慮といひ、氣魄といひ何處にでも當はまる人格であつた。

といへるは、さすがよく彼を見てをる。常識があつて、野心があつて、勤勉である。政治家として適するばかりでなく、實業家や外交官としても必ず成功したであらうと思はれる。

多年病床にあり、しかも仕事が多方面にわたつたので、一部についてのまとまつた、大きな作品や論述のないのは、いさゝか物足らぬが、何といつても明治前半期を代表する一天才で、彼はあつた。

第六章　『歌よみに與ふる書』並に『歌話』にあらはれたる子規の歌學思想

一　竹の里人

俳句の革新に成功した子規が歌壇に進出し來り、この革正運動に着手したのは、まづ明治三十一年で、その二月に竹の里人の名を以て、十回に亙り「日本」に發表した『歌よみに與ふる書』がその具體的發現である。この論文は萎靡沈滯を極めてゐた當時の歌壇に對つて、明かに一つの狼火であつた。當時一個の病俳人に過ぎないと思はれてゐた子規から、突如としてかくの如き堂々の論議を聞いたのであるから、世人は眼をみはつて驚き、贊難の聲が忽ち四方に起つた。之に對しても子規は丁寧に、その答ふべきものには、答へた。これが卽ち『人々に答ふ』である。

凡そ一個の論文が、かくの如き大いなる反響を喚び起すことは、文學史上まことに稀有の例であらう。私は寡聞にしてまだそれを知らぬ。しかもそれが六尺の病床に呻吟してゐた病詩人によ

つて叫ばれたのであるから、世人の一驚を喫したのも無理はない。

子規の所説の影響は、之を概言すれば、少くとも日本の文學、とくにも和歌俳句は明治時代に於て彼のために滅亡の淵から救ひ上げられたといつても決して過言でない程のものである。少くとも、私共の短歌の道は更生のよろこびを迎へた。これは決して嘘でない。その實證は、子規の言説の到る處に散見するのであるが、私は、今「歌よみに與ふる書」に之を徴せんとするのである。

二　萬葉主義

子規の歌學思想の根本は萬葉主義である。萬葉主義とは、私がこゝで假りに名づけた名稱で、子規がかく明言してゐる譯ではない。今その主張を概言すれば、理屈の排斥である。俗氣俗趣の排斥である。理想、空想、主觀の排斥である。外面美麗の排斥である。調子のたるみたることの排斥である。陳腐の排斥である。等々なほ多くあるべし。之に反して、彼の主張するところは實事、實感、實情である。高尚にして斬新なる趣味である。内面充實である。調子の緊張である。趣味の自然である。手段の寫生である。有りの儘の活寫である。等々。極めて大雜把では

あるが、彼の歌論はこの主張を以て一貫してゐる。而して彼はこれらの主張は萬葉集の歌の具備するところであつて、斷じて古今集以下の諸歌集に存るものでない。然るに今の歌よみ共はあやまつて古今以下の道に踏み迷ふてゐる。故に歌人共は今一度眼を開いて萬葉集を見直せ。萬葉集こそは歌道の聖典であり、歌はよろしく萬葉に還れ！　これが子規の主張であつた。必ずしも斯様な言葉を使つてゐる譯ではないが、子規の精神はまさに斯くの如くであつた。私はこれを子規の萬葉主義といはんとする。

人あつて、客觀主義、寫生主義、自然主義などの名を用ゐよといへば、それでもよろしい。しかし、それは叙上の內容を知悉してからの命題でなければならぬ。

この萬葉主義の見地から彼は實朝、宗武、元義、曙覽を稱揚し、貫之、定家、景樹等を排撃した。それをしばらく、「歌よみに與ふる書」に就て見やう。

三　實朝禮讃

歌人としての實朝を稱揚したものに賀茂眞淵がある。彼はその復古學的見地から、實朝の歌の『ますらをぶり』をみとめ、「新學」「歌意考」等に於てこれを論じた。しかし子規にいはせると眞

淵のほめ方はまだ足りない。眞淵は實朝の歌の妙味の半面を見たが、他の半面を知らぬ、といふ。(歌よみに與ふる書)事程左樣に、子規は實朝禮讃者であつた。

子規はいつ頃から實朝を知つたか。可成早くからのやうであるが、(今それを引用しえぬが)これをはつきりと言つたのは、「歌よみに與ふる書」の劈頭である。曰く

仰せの如く、近來和歌は一向に振ひ不申候。正直に申せば、萬葉以來、實朝以來一向に振ひ不申候。實朝といふ人は三十にも足らいで、イザ之からといふ所にてあへなき最期を遂げられ誠に殘念致候。あの人をして今十年も生かし置いたらどんな名歌を澤山殘したか知れ不申候。とにかく第一流の歌人と存候。强ち人丸赤人の餘唾を舐るでもなく、固より貫之定家の糟粕をしやぶるでもなく、自己の本領屹然として山嶽と高きを爭ひ、日月と光を競ふ所實に畏るべく尊むべく、覺えず膝を屈するの思ひ有之候。古來凡庸の人と評し來りしは必ず誤なるべく、北條氏を憚りて韜晦せし人か、さらずば大器晩成なりしかと覺え申候。人の上に立つ人にて文學技藝に達したらん者は人間としては下等の地に居る通例なれども、實朝は全く例外の人に相違無之候。何故と申すに、實朝の歌は只器用といふのではなく、力量あり見識あり威勢あり時流に染まず、世間に媚びざるところ例の物數奇連中や死歌(しにうた)よみの公卿達とトテも同日には論じ難

めつけてゐる。子規から馬鹿よばはりをされたと上に私が言つたのは、こゝの事である。桂園派の鼻祖景樹大人も子規に會つては臺なしである。

四　曙覽宗武元義推賞

子規が實朝に亞いで尊敬した歌人は橘曙覽であつたが、これについては明治三十二年三月に「曙覽の歌」と題する長論を發表し、「曙覽は實朝以後の第一人にして、彼を推賞するに千萬言を以てするも過褒にあらず」と激賞してゐる。而してかくの如くに彼を賞する所以は、曙覽の人物並に藝術の秀れてゐた爲に外ならぬのであるが、これも一口にいへば曙覽の萬葉主義への傾到である。曰く、

「曙覽の歌は古今新古今の陳套に墮ちず、眞淵景樹の窠臼に陷らず、萬葉を學んで萬葉を脱し瑣事俗事を捉へ來りて縱横に馳驅するところ、却て高雅蒼老些の俗氣を帶びず。殊にその題目が風月の虛飾を貴ばずして、直ちに自己の胸臆を攄くもの、以て識見高邁、凡俗に超越せるを知るに足る。」

「高雅蒼老些の俗氣を帶びず」といひ、「その題目が風月の虛飾を貴ばずして、直ちに自己の胸臆

を描くもの、」といふこれ即ち萬葉主義に外ならぬ。

又曰く

「萬葉が遙かに他集に抽んでたる所には、他集の歌が毫も作者の感情を現し得ざるに反し、萬葉の歌はよく之を現したるにあり。他集が感情を現し得ざるは感情を有りの儘に寫さゞるがためにして、萬葉がよく之を現し得たるは之を有りの儘に寫したるがためなり。曙覽の歌に曰く

いつはりのたくみをいふな誠だにさぐれば歌はやすからむもの

「いつはりのたくみ」。古今集以下皆是なり。「誠」の一字は曙覽の本領にして、やがて萬葉の本領なり。萬葉の本領にして、和歌の本領なり。我謂ふ所の「有りの儘に寫す」とは即ち「誠」に外ならず。」

これも佳い言葉である。子規の有りの儘に寫す主義即ち寫生主義のよき説明である。

又曰く

「西行の如きは幾多の新材料を容れたるところ或はこの有りの儘の意義を解する者に似たれども、實際其歌をみれば百中の九十九は皆いつはりのたくみなるを知らん。趣味を自然に求め、手段を寫實にとりし歌、前に萬葉あり、後に曙覽あるのみ。」

と。即ち子規の自然主義、寫實主義である。次ぎに尙一節を拔いて、この引用を差しやめる。

「余は思ふ。曙覽の貧は一般文人の貧よりも更に貧にして貧、曙覽が安心の度は一般貧文人の安心よりも更に堅固なりと。蓋し彼に不平なきに非るもその不平は國體の上に於ける大不幸にして衣食住に關する小不平に非ず。「獨樂吟」の中に曰く

たのしみは木の芽煮やして大きなる饅頭を一つ頰ばりし時

たのしみは常に好める燒豆腐うまく養たてて食せけるとき

たのしみは小豆の飯の冷えたるを茶漬てふ物になして食ふ時

多言するを須ゐず、此等の歌が曙覽ならざる人の口より出で得べきか否かを考へ見よ。陽に淸貧を樂しんで陰に不平を蓄ふる彼の似而非文人が「獨樂吟」といふ題目の下に果して饅頭燒豆腐の味を思ひ出すべきか。彼等は酒の池、肉の林と歌はずんば必ずや麥の飯、藜の羹と歌はむ、饅頭、燒豆腐を取つてわざ〳〵之を三十一文字に綴る者、曙覽の安心ありて始めて之れ有るべし、あら面白の饅頭、燒豆腐や。

たのしみは錢なくなりてわびをるに人の來りて錢くれし時

たのしみは物を書かせて善き價惜みけもなく人のくれし時

曙覽は欺かざるなり。彼は錢を糞の如しとはいはず、あどけなくも彼は錢を貰ひし時のうれしさを歌ひ出でたり。猶正直にも彼は錢を多く貰ひし時の思ひがけなきうれしさをも自狀せり。仙人の如き佛の如き子供の如き神の如き曙覽は余は理想界に於て之を見る、現實界の人間として殆ど承認する能はず。彼の心や無垢清淨。彼の歌や玲瓏透徹。」

これだけの引用で、讀者諸君はすでに曙覽の人と歌との輪廓の如何なるものなりやを略了解されたであらう。そして子規が萬葉主義の立場から、彼に傾到する所以をも了解されたであらう。

子規はなほ、同じ理由から田安宗武を稱讃してゐる。「歌話」の中に曰く、

眞淵は萬葉々々といひて敎へしなるべきも眞淵自身には十分會得せざりし萬葉の趣味の却つて宗武によりて會得せられたるも面白し。

又宗武の說を駁せる眞淵の說を引き(眞淵の國歌八論餘言拾遺)

歌に對する眞淵の眼孔は遙かに宗武より小なりき

といひ、又曰く

その歌はいまだ多く見ざれども作什は一々擧ぐるに勝へず。勁健にして高華なり、古雅にして清新なり。吾は實朝の後始めてこの人を得たるを喜ぶ。しかも二人共に武門の貴人に生れた

ることの不思議さよ。長く和歌の權力を握りて徒に世に誇り、人を侮りし月卿雲客の賤しむべく厭ふべきは今更にいはず、或は古學を窮め、萬葉を解き或は古今新古今を崇拜して自ら歌道の宗匠と稱する彼の幾多の歌人は果して何する者ぞ。

うんぬん。又

春日野の春日の野べに今日もかも里の乙女ら菫つむらむ

を評して、『誠に平凡なる作なり、されど一字の懈筆なく、一點の俗氣なきに至りては全くこの人の特色にして、他人の集中に見るべきものにあらず。平凡遂に平凡ならず』といひ、又

ひむがしの山のもみぢ葉夕日にはいよ〳〵赤くいつくしきかも

を評して、『所謂歌よみなる者をして此歌を評せしめば、子供のつくりたるやうなりとや笑ふらむ。いよ〳〵赤くいつくしきかも、などいへる子供の言葉に似たるだけ面白味あり、この平凡及ぶべからず』といつてゐる。

かくて、『萬葉以後の歌人は源實朝と田安宗武の二人なり』といふ結言となり、又

上にして田安宗武下にして平賀元義うたよみ二人

の歌となつて、實朝——宗武——元義の順序となる、その中間の橋となつたのであつた。

次ぎに當然に平賀元義について一言しなければならぬ。

「墨汁一滴」のはじめにいふ。

天下の歌人擧つて古今調を學ぶ。元義笑つて顧みざるなり。天下の歌人擧つて新古今を崇拜す。元義笑つて顧みざるなり。而して元義ひとり萬葉を宗とす。天下の歌人笑つて顧みざるなり。かくの如くにして元義の名は其萬葉調の歌と共に當時衆愚の嘲笑の裏に葬られ今は全く世人に忘られ了らんとす。

これが當時まだ多く知られざりし備前の歌人平賀元義を九泉の下に、子規が呼び起して、天下に推賞した推薦文の冒頭である。そして子規によれば元義の歌のすぐれたる所以は、その醇乎たる萬葉調たるところにあつた。萬葉調を體得せるが故に古今集以後の歌の如き理屈と修飾の厭ふべきところがない。又彼はかつて實景實感にあらざれば歌によんだことがない。故に眞摯にして古雅、後世の歌にみゆる纖巧嫵媚の弊はすこしもない。これが實にその特質であつた。

その例歌

天保八年三月自彦崎至長尾村途中

牛かひの子らにくはせと天地の神の盛りかける麥飯の山

五月三日望逢崎
はゝそばの母をおもへば兒島の海逢崎の磯浪立ちさわぐ
五月九日過藤戸浦
あらたへの藤戸の浦に若和布賣るおとひをとめは見れど飽かぬかも
逢崎賞月
まそかゞみ清き月夜に兒島の海逢崎山に梅の散るみゆ
望父峰
父の峰雪ふりつみて濱風の寒けく吹けば母をしぞおもふ
成程朗々たる萬葉調である。今日では元義を近世萬葉調歌人の優者として何人も異議を挾むものなく、これに關する研究書の如きも數種をかぞへる。併し子規の時代に、これほど思ひきつて、はつきりと彼を推賞したものは無く、こゝにおのづから批評家としての子規の偉大があらはれてゐる。

五　貫之定家景樹排撃

子規の遣り口は、これまで一向に世に知られてゐない曙覽や實朝や宗武や元義を地下に喚び起して、これを天下に宣傳すると共に、一方これまで歌仙としてその名の高い貫之、定家、景樹の壘を一蹴して、世の宗匠連やえせ歌人達の蒙を啓くにあつた。これは俳句革正運動に於て、すでに彼の取りし手段であつたが、今また和歌革新の運動に於てもこの方法をとつた。

最初に槍玉にあがつたのは貫之である。「再び歌よみに與ふる書」に曰く、

貫之は下手な歌よみにて、古今集は下らぬ集に有之候。その貫之や古今集を崇拜するは誠に氣の知れぬことなど申すものゝ、實はかく申す生も數年前までは古今集崇拜の一人にて候ひしかば今日世人が古今集を崇拜する氣味合はよく存じ申候。崇拜してゐる間は誠に歌といふものは優美にて古今集はことにその粹を拔きたるものとのみ存じ候ひしも三年の戀一朝にさめて見ればあんな意氣地のない女に今までばかされて居つたことかと悔しくも腹立たしくも相成り候。先づ古今集といふ書を取りて第一枚を開くと直ちに「年の內に春は來にけり一年を去年とやいはん今年とやいはん」といふ歌が出て來る。實に呆れ返つた無趣味な歌に有之候。日本人と外國人との合の子を、日本人とや申さん外國人とや申さん、とシャレたると同じことにて、シャレにもならぬつまらぬ歌に候。この外の歌とても大同小異にて、駄洒落か理屈ツぽいもの

のみに有之候。それでもしひて古今集を褒めていへば、つまらぬ歌ながら、萬葉以外に一風をなしたる所は取柄にていかなるものにても、はじめてのものは珍らしく覺え申候。只これを眞似るをのみ藝とする後世の奴こそ氣の知れぬ奴には候なれ。それも十年か二十年のことなら、兎に角、二百年たつても三百年たつても、その糟粕を嘗めてをる不見識には驚き入り候。何代集の彼ン代集のと申しても皆古今の糟粕の糟粕の糟粕の糟粕ばかりに御座候。貫之とても同じ事に候。歌らしき歌は一首も相見え不申候。

云々。これでは貫之も三文の價値もない。

定家並新古今集については、之を貫之並古今集よりはいゝさか高く買つてゐるが、しかしそれとても大した値段ではない。卽ち彼は「九たび歌よみに與ふる書」に於て、左の如き數首があるから、新古今集は古今集に比してやゝよいのであると稱して、實定の「なごの海の霞の間より」、信明の「ほの〴〵と有明の月の」、西行の「さびしさに堪へたる人の」外數首を抜いてをる。そして結論を下して曰く

定家といふ人は上手か下手か譯の分らぬ人にて、新古今の撰定をみれば少しは譯の分つた人かと思へば、自分の歌にはろくなものは無之候

といひ、名家のくせに傑作のないのは狩野探幽の如しと附言してゐる。景樹に至つては馬鹿扱ひである。それでも貫之よりはいゝといつてゐる。そのことはすでに述べた通りである。

六　理屈は文學に非ず

子規の持論、排理屈の辯が、「四たび歌よみに與ふる書」以下に見える。先づ子規は大江千里の

月みれば千々にものこそ悲しけれわが身一つの秋にはあらねど

を評して、上三句は無難なれど、下二句は理屈である。もし我が身一つを秋と思ふと詠むならば、感情的であるけれども、秋ではないが、と當り前の事をいはゞ理屈となる。歌は感情をのぶるものであるのに、理屈を云ふは、作者が歌を解せざるためである。斯様な歌をよしと思ふは、その人が理屈を離れ得ざるがためにして、嚴格にいへばかくの如きは眞の歌にあらず云々といひ、更に有名な八田知紀の吉野山の歌

芳野山霞の奥は知らねども見ゆる限りは櫻なりけり

については「霞の奥は知らねども」と消極的にいつたのが理屈である。すでに見ゆるかぎりはといふ上は、見えぬ所は分らぬがといふ意味は其裏にこもり居るものを、わざ〳〵知らねどもとことわりたる、これが下手と申すものに候。この歌は元々客観的即ち景色の歌である。然るにその中に主観的理屈の句まじる。これこの歌の殺風景なる所以なり、といひ、又同じ作者の

うつせみのわが世のかぎり見るべきは嵐の山の櫻なりけり

を評して「さて〳〵驚き入つたる理屈の歌にて候よ。嵐山の櫻の美しいといふことは無論客観的の事實なるに、それをこの歌は理屈的に現したり。此歌の句法は全然理屈的にて「べきは」とかけて「なりけり」と結びたる最も理屈的殺風景の處に有之候。一生嵐山の花を見やうといふも變なくだらぬ趣向なり。この歌全く取所無之候」といつてゐる。

この外、春海の

心あてに見し白雲は麓にて思はぬ空に晴るゝ富士が嶺

も、契沖の

もしほ燒く難波の浦の八重霞一重はあまのしわざなりけり

も、躬恒の

心あてに折らばや折らん初霜の置きまどはせる白菊の花

も、悉く、理屈ッぽく、無趣味で、俗で、殺風景で、とるに足らぬ愚作である。かくの如き歌の古來世に傳承せられたるは實に怪しむべき至である。これは「五たび歌よみに與ふる書」中に子規のいふところであるが、更に「六たび歌よみに與ふる書」につゞけて、理屈排斥の說をなし、

詩歌に限らず、すべての文學が感情を本とすることは古今東西相違あるべくも無之、もし感情を本とせずして、理屈を本としたる者あらば、それは文學にても、歌にてもこれあるまじく候。故らに皇國の歌はなど言はるゝは、例の歌より外に、何物も知らぬ歌よみの言かと怪まれ申候。「何れの世に何れの人が理屈をよみては歌にあらずと定め候哉」とは驚き入つたる御問に有之候、理屈が文學にあらずとは古今の人東西の人悉く一致したる定義にて、もし理屈をも文學なりと申す人あらばそれは大方日本の歌よみならんと存候

と皮肉をいつてをる。又「七たび歌よみに與ふる書」には

歌の區域をひろくするが小生の目的に候。とはいへ、いかに區域を廣くするとも非文學的思想は容れ申さず、非文學的思想とは理屈のことに有之候

等の言葉がある。

かくの如く理屈排斥は、子規に於ては單に歌に關するだけの問題ではなく、彼は俳句に於ても、文章に於ても、この事を繰り返し説いてゐるのである。

七　寫生、用語問題

理屈を排斥すると共に寫生に力を用ふるのが、子規の思想の重點であるが、しかしこれに就てはこの歌よみに與ふる書中には說くところが多くない。但だ「六たび歌よみに與ふる書」の結尾に於て、

文學にては合理非合理を論ずべき者にては無之、從つて非合理は文學にあらずと申したる事無之候。非合理の事にて文學的には面白き事不少候。生の寫實と申すは合理非合理、事實非事實の謂にては無之候。油畫師は必ず寫生に依り候へどもそれで神や妖怪やあられもなき事を面白く畫き申候。併し神や妖怪を畫くにも勿論寫生によるものにて、只有の儘を寫生すると、一部々々の寫生を集めるとの相違に有之、生の寫實も同樣のことに候

とあるのが、寫生論の一端である。これに就ては「墨汁一滴」や「病床六尺」の中に、最も明かに、又強く、屢ゝ論ぜられてゐるのである。（寫生論の詳細はこゝには省略）

用語問題は今日も歌論として未解決の重要問題であるが、これに關する子規の考へ方がやはり「歌よみに與ふる書」中に見える。即ち

　生は和歌に就きても舊思想を破壞して新思想を注文するの考へにて、隨て用語は雅語俗語漢語洋語必要次第用ふる積りに候(七たび歌よみに與ふる書)

とあり、又

　外國の語も用ゐよ、外國に行はるゝ文學思想も取れよと申す事に就きて日本文學を破壞する者と思惟する人も有之げに候へどもそれは根本に於て誤り居候。たとひ漢語の詩をつくるとも洋語の詩をつくるとも將たサンスクリツトの詩を作るとも、日本人が作りたる上は日本の文學に相違無之候。唐制に模して位階も定め服色も定め年號も定め置き唐ぶりたる衣冠を着け候とも日本人が組織したる政府は日本政府と可申候。英國の軍艦を買ひ、獨國の大砲を買ひ、それで戰に勝ちたりとも運用したる人にして日本人ならば日本の勝と可申候。併し外國のものを用ふるは如何にも殘念なれば日本固有のものを用ひんとの考へならば其志には賛成致候へども迚も日本の物ばかりでは物の用に立つまじく候。文學にても馬、梅、蝶、菊、文等の語をはじめ一切の漢語を除き候はゞ如何なる物が出來候べき。源氏物語枕草子以下漢語を用ひたる物を排

所致し候はゞ日本文學は幾何か殘り候ふべき。それでも痩我慢に歌ばかりは日本固有の語にて作らんと決心したる人あらばそは御勝手次第ながら其を以て他人を律するは無用の事に候（中略）いかなる言葉にても美の意を運ぶに足るべきものは皆歌の言葉と可申、之を外にして歌の言葉といふ者は無之候。漢語にても洋語にても文學的に用ひられなば皆歌の言葉と可申候。（七たび歌よみに與ふる書）

卽ち子規は和漢洋雅俗、いかなる言葉をも用ふべしとする論者で、この點頗る進取的、積極的である。今の口語又は文語の一方に偏する論者と同日に語るべからず。

元來、子規は頗る進歩的な考へをもち、舊來の陋習はどし〳〵破壞するも妨げなしといふ位の意見の抱持者である。新しきことを好み、又研究心に富んでゐた。歌についても、當時すでに盛んに口語歌を試作してゐる。彼が萬葉主義を唱へ、復古運動を鼓吹したがために、固陋なる消極論者であつたにちがひないなぞと速斷しやうものなら、それはとんでもない間違ひである。彼は頗る急進的な積極主義者であつたのである。

凡そ一事の革正運動を企つる程の人は概ね然りであらうが、子規に於ても鬱勃たる進取の氣象は、常に力強く胸中に燃えてゐたのである。この事は、特に、こゝに記るして置きたく思ふ。

八　必死の努力

以上「歌よみに與ふる書」にあらはれたる子規の歌學思想は大要これを抄したつもりであるが、彼は之等の説を吐くにあたり、實に熱心であつた。病苦を忘れて禿筆を呵し、論説をなすと共に、又みづから歌を作つて、これを「日本」に發表した。

當時京の愚庵和尚に書をよせて曰く

此頃歌をはじめ候處あまり急激なりとて陸翁はじめ皆々に叱られ候へども遣りかけたものなら死ぬるまでやる決心に御座候。昨夜も湖村子來訪、歌の話に夜の二時まで更かし申候。前月末頃は歌のため毎夜二時三時に及び、或は徹夜など致し候。この頃のよはりも多少はそれにも原因致し候ひけんと存じ候。

明治三十一年三月十八日の手紙、恰も「歌よみに與ふる書」を發表しはじめた頃である。死ぬるまでやる！とは、その意氣むしろ悲壯である。

又三月十九日附落合直文に送りし手紙には

拙歌につきては攻擊四方より至り候へども、自ら多少信ずる所有之候上は死を決してやる所

存に候。

とあり、三月二十四日附得能文氏に與へし手紙には

歌ものりかゝつた船にて、今更後へ戻すわけにも參らず、やるだけはやり可申候。(中略)小生如何に愚なりと雖も、又病體なりとも、今の歌よみどもには負け申間敷候。呵々。

とある。今の歌よみどもには負けない、といふ、子規の抱負と心熱とを見るべきである。

何しろ子規の態度決心が右のやうである。之に對して議論の沸騰したのも無理はない。子規は一々之に對して答文を書いた。論難者の中に、後年彼の最も有力なる門人となりし伊藤左千夫がゐた。彼は當時春園と號してゐた。又下總の長塚節がゐた。節ははじめて「歌よみに與ふる書」を讀んだ時の感想を次のやうに語つてゐる。

「歌よみに與ふる書」といふのは、十回にわたつたのであるが、自分にはいかにも愉快でたまらないので、叮寧に切り拔いて置いて、人にも見せびらかした。偶之に異議をはさむ者でもあれば、その人がいかにも憎らしくてたまらぬ位であつた。

云々。當時節はまだ二十位の青年であつたが、その後一兩年にして、彼は決心して上京し、子規の門を叩くことになつたのである。左千夫も同年に遂に子規門に入つた。その外、岡麓、香取

秀眞、赤木格堂といふやうな人々がおのづから集り來たつて、根岸短歌會の創立となり、そろそろ子規派の名が世の中へ廣がつて行つた。蕨眞、三井甲之、森田義郎等の名も前後して、この派に近く、その存在を知られるに至つたらしい。

子規は「三たび歌よみに與ふる書」の結尾に於て

斯樣に惡口をつき申さば生を彌次馬連と同樣に見る人もあるべけれど生の彌次馬連なるか否かは貴兄は御承知の事と存候。異論の人あらば何人にても來訪あるやう貴兄より御傳へ被下度、三日三夜なりともつゞけ樣に議論可致候。といつてゐるが、この信念あり、この熱心ありて、はじめて彼の事業は成功したのである。私はこの彼の信念を、衷心より尊敬する。

かくて三十三年頃には與謝野鐵幹と論爭をつゞけ、遂に

去年の夏頃、ある雜誌に短歌の事を論じて鐵幹子規と並記し兩者同一趣味なるかの如くいへり。吾以爲へらく、兩者の短歌全く標準を異にす。鐵幹是ならば子規非なり。子規是ならば鐵幹非なり。鐵幹と子規とは並稱さるべきものにあらずと。（墨汁一滴、三十四年一月二十五日）

といふに至つた。この子規の信念は流れ〳〵て今のアラヽギに及んでゐる。要するに「歌よみに與ふる書」を發表して短歌革正の第一聲をあげた子規の運動は、よし彼の生前には十分成功す

るに至らなかつたとはいへ、今日すでに歌壇の主潮となり、今や牢固として拔くべからざる地盤をもつに至つたのであつて、子規また以て地下に瞑すべきであらう。

明治の文學に、「眞」の生命を吹き込んだ貢獻に於て子規の名は竟に不朽である。詩も歌も俳句も、文章も子規を境界線としてレアリズムへの轉換を劃したのであつた。

第七章　子規のぐるり

漱石、愚庵、羯南、拓川等がこと

一

正岡子規は明治二十七八年の戰役に從軍記者として滿洲に出征したが、やがて講和となつたので、彼は空しく歸國した。しかるに歸途船中で喀血し、途にこれがために起たなかつた。しばらく須磨に療養し、幸ひにも快方に向つたので、松山に歸省した。しかし松山には最早彼の家はなかつた。出征に先立つ三年、子規が大學をやめて「日本」新聞に入り、家族——といつても母堂と妹さん——を引きまとめて、根岸に一家を構へたからである。

家族はゐなかつたが、夏目漱石がゐた。漱石とは一高以來親交がある。現に漱石がこの松山の中學に英語教師として、やつて來たのも子規の紹介によつてゞあつた。

漱石は松山市二番町の上野といふ人の家を借りて住んでゐた。もとより未だ獨身で、婆やを雇

つて、簡素な生活をしてゐた。二階が漱石の書齋兼居間で、階下の一室が明いてゐる。子規にわづかの滯在ではあり、別に家を借りる程の必要もないので、この階下に居候をきめることにした。ところが、この居候なかなか横着で、けふは鷄にしようか、それともウナギにしようかなどと贅澤なことばかりいつてゐた。

子規の俳名はすでに高かつた。松山の俳人たちはおのづから子規の室へ集つて來た。極堂、霽月、愛松、叟柳、梅屋、三鼠などがゐた。子規は熱心にこれ等の人々を敎へた。人々も熱心であつた。かくて俳句の結社松風會が出來、後にホトヽギスの生れる素地がつくられた。

句會もしばしば開かれた。子規の室で運座などやつてをると、漱石も二階からコトリコトリ音をさせて下りて來た。そして一座に加はるのであつた。

漱石の借りてゐた家は、何んでも久保より江さんの伯母の家であつたさうな。今のより江夫人も當時は汚い田舍娘であつたかも知れない。子規や漱石のところへ遊びに行つたこともあらう。そんな事を虛子がより江さんの「嫁ぬすみ」の序文に書いてゐる。ゐの古、より江の句を近頃ホトヽギスにも見るのも、由つて來るところ遠いといはねばならぬ。

二

漱石は純粋の江戸ッ子である。彼は米のなる樹を知らなかつた。子規はいふ——

高等中學校にゐた頃漱石の家をおとづれた。漱石の家は牛込喜久井町で田圃からは一丁か二丁しか隔てゝゐないところである。（筆者いはく、現時の喜久井町と對照せよ）二人で早稻田から關口の方へ散步した。五六月頃でそこらの水田に植ゑられたばかりの苗がそよいでゐる。この時余の驚いたことは漱石は吾々が平生食ふところの米はこの苗の實であることを知らなかつたといふことである。

これではいけない。都の人を一人前の人間にするにはどうしても一度は田舍住居をせしめなければいけないと子規はいつてをる。しかし漱石は遂に麥と稻との區別を知らなかつたかも知れない。

大學時代、子規はノートを抱へて、試驗勉强のために大宮公園の萬松樓に出かけたことがある。池があつたり、松山があつたりして、とても景色がよい。折から晚夏の頃、萩の花が眞盛りである、どうしても勉强などは出來ない。こんないゝ景色をひとりで見るのは惜しいやうな氣が

する。竹村黄塔を呼ぶ。やつて來る。漱石に手紙を出す。漱石も來て一二泊して歸る。遂に子規みづからも勉强はほとんどしないで、空しくノートを携へて歸京した。――こんな經驗は筆者にもある。

漱石は明治二十六年七月大學を卒業し、翌年四月松山中學に赴任した。その僑居へ子規が居候となつてやつた來たことは前記の通りだ。

月日は流れる。漱石は間もなく高等學校教授として熊本に赴く。そこで結婚し、長女を擧げた。續いて留學の命令。トン〳〵拍子の進出。しかしこれに引き代へて子規は病勢次第に進み、漱石が英國に着いた卅四年の春頃は時に危篤に陷り、遂に卅五年九月、漱石の歸るをまたで死んでしまつたのである。

ロンドンの漱石にあてた子規のあはれな手紙がある。これが恐らく子規の最後に漱石に送つたものであらう。いはく

僕ハモーダメニナツテシマツタ、毎日譯モナク號泣シテ居ルヤウナシダイダ、ソレダカラ新聞雜誌ヘモ少シモ書カス、手紙ハ一切廢止、ソレダカラ御無沙汰シテスマヌ。今夜ハフト思ヒツイテトクベツニ手紙ヲカク。

イツカヨコシテクレタ君ノ手紙ハ非常ニ面白カツタ。近來僕ヲヨロコバセタモノノ随一ダ。僕ガムカシカラ西洋ヲ見タガツテ居タノハ君モ知ツテルダロー。ソレガ病人ニナツテシマツタノダカラ殘念デタマラナイノダガ君ノ手紙ヲ見テ西洋へ行ツタヤウナ氣ニナツテ愉快デタマラヌ。モシ書ケルナラ僕ノ眼ノアイテルウチニ今一便ヨコシテクレヌカ。(無理ナ注文ダガ)

畫葉書モタシカニウケトツタ。ロンドンノ燒イモノ味ハドンナカキヽタイ。

不折ハ今パリニ居テコーランノトコロへ通ツテヰルソーヂヤナイカ、君ニ會ツタラカツオ節一本途ルナドトイツテヰタガモーソンナモノハ食フテシマツテアルマイ。

虛子ハ男子ヲアゲタ、僕ハ年尾トツケテヤツタ。

錬卿ガ死ニ非風死ニ皆僕ヨリ先キニ死ンデシマツタ。

僕ハトテモ君ニ再會スルコトハ出來ヌト思フ。萬一出來タトシテモソノ時ハ話モ出來ナクナツテ居ルデアロー、實ハ生キテ居ルノガ苦シイノダ、僕ノ日記ニハ「古白曰來」ノ四字ガ特書シテアルトコロガアル。

書キタイコトハ多イガ苦シイカラ許シテクレ玉へ。

明治三十四年十一月六日燈下ニ書ス

東京　子規　拜

ロンドンニテ

漱石兄

漱石は三十九年十月に出版された彼の「吾輩は猫である」中巻の自序中にこれを引用していはく

この手紙は美濃紙へ行書で書いてある。筆力は垂死の病人とは思へぬ程たしかである。余はこの手紙を見るたびに何んだか故人に對してすまぬ事をしたやうな氣がする。書きたい事は多いが苦しいから許してくれたまへとある文句はつゆ僞のないところだが、書くことは書きたいが、忙しいから許してくれたまへといふ余の返事には少しの遁辭がはいつてゐる。あはれなる子規は余が通信をまち暮しつゝ待ち暮した甲斐もなく呼吸を引きとつたのである。

子規はにくい男である。かつて「墨汁一滴」か何かの中に、ドイツでは姉崎や藤代が獨逸語で演説をして大喝采を博してゐるのに、漱石はロンドンの片田舍の下宿にくすぶつて婆さんからいぢめられてゐるといふやうな事を書いた。こんな事を書く時はにくい男だが、書きたいことは多いが苦しいから許してくれたまへなどといはれると、氣の毒でたまらない。余は子規に對してこの氣の毒を晴らさないうちにとう〳〵彼を殺してしまつた。

子規が生きてゐたら「猫」をよんで何といふか知らぬ。あるひは「ロンドン消息」は讀みたいが「猫」は御免だとにげるかもわからない。しかし「猫」は余を有名にした第一の作物である。有名になつたことが、左程の自慢にはならぬが、「墨汁一滴」の中で、暗に余を激勵した故人に對してはこの作を地下に寄するのがあるひは格好かも知れぬ、季氏は劍を墓にかけて故人の意に酬いたといふから、余もまた「猫」を碣頭に獻じて往日の氣の毒を五年後の今日に晴らさうと思ふ。うんぬん。

これは序文にして追悼文である。漱石が子規の死に目にあへなかつたことは、子規も殘念であつたらう。漱石も殘念であつたにちがひない。私共もまた殘念である。「墨汁一滴」の中で、余を激勵したと漱石はいつてをるが、これは漱石が恬淡で、野心のないことを非難したものである。子規は自分が滿々たる野心家であつただけに、野心のないことを好まなかつた。それが友人であればあるひは難じあるひは激勵したのである。それについて赤木格堂の書きのこしてゐる子規の談片はおもしろい。

子規格堂に向ひ、漱石を評していはく

君なあ、僕の親友に夏目といふ才物があるが、どうも本人に野心がないので困るんだ。執着

心が頓とないのでなあ。今熊本の高等學校から英國へ留學さゝれてゐるが、英文學では日本に二人とあるまい。俳句を作つても超然として他の群と趣を異にしてゐる。

始め大學を出た時早稻田文科の敎師になつたが、その當時の生徒が下駄で敎室へはいつたり、敎師に對して無禮な言語を弄するといふのがかんしやくに障つて、たうとう辭職して僕の國（伊豫）の中學へ敎師に行つたが、始めのうちは可なり氣に入つた樣子だつたが、段々氣に入らぬ所があつたと見えてまた逃げ出した。妙に江戸兒の潔癖があつて執着心が薄いのだよ。

中分のない素養もあり、隨分讀書もやり、異つた頭でもあり、確かに一方の雄であるが、惜い事には本人に野心といふものがないんで困る。僕は平生日蓮を崇拜してゐるから、日蓮の奮鬪振りを詳しく書いて大に彼の野心を煽つたものだ。熊本のやうな田舍を捨てて早く中央へ歸らねば本統でないと力說してやつた。所がそれが君大に漱石のしやくに障つてなあ、長い長い返事をよこして日蓮主義を罵倒して來たよ。どうも變人で野心がないから困る、今度英國へ留學することになつたのは、大學にもさすがに眼の見える人が居たんだね。

この短かい言葉は二人の性格をよくいひ現はしてをり、またこれによつて二人の交遊をも知ることが出來て、興が深い。

三

明治の傑僧愚庵和尚が子規の世界にあらはれて來るのはおもしろい。

愚庵は一に鐵眼、平藩士天田五郎の後身である。五郎は戊辰の役に一家離散し、母と妹とが行方不明になつたので、それを尋ねて全國を行脚したが、目的を遂せず、晩年京都の滴水禪師の門に入り剃髮して愚庵と稱し、風月を友として一生を終つた人である。俠客となり新聞記者となりあるひは興行師ともなつたが、ある時は淺草公園の寫眞屋の小僧に住み込んだこともある。有栖川宮の家從になつたこともあれば、山岡鐵舟の紹介で淸水次郎長の子分となり、また養子にもなつた。桐野利秋とよく、そのために鹿兒島へ行つたこともあれば臺灣征討の軍に從つて臺灣へ渡り、彈丸雨飛の中を馳驅したこともあつた。交友すこぶる多く山岡鐵舟、落合直亮、丸山作樂、品川彌二郎、副島蒼海、福田靜處、本田種竹、高橋健三、國分靑崖、福本日南等の名がすぐに思ひ出される。愚庵著東海豪俠傳の序文を書いてゐる大岡育造や、愚庵遺稿の編者陸羯南がまた彼の友であつたことは、いふまでもない。子規との交りはいつ頃からか明かでないが、羯南との交誼が緣となつたのであらう。

明治二十八年の秋の一夜、子規は虚子をつれて、洛東清水産寧坂の草庵に愚庵をたづねた。折よく主人は居合はせ、三人爐を圍んで話つきず、客携へ來りし柚子味噌を出せば庵主手を拍つて善哉と呼ぶ。爐の上には淨林の釜がチンチンと煮沸つてをる。

老僧や掌に柚子味噌のみそを點す

これが、その夜の子規の句であつた。翌年の春、愚庵が高き鼻、長き眉、羅漢のやうな顏を根岸の草庵にあらはした。病床六尺居士の歡びはいかばかりであつたか。しかも彼は淸水草庵の淨林の釜を忘れなかつた。卽ち詠ふていはく

木枯の淨林の釜つゝがなきや

四

子規は大食であつたが、とくに果物を好み、果物のうちでも柿を好んだ。三千の俳句をけみし柿二つ――この句がそれを證する。この事は既述の通りだ。

それゆゑ、友や弟子がしばしば彼に柿を送つてゐる。京都の「釣鐘」は名もおもしろいが、うまいこともうまい。愚庵はこれを子規におくつた。謝していはく

釣鐘の蔕のところが澁かりき

いくら釣鐘でも、ヘタまでしやぶれば澁からう。しかし、そこに子規の柿好きもわかれば、うれしい心も躍つてゐる。恐らく、むさぼるやうに、食つたのであらう。

　み佛にそなへし柿のあまりつらん我にぞたびし十あまり五つ

　柿の實のあまきもありぬ柿のみの澁きもありぬ澁きぞうまき

　おろかちふ庵のあるじが吾れにたびし柿のうまさの忘らえなくに

こんどは歌での返禮。「發句よみの狂歌いかゞあらん」と附言してゐるが、どうして、狂歌どころでない。澁きもありぬ澁きぞうまき——このへんへお目をとめられへ。柿の使ひは一度は詩人一度は俳人。卽ち桂湖村と寒川鼠骨。これもすでに述べた。

愚庵は明治卅七年一月十七日しづかに圓日のうすづく如き、大往生を、桃山のその庵において遂げた。享年五十一であつた。

五

羯南のことが出た。羯南は陸氏、名は實、もと品川彌二郎に用ひられて、農商務省の役人をし

てゐたが、後辭して同志と東京電報を創刊した。この改題されたものが、卽ち「日本」である。論壇の雄として、當時堂々の陣をはつてゐたことは何人も知るところであらう。

加藤恒忠は外交官であるが、拓川と號して文筆にも秀れてゐた。子規の叔父である。子規を愛し、子規が中學を半途でやめて上京したのも、この叔父をたよつての事であつた。子規は「加藤の叔父々々々々」といつて、何くれと相談してゐた。

恒忠は羯南と好かつた。それで子規が上京したばかりの時、急に外交官として白耳義へ赴任することになつたので、愛する甥の上を、羯南に託して出かけた。子規一生の大恩人は羯南であるが、その連結のはじまりはこの叔父の依賴だつたのである。

まだ青書生の子規を自分の社に採用して、月給をくれたものは羯南であつた。その新聞に俳壇を設け、歌壇を設けて、子規が畢生の大業を成さしめたのも羯南である。子規が引越すといへば羯南は自分の町内に家を求めて子規一家のために便宜を與へた。

芭蕉破れて書讀む君が聲近し

と子規の句。聲の主は羯南である。それほど兩家は接近してゐた。病軀を抱いて神戶にやつと上陸した子規の病狀を京都の虛子に通報したのも羯南であつた。虛子はすぐかけつけて師の病を

みとつた。病床の子規を慰めるためいろ〳〵の心づくしはもとより多かつた。死の床にはもち論羯南とその夫人は來てゐた。かくて、羯南は子規が一歩世の中にふみ出してから、この世を去るまで、陰になり、日向になり、彼をかばひ、彼を引立てた。子規があんなにひどい病苦と闘ひながら、あれだけの文學的貢献をなすことの出來たのは、一つに、羯南の援助によるものである。子規をおもふ人は、必ず羯南のそのかげにあることを思はねばならぬ。

羯南は明治四十年九月二日、東京で死んだが、享年は愚庵と同じく五十一であつた。ほんの三四年遲れて死んだ人がその前の人の遺稿に跋を書いてゐるのも奇であるが、それが二人共同じ享年で死んでをるのは更に奇である。何等か前世の約束事とでもいふのではないか、といふ氣さへする。

しかも三人のうちで一番わかい子規が一番さきに死んでをる。それは明治三十五年九月十九日のことで、子規はわづかに三十六歳の壯年であつた。

今年（昭和二年）五月十二日に子規の母堂が八十三の高齢を以て死んだことを思ひ合すれば、子規は何といふ若か死であつたことか。

「加藤の叔父」は晩年に郷黨に推されて代議士となり、また松山の市長にもなり、銀行會社の重

役なども兼ねてゐたが、大正十二年病氣で死んだ。年齢は知らない。その三男忠三郎といふのが子規の後をついでをる。子規には妻もなく子もなかつた。肉親は一人の妹さん（律子女史）が根岸の子規庵にあるきりである。

田端大龍寺の子規の墓の傍には、母堂の墓があらたに築かれた。

子規のぐるりには、なほ、多くの歌人俳人などがある。一寸考へても右の外になほ不折、碧梧桐、虚子、鼠骨、飄亭、鳴雪等がある。今の文部大臣勝田主計氏の如きも亦子規のぐるりの一人として擧げ得らるゝ人である。恐く子規位多くの友人をもつてゐた人は少ないであらうと思はれる。それも書かねば題意に副はぬ。しかし今はしばらく視野の外におくことゝする。

第八章　子規の母堂

一八十三歳

今日の夕刊は子規の母堂八重子刀自の死を報じてゐる。腎臟炎に風邪を併發して上根岸の舊居に逝くとある。私はこの程去年から書いてゐた「子規全傳」を卒へたが、その終りに、子規は明治三十五年に亡くなつたが、母堂は八十三歳で今なほ健在であると書いた。しかるに、今にはかにその訃を聞く。母堂のゐられる間に一度子規庵へと思つてゐたが、今はそれもあだとなつた。

母堂は松山藩の藩儒大原觀山の女であつた。子規がまだ九つか十の年に良人を失ひ、未亡人となつたが、至つて貞淑な、しつかりした婦人で、子規の成人をたのしみに、獨身をとほして來た。觀山は學德高く、當時上下の尊敬をうけてゐた。少年時代の子規はこの祖父から主に薫陶せられたのである。

妹さんが一人ある。兄の看病のためにほとんど一生を捧げた人である。泣き、どなり、はては

をらび通した、あの業病の子規は、母堂と妹さんのまめな介抱の下に、わづかに生きてゐたのであつた。

　　母とふたり妹をまつ夜寒かな

冬の夜に、買物などに出かけた妹さんをまつてゐるのであらう。母と子と、兄と妹と、三人のかすかなる、しかし涙ぐましい世界を、私はこの句に看る。

二　貧しき生活

子規が大學をやめて「日本」に入つた時は月給十五圓であつた。最後に四十圓まで上つてゐるが、まづ三十五圓位の收入であつたと見ていゝ。もつとも多少の副收入はあつた、けれども合計五十圓にはならなかつたであらう。今日とは時代もちがふが、しかしこれで親子三人をさゝへ、藥價を拂ふことは餘程困難であつたに違ひない。社の歸りに袂に十錢の小遣ひのなかつたこともあれば、年のくれに五錢も餘さなかつたこともある。

日記のうちにいふ。

母廣德寺前にて、罌粟、石竹等の種五六袋買ふて歸らる。(罌粟は余の所望也)お土産燒栗一

袋（十個入二錢）は上野廣小路六阿彌陀へ詣られし歸り門前の露店にて求められたりと。余何故にモ少し多く買はれざるかと問へば、あまりに高き故なりと。

十個一袋二錢の燒菓を高いからといつて、一袋より買つて來ない母である。母の心のつましさもわかるが、子規の生計も察せられる。若い頃は金錢にきはめて恬淡であつた子規が晩年には非常に儉約な、時にはけちと思はれる程の人間に變つてゐるが、それはかうした苦しい境涯に由來するのである。

今日では子規の遺作は全集その他いろ〳〵の形で出版され、印税の收入は相當大きな額であらうと思はれる。百や二百の金は何んでもあるまい。しかし生前の子規の生活はあはれなものであつた。ある男が私にいつた。漱石の遺族は立派な家を建て、大きな石の門までこしらへたが、漱石が「猫」をかいたのは食卓兼用の小机であつたと。藝術家の生涯といふものは大方さうしたものかも知れない。それでも、子規の家も、母堂があれば、まだあかるい。今はいよ〳〵妹さん一人である。子規に子がなかつたことは、さびしい彼の一生をいやが上にもさびしくさせる。紅葉や獨步はまだいゝといふ氣がする。

三　加賀樣の店子

十二日午前六時、母堂が呼吸をひきとつた家は、今から二十六年前、子規が「日本」に入つた頃、羯南主筆の世話で、そのおとなりへ引越した家である。卽ち舊子規庵、彼の事業の大半はここで爲され、遂に彼自らもこゝで死んだ。下谷區上根岸町八二、俗に鶯橫丁といふ狹い通り、上野の森の裏かげであつた。引越して來た時子規は

芭蕉やぶれて書讀む君が聲近し

とよんだ。君とは羯南である。また

加賀樣を大家にもちて梅の花

ともよんだ。前田侯の邸內で、その貸家だつたのである。この家は、子規の死後、移轉を求められたこともあつたが、門人達の盡力によつて、昭和三年文部大臣の認可を得、社團法人となり、子規庵保存會としていつまでも、舊のまゝに保存することが出來るやうになつた。數年前私も一度訪ねたことがある。病氣だつた子規の室もまだ昔のまゝで、壁の上には、子規が旅に用ゐた笠などが懸つてゐた。あの笠は今もあるであらうか。

思ひなしか、小さな庭の草までも、意味ありげに見えて、私は低個去り難いやうな氣がしたのであつた。

四

子規は文藝家は長命せねばならぬ。信實や俊成や北齋は九十以上、雪舟、元信、定家等は八十以上、山陽、芭蕉、竹田等にしても五十以上までは生きた。二十臺でえらかつたものは實朝だけである。文藝家は長生きすることだ、かういひ〳〵しながら彼自らは僅かに三十六で死んだ。せめて人生定命の五十位までも、彼を生かしておきたかつた。それにしても彼を生んだ母堂は八十三の高齢をかさねた。父は彼がまだ幼少の時に死んでをる。今はひとりの妹さんが生き殘るのみ。人の生死離合の不思議が思はれる。母堂の墓は田端大龍寺に子規とならんで建てられるといふ。今、私はあの寺にある子規の簡素な墓石を思ひ出してゐる。（昭和二年五月十二日夜）

第九章　子規の遺品遺墨展覧會を観る

一　三越にて

展覽會といふほどではなかつたが、併し子規の遺品遺稿遺墨二十八點が今年（三年）第二十七回忌を機として九月十五日から一週間三越呉服店の一階に陳列せられた。即ち左の如し。

一　病床手記　　一冊　　子規庵出品
　　子規居士日記の一である

一　蓑と笠　　　　出品者同上
　　子規居士の行脚時代に使用せられしもの

一　散木弃歌集　　一冊　　子規庵出品
　　子規居士の抄寫せられしもの

一　子規居士肖像　　二（寫眞）

一 辭世の句　　一幅　　子規庵出品

　例のへちまの水の句三句である

一 自作塑像　　子規庵出品

　子規居士、歿せられし年の五月に病床にて自ら作りしもの

一 俳句分類　一冊　子規庵出品

　子規居士編纂なり。全部を積めば二丈の高さに達す

一 三幅對半折

　鄙の家に赤き花咲くあつさかな　子規

　馬しかる新酒の醉や頰冠　病骨子規

　雁なくやいはほに白き夜の波　升

一 寒山落木　一册　子規庵出品

　子規居士の自筆自句選

一 飯食考　一册　子規庵出品

　子規居士の稿本である。甚だ面白い

一　八千八聲　一册　子規庵出品

子規居士の編纂なり。二冊中の一

一　仰臥漫錄　二册　同　上

草花の鉢並べたる床屋哉の一句あり

一　筆まかせ　稿本四册のうち一　同　上

一　俳書年表　一册

子規居士の編纂である。

一　寒川氏あての書簡　寒川鼠骨氏出品

一　机

病中の子規居士腰たゝぬため膝をもたせ又は膝をたてて字を書くに便なるやう工夫して一方を切り取り、用ひざる時ははめ込む樣、作らしめたるもの

一　帽　子　大學生時代の角帽　子規庵出品

一　かさねことば　一册　同　上

一　漢詩稿　一册　同　上

一 故事熟語考　　一册　同　上

一 洋語集錄　　一册　楷書　同　上

一 とくさの歌半折　　蕨橿堂氏出品

一 五言絶句　　一幅　結城素明氏賛　子規庵出品

一 寒牡丹之圖　　蕨橿堂氏出品

一 藤の歌並に自畫　　同　上

以上の遺品遺墨遺稿が、糸瓜忌にちなみて、へちま棚をしつらへた陳列棚の中に、ていさいよく陳列せられ、子規の遺著數種並に後人の子規についての研究書類がその間に置かれてあり、とくに政教社の日本及日本人の增刊號「正岡子規」が多くひろげられてあつた。拙著正岡子規全傳並に正岡子規歌集も亦その中にならべられてあつたのである。

二　笠と蓑

私はまへに「正岡子規全傳」を著して、これらの遺物についても多少は觸れて置いたが、併しまだその實物は見てゐなかつた。笠は先年子規忌の句會に列した時、子規庵で一見したが、それ

も今は殆んど記憶にない。今度は謂はゞ初見参である。それで、うれしくて、三越へ二度も足を運んだ。その偶感を記して置く。

笠と蓑。

「墨汁一滴」に自分の笠のことを自ら書いて、

柱に掛けたる菅笠は明治二十四年の春蕨（埼玉）あたりにて買ひ求めて、忍(おし)、熊谷、川越、松山の百穴を見て歸りたる昔のなごり、笠の上の句は此頃消して取りたり。

　武藏野のこがらししぬぎ旅行きし昔の笠を部屋に掛けたり

同じく掛けたる蓑はその前の年の春、房總の雨にそぼちて、捨てかねし旅の形見。

　草枕旅路さぶしくふる雨に菫咲く野を行きし時の蓑

とある。この笠と蓑が先づ眼をひいた。子規の晩年は病床六尺裡のきのどくな廢人だつたので旅行などは思ひもよらぬが、早くは屢〻旅行をしてゐる。芭蕉の奥の細道をおもふて、奥羽行脚を企て、「はて知らずの記」を書いたのは明治二十六年、彼れが年二十七の時であつた。この笠と蓑はこれより先き、埼玉縣及房總の旅に買ひ求めたものである。

それが、今三越の新洋式のガラス張りのうちに陳列せられた。甚だ不調和であるが、併しあの

欝風の子規が現代の浮薄な空氣の中に飛びだして來て、どんなもンだい、と肩を張つてゐるやうに見える。不調和が甚だ愉快である。

机。

これも墨汁一滴のうち、わが室の什物の中にある。曰く

長さ三尺四寸、幅一尺八寸、高さ一尺二寸、正面中程を少し左へ片よりて六寸角程切り抜きたるものなり。こは病床に坐りて左の膝を立てながら机近く引き寄せて物書かんために自ら工夫せるもの、不恰好言はん方なし。

云々。これが矢張り出陳せられてゐる。出陳の說明書も凡そ右と同じである。いかにも不恰好のものであり、抽斗一つない簡素な机である。併し子規がこれに凭つて病間禿筆を呵せし幾年月をおもふと涙が出る。現代の人々は流行のデスクに明るい電燈のスタンドを据ゑて、ひとツぱし文筆の士らしく見えながらさてロクなものは書かぬ。然るに子規はかくの如き汚ない机に病軀をよせかけて、「病床六尺」を書き、「墨汁一滴」を書き、多くの句や歌をよんだのである。

幸福な現代の人々はすこし顧みるがよいとおもふ。

眼の前に、その机を見つゝ、私は感慨無量であつた。漱石が「我輩は猫である」を書いたのも

小さなチャブ臺の上であつた。その「猫」で遺族の人々はゆたかな生活をしてゐると聞く。子規の遺族も全集の印稅でまづしくはないらしい。氣の毒なものは藝術家の生涯である。

三　疊に麻紐の環

机の前方をすこし切り拔いたことで思ひだすのであるが、それは子規が病中あまりの苦しさに堪へかねて、いろいろな工夫をしてゐることである。

三十四年に書いた「墨汁一滴」にいふ。

寢床の傍の疊に麻もて鐶箒の環の如きものを二つ三つ處々にこしらへしむ。疊堅くして疊針通らずとて女ども苦情タラ〳〵なり。こはこの麻の環を余の手の捉まへ所として寢返りを助けんとの企てなり。この頃身體の痛み强く寢返りにいつも人手をかるやうになりたれば傍に人の居らぬ時などのためにかゝる窮策を發明したる譯なるが出來てみれば存外便利さうなり。

寢返りをうつために、疊に麻紐の取り手をつくらしたといふ。三十四年には、もはや自分の身體を自分で持てあつかふことが出來なかつたのである。

同じ「墨汁一滴」の七月一日の項には

健康な人は蚊が少し出たばかりのことで大騷ぎをやつてうるさがつてゐる。病人は蒲團の上に寢たきり腹や腰のいたさに堪へかねて時々わめく。熱が出盛ると全體が苦しいからたえずうなる。蚊なんぞは四方八方から全軍をこぞつて刺しに來る。手は天井からぶらさがつた力綱にすがつてゐるので、蚊を打つことは出來ぬ。仕方がないので、蚊帳をつると今度は力綱にはなれるので病人は勢力の半分を失ふてしまふ。その上に、もし夜が眠られぬとなると邉る瀨も何もあつたものぢやない。

とある。これでみると、子規は疊の上に麻綱の取り手をこしらへたばかりでなく、天井から力綱をさげてそれにつかまつて居たと見える。夏の夜、蚊にせめられ、蚊帳をつると力綱に離れるので、體の力の半分をそがれてしまふといふ。氣の毒とも、あはれとも、いふべき言葉を知らぬ。實に恐ろしき病魔に取りつかれたものである。

机の一方を切りぬいたのを見て、私はこの二つのきのどくな養生上の工夫を思ひ出したのである。

辭世の句（子規の死の項參照）は懷紙ほどの大きさの紙に

眞ン中に

糸瓜咲て、痰のつまりし、佛かな

と草書で、やゝ大きく、三行に書き、右に小さく、やはり三行に

をとゝひの、へちまの水も、取らざりき

と書き、左に、こんどは二行に

痰一斗糸瓜の水も間にあはず

と書いたものである。死の前數時間にして書かれた筆蹟とは、どうしても思へない程に、はつきりと、強く書かれてある。死の直前まで意識も氣力も實に明瞭であり、又衰へなかつたことを示してゐる。

この一幅は天下の珍品で、子規庵所藏の遺物中でも、一だんと目立つものであらう。

四　自作の塑像

自作の塑像はまた珍らしいものであつた。これはまだほんの試みに過ぎない。技巧としては多く見るに足らぬものであらう。けれども斯樣な塑像を試みた彼の心持は實に尊敬すべきであつて卽ちこれは彼の旺盛な研究心の一つの發露として興味をひくばかりでなく、一面には又彼の寫生

主義の實行的方面のあらはれとして面白いのである。子規は或時香取秀眞氏の鑄物を評し、歌を以て、寫生を勸奬してゐるが、左樣なことを言ひ得るやうになつたのも一つに、斯くの如き研究心のある結果であつたことは爭はれない。

子規が明治三十三年本所綠町の香取氏に送つた手紙には次の如き歌がある。(子規全集　第十五卷五五一頁)

我顏ヲ鏡ニ寫シ其顏ヲ土ニカタドリ土ノ坊主成ル

我顏ヲ鏡ニ寫シカタドリシ竹ノ里人手ツクネノ像

我顏ヲ見テカタドリシ土カタハ我顏ニ似ズアラヌ人ニ似ル

渾沌ガ二ツニ分レ天トナリ地トナルソノ土ガタワレハ

後で子規は右の自作粘土像を母にもたせて香取氏にとゞけたのであるが、右の四首歌はその前觸れだつたのである。母に塑像と共に持たせた手紙には

顏カタゲの像御目にかけ申候。御序に御燒き被下度候。急ぎ不申候。もし燒かずともかたまるものならば燒かずとも善く候。

とあつて

士ガタニウツシカタドル我顔ノスコシユガミテ猶面白シ
常臥ノ病ノヒマノツレ〴〵ニ土ヲツクネテ人ヲツクリヌ
土ガタヲ入レタル罐ヲ携ヘテ秀眞ガリ行ク途中氣ヲツケヨ
此次ニ何ヲコネンカ驚ク莫レ大慈大悲ノ觀世音菩薩
觀音ヲ寫生ナサントオモヘドモ觀音アラズ似タル女モガ
方丈ノ室ニコモリテ捏ネント思フ二丈五尺ノ土ノ盧舍那佛

といふ六首の歌が書いてあつた。甚だ面白い歌である。
この子規手づくりの子規の像（高さ四五寸ばかり）を私は、今度はじめて、この三越の展覽會で見たのであつた。
子規の歌や手紙にはこの塑像つくりについての記事が他にもちよいちよい見えてゐる。

五　俳句分類

俳句分類。
「俳句分類」の原稿も面白いものであつた。說明に子規居士の編纂なり。全部を積めば二丈の高

さに達すとあるのも目についた。

「俳句分類」は未完成に終つたが子規畢生の大事業であつた。それは古今の俳書句集にあらはれた俳句を、同一の題下に分類して、その作者と共に一目の下に分明ならしめ、類句の史的研究をすると共に、後世人の句作の參考に資せんとするものであつた。單に古今の俳書句集といへば簡單のやうであるが、上は宗祇にはじまり、芭蕉蕪村をへて梅室蒼虬に至り、更に近代に下らんとするのであるから、その書類の多きこと眞に驚くばかりにて、大抵の者には、一通り眼をとほすさへ容易のことではない。しかし子規はこの大仕事をひとりでコツ〳〵とやつてゐた。いつ頃着手したかはつきりせぬが、大學二年生の明治二十四年頃であるらしい。それが三十一年まで少くとも續いてゐることは、三十一年の歌「われは」の中の一つに

吉原の太鼓聞えて更くる夜にひとり俳句を分類すわれは

とあるに徴しても明らかであらう。尤も途中從軍や病氣のために中絕したこともあつたと思ふが。

「俳句分類」の稿本は一册が大抵百枚から三百枚位の厚さであつた。一題につき半紙一枚をあてたがその半紙は一枚卽ち一頁が十行罫になつてゐたから、一枚に二十句を記入することが出來る。

もし二十句以上になることがあれば、更に一枚の新しい罫紙を加へるのである。二百枚もとぢた册子の中へ、後から、一枚を追加する必要がしば〳〵生じた。そのため子規の用ふる錐は常に光つてゐた。一句々々毛筆でていねいに書いては消し、書いては消ししてある。かくて雞鳴に及んだことも決して珍らしくなかつたといふ。

この勞作の結果、副產物として「俳書年表」が生れ、「俳家全集」が編まれた。「俳書年表」の原稿は陳列されてをり、見ることが出來た。

寒山落木。

これは子規の手記せし句稿である。明治十八年にはじまり二十九年に終つてゐる。子規が俳句をつくり始めてから最も旺盛だつた頃までの句集である。

仰臥漫錄。

三十四年の夏から三十五年の臨終前數日までの雜錄である。いはゆる漫錄で、ところ〴〵挿畫がある。今年三越に出たものは「その二」の方であるが、開かれてゐるところは鉢うゑの鷄頭の繪で、傍に

草花の鉢並べたる床屋哉

の一句をしるしてあつた。

鼠骨氏あての書簡。

これは甚だ興味多き書簡である。文面左の如し。

僕はこの頃横腹が痛んで筆が取れんのでそれが殘念で不愉快で誠につまらぬ。ところがふと一策を案出して每日「墨汁一滴」といふ短文を書いて、新聞へ出さうと思ひついて一昨日の夜一文を送つておいた。昨夜も一文送つておいた。そこで今朝はそれが出てゐるだらうと思つて、急いで新聞を廣げて見ると、無い。つまらぬ〳〵。何もいやだ。新聞もよみたくない。斯う思ひながら新聞の大組を見ると大物がぴつしり塞つてゐる。それで墨汁一滴を出す餘地が無かつたのであらう。併し僕は處を擇ばぬ。欄外でもよい。寧ろ欄外がよいかと思ふ。欄外を每日二欄借りて欄外文學などもしやれてゐるよ。欄外二欄貸さないだらうか。若し僕に金があつたら廣告文學なども面白いだらう。これは每日廣告料を拂つて自分の文を廣告欄に出すのさ。面白いぢやないか。(下略)

一月十五日　　　　規　仰　臥　書

鼠　骨　兄

子規ほどの大家の文章も當時は新聞に載らなかつたこともあつた。載らないと機嫌がわるい。かんしやくを起して、料金を拂つてもいゝからと鼠骨に訴へたのである。面白い手紙である。鼠骨氏はこの長文の手紙を三段に切つて、茶掛の幅にしつらへてゐられる。この手紙なども蓋し子規の遺墨として珍品に屬するものであらう。

「飯食考」の原稿も、よんだら、嘸かし面白からうと思つたことである。

大學生時代の角帽を見て、私は自分のその頃を、つい思ひ出した。

漢詩稿や故事熟語考は楷書で、とてもうまい文字がこくめいに書かれてあつた。このこくめいに書くことが、おもふに、子規を能筆たらしめた。

結城素明氏の菊の畫賛のある茶掛には

西行不逢佛
東行却逢牛
借問來何處
牛曰牟々々

と、いゝ文字で書いてあつた。

蕨橿堂氏出品の藤の歌並畫及び寒牡丹の一軸は共に遺墨中の逸品、寒牡丹の稚拙で一生懸命の努力の寫生には、愚直のうちに美しい魂がにじんでゐるやうに思はれた。

展覽會の出品は大凡上の如くであつた。もつと大規模にしてくれたらと、その方に多少の遺憾はあつたが、併し逸品佳什のそろひとて、これだけでも實に有難いものであつた。

鼠骨氏あたりの發起かとおもふが、私はこれを感謝したい。今年の子規の日は第二十七回忌といふので、この三越の展覽會があつたり、雜誌が特別號を出したり、句會や歌會もあつて、私はうれしかつた。今後も斯樣な企ては可成ある方がよからうと思ふ次第である。

第十章　或る問ひに答ふる返事

子規と愚庵の關係並に子規の書について

正岡子規全傳を公にして間もない頃のことであつた。大分縣中津商業學校の茂呂治二氏から一通の手紙をうけ取つた。それは拙著にある一二の事項についての質問であつた。斯樣な手紙はずゐぶん處々から貰つたが、これは私の不備を補ふ性質のものであるから、こゝに公表さして貰ひ、私のそれに對するお答をも併せ發表しやう。

一　愚庵との關係

拜啓。筆硯愈御多祥の段大慶至極に存候。扨私儀先生の著書を愛讀し來り種々御蔭を蒙り居るものに御座候。厚く御禮申上候。此節はまた先生の近著正岡子規全傳を拜見仕り二十年來の宿願を遂げ誠に愉快に御座候。何時ながらの御深切なる書振り、趣味津々のうちに覺えず一讀過仕り候。中につき不審の點有之候間甚だ恐縮ながら御閑暇の節御敎示たまはり度御願申上候。

一、愚庵との關係の條について。

和歌に於て愚庵は子規の後輩なる樣御說明有之候ところ愚庵は子規の作歌以前すでに萬葉調の歌を獨自に詠じたるものには候はずや、相馬御風氏なども福田靜處翁の直話をひきて子規の歌は愚庵の御蔭を蒙り居る樣先輩の樣述べ居り候。この點如何や。

二、子規の書について

子規の書は手本より習ひ得たるものならで、自然生のまゝといふところありとの御評に御座候。私も多年子規を好み、書なども習ひたること有之候。粗末な私の感じにはどうも自然生のまゝとは受取り兼ね候。文字の姿より見ればいかにも明治の三筆と唱へられし長三洲の書より脫化したるものならずやと存じ候。情趣の上には又芭蕉の趣有之候。一應確かなことを現存の人につき御調査被下間敷候や。

猶子規の歌の軸などはコロタイプにでも取りて同好者に御頒ちなされてはと存じ候。匆々。

一月二十二日　　　茂呂治二

橋田東聲樣侍史

いかにも尤な質問である。先づ子規と愚庵との關係について述べやう。

成程、私は私の「正岡子規全傳」の中に於て、子規と愚庵との關係について一言し、愚庵も萬葉調の歌をつくつた。歌については子規よりも後輩であつたが、しかし中々佳い歌を多くのこしてゐる云々。（子規全傳七四八頁）

といつた。なぜ、斯ういつたかといふに、別に深い根據のある譯でもなく、又特にしらべたのでもない。たゞ書簡類からぼんやりとかく思ひ込んだものと見える。

が、その後茂呂君の手紙が動機になつてしらべてみると、歌に於ては、いかにも愚庵が子規の先輩である。でこの段は私の所說があやまりであつた。取消して大方に謝する。

すなはち、「日本及日本人」の愚庵號（昭和三年一月十五日發行）を見るに、鳥居素川の話として、

東京に着いて、初めて出社すると、正岡君も同じ月に入社してゐて、互に顏を見合せて、ヤアといひました。この正岡君については、愚庵もその俳論に感服し、珍らしい人だといつてゐましたが、後ち正岡君が和歌に手を出すに及んで、「止せばよいのに、惜しい事だ」と申してゐました。和歌の段になると愚庵は數枚上で、その頃の正岡君を乳臭いと思つてゐたやうです。

云々。

とある。これによると、明かに愚庵が子規の先輩であり、私の說はまちがひであつた。

明治三十年に愚庵から柿を貰つて、その禮狀を出した時、結尾に

俳諧歌とでも狂歌とでもいふべきもの二つ三つ出放題にうなり出し候。御笑ひ草ともなりなんにはうれしかるべく。あなかしこ。

といつてゐる子規の言葉が、右の素川氏の言葉と照應して、はつきり分つて來る。後輩なればこそ、俳諧歌とも狂歌とでも云々といつたのである。

又三十一年三月に愚庵に送つた手紙には、

この頃歌をはじめ候處、あまりに急激なりとて陸翁はじめ皆々に叱られ候へども、やりかけたものなら死ぬまでやる決心に有之候

とあるが、これも、子規が歌をはじめたことを報告したもので、卽ち自分が愚庵に比し、後輩であり、未熟者であつたことを證するものといへやう。

實際の歌の作品について見るに、

頭おろしける頃

鶯の聲ばかりして山寺の春はしづけきものにぞありける

墨染の麻の衣のあさなさな手向くる花の露にぬれつゝ

初めて托鉢したる折に

今朝いでてほほとはいへど否たみて初音やさしき黄鳥の聲

など、これは愚庵が出家後、卽ち彼が年三十九、明治二十五年によんだ歌であるが、二十五年といへば、子規はまだ大學を半途退學して、「日本」に入り、俳句には大に力を注いでゐたが、歌にはまだ手をつけてゐなかつた時代である。二十五年に旣にこれだけの歌をよんでゐるところを見れば明治時代に於ける萬葉調の先進の一人は實に愚庵和尙その人であつたといつてよい。これは尊敬すべきことである。

私はとんでもない間違ひを、うつかり書いてしまつてゐたのである。茂呂氏の示敎を感謝する次第である。

相馬御風氏は曰く

兎に角、正岡子規が萬葉集を楯にして、盛んに歌壇の革新に努めて居た時、旣にそれよりずつと以前から京都淸水の靜寂な庵室裡に孤座して歌壇などゝいふものを聊かも眼中に置かずに、あれだけ生命のある萬葉調の佳い歌を多く詠んでゐた愚庵和尙といふ一個の人物のあつた

事は、今日から回想していかにも興味深い事實である。（相馬氏著愚庵和尚その他）

要之、愚庵は歌に於ては子規の先輩だつたのである。

二　子規の書

子規の書については、茂呂氏の質問に拘らず私はまだ私の前説をひるがへす材料を得ない。前說といふのは、私が「子規全傳」に發表した所で卽ち、

子規の書は稚拙にして簡古、頗る深い味をもつてゐる。

私は近年まで子規の書などをつまらんと思つてゐたが、しかし彼を研究し、彼に對するしたしみが增すにつれて、非常にいゝものと思ふやうになつた。

何んとなく、粗野な筆蹟である。お手本から習んだやうなところは少しもない。生えぬきのまゝ、自然生（じねんじやう）のまゝといふところがある。何流とか、かに流とか傳統によつてまなび得たものでない。それだけ匠氣なく、クサミがない。

良寬は書家の書は嫌ひだといつたさうであるが、これはその匠氣とクサミを嫌つたものであらう。私などもさうおもふ。書などといふものは、下手なら下手で、正直に素撲に書き放せ

ばよいので、あんまりお手本などに拘泥すべきではあるまいと。御手本により過ぎると、自分の個性がなくなり、從つて表面だけきれいで、中味のないものになつてしまふ。個性がないから形は整つてゐても、人を惹きつけないのである。

斯んな見方からすれば子規の書は實に生えぬきのまゝのものである。生一本である。下手であるかもしれんが、しかしそこがいゝのである。書家からいへば、どだい、格にも何にもはまらん邪道であるであらう。私にはそこが有難い。

彼の筆蹟で私の最もすきなところはその自然が第一である。第二に孤悄にして勁いところがある。あの無邪氣な勁さ！ あれが好きである。これは彼の少年時代の漢學的教養からおのづから來たのではあるまいか。例へば漢詩をつくる。漢詩をつくれば古人の詩を讀む。額や軸などにも氣をつける。自然に、書についての眼が養はれるといふものである。

彼の絶筆

　糸瓜咲いて痰のつまりし佛かな

　痰一斗糸瓜の水も間にあはず

　をとゝひのへちまの水も取らざりき

の寫眞版を見るに、これが臨終の、しかも七年も八年も病んで、病み衰へて死にゆく人の、筆蹟かと思はれる位ゐ、氣がはいつてをり、勁いところがある。これは注意すべきであつて、この勁さが彼の性格であり、それが筆蹟の上に最も如實にあらはれてゐる。そこが私の好きでたまらぬ所である。

筆蹟くらゐその人の性格をよくあらはすものはない。子規の書の寂しさとつよさと自然さはさながらに、子規その人の寂寥と雄勁と自然さとである。

節、左千夫、赤彥、皆子規の系統の書である。今では萬葉調の書ともいふべき一派をなしてをる。なめらかなところ、氣取つたところ、小手の利いたところが少しもない。そこが尊むべきである。書の上でも子規は萬葉調である。云々

と。辭世の句は私はこの程三越で子規の遺品遺墨展覽會があつて、そこで、はじめて、實物を見るを得たが、實物を見ても前言をくつがへす必要を感じない。

先頃、政教社で五百木飄亭氏に會つた時、私はふと思ひだして、子規の書の系統について訊いて見た。しかし飄亭氏も別に先生や手本があつた譯ではないといふことであつた。何しろ多才な子規である。幼時の教養と、久しき病床生活と、おのづからにしてあの境地に到達し得たものと

第一章　節の子規庵入門

一　はじめて子規を知る

長塚節はすくなくとも、歌については子規のならした土臺の上に本建築を建てた功勞者である。彼が子規を慕うてその門に來たのは齋藤茂吉氏のいふが如く、いかにも「尊とき因緣」である。そして之は歌道の仕合せであり、また吾々の幸福であつたといはねばならぬ。

彼が子規を知るに至りし由來については、節自身の言葉を借りやう。「竹の里人」と題して節の語つた話が節全集第六卷の「雜文中」にある。かつて馬醉木所掲の文である。今それを引用する。

自分が先生の名を知つたり、又は議論を見たりして景慕のあまりに、是非共逢つて話も聞いて見たいといふ念慮のあつたのは、もう久しいものであつた。こんなことがある。

幕府が瓦解の時分に江戸で役向を勤めてゐた人で、僕の村の名主と知合であつたとかで、後にその名主を賴つて、僕の村へ永住することになつた岡本といふのがある。その人はとうに死

んで跡目の代である。たしかには記憶もないが、十四五位の頃であつたらう。その時のことは今でも知つてゐる。父と共に村の中を散歩した時のことである。茶の木の花がやゝだらけて菊がもうよつほど摘まれた頃である。枯芒の中を歩いた時に、父からかういふ話を聞いたのである。父はその岡本といふ人からきいたのだといふことであつた。岡本の叔父位になる人で東京に發句をつくる人がある。その知合とかに大學生があるが非常な發句熱心で、故人の發句の八萬句とかを八萬遍繰り返して讀んだとかで、今では恐ろしいえらいものになつたさうだといふやうな事で、非常に驚いて話された。その頃は自分は發句などといふものは、固よりのこと、頭が一切空虚なので、格別に感じやう筈もなかつたが、只偉い人もあるものだなァ位に、偉いと話されたのでさう思つたのであつた。その後もそのことは念頭から離れて居つたが、去年あたりふと思ひついて、聞いてみると、それが全く先生のことであつたのだ。後にこの話をした岡本は自分が家をはなれてゐるうちに、肺病になつて死んでしまつた。丁度自分と同年輩であつた。自分が見舞に行つた時に、先きのことを思ひ出して、尋ねて見たところが、先生のことを知つてゐて、緣者の老人が宗匠で、その宗匠が先生にも會つたことがあるのだといふことをいはれた。とにかく、これが先生について知つた一番はじめのことで、あつたのである。云々

岡本といふ人はどういふ人であつたか、今知るよしもないが、とにかく、この人が子規の存在を最初に節の腦裡に植ゑつけた人なのである。

節は更につゞけていふ。

明治二十八年と九年との夏、鹽原へ保養に行つたのである。自分はその頃から頭が惡くて仕方がないので、なんとか治療の方法もないものかと、思案の末、人の勸めで行つたのである。二夏行つたのであるから、しかとも覺えぬが、たしかに後の夏であつたやうに記憶してゐる。鹽の湯といふ狹苦しい谿谷に六十日も滯在した。喧ましい鹿股川を隔てて鼻を突きあふやうな雜木山に向つて、退屈で仕樣がなかつた。斯ういふところの習慣で相宿の客とは別懇になり易いものなので、自分もいろ〳〵の人と交際した。大抵は入れ替り、立ち替りでしばらくも止まることはないが、下野の矢板の在から來た人が、永逗留をした。この人と格別に往來したが、この人が「日本」を見てゐた。自分はその時分國民や讀賣が好きでいくらか文學の趣味を解したつもりの自分は文學新聞はこればかりなどと、ひとり決めをして他のものには眼も貸さうとはしなかつた。ところが、その人のいふに近ごろ俳句の議論が「日本」に出てゐるが、中々むづかしいものであるといつて見せられた。成程むづかしいものだと思つて、見は見たが、解し

やう筈はない。併し一つ面白いと思つたのが、今に記憶してゐるが、それは

名月や裏門からも人の來る

といふ句のもの字が、惡い理屈であるといふのであつた。しかしその時は論じた人が誰だか一向注意もしなかつた。さうして「日本」を見たのも三日か四日かに過ぎなかつた。この俳句の問答を書いたのは先生「子規」であつたといふことを知つたのはずつと後である。自分が先生の議論を見たのは、これがはじめてであつた。

二十九年といへば、節がわづかに十八歳で、水戶の中學校を腦神經衰弱のために半途退學した年である。保養のため、鹽原に滯在してゐたが、この時はじめて子規のかいた文章を偶然にも見たのである。

因に、右の名月の句については、子規は、外に惡い所はなけれども「も」の一字はたしかに理屈を含み、この一字の爲に全句を殺したり、といつてゐる。（合本俳諧大要のうち、俳句問題一一四頁）

更に節はつゞけて曰く、

それからこれも、その夏のことであるが、鹽原から歸つて、近く發行せられた「世界の日本」といふ雜誌を見た。世界の名士の肖像などが載せられてあるのを、ひどく面白く思つた。これ

に「わが俳句」といふ一篇が出てゐた。自分は一わたり讀んで見たが、むづかしくてさつぱり解らないやうに感じたが、何等か面白いところもあるやうに思つた。さうして、主意がどうかといふことよりも「我が俳句」といふ一篇があつただけは忘れることが出來なかつた。その後さきにいつた岡本が、或日自分の家に來たことがあつたが、その時に「わが俳句」の話が出て、それを岡本に見せたところが、この獺祭書屋主人といふのは俳人子規の別號である。子規といふのは肺病でどうだとかいふことを語つた。……自分の家では久しく「日本」を取つてゐたので、この時分から少しづゝ注目するやうになり、先生の句がいつも眼につくやうになつた。これがまづ先生の名を知つたはじめである。

——その後いくらか俳句を面白く感じて來た時に、先生の「歌よみに與ふる書」が出たので、もう十分にこの方にひきつけられて到頭歌で教へをうけるやうになつた。(三十六年十二月馬醉木第七號)

「歌よみに與ふる書」は、當時まだ二十歳の青年に過ぎなかつた節にいかなる影響又は印象を與へしかといふに、彼、みづから後に人に語つて曰く、

「歌よみに與ふる書」といふのは十回にわたつたのであつたが、自分にはいかにも愉快でたまら

ないので、叮嚀に切り拔いて人にも見せびらかした。偶々これに異議をはさむ者でもあれば、その人がいかにも憎らしくてたまらぬ位であつた。その頃大分「日本」紙上の歌壇はかまびしかつたが、他の歌よみの專門の連中は、うんだとも、つぶれたともいはない。たまに何故默つてゐるのだと、人からからかはれても自分は歌よみではないといふやうな遁辭を設けて尻込みする弱蟲の中で、盛んに先生にはり合つてゐた春園といふ人が今日吾々と行動を共にしてゐる伊藤左千夫君であるといふことは更に思ひがけやう筈もなかつたのである。云々

春園の左千夫が、こゝではじめて、節の言葉によつて紹介されてゐる、甚だ面白い。「歌よみに與ふる書」を切り拔いて、人にも見せびらかしてゐた、といふ節の言葉は、後のこの師匠と弟子との關係に思ひ合せて一段と興味深く感ぜらるゝ。

「歌よみに與ふる書」は大に反響をよび起して、贊雖の議論が、四方から子規のぐるりに集つた。子規が之に對して一々答辯したものに、「人々に答ふ」がある。之について節は曰く、

それから「人々に答ふ」といふ標題で出たのが、いかなる難問に出會ふても極めて明快に、極めて容易に、解說されたが、いかにも心持がよくつて、未だに忘れない。その中でも、或人の和歌が人を感動せしめて命を助かつたとか、領地をかへされたとかいふ歷史上の問題を捉へ

て詰責したのに答へて、人を感動せしめた歌が決して名歌でない。都々逸は下品なものである
が、女郎雲助を感動せしむるのは、都々逸でなければならない。維新の志士と稱する者の詩は、
詩でなければども、書生の氣を鼓舞するのはこの志士の詩に限つてをる。眞の名歌と稱すべきも
のは、趣味を覺えた文學者の頭で判斷したものでなければならないといふやうな意味のものが
あつたが、どうしても忘れられないことなのである。

一寸註をするが、これは内藤鳴雪の質問に答へたもので「人々に答ふ」のその十三に出てゐる。
私も節と共に、こゝのところの子規の說に痛快を叫ぶものである。節又曰く

そのうちに議論ばかりでは埒があかないから、作例を示さうといふので「百中十首」が出は
じまつた。自分はそれまで歌集などをあまり見たこともなく、古今集なぞでも一枚讀まないう
ちに嫌になつて、放り出してしまふといふやうな鹽梅であつたが、「百中十首」が出るとはじめ
は變なものだと思つたがだん〳〵面白く感じて來て、頭到眞似て見るやうになつた。

百中十首といふのは、子規が自作の歌を、友人知己に示し、その佳なるもの。十首を選びて、
作歌の參考とせしもの、例へば佐々木竹柏園主人の選びしものを擧けんに左の如くである。

百　中　十　首（竹柏園選）

武藏野に春風ふけば荒川の戸田の渡に人ぞ群れける
御車に供奉せしことも夢なれや古里の山にひとり菊を植う
やぶ入の女なるらし子を負ひていかのぼり持ちて野の山道行く
木曾山の山のはざまを我行けば笠の端わたる五月雨の雲
寢靜まる里のともし灯皆消えて天の川白し竹藪の上に
玉くしげ二子の山に風吹けば雲飛びいたる蘆の水海
古さとに我に五反の畑あらば硯を焚きて麥植ゑましを
潮早き淡路の瀬戸の海狹みかさなりあひて白帆行くなり

金州戰後

人住まぬいくさのあとの崩れ家杏の花は咲きて散りけり

病中對鏡

昔見し面影もあらずおとろへて鏡の人のほろほろと泣く

今から見れば、決して子規の名譽になる作ばかりではないが、併し彼の熱心な研究的態度には首服せざるを得ない。この熱心がありたればこそ後年の大をなしたのである。

二　最初の訪問

さうかうしてゐるうちに、節の胸は子規を訪問したいとおもふ心でいつぱいになつた。上京したくてたまらない。しかし、まだ、なか〳〵思ひきつて、上京して、子規の門を叩くといふ決心がつかなかつた。それは一つは東京の子規の住所がどこであるか、知らない。又、二には自分の無識を耻づる心からであつた。けれどもどうしても訪ねたくてならず遂に子規庵へ行かうと思ひ立ち、十三日出京したのであつた。「竹の里人」中に曰ふ。

そこで自分は先生の住所を知ることに非常に苦心をした。「日本」に關係ある人なのだから、社へたゞせば直きに分るのであつたらうが、その時分はそんな智慧も出なかつた。そこで、ふと「日本」の俳句に。「鶯横町まがらんとすればしぐれけり」といふのがあるのに、目がついて、これは屹度こゝが先生の住所であると知つた。それからホトヽギスを見るやうになつて、漸く上根岸のそこがさうであることを確めた。それからその後根岸のあたりをブラ〳〵歩いて愈といふとこを突き止めたといつては變だが、そこらの模樣を見て、三月二十七日、それは明治三十三年三月二十七日、染筆を乞ふつもりで、短册を用意して、半ば恐れを抱いて、先生を訪問

に行つた。自分は今は一年に三回か四回の上京も覺束ないのであるが、その頃はその兩三年以來しきりに上京して、悠遊したことであつたのだから、早く先生のもとについたならば更に大に利益したことであらうに、惜しいことをしたと思ふこともあつたが、この時はじめて、思ひきつて行くことになつた位だから、據所ないことである。さてその二十七日といふのは非常に天氣もよい日であつたが、午後から出かけた。黑塀をぐるつと廻つて、前に見てをいた門の所へ出ると、立派な人力車が一臺、主人を待つて控へて居て、そつと玄關を見ると客の下駄のやうなのが、二三足並んでゐる。思ひ切つて入らうかと思つたが、何となく氣遲れがして二三遍行つたり來たりしたまゝ、到頭門の扉を押し開ける勇氣も出ないでスゴ〳〵として歸つてしまつた。翌日は人に先んぜられないやうにと思つて、午前に行つた。今日は誰もまだ來てゐないやうであるから、玄關に立つて案內を賴む。そのうちにゴホ〳〵といふ先生の咳が二三度聞えて、やがてお母さんが出られたので、自分は半紙を手頃に切つて自分で認めた名刺を出す。しばらくすると、先生の病室六疊へ通された。その時先生はガラス窓に近づいて襖の方を枕にして寢て居られたが、上體を少し擡げて左の肘で支へつゝ、いま自分が出した名刺を蒲團の上へ置いて、下を向いた儘ぢつと見詰めて居らるゝ所であつた。イヤ失敬といふやうな先生の挨拶

があつて、俳句の方でお目に掛つたことがあつたのですか、歌の方で御目にかゝつたことがあつたのですかといふ問があつた。そこで自分は歌について教をうけたいといふと先生は暫く默して居つたが、いくらでも作るのがいゝのですといつて、又程經て、作つて居るうちに惡い方へ向つてゐると、それがいつか厭になつて來るのです。惡いことであつたら、屹度厭になつて仕舞ふのです、といふやうなことを話された。自分は先生はもつと物をいはれる人であらうと思つたのに案外言葉の少ない人だと思つた。併しその少なかつた話が自分には非常に浸み透るやうに覺えた。(明治三十七年二月馬醉木第九號所揭)

それから節は持參した短册を出して子規に揮毫を乞ふた。子規は、一枚づゝ書いて數枚をくれる。節はだまつて、出來たのを手にとつて見る。そこへ襖をあけて一人の客がはいつて來た。それは中村不折であつた。右の馬醉木の文章には、まだ、斯うしたことが書いてあるのである。日頃慕ひこがれてゐてもさて愈眼のあたりその人に會へば、氣がおくれて、なかなか口も利けない。地方青年のはじめて上京して、當時の文壇の大家に會つた時の心持又は態度がいかにもよく描かれてゐる。

節は三十日の日に再び子規庵を訪ふた。子規は前のやうにガラス窓に近く、襖の方を枕にして寢てゐた。節は國元から持參した丹波栗を二升ばかりそれへ出した。子規がこれはどうして保存するのかといふ問ひを發したので、節は砂と交へて土中に埋めて置く旨を答へる。そのあとで節は、かねて用意してゐた丹波栗をよんだ歌を三首ばかり、子規の前へ出した。

先生はこれをぢいつと見てゐられたが、「そのうちの一つをこれだけは別に惡いこともないが、あとのはもつと尻が締らなくてはいけないのですと言はれた。自分はうれしいやうな、恐しいやうな氣がして聽いて居つた。先生のは後になつてもその通りであつたが、自分等の作つたものを見て貰ふのにその作品が非常に拙劣で隨分叱責されるやうな場合でも、最初はこの時のやうに唯ぢいつと見て居られて、それから極く柔かに叱られるのであつた。比較的上作であつた時は直ちに面白いといふ一言で終るのである。

甚だ面白い態度であるとおもふ。この時子規は節に對して、作歌の原則ともいふべき大切なことを敎へてゐる。節はそれをていねいに書き記してゐるが、今私が、參考のために要約してみれば、

原則。歌の重心は結句にあり。故に初句にいふべきは二句に延していひ、二句のものは三句に、

三句のものは四句に、順々に繰り下げて結句に集注すべし。

例歌と說明。

(一)大鷦鷯高津の宮は雨漏るを葺かせぬことを民はよろこぶ

(子規曰)この結句が「民は」と曲折してゐるから尻が据わつてゐるのである。三句までは極めて平凡に言つてある。四の句に至つて一つの曲折を作つてゐるのを、更に結句に斯う言つてあるので十分に締りがついてゐるのである。これがもし「喜びにけり」といふやうな句で結んであつたら到底ものにならないのである。

(二)大汝少彦名の在しけむしづの岩屋は幾代經ぬらむ

(子規曰)三の句まで一直線に言ひ放つて四の句の「しづの岩屋は」の「は」で曲折をなして、次に時間を含んだ句で結んであるから、尻が非常によく据つてゐるのである。この歌は結句が「苔蒸しにけり」といつても落着くのである。

(三)白金の目拔の太刀をさげ佩きて奈良の都を練るは誰が子ぞ

(子規曰)四の句までずうと言ひ下して置いて、結句で「練るは誰が子ぞ」の「練るは」と曲折をつけてあるから据わりがいゝのである。

(四)時により過ぐれば民の歎きなり八大龍王雨やめたまへ

(子規曰)これは三の句までは非常にまづい。殊に「時により」などの句はひどい。然るに「八大龍王雨やめたまへ」の句ですつかり据つてゐる。三の句までの平凡な、輕いところがいゝのである。歌では成る可く初めは輕く出る。さうすればおのづから尻が据るのである。初めにつよく言ひ切つてはどうしても尻がふら〳〵する。

そこではじめに擧げた原則が出來る。これは實に歌の死活の問題である。

古今集はやう〳〵尻輕の病弊を食ひとめてゐるが、古今以後の歌は皆頭重脚輕である。こんな調子のことに氣のついたものは貫之以來一人もない。云々

これがその日の午前中に子規が節に敎へた作歌道の要旨である。實にいゝことを敎へてをるとおもふ。さうかうしてゐるうちに晝も過ぎてしまつた。

但し晝飯を馳走になつたか否か、節は書いてない。

四　初陣の十首歌

晝も過ぎた。

子規は妹さんをよんで、火を點じた線香を持つて來させた。そして、節に、この線香の燃えきれぬうちに、この部屋又は庭の實景をとらへて歌に詠んで見よと命ぜられた。節はこんな事にこれまでかつて遭遇しないので、少なからず不安心に思つたが、已むをえず筆をとつて出鱈目に書きつけたのが十首ばかりになつた。すなはち、

うたびとの竹の里人おとなへば病の床に綸をかきてあり
あら庭にしきたる板のかたはらに古鉢ならべ赤き花咲く
生垣の杉の木低みとなり家の庭の植木の青芽ふくみゆ
ばらの木の紅き芽をふく垣のうへに小さき蟲のいでて飛ぶみゆ
人の家にさへづる雀ガラス戸の外に來て鳴け病む人のために
ガラス戸の中にうちふす君のために草萠えいづる春をよろこぶ
古雛をかざりひいなの繪をかけしその床の間に對ひて坐りぬ
わか草のわづかに萠ゆる庭に來て雀あさりて隣へとびぬ
ガラス戸の外に飼ひ置く鳥のかげのガラス戸透きて疊にうつりぬ
枝の上にとまれる小鳥君のためにたゞ一聲を鳴けよとぞおもふ（座上剝製の鳥あり）

これ等の歌は、成程、まだ左程深いものではない。しかし彼はたど〳〵しい乍らも、いかにもよく注意してこまかいところを見てゐる。忠實に寫生してゐる。早くも子規風の寫生をやつてゐるところが注目に價ひする。この日のことを節は後に記して曰く、

先生は家族のものをよばれて、線香に火を點ぜしめ、やがてこの線香の燃えきる間に、こゝの實景を歌によめと命じられた。自分はこんなことに遭遇したことがないので、少なからず不安心に感じた。やむを得ず筆をとつて、でたらめに書きつけたので、十首ばかりになつた。自分は線香のもえ切れないうちに、出來たのがむしろ意外であつた。先生もしばらく經つて、筆をなげ棄てて室内の器物をよんでみたといつて紙片を示された……その後三四日を經て、「日本」に自分の作つた十首が掲載されたのを見て、自分は驚いた。これから自分も歌會などに出席するやうになり、東京の歌人とも知合になつた云々。

即ち左千夫、麓、格堂等を知るやうになつたのである。

とにかく、前記子規庵訪問の歌は、節にとつては歌壇への初陣だつたのである。

なほ、この日子規のよんだ寫生の歌は、「わが家の什具」といふ題で十首ある。即ち

わが家の什具

我家の長物は皆人のたまものなり。茶日卓一つ露石より

ある時はひひなを祭りある時は花瓶を置く眞黒小机

紫のほのかに匂ふ一輪ざしの花瓶一對、鼎の銘や何や彼や篆字もて書きたる支那の絹團扇は叔父のおくりたまへるもの

フランスの人が造りしビードロの一輪ざしに椿ふさはず

もろこしのからのみやげにもらひたる濃き紫の月がた團扇

露石は大阪の俳人水落露石、支那の絹團扇を送つた叔父といふのは加藤恒忠氏であらう。

今戸燒の茶托五枚、一枚々々に古瓦の文字を寫したるは隣の君のたまもの、字は蔵六なり

いにしへのからの瓦に彫りきとふ文字をうつしゝ茶托四五枚

「隣の君」は陸羯南であらう。二十七年二月、子規が上根岸八十二の羯南の隣りへ引越して來たことはすでに述べた。

この外、不折の模様に擬して秀眞の鑄たる茶托、虚子の送りし鶉、蘭原氏の寄せし剝製の小鳥、種竹山人の贈りし上海の醉蟹。岡麓の送りし釜など。

子規はこれ等を皆歌にしてゐる。彼の生活がしのばれて、ゆかしい。

第二章　節の病氣

附。病中雜詠の解について或人に答ふ

一

節の病氣についてはまづ其年譜を見るに

明治四十四年。三十三歳

　春、堆肥の研究をなし、また竹林栽培に着手す。七月頃より咽喉に痛みを覺ゆ。十一月上京、岡田和一郎博士の診察を受け、喉頭結核と診斷せらる。十二月五日岡田博士の根岸養生院に入院す。

とあつて、發病から入院の次第は明かであるが、なほこの病院から門間春雄氏に送つた手紙がある。これは入院の翌々日即ち十二月七日に書いた手紙で、發病の模樣など極めて詳細に報じてある。

拜啓。ふと大兄を思ひいでて、不思議の場所より一書差進申候。此までの御疎遠これにて御海容被下度候。小生は只今喉頭結核といふ診斷にて、兎にも角にも手頼るものは斯道の大家より外に無之、岡田博士の經營する本院へ參り申候。只今思へば八月以來唾液を嚥むに、ぴりりと咽喉に痛みを覺え候に、別に氣にもかけず打棄て置き候ひしを、十月になりて咳はげしく、懇意の間柄なる田舍の專門醫に見せ候處、これも格別のことにも思はぬ樣子にて打過ぎ居候に、小生も別段苦痛も感ぜぬ病氣ながら、ふと思ひ出してよく〳〵奧の方まで見て貰ひ候處、醫者も始めて驚き候譯合、先月中旬上京小此木と申す大家に見せ候に、只暖地へ行けとのみ、小生も二三泊して歸京すべかりしに、友人の勸めにより木村といふ學士、此は富豪岩崎一家の格別なる信用を博し居る人の由にて、これに見せしに、卽刻病名を宣告、打捨て置き候へば存命は一年か一年半と申されしに付、流石に小生も數日間は快々として食慾も減退の氣味、然し乍ら只管此の學士をたのみに通ひ申候處、小生の弟に工學士一人有て、此者只今在京、かつて高等學校にて野球の選手たりしより、只今大學教授にして病理學者なる長與又郎氏と入懇なるを幸、同氏の紹介を貰ひくれ候に付、先月末日岡田博士に診察をうけ申候に、手術を施して患部を切取るに如かずとのこと、藥品の塗布によりし木村氏を棄て一昨日入院仕り候。

肺部にも僅ながら故障有之ものゝ由、只今は熱もなく盜汗もなく、只今の處身體は虛弱と申乍ら從前と異なることなく、一日六七里の道を行くに苦しからず候。治療の結果いかに落つき可申か、全治せぬまでも可成餘命を延長し得ることを望み申候。三四年間とくと心掛け候て、今一つ長篇の小說に筆をつけたく存候云々

卽ちこれによると、最初に喉頭結核と診斷した醫師は木村學士で、年譜に岡田博士とあるはあやまりのやうである。岡田博士にはついで診察を乞ひ、愈病氣確定して、その經營になる下谷の根岸養生院といふに入院したのであらう。喉頭結核の外に、肺にも故障があつた。

昨夜第一回の手術を受け申候。簡單にして些の苦痛も無之、起居何の拘束も無之候。院長はこの手術に於ては方今只一人なりと自稱致居候由に候が、如何のものに候か、何と申しても小生は大事に大事をとらねばならぬ身體に相成申候。二回程ツベルクリンの反應を試驗致し候へども、矢張結核菌の存在をたしかめられ申候。此間も篤と御申きけに候へども、小生只今にては心も落着き申候に付、神經のために病勢を增進せしむるが如きことは無之候。平に御安心被下度候。（下略）

これは明治四十四年十二月九日に右養生院から千葉縣の寺田憲氏に送つた手紙である。この手紙

の文面にも非常に悲觀したり、失望したりしてゐるやうなところはない。いはゞ案外平氣である。
これは理性に勝つてゐた彼の性質と見るべきであらう。

尤も、右門間氏への消息のうちには

さすがの小生も數日間は怏々として食慾も減退いたし云々

とあり、又「病中雜詠」その一のはしがきには

喉頭結核といふ恐ろしき病にかゝりしに知らでありければ心にも止めざりしに打棄ておかば餘命わづかに一年を保つに過ぎざるべしといへばさすがに心はいたくうち騷がれて

とあつて、相當驚の色は示してゐるが、併しこれとても子規が明治二十九年三月はじめて結核脊髓炎卽ちカリエスの診斷をうけて、虛子に飛報を送り、

貴兄驚き給ふか。僕は自ら驚きたり。今日の夕暮ゆくりなくも初對面の醫者に驚かされぬ云云

といひ、

五分間の後は平氣にかへりぬ。醫師のかへりたる後十分許り何もせず只枕に就きぬ。其間何を考へしか一向に記憶せず

いかにも尤もに想像され、又同情もされる次第である。

三　或人の問ひに

この歌について、――といつても最後の一首について、未知の人からかつて私のなした解釋につき、質問の手紙を貰つたことがある。餘談であるが、參考のために、左にしるして置かう。

衰ふる我が顏さびしこゝにだにあけに映えよとあけの紙貼る

この歌の解釋については、私は實はよくわからない。それで前に紅玉堂本新釋和歌叢書中「長塚節歌集」を私が執筆した時に、これに關しては唯だ

「朱(あけ)に映えよと朱の紙貼る」は私にもよく分らないが、節は紅い色の懷紙などによく歌を書いてをるが、あの懷紙を指していつてゐるのではあるまいか。紅懷紙(べにくわいし)の右寄りに一首の歌を二行に、やゝ大きく書いたのを、私は中村憲吉君のところで見た。齋藤隆三氏の家でも見た。その懷紙のことであらうと想像する。或は又、朱の紙をはつて病の平癒をいのる地方的の風習でもあるのであらうか。

と述べ、疑問を存して置いたが、これについて、岩手縣下閉伊郡山田町御藏山白土喜久方野塚捨

三氏といふ人から

私は肺結核及滲出性肋膜炎のために死生の境に彷徨すること前後四囘、今漸く快復の曙光を見乍らも、貧窮と病苦の底にあるものですが、この間にありて貴著「長塚節歌集」は毎朝いただく一合の牛乳を節して之を求め、一句一行、めんみつに拜見しました云々

といふ前書につゞいて、

「さて衰ふるわが顏さびし」の歌に對する先生の解釋でありますが、私は私の病苦の體驗並に死んだ友の言葉によつて、別個の解釋をしてゐますと述べ、その解釋を述べてゐる。

曰く、

病友はよく言ひました。「人から痩せたの、顏色が青いのと言はれるのが一番いやだ。恐ろしくて聞きたくない」と。そして或る病人の如きは顏色が青いといはれるのがいやさに、可笑しい程頰紅を塗つて、誤魔化さうとしたといふ話もきいてゐます。

肺のため、消耗熱がさかんな時は、頰に一種の美しい紅潮を來たしますけれど、心的懊惱が激しいと、一晩のうちに見違へる程衰へて、もの凄い蒼白な顏色となることは人の知るところです。

で、私は前掲の節の歌は、やはり、節自身が顔を鏡に寫して見、あまりの衰へに寂寥の念に堪へず、たはむれに、頬のあたりへちよつと紅い紙をくつつけた時の作だらうと思ひます。

嘗つて、私自身が、しつきりなしに出る血痰に惱まされ、次第に痰が血の塊りとなつて、まつかなヤツが吐き出されるのに辟易し、悲哀と寂寥との荒凉たる心をどうすることも出來なくなり、自分の吐いた血塊を凝視しながら思はず「こいつは素晴しい藝術品」だと口走つて、泣笑ひともつかず、苦笑ともつかぬ、どうにもならない時の變な笑ひを洩らしたことがありました。長塚節もさうした心理を深く體驗したのではあるまいかと思ひます。

卽ち、彼の歌は、蒼ざめた顏の、こゝだけでも赤くてあれと、頬のあたりへ赤い紙を貼つたのではないでせうか。

と。いかにも野塚君の解は詳細である。私の解釋は淺かつた。地方の風習かともふと思つたが、さうでもないらしい。すれば野塚君の解をとるべきであらう。しかし又よく考へてみると、自分の頬に朱の紙を貼つて、一時を胡魔化さうとする、そんな子供らしい氣休めは、節に於ては、篤さうにも思はれぬところもあつて、野塚君の說を全部的に肯定することもどうかと思ふ。大方の示教をまちつゝなほ考へて見ることにしたい。

追記。

あとで長塚節全集の書簡篇をよんでゐると、大正三年七月九州大學病院から島木赤彥氏にあてた手紙の中に

弟がこちらへ來る用があつたので、あの赤い紙をもつて來させました。漸く二枚ばかり書きましたが、こんどの少しよく書けた樣です。久保夫人に對して三年來の書債を果すことが出來るのです。

とある。この赤い紙といふのは、何かはつきりせぬが、やはり私が中村憲吉君や齋藤隆三氏のところで見た紅懷紙(べにくわいし)であらうと思ふ。さうすれば、私が前に想像したのも多少理由ある想像になりさうである。たゞ歌の「こゝにだけ、あけに映えよ」の「こゝ」とはどこであるかゞ分明(はつきり)しないのである。その點は野塚君が「頰ぺた」を指すものとした說が、「衰ふるわが顏さびし」の顏をうけるものと解せられて、妥當のやうでもある。たゞ、節が、赤い紙を頰に張つたといふことが、たはむれとしても、私には節その人らしく思へないのである。

なほ、右島木氏あての手紙で、久保夫人に對する三年來の書債を果したとある久保夫人は申すまでもなく久保博士夫人より江さんのことであり、夫人に送つた歌は「鍼の如く」の中の

たまたまは絣のひとへ帶しめてをとめなりけるつゝましさあはれ

白埴の瓶こそよけれ霧ながら朝はつめたき水汲みにけり

などであつた由であるが、さて何にかいたのであるか。「白埴の」の歌は平福百穗氏筆秋海棠の圖に贊をしたものであるが、「たまたまは」は何んにかいてあるか。想像するに、前記「弟がこちらへ來る用があつた」ので持參させた「赤い紙」であらう。それはきつと、私が中村齋藤二氏のところで見たことのある紅懷紙と同一のものに相違ない。

いや、餘談が長くなつた。一聯十二首の一つ一つの歌については解はせずとも、よく味へばおのづからわかるであらうと思ふ。

「病中雜詠」其二の方は五十首以上の連作であるが、これは「節の病氣」に關聯して述べるよりも、例へば節と女性といふやうな篇を置いて、そのくだりに述ぶべき抒情歌篇である。故にこゝにはこれを省略する。

第三章　節の旅行

附、長塚家の家運について

一　旅　年　譜

節は「旅行について」といふ文章のはじめに

余は旅行が好きである。年々一度は長途の旅行をしなければ氣が濟まぬやうになつた。兎に角全國歩いてみたいつもりで、地圖の上に、朱線の殖えるのを樂みの一つにしてゐる云々

といつてゐるが、實際節は旅行家である。明治の文人では田山花袋氏や大町桂月氏などが旅行家として昔はあげられたものであるが、(今は一々あげ切れない位多くの旅行家があらう)節は花袋桂月以上の旅行家であつたと思ふ。歩いた距離は或は短かいかも知れないが、眞の意味の旅行をしてゐる點では、花袋桂月も或は及ばないかも知れぬ。すでに十八歳の時、水戸から徒歩で那須野を越えて、鹽原へ行つてゐる。

節の旅行の主なるものを次に揭げて見る。

明治三十六年（二十五歳）

七月より八月にかけて、京都奈良伊勢紀州の國々を巡り、三河及び伊豆に遊ぶ。西遊歌（三十六年十一月馬醉木所揭）六十一首はその收獲である。

明治三十八年（二十七歳）

八月十八日發程先づ房州にゆく、轉じて甲斐より中仙道を美濃にいで、近江を經て、京都に入り、更に丹波丹後に遊び、攝津伊勢を經て九月十三日鄕里にかへる。

羇旅雜詠（三十八年十一月馬醉木所揭）百三十六首はこの旅行の所產である。

明治三十九年（二十八歳）

八月より九月にかけて約四十日間東北地方を遊行す。卽ち金華山より松島仙臺を經て羽前國最上にいで、大沼の浮島を見、米澤より檜原峠を越えて會津に入り、新潟にいで、更に佐渡にわたる。名作佐渡ヶ島はこの時の收獲である。再び越後に戻つて彌彥山に登り、又中津川上流秋山の鄕を探り、信越國境苗場山を越えて、上州草津に出た。

明治四十年（二十九歳）

陸中平泉の中尊寺にまうで、更に羽後象潟に遊ぶ。

この年はかの「早春の歌」、「初秋の歌」の如き、傑作を多く得た年であるが旅の歌はない。

明治四十一年（三十歳）

九月上州榛名山を越え、草津奧山より切明温泉といふ山奥の湯に遊ぶ。「淺霧の歌」は榛名越えの時に得たる傑作である。

明治四十二年（三十一歳）

陸中平泉に再遊し、陸奥淺蟲温泉に行き、又十和田湖に遊ぶ。歌なし。

明治四十四年（三十三歳）

この頃は歌についてはすツかり倦怠時代で、小説や寫生文に熱中してゐた。歌はこの年「薬鞍岳をおもふ」十四首があるだけで、他に一首もない。

毎年のやうにやつてゐた旅行もしてゐない。

明治四十五年即ち大正元年（三十四歳）

薩摩開聞岳に上り、耶馬溪に遊び、更に四國に渡つて、道後温泉に遊び、屋島の古戰場を訪づれ、紀州に入つて高野山に登り、奈良京都より近江に遊んでゐる。

大旅行であるが、歌なし。

大正二年（三十五歳）

山陰道に遊ぶ。歌なし。

大正三年（三十六歳）

福岡の九大病院療養中、思ひ立つて日向青島及その附近に遊び、別府を經て、福岡に歸る。

この時の歌は「鍼の如く」その五である。

大要斯くの如くであるが、短かい生涯に於ては隨分よく歩いたものだとおもふ。金華山に行き、象潟にゆき、佐渡に渡り、高野に登り、四國の名稱をたづね、九州は殆んど殘る隈なく行きつくしてゐる。壹岐や對馬までも行つてゐるのである。それが汽車でする贅澤旅行でなく、所謂一簑一笠、汗を流して徒歩するのであるから驚くに足りる。今の世には、青年學生などにも、斯様な旅行は、少なからうと思はれる。

二　旅する心

この旅行ずきの原因を私は、これまで、單に節の自然愛によるものと考へ、普通の文人墨客が

名所舊蹟をたづねて歩くのと大した相違はないもの〻やうに考へてゐたが、この外に、なほ一つの原因があることを近頃知つた。

それは身體の鍛錬のためであつた。苦しい旅行をして身體をきたへることは卽ち病氣を驅逐するゆゑんであると考へた。轉地したり、うまいものを食つたり、高い藥をのんでゴロ〳〵してゐることは、節にとつては何んの足しにもならないことであつた。それは養生でもなんでもない。彼は旅行をして、身體を苦しめることを以て最良の養生法としてゐた。

寺田憲氏への手紙にこんなのがある。

藥を服して美味をとる位の事にては、迚も風邪をひかぬ樣には成り不申候。長き病氣は輕くてもなかなか根治するものには無之、隨つて左程氣にするにも當り不申候。直らねば直らぬなりに、丈夫になる工夫が肝要と存候。小生などは兩三年來斯樣に心掛け候ため、頭は兎角すぐれ不申候へども、寒暑風雨に堪へ申候故格別苦にも相成不申、頗安心を得申候。貴兄にはまだその工夫乏しと存じ候。海水浴は結構のことに候。されど家に居つても美味に飽き候ことにては、海岸へ行つても左程の功顯見え不申こと〻想はれ候。海水浴などいづれ甘(うま)いものを食ふて、ごろ〳〵寢てゐるならむと察せられ候。抑も誤りに候。これもせぬよりはよろしき譯に候へど

も、迚も健康には成れ申すまじく、外部の刺戟に抵抗するなど思ひもよらぬ所に候。それにはいつも申上候如く、長途の旅行に如くもの無之候。海水浴などは身體を極めて安逸に候。安逸に身體を持して、それで丈夫になることなれば、何も苦心も心配も要る所には無之候。身體を苦しめ候故、結果として丈夫になり申すことに候。貴兄には神崎の町を尻まくりになつて歩く勇氣有之候や。それが出來るならば、更に進んで草鞋穿きになつて自宅をいづる勇氣有之候や。それも出來れば最早申分無之候。仕度をして出れば始めて旅情を生じ、旅情を生ずる時はじめて苦痛にも堪へ申候（中略）

目前かほどの結果を得可申に、徒らに安逸に日を送られ候こと歯痒さに堪へ不申候。經費の點より申すも徒歩のみによれば、四十日にして四十圓を越えること有之申すまじく云々。

つまり、旅行による一種の抵抗療法である。抵抗療法であるから、苦しさに堪へることを以て第一義とする、故にすべて草鞋穿きの徒歩旅行である。海水浴などに行き、うまいもの食ふて、ゴロ／＼してゐるなどは、節は大嫌ひである。草鞋の一錢も惜しみ、宿料は必ず値切り可申、これが小生の主義に候。この苦みに堪へ得るやうになればもはや風邪などに冒され申まじく候と寺田憲氏へ言ひ送つてゐる。

それゆゑ、旅費も安い。右にも四十日四十圓でよからうといつてゐるが、即ち一日一圓である。今日に換算しても一日二圓位であらう。贅澤になれた私共の到底能ふ所でないが、節はこれでなくては駄目だといふ。そして彼はそれを實行したのである。

子規は芭蕉の奥の細道にならつて明治二十六年夏奥羽行脚を試み、「はて知らずの記」を書いてゐるが、節が越後へ行つたり佐渡へ行つたりした當時の心の底には、やはり芭蕉や子規の旅する心を慕ふ氣持があつたのであらう。

特急の寢臺車に乘り、三度々々食堂にはいつて、アイスクリームをつツつきながら、旅行してゐる今の贅澤旅行家の夢想も及ばないところである。

節は明治三十八年（彼が二十七の時）中仙道及近畿の旅を約四十日にわたつて、つゞけたことがある。覊旅雜詠百三十六首はその收獲であるが、この時なぞも、ずゐぶん亂暴な、又呑氣な旅行をしてゐる。それは中仙道を美濃國へ下らんとした時のことであるが、彼は、木曾川の支流らしい或る流れの岸で少憩した。夏の日がやけつくやうに照つてゐる。彼は不圖洗濯がしたくなり、褌まで取つて、その流れで洗ひ、傍の岩の上に引きのばし、自分は大巖のかげにござを敷いて、洗濯物の乾くのを待つた。山と山との間の、眞蒼な空に折々白い雲が通る。風はひえ〴〵と涼し

い。足をのばすと、足先きは冷めたい水にふれる。一時間ばかりして洗濯物が乾いたので、起ち上り、乾し上げた肌衣を着て、そこを出立したが、生れ變つたやうに元氣が恢復した……。

斯んな風である。

彼は宿屋で盥を借りて洗濯するのが、むしろ、常であつた。

羈旅雜詠の中、左の二首はこの時のものである。

○

妻籠(つまご)より舊道を辿る。溪水に襯衣濯ぎて日頃の垢を流す、又巨巖の蔭を求めて蓙しきてを打ち臥す。一つは秋天の高きを仰ぎ、一つは衣の乾く程を待つなり。

ゆるやかにすぎゆく雲を見送れば山の木群のさやさやに搖る

ひややけき流れの水に足うら浸で石を枕ぐ旅人われは

節の前掲「旅行について」の中の

眼をあいて見ると、緑深い山と山との間から見える眞蒼な空に、折々白い雲がふわ〳〵と出てすぐに山へかくれる。緑樹の梢が搖ぐかと思ふと涼しい風が流れを渡る。一寸足を動かすと足の先きが冷めたい水につかる。實に何ともいへぬ心持である。

はそツくり、その儘、この歌の說明になる。

節の簡易旅行のさまを示すに足る手紙を今一つ左にあげる。

小生の旅行と申候は、昨年の如くすげ笠に莫蓙草鞋と申すいでたちにて、小さなる荷物を兩掛にして、白地の單衣を着し候だけに有之候。時によりては寺院の一隅を無心し、時によりては博徒の親分をも手頼り見む所存に候へば宿などはいかなる所にても平氣に有之候。（明治三十九年八月七日佐久間政雄氏宛）

今日、上高地などへキャムピングに行く學生たちは、二百圓も三百圓もする天幕を携へて行くさうであるが、雲泥霄壤の差なんどの話でない。

今日元冠の難に殉じた少貳資時の墳墓のある瀨戶といふ所へ行つてみた。料理店はないから木賃宿で飯を食つた。有合せの飯は麥八分に米二分であつた。子鰯が三匹、それと朝干したばかりだといふので烏賊を燒いてくれた。これは甘かつた。それから五つも燒いて貰つた。それで幾らだと聞いたら六錢くれといつた。生來はじめてこんな安い勘定を拂つて見た。

これは明治四十五年六月二十九日付齋藤茂吉氏へ、壹岐國勝本から出した手紙の一節である。

これなぞも、いかに彼が簡易な旅行をしてゐたか、といふことの一つの證左にならう。

不案内な田舎の道を、節がどんな風に歩いて行つたか。それをいかにも如實にあらはしてある一節を左に掲げやう。それは金華山から松島にわたり、仙臺に赴き、更に羽前に出でんとしての旅行である。明治三十九年のことである。

九月四日

仙臺から西すれば山形街道である。余はこの街道を行くのである。時々足もとに深い渓があらはれてそこに廣瀬川の水が白く見える。水は仙臺へ落ちて、かの青葉城のもとを洗つて行くのである。渓から渓へ自然の道筋を辿つて水は大なる迂廻をせねばならぬので力の限り急いで行く。淙々として遙に且つ明かに聞ゆるものは其水が急ぐ足の響ともいひうるであらう。街道は平らかである。疎らな芒に交つて松蟲草の花がびつしりと連つてゐる。或村へ入る少し前で一人の女と道連になつた。此の女は余が後ろから追ひ拔からとした時に足をはやめて余の後へ附いて來たのである。自分は儒参りに行くのだが、お蔭で道が捗どるといつて息をはづませながら附いて來る。年増のまづいさうして日に燒けた顔の女である。髪をてか〳〵光らして白い足袋を穿いてゐる。余は好ましい道連でないと思つたからうつちやらうとすると女は汗を垂らしながら附いて來る。村へ入つた時に女は郷六（ごうろく）といふ所だと獨言にいつた。仙臺の市へ行くの

でもあらうと思ふ荷馬車が薪を山のやうに積んで二臺三臺と埃を立てて行き過ぎる。薪を負うた女が三人五人と揃つてくる。皆襤褸で厚い板のやうに拵へたチャン〳〵を着てゐる。道連の女に此は何といふものかと聞いたら、此はケラといふものだといつた。（略）

途切れ〳〵に人家のある愛子（あやし）といふ村へかゝる。此の村は端（はし）から端までは二里もあるといひながら女は負けずに附いて來る。人家の漸く途切れた所で余はつと草を刈つたあとのある草原へそれた。女はさつさと先へ行き過ぎた。余はその草原で辨當を開いた。さうしてそこへ暫く横にならうとしたがうつかり木蔭のないところであつたからすぐ又歩き出した。余はいつも辨當が濟めばきつとそこに横臥する。それは脊髓がのび〳〵としていふべからざる愉快を感ずるからである。徒歩の旅行を苦しんで續けてゐるものでなければ此の味は解らぬであらう。又人家のある所を過ぎるとそこには鬱蒼たる松林がつゞいて居るので余はたまらず身を投げ倒すやうにして松の根がたへ横臥した。（旅の日記の一節）

三　旅行の原因

私は私の前著「土の人長塚節」に於て、節の屢長途の旅行をなせることにつき、

ともかく、節はよく旅をしてゐる。これは彼が自由なからだであり、家がゆたかであつたことなぞも原因するであらうが、併し根本の動機は自然と藝術に對する愛のためである。

と說き、即ち旅の原因を

(一)主たる原因、自然愛

(二)從たる原因、身體自由にして家富む

としたが、今はこの二つを一括して、從たる原因とし、最も根本的の原因として

(三)身體の鍛錬、肉體を苦しめて健康たらんとすること、

(四)戀を失ひし苦惱

の二つを擧げたくおもふのである。最後の原因即ち失戀の懊惱については、詳細はわからぬが、大正三年七月横瀨夜雨氏に送りし手紙にも

小生には苦惱と煩悶との外なく、九州に來ることを樂み申候次第、委曲はこゝに盡さず候。解釋の仕樣によりては、小生は終始幸福の人間なりしに相違なかるべきも、遂に薄倖の生涯に過ぎず候。

とあるなど、その一證左である。大正三年日向靑島への旅行をした時にも、折生迫(なりふさこ)といふ所より

東京の友に書をよせて

とこしへに慰もる人もあらなくに枕に潮のおらぶ夜は憂し

むらぎもの心はもとなさもあらばあれ乙女のことはしばし語らず

などと歌つてゐる。晩年の彼は氣の毒な懊惱の詩人であつた。あの冷靜な胸の奥には火のやうな熱情がひめられてあつたのである。

四　一つの問題

こゝに一つの問題がある。

それは右四つの原因のうち、第二のもの、即ち節は身體(からだ)が自由で、家がゆたかであつた爲に旅が出來て、それは彼のために仕合せであつたといふ私の論(「土の人長塚節」に書きし小論)に就いて大牟田の三池鑛山に勤めてゐる藤井磐氏から、質問の手紙を貰つたことである。藤井氏の質問の文は

(前略)節が多く旅行せしことに就て、「家がゆたかであつたゝめに旅行も自由に出來た」と書かれ候こと當人の節に取ては聊か迷惑なことに非ずやと存じ候。節の家は舊家にて資産もあつた

らしく「小生は未だ自ら金錢を得べき方法を知らず祖先の餘德によらずして何を以て立ち申さむや茲に思ひ到る時悚然たらざるをえず候」と書翰中にも書き居り候へども家運傾けるを嘆き借金の苦面をする手紙は隨所に見られ旅費は隨分節約して居たらしく「草鞋の一錢も惜しみ宿料は必ず値切る」とあり又佐渡への旅行については「四五十日を二十圓位にて仕上げ申度と心掛け居り候」とあり候少くとも節自身は貧乏の苦しみも相當に味ひたる心持ちにて居り、先生のあの一句には定めし不服かと存じ申候。

といふのである。藤井氏の引用は私の主旨とは異なる所もあるが、大體に於て私の書いた通りであり、いかにも尤もな不審である。家がゆたかであつたか否かといふことは、他人の家計に立ち入ることで、容易に口にすべきことではないが、しばらくこれを許して戴くとしても、こまかいことは私には分らぬ。人に尋ねることも遠慮される。しかし長塚家はその地方での舊家で、多くの山林田畑を所有し、下男下女も多數使用してゐた。それは現在の長塚家の門の構へを見ても分ることであり、縣の政治に奔走し遂には縣會議長にもなつた父君、令弟の工學士又陸軍少佐、妹さん達の縁邊等のことを考へても、決して田舍のまづしい農家ではないのである。唯だ節の晩年頃には主として父君の失敗から家運が傾きかけてゐた。父のつくつた負債も相當に多かつた。

これを挽回せんがために節は母堂と心を砕いたやうである。藤井氏は節の手紙などの文面から、推して長塚家は決してゆたかではなかつたやうだといふ。成程、大へんゆたかでは無かつたかも知れない。又たしかに昔の盛んな時代の長塚家ではなかつた。けれども決してみじめな生活でもなかつたことは事實であらうと私は思ふ。殊に私が「土の人長塚節」に書いた文は子規にくらべての心持もあつたのであるが、今でもはつきりそれを言へるやうに、子規の家計などとは到底比較にもなにも成らぬのである。節は、藤井氏のいふ通り、木賃宿にとまつたり、草鞋の代を値切つたりしてゐる。しかしこれを以て、家がまづしかつたとするのは早計である。貧しかつたといふよりも之は節の主義であつた。又節ばかりではない。凡そ農村生活の實際を經驗したものは一錢一厘の利と雖も之を爭ふのが普通である。それは彼がまづしいから、といふ譯では必ずしも無く、すでに習ひ性と成つてゐるのである。しのびざる心！　一粒の麥を惜しむ心！　さういつた心が農民の心理である。節の場合にも多分にそれがある。

とくに、節の場合には、前述の如く、「苦しい旅行」をして、困苦に耐へうる身體を作り上げてやらうといふ意圖がある。抵抗療法をやつてゐるのである。それゆゑ、好んで、木賃宿に泊り、人跡稀なる深山に入り、溪谷を跋渉などしてゐる。所謂一蓑一笠、飄然として、雲水に似たる寂

しい旅行をつゞけてゐるのである。

手紙その他の文書によつて、節の家計が昔のやうにゆたかなものでなかつたことは、私も、藤井氏の手紙によつて、更に注意したことであり、又私の文章が言葉足らずで、疑問を起したことは遺憾であるが、しかし、それにしても長塚家は田舍の普通の農家の如き、まづしさにあつたのではない。手紙などに左樣にあらはれてゐるのは或程度まで事實であるにしても、そのまゝ受け入れることは出來ない。概ね節の性格から來た几帳面である。

節が嘘をついてゐるとは決して思はぬが、長塚家は當時それほど落ちぶれてゐたとは思へない。現に、今年六十九歲になる母堂が下女下男を指揮して、元氣で、農事に從事してをり、當主順次郎氏（この人が工學士、節とは一つちがひの弟）は東京神田で金庫の製作販賣業をさかんにやつてをられるのである。

家運の傾いてゐたことは事實である。それを思ふ心がたえず節の胸にあつたことは爭はれない。併し一錢半錢を爭ふやうな彼の生活ぶりは、一つは彼の性格であり、一つは農民の心理であり、これが旅行に於てとくにあらはれてゐるのは、前にもいふ通り、旅行は、節にとつては病氣に對する一つの抵抗療法だつたからである。

私は斯様に解してをる次第である。

節の「旅行について」の中から、すこしく抄記して、節の旅行信條といつたやうなものを、うかゞふ便宜に資することにしたい。

五　節の旅行の信條

○

余の旅行は極めて簡易な仕方である。最初の用意は旅費で、これが出來ると、豫め歩かうと思ふ方面の地圖を披いて旅費に相應した行程を定める。參謀本部の二十萬分の一の地圖であれば、何處へ泊つて何處へ出るといふことが、大抵は大なる間違なくきめることが出來る。全く旅の徒歩ならば一日五六十錢で余は十分に支へてゆくことが出來る。旅費と行程が定まれば、旅裝の支度になる。余は大抵旅行の時期は夏から秋の初めと定めておくが、これは旅裝の輕便を欲するからで、學生の旅行期と一致して居る。單衣一枚着たまゝで、肌衣はシャツとズボン下と越中褌とを別に一組荷物へ入れる。肌衣は忽に汗じみて仕まふものであるから、時々洗濯を要するが、天候の如何によつて出來ないことがあるから、其時の用意である。

○

荷物は外に地圖雜記帳鉛筆葉書位で、あまり澤山は持たぬ。此外に大切なものは辨當箱である。余の使用するのは、長さ五寸餘、巾四寸餘、深一寸四分である。旅行全體からいへば、金錢が第一の必要條件であるが、單に一日一日でいへば、辨當位大切なものはない。殊に暑中の旅行で、人家の遠い所で腹がへつたら、とても仕末に了へるものではない。茶店があつたとしても支度をさせるに無駄な時間を費す。辨當を持つて居れば、自分の勝手な時に腹を滿たすことが出來るのみでなく、其處に一錢の冗費をも費さぬ。湯茶が無ければなどいふのは贅澤である。一厘一錢も無駄をせまいといふのは、余の旅行中の嚴重な掟である。今一つ辨當が空になれば荷物が頓に輕くなる。此時の心持は經驗がなければ分らぬ。荷物はこれだけで、これは二包に分けて所謂兩掛といふものにして肩へかける。脚は脚絆草鞋で固めるのは極つた話であるが、草鞋掛の足袋は底が拔けても指が現はれても決して捨てぬ。旅費の節約を旨とするからである。これで笠を冠つて蓙を着れば旅裝は完全する。

○

余は旅中は非常に節約するため食物などはちつとも六かしいことはいはぬ。頬骨が少し位高

くなつても、消化力が旺盛になつてゐるから、歸つてから二週間經過すれば太つてしまふ。不攝生はよろしくないが、甜瓜位は飽くことを知らずに食ふ。

○

宿屋へつけば、必ず宿料の談判をして安くさせる。必ず辨當をつめさせる約束をする。一日は一日の節約をして、一日の豫定額の内から十錢でも二十錢でも翌日へ繰越が出來れば心は甚だゆるやかに感ずる。壞中は如何にしても日々に減却するばかりだからである。宿料を安く泊れば宿屋に不平が起らぬ。風呂の加減もきいてくれる。お給仕もしてくれる。床ものべてくれる。余は却て氣の毒に感ずる位である。余が明石の宿屋で粗末な辨當を貰つて兵庫まで來ると、ある工場の傍に腰掛茶屋があつたが、荷車引等が飯を食つてゐる。余も鰯を一皿注文したら鰯が八匹あつた。幾らだと聞いたら二錢だといはれて驚いた。以上のやうな貧乏の旅行を我慢さへすれば旅行は格別苦になるものではない。これを人に語れば人は面白いといふ。旅中に錢がなければ身體に苦勞がかゝるが、後日になればその苦勞が面白い話の一つになる。旅行の面白味はこの後日における追懷がむしろ最なるものといつてよい。

○

いかにもよく節の人柄をあらはしてゐる。宿屋へつくと、先づ宿料を談判し、翌日の辨當をつめることを約束する、などは、ちよつと、常人には出來難いことである。私のやうな、氣の小さい、見榮坊には決して出來ない。そこを節はきびしく實行して、一錢半錢でも無駄を省かうと心掛けてゐる。えらい所以である。

奥の細道の行脚に於ける芭蕉の心持なぞを、節は決して忘れなかつたにちがひない。

門間春雄氏が節の家を訪問せんとして、道の順序を問ひ合せた時、長い長い返事を出してゐるが、その中に

さて愈御いで下され候とならば（中略）上野驛は隨分早くお立に相成らず候ては、日のあるうちに小生方へは六かしく候。青森線の七時二十五分ならば九時四十六分に小山驛着、十時四十六分小山發、十一時二十分下館着、此處にて一寸晝食せねば途中には何物も無しと覺召さるべく、それも停車場前の旅館などへお立寄相成候ては面倒故、少しはやくても小山驛にて辨當など求め、下館まで車中三十分以上の時間有之候へば、その間にお濟し相成ること至極と存じ申候。

云々といつてをるが、これなども前記旅行の心得と對照して、すつかりよく分るやうに思はれる。

停車場前の旅宿などに上つて、無駄な金を使ふのはやめて、汽車の辨當をお買ひなさいといふ。節は自分が無駄な費用を惜しむばかりでなく、人に對してもこれを注意し、これを勸奬してゐる。

といつて、義理を缺いても、何んでも構はぬといふやうな守錢奴であつた譯では、固より、無い。出すべきところには出し、爲すべきことはちやんと爲るのである。但だ、無駄はせぬ、無駄をするのは勿體ない、節約を嚴守しやう、といふのが節の主義であつて、これは單に旅行ばかりでのことではなかつた。

いはゞ勤儉力行の四字、これが節の人物であり、又その人生觀でもあつた。

これが彼を、或場合には、吝嗇のやうにさへ見せたのである。併しこの聰明と努力とが彼の藝術を完成せしめた原因であつて、これなくては、「土」や其他の小説並にあの多くの歌の如きは、到底生れるものではないのである。

第四章　節の秋の歌

一　三つの秋の歌

今年ももう秋だ。（と、私が、書いてゐるけふは九月の二日である。）
秋になると、私はかならず節の秋の歌を思ひだす。節はいつたい季節の變移に非常な敏感をもつてゐた歌人で、この點では古來獨歩だらうと、私はかねて思つてゐる。これは彼は百姓だつたためと、うまれつき物をこまかく見る性質の人間だつたためであらう。百姓を熱心にすれば自然をみる眼はおのづから鋭くなる。農業といふ仕事はたゞ〳〵自然天然にたよるものだからである。
それから、またおもふに、節の清い、高い性情は秋の氣ににつかしい。秋の空、秋の水、秋の野、さうしたものが最もよく節の性格を象徴するやうに思へる。清澄にして、高い氣品と、ひきしまつて、きりッとした風格である。これも節に秋の歌を多からしめた所以であらう。
然らば節の秋の歌は如何といふに、まとまつたものは先づ次の三者であらう。一つや二つまざ

つたものならば、あけきれない位澤山ある。

明治四十年（二十九歳の時）

初秋の歌（十二首）

晩秋雜詠（十八首）

明治四十一年

秋雜詠（八首）

今之等について註釋的雜感を述べやう。鑑賞の上に多少の參考ともならう。

二　初秋の歌

先づ初秋の歌をあげる。抄するつもりであつたが、十二首全部をあげやう。揃つて傑作で、何れを拔かんやうもない上に、斯ういふ歌はやはり十二首を一篇として一度に味ふがいゝと思ふからである。簡單に註を加へる。

初　秋　の　歌

（一）小夜深にさきて散るとふ稗草のひそやかにして秋さりぬらむ

註。「稗草の」までは、ひそやかにして秋來る、といはんための序である。「小夜深にさきて散るとふ」といふ句法は萬葉歌あたりの序辭から得たものであらうが、更に深い。空想的でありながら重厚である。但し私は稗草の花が小夜深にさきて散るといふ事實はまだ知らない。

(二)植草ののこぎり草の茂り葉のいやこまやかに渡る秋かも

註。これも第三句までは、いやこまやかに渡る秋かもの序である。併し前の稗草にしても、この鋸草にしても、田園の名なし小草で、それは作者のよく知り、よく見てゐる草である。それを緊密に驅使し來つて、この歌をなすところを看取すべきである。

「ひそやかにして秋さる」といひ、「いやこまやかに渡る秋」といふ。新秋の氣のひた〳〵と寄せる心持である。

(三)目にも見えずわたらふ秋は栗の木のなりたる毬(いが)のつばらつばらに

註。この歌では栗の毬を以て目にもみえず渡らふ初秋の氣をあらはさうとした。「なりたる毬のつばらばらに」は、眞にうまい。

(四)秋といへば譬へば繁き松の葉の細く遍く立ちわたるめり

註。こんどは松の葉である。「松の葉の」までは、細く遍く、の序なること上述の如し。しかし決して意味のない、空疎なる序ではない。

「めり」は推量の助動詞である。これも空想の勝つた作である。

(五)馬追蟲(うまおひ)の髭のそよろに來る秋はまなこを閉ぢて想ひ見るべし

註。やはりそよろに來る秋である。それを表象するに馬追蟲のひげを以てするところが、この作者である。

(六)外(と)に立てば衣うるほふうべしこそ夜空は水の滴(しただ)るが如

註。これから、新秋の夜空をうたふ。

(七)おしなべて木草に露を置かむとぞ夜空は近く相迫り見ゆ

註。夜涼水の如し

(八)からくして夜の涼しき秋なれば晝はくもゐに浮きひそむらし

註。からうじて夜は涼しくなつた。涼氣は夜のいたるを待つて下界人界を訪れる。晝間のうちはまだ雲の上にひそみ隱れてゐるのであらう。晝間はまだなか〳〵殘暑がきびしいのである。

(九)うみ苧(を)なす長き短きけぢめあれば晝はまさりていまだ暑けむ

註。「うみ苧なす」長き短きの序である。麻を水に漬け、その皮より採つた纖維が卽ち苧であるが、これを水にさらし、日に乾かし、仕上げることを「うむ」といひ、仕上げた糸をうみ苧といふ。もとより長きあり短きがある。

夏至より冬至に至る間に於て、晝夜の時間の長さが全く同じ時がある。それは初秋の候で、それからだんだんに晝が短くなる。この歌の場合は、晝夜の時間が同じからず、まだけぢめがある。初秋ゆゑ晝が長いのであらう。從つてまだ晝がまさりて暑いのであると、やはり殘暑をよんだものである。

（十）芋の葉にこぼるゝ玉のこぼれこぼれ子芋は白く凝りつゝあらむ

註。玉は露の玉である。葉の白露が土にこぼれ、土の中では子芋が生長しつゝあるのである。

（十一）青桐は秋かもやどす夜さればさはらさはらと其葉さやけり

註。青桐の葉の音をきけばいかにも秋の氣がする。秋は青桐の葉に宿つてゐるやうだといふのである。

（十二）烏瓜（たまつき）の夕さく花は明け來れば秋をすくなみ萎みけるかも

註。烏瓜の白花は夕べになれば開く。併し夜が明ければもう萎んでゐるのである。

總評するに之等の歌は可成空想的であるが、しかも決して浮薄でない。がしりと据わつてゐる。斯樣な作風は節獨特のものであつて、萬葉以後歷代の歌人歌集にも容易に類例を見出しがたきものである。歌のもつ最もよきもの、美しきもの、高きものを、十分に湛へもちて、短歌藝術の特色を、人と世との上に、光被させるものであると信ずる。

齋藤茂吉氏はかつて、右のうち(一)(四)(七)を拔いて、評言を附して、

實に驚くべき程、深さと細かさと靜かと確かさを有つてゐる歌である。萬葉集の四季の歌には無論かういふ歌はない。(中略)「小夜深にさきて散るとふ」などの萬葉調の、しづかで重厚で、そしてうらがなしく、幽かな歌調は實に何ともいへないくらゐにいゝものである。

といつたが、決して過褒ではないのであつて、私のいはんとするところも、また如是である。」

三　晩秋雜詠十八首

次に晩秋雜詠卽興十八首を見る。

(一)芋殼を壁に吊せば秋の日のかけり又さしこまやかに射す

(二)秋の日に干すはくさぐさ小鍋ほす箒ぐさ干す張物も干す

(三)葉鷄頭に藁おしつけて干す庭は騷がしくしておもしろきかも

(四)葉鷄頭は籾の筵を折りたゝむゆふべゆふべにいやめづらしき

明治四十年十月二十八日附島木赤彥氏に送れる手紙には、これ等の歌、並に

(五)紅の二十日大根は綿の如なか虛にして秋逝かんとす

(六)こほろぎははかなき蟲か柊の花が散りてもおどろきぬべし

をあげ、

小生近來に到りて漸く歌ごゝろ起り、少々づゝよみいで申候。いづれ「日本」などへ出し可申、此十日ばかりのうちに數はなかく有之候

といひ、さらに、

柿の木に柿くひをれば藪つゞき隣の藪の柚子黄み見ゆ

稻を扱くをちの庭人驚かむとゞかばそこに柿なげて見む

小刀の鞘うち拂ひ手をのべて一つ二つともぎておもしろ

の三首を記し、「とにかく、四十首を纏めて出して見たき樣存ぜられ候」といつてゐる。が、私のこゝに引用したいのは、この手紙の後半である。卽ち曰く

最後に小生の歌もつまらぬもののみなれど、歌はたゞ文章にいふことをそのまゝ三十一字にしたのみにては、まことに興味索然たるべく候。大兄の近業は多くこの普通なる文章中の普通なる數語を排列したる如く相見え申候。等しく眼に映ずる所のもの、一度び作者の頭腦を透して現はるゝ時、そこに命を有せざるべからず、卽ち作者の主觀が、濃く又薄く、あらはれねば

ならぬものと存候。この點について、小生の晩年あたりまでの、唯々自然の材料にのみすがりたる寫生の歌は全くつまらぬものと存候。その材料はつまらぬものでも、其人の見様如何にて、一首のうちの一句に命をたもたしむるものをも得べくと存候。この邊餘程注意して今囘の歌はつくり申候。固より未だ滿足なるものを得べき道理も無之候故、非難百出なるべく候へども、何かへ現はれ候折は、幾重にも御批判の程仰ぎ申候。

これは明らかに、形骸の寫生に不滿を感じ、精神の寫生に至らざるべからざるゆゑんの、作者としては發見である。寫生より寫意への轉機を自覺しての言葉とも見るべきであらう。或は象徴主義といつてもよい。「唯々自然の材料にのみすがりたる寫生の歌は全くつまらぬものと存じ候」といふのが、それを證するのであつて、これは節にとつては一つの心的革命ともいふべき推移であつた。その初期に於ては節はむしろ寫生主義容觀主義であつて、この點で、伊藤左千夫の主觀主義と對立し、又兩者論爭の種となつてゐたのである。

これは明かに節の進歩であらねばならぬ。彼は、作者の主觀の濃く薄く出ねばならぬことを、こゝに於て、主張し、而して上述の自作を赤彦氏に送つてゐる。

その意味でも、「晩秋雜詠」は注意して見るべき作品である。

四　晩　秋　雜　詠（つゞき）

引用が長くなつたから、こゝで一寸切つて、再び筆を晩秋雜詠十八首へ引き戻す。赤彦氏への手紙の歌を引用したために、長塚節歌集の本文にあるものとは歌の順序がいさゝか前後した。讀者、之を諒せよ。

（七）荒繩に南瓜（とうなす）吊れるうつばりをけぶりはこもる雨ふらむとや

（八）はらはらと樫の實ふきこぼし庭の戶に慌しくも秋の風鳴る

（九）おしなべて折れば短くかがまれる茶の木も秋の花咲きにけり

（十）莢の實の赤びあけび（あけ）に草白むみぞの岸には稻掛けにけり

（十一）黃昏の霧たちこむる秋の田のくらきがかへ鴫鳴きわたる

南瓜を荒繩で吊つたうつばり、戶にあたる樫の實の音、茶の花に莢の實、掛稻、秋の田、鴫の聲――悉く田園の景趣である。節の壇場ならざるはない。

このつぎに「こほろぎは」「くれなゐの二十日大根」がある。上述の如し。

（十二）咲きみてる黃菊が花は雨ふりて濕れる土に映（うつ）りよろしも

（十三）此頃は食稻もうまし秋茄子の味もけやけし足らずしもなし

註。味もけやけし。けやけしは「けやかに」「けやけく」などと同じく、「貴けし」である。

（十三）繩つけて糸瓜を浸てし水際の落ち行くごとく秋は行くめり

（十五）夜なべすと繩綯ふ人よ鍬掛の鍬の光はさやけかるかも

註。これも村に生れたものでなければ、分りかねる材料である。銀ぶらをよろこぶモボやモガには決してわからない。

（十六）美しき籃の黄菊のへたとると夜なべしするを我もするかも

（十七）蔕とればほけて亂るゝさ筵の黄菊が花はともしかかけよ

（十八）障子張る紙つぎ居れば夕庭にいよ〳〵赤く葉鷄頭は燃ゆ

以上十八首である。もとより卽興であり、十八首悉く珠玉の詩といふことは出來ない。併しながら天然の風物を抒し、矚目の印象を寫生しつゝ、その間におのづから主觀の滲透して、氣品高き風格をなせるところ、まことに古今獨步の槪ありとさへ思はるゝのである。蓋し、節調といふべきである。

なかんづく、私は（一）芋がらを壁に吊せば、（三）葉鷄頭に藁おしつけて、（四）葉鷄頭は籾の筵

を折りたゝむ、(五)紅の二十日大根は、(六)こほろぎははかなき蟲か、(十五)夜なべすと繩なふ人よ、の六首を絶唱なりとする。

　葉鷄頭(かまつか)は籾のむしろを折りたゝむゆふべゆふべにいやめづらしき

の如きは、寫生より一氣に象徴につき拔けてゐる。

五　秋　雜　詠

　四十一年の「秋雜詠」八首も傑作である。が、これを最後として當分節は歌と絶縁した。(第五章參照)卽ち、四十四年の乘鞍岳を憶ふ歌まで一首もないのである。

　この秋雜詠についても、島木氏に手紙をかいて、「小生の歌は七八首のみに有之、それも作りて程を經れば、自分にもいやに相成申候。されど末尾にしたため申候。宜しく御取捨被成下度候。匆々」といへる如く、歌に對して頗る懷疑に墜ちてゐたのである。

秋　雜　詠

(一)葉鷄頭(かまつか)の八尺のあけの燃ゆる時庭の夕べはいや大いなり

　註。「八尺のあけ」は子規の歌の五尺のみどり手洗鉢を掩ふあたりから暗示を得てゐるとおもふが、

併しこの歌を得た年の翌年、上總の寺田憲氏に送つた手紙には、「庭の葉鷄頭八尺以上に相成申候云々」とあるのを見れば、やはり寫實である。一首全體に傑作といふべく、下句特にいゝ。

(二)久方の天を一樹に仰ぎ見る銀杏(ちち)の實ぬらし秋雨ぞふる

註。久方の天を一樹に仰ぐ、は緊密で、とても聰明な句法である。

(三)秋雨のいたくしふれば水の上に玉うきみだり見つゝともしも

(四)こほろぎのこもれる穴は雨ふらば落葉の戸もてとざせるらしき

註。こまかくも、鋭い。私の好きでたまらぬ歌。

(五)鬼怒川は空をうつせば二ざまに秋の空見つゝ渡りけるかも

註。二ざまに、空と水と、兩方に秋空を見る意

(六)鬼怒川を夜ふけてわたす水棹の遠く聞えて秋たけにけり

(七)稻刈りて淋しく晴るゝ秋の野に黄菊はあまた眼をひらきたり

註。黄菊があまた眼をひらく、といふ擬人法はたくみである。

(八)鵯のひゞく樹の間ゆ横ざまに見れども青き秋の空よろし

註。ひよどりの聲は、節は好きであつたやうに想像される。

以上で晩秋雜詠の拔きがきを終る。一々說明のかぎりでない。諸君はよろしく熟讀翫味せらるべし。

附記。

今日は、殘暑殆んど堪へ難し。午前中、上野の美術館に日本美術院の展覽會を見、午後文部省に赴く。院展では大觀の「立葵」、古徑の「鶴と七面鳥」大傑作にて、その他岳陵、龍子、寬方、千靫、千甕など、自分の知れる人の作品多くしかも何れも佳作大作にてれうしさ限りなかりし。（九月三日夜）

第五章　歌とはなるゝこと三年

附、乘鞍岳の歌について

一　歌とは絶縁に候

歌をつくると散文を書くとでは、氣持もちがへば態度もちがふ。これは自由な散文の筆法と形式に約束のある韻文との相違であつて、例へば道路を歩むと停車場などの階段を下るとの差であるとおもはれる。昔からの人でも學問と作歌とを兼ねた人は少ないやうである。眞淵にしても茂睡にしても宣長にしても學者としては偉かつたにちがひないが、歌人としてはそれほどではないやうである。私の國の人で、萬葉集古義の著書である鹿持雅澄などが、やはりそれで、學者としてはあのやうな大業蹟をのこしてゐるが、歌は萬葉の形式套襲をいでない。現代の歌人を見てもこの傾向は見えてゐる。歌もよいが、論もよい子規の如きは例外である。

節が一時すつかり歌を遠ざかつてゐたことがある。彼の年譜を見てもわかるが明治四十一年に

は相當澤山の歌を發表してゐるに拘らず、島木赤彦氏に書をよせて、

小生旅中一首も無之候。この頃小生の頭の妙に變りしは、文章を書きはじめてよりに有之候。（△點は本文の筆者）

といつて、既に歌に興味の失はれてをることを述べてをり、其翌年即ち四十二年には一首の歌も遺してゐないやうである。その翌年も然り。さうしてこの頃は自分に作歌欲がないのみか、他人の歌のどれを見ても感服しないといつてゐる。この狀態がつゞいて四十四年になるのであるが、併しこの年にはかの乘鞍岳の名歌を發表してゐる。けれどもそれも僅に十四首のみに過ぎない。四十五年にも病中雜詠その一及その二があるが、それだけである。即ち四十二、三、四年と斯う三ヶ年間は、彼はまづ歌は作らなかつたといつてよい。この間の彼の心的經過を見るに、明治四十二年九月佐久間政雄氏に送れる書簡に曰く、

拜啓。かねて御依賴の歌集その節早速御返戻申上ぐべき筈の所、當時歌といふものゝ上に甚しき疑を生じ、今以て何とも解決致不申候。それは小生自ら近來全く散文的の頭腦に相成、歌に全く絶緣致し來り候故に有之可申候。現今に於ては何人の作を見ても感服すべきものを發見致さず、感情を主とすと稱せらるゝ歌よりも、却て文章に於て切實なる感情を表現するに便利

にして、且つ實際の傾向が如此もの有之候狀態、小生の遺憾とする處に有之候。

と、歌に遠ざかりし心境を告白してゐる。この手紙は佐久間氏が先頃正木不如丘氏の高原療養所の所員として信州富士見に赴くにあたり、私に遺して置いてくれた。私は大切にこれを保存してゐる。

散文は、と見れば、この手紙を書いた四十二年には小說「開業醫」「おふさ」「敎師」があり、其他に「旅の日記」「菜の花」等がある。「土」はその翌年から發表せられたのであるから、この頃もう想を錬つてゐたことであらう。

歌と絕緣する、といふ意味の手紙はまだあつたとおもふ。一寸待ちたまへ。書簡集を繰つて見る。

ある。ある。古泉千樫氏宛に。

早速返書差進可申の處、ホト、ギスへ掲載すべき小說の執筆に忙しく昨日まで頭をいため申候。小生は人の倍も執筆の時間を要し申候に付、虛弱なる身體はために損はれ申候。題は「敎師」と申候。

葉雞頭九尺に相成申候。

云々とあつて、最後に

歌とは絶緣に候。匆々。

とあるのが、それだ。やはり、四十二年である。

絕緣といふからには、餘程深く歌を見限つてゐたことがわかる。この氣持はなほ二年あまりも續いたらしく、四十四年に久々ぶりで乘鞍岳の歌をつくつた時、作歌後の感想を胡桃澤勘内氏(平瀨泣崖)に書き送つてゐるが、中に

從來歌といふものはもはや到底出來ぬものと觀念もし、又歌はつまらぬものとひねくれたる考も起り申候ひしが、作りえたる時はやはり懷しきものにて

うんぬんと言つてをる。歌はつまらぬものと輕蔑し、到底出來ぬものとあきらめてゐたのである。大正四年に世を去つた節の生涯からいへば、四十四年はすでに晚年である。もし節がその年に喉頭結核の診斷をうけることなく、又それがために、彼の愛戀を捨たねばならぬといふ「轉機」がなかつたとしたら、彼の作歌生活は四十一年を以て終りを告げてゐたであらう。

けれども彼の生命にとつてはこの上のない不幸が來た。それは右の「轉機」である。そのために彼は病患を憂ひつゝ、同時に斷ちがたき悲情を胸の奥深くに秘めて、はる〴〵と筑紫に下つた

のであつた。彼の傑作歌篇「鍼の如く」は、かゝる悒悶のわづかなる活路であつた。もし病患にかゝらず、性愛の不幸に遇はなかつたならば、恐らく「病中雜詠」も「鍼の如く」ものこらなかつたであらうとおもへば、節には氣の毒であるが、病氣も悲戀もまた有難いことであるといはねばならぬ。

地層を貫流し、岩石の間をぬけて、わづかにいづんだ泉が卽ち「鍼の如く」「病中雜詠」中の歌である。その淸くして、しまり、又高きはそのためである。

二　乘鞍嶽の歌

さて、その短歌との絕緣期に、突如としてうめき出された乘鞍岳の歌であるが、これは四十四年九月にアラヽギに發表せられ、全部にて十四首ある。春陽堂本長塚節歌集の年譜には、四十三年アラヽギに發表すとあるは間違であらう。四十四年九月のアラヽギといへば、子規十年忌號であるが、「乘鞍岳をおもふ」はその記念號に載つてゐるのである。

それはさて置き、「乘鞍岳をおもふ歌」は音律朗々。手法緊密、實に得やすからざる傑作である。これについては、その歌の生れたのがいはゞ偶然であつただけに、節自身も屢感懷を漏してゐる

るが、それをいふ前に、まづ歌を掲出したい。

乗鞍岳を憶ふ

落葉松の谿に鵙鳴く淺山ゆ見し乗鞍は天にはるかなりき
鵙のこゑ透りてひゞく秋の空にとがりて白き乗鞍を見し
我が攀ぢし草の低山木を絶えて乗鞍岳をつばらかにせり
おほにして過ぎば過ぐべき遠山の乗鞍岳をかしこみ我が見し
乗鞍と耳に[illegible]きかへりみて何ぞもいたく胸さわぎせし
思はぬに天に我が見し乗鞍は然かと人いはばあらぬ山も猶
くしびなる山は乗鞍かしこきろ山のすがたは目にかにかくに
乗鞍をまことにいへばたゞ白く山の間に見し峰をそを我れは
うるはしみ見し乗鞍は遠くして一日といへどながく矜らむ
乗鞍はさやけく白しにごりたるなべてが空に只一つのみ
おろそかに仰げば低き蒼空をはるかにせむと乗鞍は立てり
乗鞍は一目我が見て一つのみ目にある姿我目に我れ見つ

まなかひに佛消たずたふときもの山に乘鞍人にはたありや
乘鞍はひと日見しかばおごそかに年を深めてますます思ほゆ

こゝで一寸、訂正させてもらふ。紅玉堂本私の長塚節歌集中、この歌の引用に私の思ひあやまりが有つた。卽ち第一首、落葉松の谿に鵙鳴く淺間山ゆとある淺間山は淺山の間違ひであつた。字餘りになり、不自然でもあるのに、どうしてこれを思ひあやまり、校正の時にもそれに氣がつかなかつたのか自分にもわからない。大方に深くおわびする。

三　神來の感興

實は、私は乘鞍岳の歌を寫生の歌とばかり思つて、これまで人にもそのやうに話してゐたが、これは私の考へあやまりにて、それは想像でつくられた歌であつた、尤もかつて一度は見たことがある。信州の胡桃澤勘内氏から或る時燒岳噴煙の繪葉書をもらつたが、それに「この山、乘鞍岳の北にあたりて云々」と註がしてあつた。これで、節はかつて見た乘鞍岳の遠景を想ひ出し、興湧いて、あとからあとからと、十四首を得たのである。この事は茂吉氏あての手紙にあり、又

胡桃澤氏あての手紙にもある。茂吉氏には、

　三年以來はじめての稀有なる現象にて、歌の巧拙など申す以外に、多少の喜悦を禁じ能はず候

といつてゐる。あゝ、この一聯皆殆んど空想で出來た作であつたのか。神來の感興であつたのか。さう聞けば、成程とうなづかれる節もある。いひ方に、どこか抽象的なところがあり、甘い回想的な情調もあるのである。といつて、この故に歌を非難するのではない。歌はもとより彼としても傑作であることを信ずる。唯だ、さう聞けば、爭はれないものだといふことを、ふと、思ふのみである。

胡桃澤氏には

　拜啓。別紙（乘鞍岳の歌十四首――著者）は小生三年以來の稀有なる現象に有之候。アラヽギ紀念號の原稿として、今日齋藤茂吉君宛に送り申候、同氏へも手紙に書き添へ申候へ共（前述せしところ――著者）小生には從來歌といふものはもはや到底出來ぬものと觀念もし、又歌はつまらぬものとひねくれたる考も起り申し候ひしが、作りえたる時はやはり懷しきものに候。乘鞍岳は今はしかと覺えざるが如く相成候へ共、その形のみはありありと目に映じ居り候。多分は霧

が峰から見しものと存じ候へ共、或は松本城の附近よりなりしか、更に又故望月君の繪葉書に描かれしものが印象を深くせしものか、兎に角見たりとおもふ場所は、落葉松と鵙の聲とに忘れ難き山坂にして乘鞍岳は白かりし一つに限り申候。乘鞍岳といふことが只小生には嬉しくて何も彼も辨へ申さず候。十四首の歌は僅かなる感興のために成り申候。而してその感興を喚び起したるものは、貴兄より賜はりたる燒岳の繪葉書に有之候。更に又「この山乘鞍岳の右の方に方りて」といふ一句、乘鞍岳の印象を小さな腦裡に新にしたるが故に有之候。小生をして僅かながらに再び呼吸するを得しめたるは全く貴兄に候。貴兄の賚に候。小生は斯く思ふて深く感謝するものに有之候。

といつて、深く感謝してゐる。これによると、乘鞍岳の歌は、全く、天來的の感興から、卽興的にうまれたもので、作歌の動機などを論ずる場合の一の著しき參考資料たるべきものである。

しかも、一葉の繪葉書の簡單なる註が、彼をして、この十四首を成さしむるところ、やはり節其人の手腕の非凡に歸せねばならぬことはいふまでもない。

四　想像の作品

また、この事について、岡麓氏にあてた手紙である。四十四年七月三十一日附のものである。

一昨夜は殆んど眠らず、此は珍らしく、三年目にて歌が頭に浮び出でし故に候。眠るも惜しき故蚊帳の外にランプをともして書きつけ申候。乗鞍岳を憶ふといふ題をつくべきものにて、十三首程有之候。內容は何もなく候故、つまらぬものに極り申候。あらゝ木の紀念號へ發表可致候。

といつてゐる。一昨夜は殆んど眠らず、はその夜の感興のほどが想像される。蚊帳の外にランプをともして得るに從つて書きつけたといふ。寂しい岡田村の夏の夜のことである。夜がふけるにつれて、屋敷をめぐる木立を霧がつゝみ、近くの田圃からは蛙なんかのこゑが聞えて來たといふやうやうな夜ではなかつたか。

不思議に湧き上つた歌心に、彼はうれしく、なつかしく、夜更くるまで眠られなかつたであらう。名作「乗鞍岳」はさうした夏の夜の卽興であつた。

殆んど想像の作品であつて、以前彼の主張した寫生歌ではない。それだけに節の主觀がつよく一聯の上ににじみ出て、いかにも彼らしい氣稟の好さを見せてゐる。おのづから品格の高いものがある。むしろ單に自然にすがりついてゐるのみの寫實以上の自由と美しさがある。こゝでは想

像が却つて効果的であつた。「乘鞍岳を憶ふ」に於けるこの特色は必ず大書さるべきである。

實をいへば、彼の歌はこの乘鞍岳を境界線にして、大きな轉換を試みてゐるのである。それを次にいはう。

五　寫生より象徴へ

かつては寫生主義を强調して、左千夫と爭つた節である。（左千夫篇中「主觀と寫生との論爭」參看）それが歌にはなるゝ事三年、突如として空想の所產乘鞍岳を憶ふ傑作を出したが、この頃また彼の上には愛慾の破綻による惱みがあり、一方には小說に精進せんとする內的の要求も强いものがあつた。

かくて彼の作歌は益內へ內への道程を辿つて行つた。後にもいふ如く、その頃島木赤彥氏に書を送つて『歌は只文章にいふことを、其儘三十一文字にしたるのみにては洵に興味索然たるべく候。』『小生の昨年あたりまでの、單に自然の材料にすがりたる寫生の歌は全くつまらぬと存じ候』などといつてゐる。これは四十年の手紙であるから、さすれば三十九年頃までの彼の作品は單に自然の外面記述でつまらないと自ら失望してゐるのである。この失望が當時彼に歌を作らしめな

かつ原因であらう。

この手紙で注意すべきことは、唯々自然の材料のみにすがりたる寫生の歌はつまらない、といふ一節である。卽ち作品の上に、作者の主觀が滲透したものでなくては、藝術は存在の理由がないといふのである。

彼はかくて敍景歌に於ても主觀の要求せらるべきを强調するに至つた。それには旅行に於て得たる心の影響もあり、殊に古美術からの悟入もあつたらしく思はれる。かつて鳥羽僧正の鳥獸畫卷の氣韻生動を指摘し、その原因を

作者が對象に乘りうつれること

の一事に歸してゐる如き、節の藝術的信念の那邊に存するかを見るべきである。

かくて彼は長篇「土」に着手したのであつた。「鍼の如く」二百三十二首の製作も亦同じ信念の結果に外ならない。知るべし。彼の藝術的要求の如何に如實に之等の作品の上に滲じみ出せるかを。卽ちそれは、決して單に自然の材料のみにすがるの態度ではない。彼は「いのち」の要求として、その全幅の精神をこゝに打ち込んでゐるのである。

寫生の主張は擴充して寫意に發展した。これが象徴の世界でなくて、何んであらう。前期の寫

實主義が乘鞍岳の歌を經て、「鍼の如く」の傑作に突き拔けるまで、節は數年を費せるのみである。努力もしたが、ゆたかなる天分の所有者でもあつた。

第六章　徹底努力主義の人と藝術と

附、「炭燒の娘」について

一　若冲の三十幅評

節が眞面目で、一徹で、すこしも胡魔化しのない人間で、その上大の努力家であつたことについては、私はこれまで幾度書き、幾度語つたか知れない、が、この頃節の書簡集を讀んで見ると、その中に、またこれが屢散見してをる。

明治四十五年京都の岡崎公園で、若冲の花鳥圖三十幅の展覽があり、節も行つて觀覽したと見えるのであるが、後で左千夫に感想を書き送つて曰く

君はいつかつまらぬと言つてゐたが、僕はさうは思はぬ。成程隨分不器用なものゝやうであるが、あれだけの努力とそれに伴ふあれだけの强みと厚みと力とは我々は十分尊敬せねばならぬ。こゝへ來て二度入札があつたので行つて見たら栖鳳の畫が非常に多かつたが、僕は文展で

敬服してゐた彼に對して全く失望せざるを得なかつた。四條派の通弊の薄つぺらが鼻につく。才氣のみの産物がどれだけつまらぬかを今更のやうに感じた。其處へ行くと若冲の三十幅の如きは段がちがふ。僕は彼が力一杯にあの大幅へ餘俗もなく寧ろ窮屈なまでに畫いたのを多とする。段々掛替へるのでまた七幅しか見ないが、大きな牡丹の花を一幅へ四十三も書いてその隙間にはびつしりと小てまりの花を胡粉で畫いてゐる。僕は自分が製作をするについて暗示を與へられたやうな心持がする。僕は製作にとりかゝつたら力限り根限り自分の良心が滿足する程度に、さうして一つは共作物を尊敬し、讀者を尊敬し同時にその心は作者自らをも尊敬してかからねばならぬと思ふ

といつてゐるが、これなどは、彼の努力主義を遺憾なくいひあらはしてゐる。力の限り根限り自分の良心が滿足するまでやる、といふ。これが實に、彼の製作の態度――一貫して少しもかはらなかつた彼の態度であつた。

若冲の繪は、今は御物で東京にあり、時々博物館内表慶館などへその一部を出陳されることがある。私も先年二度ばかり見たことであるが、いかにも念の入つた大作である。所謂力限り根限りの努力の作品である。あの硬い作風には好意のもてない所がないでもない。人によつてはつま

らぬといふ。しかし四つに組んで押して行くやうな、あの全幅の力の前には何人も撲たれざるを得ないであらう。寸分のごまかしがない。眞摯そのものである。

若冲は好んで鷄を描いた。彼が鷄を描くや、全心を鷄の中に打ち込んでゐる。鷄を敬禮してゐる。それでおのづから、あんな大きな、美しい、むしろグロテスクな鷄になつたのであらう。松の上にとまらせたのであらう。私がかつて「若冲は鳳凰を描くつもりで鷄をかいたんぢやないでせうか」と、中村岳陵氏に何かの折に話したところ「その評言はいゝですな」と答へられたことがある。全く、私にはそんな風に考へられる。

話が餘談になつたが、ともかく、節には若冲の精いつぱいの努力がうれしかつたのである。自作についての暗示を得たやうに思ふと、節がいふのは、この點である。

二　眞實の力

やはり左千夫への手紙に

南畫は一般に氣韻といふことを頻りに稱道してゐながらどうも重量の足らぬものが實際に出來上つてゐる樣である。蕪村などでさへ誰々の筆意に倣ふといふことをいつて居る。僕にはこ

れがどうも變なことだと思はれる。萬葉調だとか古今調だとかいつて歌を作り分けして見るのと同じやうなものぢやないかと思ふ、要するに遊戯の分子が多過ぎる。僕は華山にさへ輕薄の氣が免れないと思ふのは古人の筆意だとか何だとかいふことを氣にして居るからだと思ふ。宗敎畫などを見るとそんな處ではなく、もつと大切な方面に專心努力してゐるらしい。

僕は今まで馬鹿にしきつてゐた應擧に金刀比羅神社の書院の山水を見て大に尊敬の度を加へた。應擧には巫山戯た處がない。若冲でも、蕭白でも、極めて眞面目である。氣韻を目的とし、學問を鼻にかける傾のある南畫の先生達に薄ぺらな處の免れないのは心の土臺に一點の巫山戯た處が蟠つてゐるからだと思ふ。云々

やはり眞面目の主張であり、巫山戯の排擊である。

正直に、それは愚直といはれる程正直に、一心不亂に努力する、さういふことを私はしばしば所謂藝術家といはれる特別階級の人々の間に見ずして、却つて昔氣質の、何んにも知らぬ、職人などに見る。愚直には人をうつ眞實のあるものである。節の心持は斯ういふところに通ふのであつて、そのために節は「有名になること」を嫌つた。みづから宣傳などすることを嫌つた。

昔の佛師などの心がいちばん、節の胸にはよくしみこんだことであらうと思はれる。

三　八頁に六ヶ月

他にもいくらもある。四十一年九月島木赤彥氏に與へた手紙には

「炭燒の娘」を書きし時は稿を改むること前後六回程にて、八頁のものに、六ヶ月を費し申候。恥をいはねば分り不申候へども事實かくの如くに候。然しその時以來人の文章を見て是非の判斷に苦しまぬやうに相成り候には自分ながら喫驚致し候。「佐渡ヶ島」も半年の苦心に候。(中略)小生は自己に何等の手頼るべき長所を有せぬ以上は、只自己の滿足するだけの努力を盡せばそれで諦め候より外なしと心に極め居候。纏つた一文を草することは小生には大なる苦惱に有之候。此の如くにして小生には一年一篇を得ることも容易には無之候(略)小生は近來他人の文を見るに餘りに努力足らず、餘りに人を馬鹿にしたる感じを起す場合多く候。

八頁のものに六月の努力を拂つたとは、眞に讚歎に値ひすることであらねばならぬ。「炭燒の娘」にしても「佐渡ヶ島」にしても、實は、左樣な努力の結晶なのである。

近來他人の文を見るに、あまりに人を馬鹿にしてゐる云々、當時東京朝日新聞に杉村楚人冠や澁川玄耳(藪野椋十)などの、輕妙な文章がしば〳〵あらはれ、世人の喝采をはくした。夏目漱石

の文の或るものなぞもそれであつた。節が憤慨してゐるのは、主として、之等の人々を指してゐるのである。

八頁位のものに六ヶ月の日子を要し、稿を改むること前後六回に及んだといふ「炭燒の娘」のことを一言して置かう。

これは節が明治三十八年五月房州清澄山の農科大學演習林に出かけて、炭燒のことを實地研究した時のことに題材を得て書いたもので、小說といふよりも、所謂寫生文の範圍に屬すべきものであるが、その意味で恐らく、彼の代表的作品であらう。炭燒の娘は名をお秋さんといふ。お秋さんは尻きりの紺の仕事着に脚絆をしめて、白い顏へ白い手拭を冠つてゐる。每日この谷かげで、背負子といふもので榾を背負つて運んだり、炭木を伐つたり、炭の碎けを篩つたり、炭を俵へつめたりしてゐる。谷は人里遠く、深山の奧である。「雨の降る日などにはそこらの木まで猿がまゐります」とお秋さんがいふ位、山の奧である。そんな山の奧で、ひとりの老父の手助けをしながら、お秋さんは何の不平顏もなく、一生懸命に働いてゐる。白といふ犬が一匹ゐる。

お秋さんはそこの窪みに獨りで枯木を挽いて居た、傍にはもう十本ばかり薪が積んである。密生した樹立は雫も滴るかと思はれて薄暗い。自分は薪へ腰をかけた。お秋さんの手拭の糸

目の交叉してゐるのまでがはつきり見えるまでに近寄つた。お秋さんは兩足を延して左を枯木へ乘せてゐる。鋸を押したり引いたりする毎に手拭の外へ垂れた油のきれたほつれ毛がふらふらと搖れる。憫い様な鋸の音の外には何の響もない。お秋さんは異様な、眞面目な顏で鋸から目を放さない。自分も腰をかけた儘ほつれ毛と白い襟元とを見詰めて居るばかりである。物をいふのも惡いが默つて居つても極りが惡い。構はずずん〳〵と話を仕掛けたら善いぢや無いかといつたつてさうはいかぬ。兎に角自分から口火は切つた。どんな事で口火を切つてどんな鹽梅に進行させたかといつたつてそれも言へぬ。お秋さんは餘計にいはぬ。

これははじめの部分の一節であるが、お秋さんのおもかけはこれだけでも分るであらう。この作の主人公（節）は山の宿から毎日炭燒小舍まで出掛けて行つて見學してゐるのであるが、或る時は爺さんのために麥酒の空罎へ清酒をつめて行つてやつたりする。爺さんの晩酌がいつもきつい地酒なので、清酒を御馳走してやりたいと思つたからである。

時々木苺をとつてたべたり、谷川で河鹿をつかまへたりする描寫がある。むろん、それは主人公卽ち節である。

この山での見學もすんで愈辭する時、お秋さんは背負子を背負つて、山の阪道を送つて來た。

白もついて來た。「此處へ鹿が立つてゐたことがあります」などと話しながら、歩いて行く。坂を上り切つたら、流石に息苦しさうで、しやがの花の疎らな草の中へ、荷を下してお秋さんは休んだ。

たうとう妙見越を過ぎ、清澄寺の山門まで來た。山門の前には茶店が相接してゐる。自分は一足先きに出抜けて振り返つてみたら、お秋さんは背負子を負うた儘婆さん達に取り卷かれて話をしてゐた。たま〳〵谷底から出てくると互に珍らしいのであらう。自分は櫻の木のかげに佇んで待つて見たがどういふものかお秋さんは遂に來ない。併し茶店まで戻つて見るといふこともしえなかつた。自分は急に油が抜けたやうな寂しい心持になつて宿へ歸つた。

「炭燒の娘」は大體右の如き筋であるが、最後に作者は

清澄山は自分にはすべてが滿足であつた。然しお秋さんと言葉を交して別れなかつたことはどうしても遺憾である。針へ通した糸のうらを結ばないやうな感じである。

といつて、しめくゝつてゐる。生涯獨身であり、童貞であつた節にも、「旅の女」のほの〴〵した心のゆらぎはしば〳〵叙述の筆に上つてゐる。お秋さんもその一人である。

四　非常に骨折ること

大正三年十一月福岡から佐久間政雄氏に送つた手紙には次の一節がある。

このあひだ門間君（春雄）から何か書きたくて仕方がないといつて來ました。是非書いて欲しいと思ひますが、先づ非常に骨折ること、書いたものを人にほめられる積りで見せないこと、此丈は大條件であります。

節にとつては、小說を作つても、歌をよんでも、その外何事をするにも「先づ非常に骨折ること」が第一の條件だつたのである。骨折る氣がないなら、はじめから着手せぬがよいといふ主義である。新聞雜誌の月評的批評などは眼中になかつた。

大正三年八月福岡から横瀨夜雨氏によせた手紙の中には、夜雨氏が「いばらぎ」（新聞）の歌壇を主宰したことをいましめ、むしろ君自身の修業に力めて下さいと忠告した後で、

我々は藝術家として、人にちやほやいはれるのが目的であるべき筈はないのです。何時でも自己の良心に、聊かでも滿足を與へ得る程度にまで努力するにあるのです云々

といつてゐるが、これも節の努力論の一例として見るべきである。

くどいやうなれど、今一例。

明治四十年十一月岡麓氏への手紙の一節である。曰く、

小生も二三月のうちには、一篇を公に致したくと存じ候。只小生は寡聞なる上に經驗と申すこと少しも無之候故、とかく億劫にて手をつけ兼ね、思ひ乍ら延引仕り候。然し乍ら、小生は自己の唯一の資本たる努力は毛頭惜しみ申すまじく候。骨折ることを以て小生は唯一の武器と心得居り申候。

徹底努力主義であり、又自力本願である。

今一つの例をあげる。

第七章　『冴え』『鍼の如く』

一　「冴え」で活きる

節は藝術の理想として「冴え」といふことを主張した。しかし別にまとまつた一個の論文はないやうである。その書簡には時をり「冴え」のことが出てをる。例へば大正三年十月福岡から百穗氏に寄せた手紙には

今は暫時批評も致し粂候。小生は一寸「冴え」といふことを申送り候へども、彼の人達には却て反感を起しはせずやと存ぜられ候。齋藤君など北原白秋氏の歌を非常に讃歎致居候へども、小生には北原氏の作を歌として許すには、餘りに不備の點が多くて困り申候。此邊小生の合はぬ處に有之候。然しこれは大兄へのみ申上候。

云々とあり、又同年九月別府から茂吉氏に送つた繪葉書の消息には

凡ての藝術は「冴え」があつて活きる。短歌の雜誌を見る毎にこの「冴え」のある作品を發

見して、さうして十分の尊敬を以て之に對したいと念じてゐる。これは決して小さな問題ではない。

とある。まだ此外にも有るであらう。

「冴え」の意義についての具體的な說明はきくを得ないが、想像するに、「冴え」とは純粹であり、澄明である。すべての不純なるもの、溷濁せるものを濾過し去つて、生命の粹を活寫せるものゝ義であらう。節は又、他の人の作物を評する場合に、まだ滓があつていけない。この滓を去らなくては、などといつたさうであるが、即ち滓のある境涯はまだ冴えないものである。冴えんがためには、先づ滓を取り去らなくてはならぬ。

藝術の純の純なるものに至つては、直ちに人間生命の神秘に通ひ、宇宙の意思にかなふ。これである、こゝに至つて、その藝術は冴えかへる。

節はつねに人に語つて

月涼し遊行のもてる砂の上　　芭蕉

夜もすがら秋風きくや裏の山　　曾良

鷄頭の十四五本もありぬべし　　子規

などの句をほめて、天地の大道に通じてゐるといつてゐたさうであるが、所謂「冴え」はこの天地の大道に參したものであると思ふ。

「冴え」を唱へるやうになつたのは、彼の晩年で、初期ではない。歌の方でも寫生を力說し、客觀を唱へたのが節の主張であつたが、後にはだん／＼に主觀的に象徵的に成つて來たやうである。單純な自然の寫實では飽き足りなくなつて來たのであらう。これを寫生より寫意への轉移といつても必ずしも不可ないであらう。かの傑作「乘鞍岳を憶ふ」の如きも、想像の作であつて、風景の寫生ではないのである。漸次に主觀味を加へてゐる。こゝに「冴え」との連絡がある。かくて淨らかに高く、ひゞきのある作品を生むに至つた。

象徵の世界に澄み入つたといつてもよい。

明治四十年頃すでに島木赤彥氏に送つた手紙に

歌は只文章にいふことを、其儘三十一字にしたるのみにては洵に興味索然たるべく候。大兄の近業はおほく、この普通なる文章中の普通なる數語を排列したるが如く相見え申候。等しく眼に映ずる處のもの、一たび作者の頭腦を透して現はるゝ時、其處に生命を有せざるべからず。卽ち作者の主觀が濃く又は薄く表はれねばならぬものと存じ候。此點について小生の昨年あた

りまでの、唯々自然の材料にのみすがりたる寫生の歌は全くつまらぬものと存じ候。其材料はつまらぬものでも、其人の見様如何にて、一首のうちの一句に生命を保たしむるものをも得べくと存じ候。此邊餘程注意して今回の歌はつくり申候。素より未だ滿足なるものを得べき道理も無之候故、非難百出なるべく候へども、何かへあらはれ候折は幾重にも御批判の程相仰ぎ申候。

云々、とある。こゝに、「餘程注意してつくつた」といふ節の歌は卽ち初秋の歌十二首、晩秋の歌十六首にして、これについてはすでに、第四章「節の秋の歌」で述べた、參照せられたい。

なほ、同じ島木氏の手紙にて、節は自作一首をあげて、自分のいふ主觀の說明をしてゐる。卽ち

南瓜の莖りがなかに拔きいでし莠そよぎて秋立ちぬらし

の三四の句に見える秋意が、卽ちこの歌の主觀味であり、同時にこの歌の生命であるといふのである。人事とか自然とか、材料の差別にあらざることを讀者は承知せられたい。

この主觀の透徹、卽ち「冴え」が右の初秋晩秋の歌あたりから、漸く意識的に進み、四十一年の「濃霧の歌」「秋雜詠」を經て、三年後の「乘鞍岳を憶ふ歌（四十四年）」となり、晩年の「鍼の如

く」に至つて、短歌藝術の妙境に入つたのであつた。

乘鞍岳の歌については、その作品並に作歌モーチヴを、第五章「歌をはなるゝことと三年」の中に說明して置いた。これも參照してほしい。

二「鍼の如く」

節に「鍼の如く」といふ秀れた歌のあることは多くの人が知つてゐやう。彼が晚年約一年間の療養歌篇で、大正三年五月からアラヽギに揭載せられたもの、合計二百三十二首の大作である。節の考へによれば、人は鐵棒でがんと擲つても死ぬし、急所を鍼で一刺し刺しても死ぬ。歌はこの鍼である。歌の極致は上手な鍼醫が銀の鍼を打つ如くであらねばならぬ。

節が右の歌篇を「鍼の如く」と命名したのは、斯ういふ一つの主張の下になされたのであり、その歌はまことに鍼醫が銀の鍼を打つ如き、おそろしくも美しき顫動と生命の力をもつものであるが、この精神乃至主張はやがて、彼の「冴え」の說に通ふものであらうと思ふ。

或は性命具象といひ、或は象徵の深さといひ、或は內生活の活寫といふ。言葉はちがふがその精神は一つである。藝術に於ける一つの精神主義である。節の晚年の主張はつねに、これに向つ

てゐた。

節がこの大作については、彼の心境が漸く深く、内へ内へと進んだ結果であつて、その前に彼は從來の歌品にあきたらず、歌を棄てゝゐた。それが一朝乘鞍岳の歌によつて甦り、更に氣の毒な愛の破局に刺戟せられ、羈旅にいで、又古美術を鑑賞し、最後に傷ける胸奥の秘を抱いて筑紫に下り、病間詩筆を呵してこの作を成したのである。單なる感傷の世界とはその生成の縁由がすでに違つてゐる。淸高にして非情限りなき内在のしらべを思はねばならぬ。（第五章のうち、寫生より象徴へ參看）

三　氣韻生動

節はまた、晩年美術の鑑賞に沒頭し、屢古美術等について說をなしてゐるが、それには所謂氣韻生動の主張が多かつた。（節の古美術行脚の章參照）これは歌論「冴え」の說に通ずるところがあるであらう。

節の冴えの說を說けばおのづから左千夫の「叫び」又「ひゞき」の主張に及ばねばならぬ。併しこれは後の左千夫篇にゆづることにする。たゞこゝにはアラヽギの節紀念號諸家談話のうちよ

り村上、島木二氏の言葉をかりて、この對照のあとを示して置くにとゞめる。

村上鐔堂氏の言葉。

伊藤さんは、亡くなられる前「叫び」といふことをしきりに論ぜられた。長塚さんは、また「冴え」といふことを大に唱へられた。さうして、若がもし俳句に及べばおなじく芭蕉を尊重せられた。「叫び」と「冴え」とは無論同じ事ではないが、此の「叫び」此の「冴え」が分らなければ、眞の文學は分るものであるまいとおもふ。共に、嚴肅の意味を有する教誨である。

因みに村上氏名は成之、歌集「翠微」の著者、今は故人である。鐔堂はシミムロと訓む。

島木赤彦氏の言葉。

左千夫先生は歌は「響き」であると言つてをられた。長塚さんは歌は「冴えなくてはならぬ」といつて居られた（アララギ左千夫追悼號より）

云々。「響き」とは「聲調のひゞき」のことで、つまり歌の意味合ひよりも、聲の律動に重きを置いたのである。これも面白い説である。

なほ、氣韻生動といふことについては、かつて旅中より平福百穗氏に手紙を寄せ、その中で之に論及してゐる。即ち鳥羽僧正の鳥獸畫卷の面白さは、その氣韻の生動にあるが、これは、作者

が描くべき對象に乘り移つて描いてゐるからである。奈良の古い佛像などを見てもこの感を深うする云々といつてゐる。これは卓說であるとおもふ。『鍼の如く』『土』などの如き作品は、作者がこの心境に入つてから後の大作であることを思はねばならぬ。

鳥獸畫卷についてのことは、これもすでに述べたとおもふ。

第八章　節の歌評歌話

一　胡桃澤氏の歌を評す

胡桃澤氏への節の書簡から拔き書する。明治三十八年五月十一日附である。「雨のうた」と題する十首のうちから。

杉垣の新芽の綠露ふゝみしき降る雨にたれがてにせり

節曰、句法面白からず。一首の意は雨が降つてゐるので杉の芽に露がおいてある。霜は重たさうであるが、なほ垂れがてにして居るといふのであるから、句の位置をかへなければならぬ。原作の儘では露がおいてあるので雨が降つても垂れがてにして居るといふやうに聞える。

杉垣の新芽の綠ふる雨に露おきむすび垂れがてにせり

としたならば聞えるであらう。

×

雨はれの庭に下り立ち垣のへの五加木をつむと露にぬれけり

節曰、これは句法も口調もよろしいが、いくらか平凡で且つ陳腐である。

×

春の日の雨はれしかば山畑の麥生のうれゆひばりなき立つ

節曰、これもさうである。調子のはつてゐるのは手柄である。

×

雨はれの日和よろしみ山人ら新墾畑に桑うゑ勵む

節曰、調子もよい。見付所が亦面白いのであるから愉快である。入選。

×

庭畑にひきのこされて薹立ちし大根青葉にはるさめのふる

春の日の雨をときじみ追込の鳥さへづらず今日もくれたり

節曰、孰れも調子はよい。併しずつと前からこんなものが散見せらるゝのだから、選には漏れる。

×

玉ほこの道ひくく羽蟲むれ夕かたまけて雨ふらんとす

節曰、初二句が平凡になる、見付所が面白い。實際あることなのであるから、此の羽蟲の飛ぶを五加木の垣の上としたならば、一首を濃厚ならしめることが出來やう。

（改作）眞垣なる五加木の上に羽蟲群れ夕かたまけぬ雨ふらんとす

四五の句に注意して見るのが肝心である。「夕かたまけて」とつゞけると一首がたるむ。改作によると、「眞垣なる五加木の上に羽蟲が群りて飛んで日は夕になつた。空は雨が降りさうである」こんなことになるのだ。原作の低きといふのは惜しいのであるが、道なれば低くといはねばならぬであらうが、五加木垣の上といへば故ら低いと斷らずとも、垣と甚だ隔離して空に仰ぐやうな位置と想像するものもないであらう。

×

安曇野の限りをしらに咲きみてるなたねの花に雨雲ひくし

節曰、五の句を「低き雨雲」とした。かやうな大きな景色などをいふには、ゆつたりした落着いたものを用ゐねばならぬ。「雨雲低し」と「低き雨雲」とはどつちがゆつたりしてゐるか。この歌珍らしいといふ譯には行くまいが、壯大なる光景一讀壯快を感ずるのである。入選。

×

さ庭べにさける韮薹の花をしげみしきふる雨に土にたれたり

節曰、韮薹の花などを歌にするものは稀であらう。調子も惡くない。採つてもよい歌である。他の人にはわかるまい。

×

こゝろみに庭に植ゑたる團栗のさ芽立つなべに雨ふりそゝぐ

節曰、「どんぐり」といふ語が一寸變だが、むしろ採るべきであらう。

總じて御骨折の程相見え、面白く拜見いたし候。十首のうちたしかに四首は及第に候。成績はむしろ上等に候。大兄の今後力を專らにせらるべき點は調子よりは却て內容卽ち見付所に有之候。有體に申候へば、大兄近來の狀況は、幾多投書家にたしかに頭角を露はし居候。卽ち毎々一種の生氣あるを認め申候。(下略)(胡桃澤氏は後の平瀨泣崖氏——著者)

二　赤彥に與へて左千夫の歌一首を評す

(前略)

左千夫君の

秋草のしげき思ひもいひがてにまつはる露を手に振り落す

の歌には閉口致し候。小生は分らぬ歌と申候處、それは小生の解釋力の缺乏せるなりとの論に歸着致候。併し何と申しても小生は不服に候。「露」を「我」と置き換へて見よとのことなれば、之は甚だ無理と信じ候。

一、此歌は三の句で切つてもよく、四の句までつゞけてもよし、これ措辭の粗笨なる所以。

一、露といふ語にまつはるとはいふべからず、露がからみつくといふ語のつゞきはあるべからず。

一、手に振り落すは、手にて振り落すと解すべき句なれど、無理にみれば露を手のひらに落すとも見ゆ。

以上は此歌の措辭の甚だ粗笨なるを表明す。言語の意味は作者が恣に改むべきに非ず。自然の約束なればなり。言語の意味を或は廣くし、或は深くし、或は重くすることは作者の技倆次第なれど、白といふ語は依然として黑きものとは反對なり。

一、此歌三句までの秋草は序なり。假設的なり。四五の句の露は現實的なり。而して兩者は密

接の關係を有すべき物體なり。故に甚だ錯雜の感あり。之は許すとしても露と置けば、露がいひがてにしてまつはるといふことにきこゆ。三の句まではいかにも人間らしけれど、四五の句はどうしても實際的の露其物を見るに過ぎず。もし全く比喩にするならば、何處までも露ならば露をかりていふべし。半分は人間らしく半分は露らしき言ひ方は到底不可解に終るべし。

一、作者は萬葉を引證して、萬葉の言外に意味ある歌、即ち「大寺の餓鬼」の歌等を以て論ずれども萬葉のは言語の意味は明瞭なり、此歌は言語が錯雜して殆んど解すべからず、つまり作者に聞いて見なければ分らぬといふ作者が恣の語法なり。

一、今一度繰り返せば三の句までの續きにては我といはねば意通ぜず、

秋草のしげき思ひもいひがてにまつはる我を……如何なるべし。然るに五の句は「我」といひては全く調和せず。

まつはる我を手に振り落す

之では飛んだ意味となる。五の句を生かすにはどうしても露ならざるべからず。しかも露とすれば三の句までが調和せず。前述の如く

秋草のしげき思ひもいひがてにまつはる露を

にては、露が思ひに堪へかねしことゝなる。どちらにしても上下掛けあはぬ歌なり、妖怪的の組織なり。

一、如何なる作者も言語の意義だけは、吾々國民の間に於ける自然の約束に從はざるべからず、白は到底白にして、黑は到底黑なり。作者は「常識的に見るからわからぬ、もし一遍よんで分らなければ、作者はどういふ積りで作りしか考へて解釋すべし、そこが解釋力の乏しきなり」といふ。然れども此歌の如きは、日本語を解する日本人に解らぬ歌なり、之を許すならば明星の歌も許さねばならず。明星の歌も分らぬ歌なれど彼等には分る也。解釋力乏しければ分らぬといふ也。同じことなり。

右要領を得ず候へども、大兄も分らぬ由申され候趣承知致し候故申述べ候。左千夫君には近來かくの如きものあるを嘆ぜざる不能、しかも頑として他人の言に耳をかさず候。大兄は富士見の會に於て納得致され候由なれど、全く心よりに候や。小生は不思議に不堪候。（下略）

節と左千夫は馬醉木時代、明治三十八年頃に、主觀（左千夫）と寫生（節）とを掲げて盛んに論議應酬したことがある。右にあげた赤彥への私信は明治四十一年のものであるが、これによれば、

この二人者の歌の上の立場はこの頃に至るまでまだ相對立して容易に下ることがなかつたのである。

萬葉を引いて白歌を辯護した左千夫の文が、今私の手許になく、こゝに引用することの出來ないのは甚だ殘念である。節の說は飽まで理攻めで、正面から押して行く行き方である。

因みに右の歌は、左千夫全集歌集には原作のまゝに採錄してある。卽ち四十一年の部、富士見野歌會の歌八首のうちの最後に、「戀」といふ題で入れてあるのである。題詠だつたと見える。

三　『赤光』書き入れ

齋藤茂吉氏の歌集「赤光」は明治大正の新歌壇に大きな波紋をつくらせた一石であつた。節がこれをいかに見たか。その一首々々に偶感を書き入れたものが横瀨夜雨氏編「山鳥の渡」にある。そのうちからすこしく抄錄して參考に資したい。

×

めん雞ら砂あび居たれひつそりと剃刀とぎは過ぎ行きにけり

節曰、時間の無い單純な空間をよんだ然かも相互に何等關聯もないものを取つて來た處、作者

×

雪のべに火がとろとろともえければ赤子は乳をのみそめにけり

節曰、木こりの妻の容子はあらはれて居れど、たゞそれだけで、あまり深い感じは起らない。東聲申す。私はさうは思はない。これは私の好きでたまらぬ歌である。それゆゑ、こゝに抜いて讀者諸君の批判をきく。

「赤光」全體に批評の書入れをすることについては、節も餘程頭を惱ましたと見え、大正三年福岡から平福氏に送つた手紙には

それから赤光の批評なのですが、どの位私は心を苦しめたか知れないのです。八度以上の熱が出るやうになつてから、しひてその事を念頭から去る樣にしたら、何程心が休まつたか知れません。

とあり、又島木赤彦氏への手紙には「赤光評にとりかゝらねばならぬのが苦痛です。とても思つたやうなことはいひ得ないと考へてゐます云々」とある。歌集が歌集であり、評者が評者であるだけに、容易に筆を下さなかつたのも無理はない。一行の批評も輕々に筆を下したものではないのである。

この「赤光」の書き入れはまだ〳〵續いてゐるが、際限がないから、この邊で止めやう。茂吉の作品に對してすら、一段の高處から、嚴しく、併し率直にずば〳〵と、きめつけてゐる所、節の抱負なり、態度なりが明かに見えて、なか〳〵興味がある。極めて短い評言ではあるが、併し周到なる用意の下に吐かれた言葉であることを、忘れてはならぬ。

四　一つの訓誨

節の親戚の中岫氏(下妻町の醫)につや子さんといふがあり、節はこの人をいたく愛してゐたが、時々手紙で何くれと訓悔を與へてゐる。その中に

十九や二十の女學生には、どんなにしたつて本當の歌は出來ないのですから、私には歌はどうも出來ませんなどゝ、他人に向つて言つてはいけません。

云々といふのがある。みづから思ひ上がつて、世の若い歌ずきの女學生などが、エラさうなことをいふのを誡めたのである。「一生懸命に勉強して出來ないのなら、出來ませんも聞えるがロクに勉强もしないで、私には歌はこの頃出來ませんなどゝいへば心ある人から笑はれます」云々といふ言葉もその手紙の中にあつたと記憶する。

又

私などは正岡先生についてから二十年にもなりますが、歌らしい歌はありません。といふ言葉もあつた。少しも威張らず、たかぶらず、謙遜そのものであつた節の面目が見えるのである。

やはりつや子さんに向つて、私のやうな無學なものには、弟子などいふものは一人もありません云々の一節もある。輕薄な世の自稱先生がこれを聞いたら赤面するであらう。

宣傳ぎらひで、地味にしづかに、こつ〳〵と自分の道を歩いて行くといふのが、歌に於ける節の行き方であつた。功名を急ぐ、或は賣名に急なる小才子をつよく忌み嫌つたのである。

たゞ正直に、すなほに、眞心を以て寫生せよ、といふのが節の作歌道であつた。

天下に歌つくる人は幾萬なるやを知らず、併し滔々たる天下の青年歌人の木偶歌は言葉は巧みに排列してあつても藝術ではない。自分には藝術としての短歌でなくてはゆるせないのです云々とも、或る手紙の中で述べてゐる。

浮華輕佻はたとひ、一線一劃といへども、節にはゆるすことが出來なかつた。一首の歌といへども所謂鏤心彫骨の辛勞の結果であつた。

第九章　節の古美術行脚

一　晩年の古美術傾到

節は晩年には日本の古美術、卽ち建築、繪畫、彫刻、梵鐘等に頗る深く心を寄せてゐた。諸國を旅行したが、それは概ね古美術行脚であつた。そのことを、彼の書簡等より抄出紹介して、いささか節の美術鑑賞について記述してみたいとおもふ。

節のみでなく、日本の文士詩人歌人には、若い時代には近代の洋風を好んでも晩年に至るに從ひ漸く東洋の、それも古代藝術日本藝術に心を寄せ、自らも製作など試み、だんだんに古風に又日本的になつて行く人が多いやうに思はれる。かの英文學者夏目漱石の如き人が晩年には實に東洋的であり、日本趣味のものを好んだ。子規ははじめから左樣かも知れないが、晩年にはとくに古美術を好み、自らも寫生などしたことは既記の通りである。私の知れる、新しい人で小宮豐隆氏の如きもさうであり、日夏耿之介氏も或はさうであらう。室生犀星氏の如きはどうか。若い頃

は西洋近代劇の研究者であつた人が今は芭蕉の研究に從事してをるといふ風である。節の如きは固より最初から東洋風な、又古典的な人であつたであらう。併しその傾向が古美術に向ひはじめたことは比較的晩年のやうに思はれる。

古典藝術と東洋思想は、年をとれば、凡その日本人がそれに向ふ性質のものであるかも知れない。

二　太宰府觀世音寺

節が晩年福岡の大學病院に療養中のことである。彼は屢太宰府に遊び、都府樓の跡をたづね、又菅公の都府樓纔看瓦色　觀音寺只聽鐘聲で名高い觀世音寺を訪ふてゐる。

小さな古寺であるが、天智天皇が滿誓沙彌に命じて創立せしめられた靈場である。馬頭觀世音菩薩、不空羂索觀世音菩薩、十一面觀世音菩薩など國寶指定の佛像が十五軀もあり、その他鐘、狛犬、扁額（道風眞蹟）古鏡、經卷等の寶物も少なくない。傳教大師の作と傳へらるゝ大黑天の立像の如き普通の大黑天とはすつかり姿態を異にせる、面白いものである。節はこれな、小生はこの大黑天が好きに有之候、と百穗氏に通信してゐる。

私も先年福岡へ公務で出張のみぎり、內務省の田中廣太郎氏、長野縣の福澤泰江氏其他と半日こゝに遊び、田中氏がかつてこの縣の事務官たりし關係上、よく御存じなので、右の大黑天などについて說明して貰つたことであつた。

それはさておき、節はこの觀世音寺の國寶を激賞し、

觀世音寺の佛像は實に奈良京都を除いては天下匹儔するもの無かるべく候。一丈六尺の馬頭觀世音の如き四面六臂かで、惡辣な貌が前後左右にくつついてゐるのですから、うしろへ行つても見つかります云々(下妻町中山友彦氏あて)

といひ、又

大宰府は九州第一の古蹟、觀世音寺の佛像の如きは國寶たるもの二十體、小生は左樣のこととは存ぜず、參り候て全く一驚を喫し申候

などといつてゐる、成程立派なものばかりであつた。十一面觀音は今も私の眼にのこつてをる。聖觀世音の立像は大佛師良俊、俊額の合作で、藤原時代のものであるといふことであつた。道眞を悲しませた銅鐘は庭の一隅の鐘樓にあり、天智帝の寄進せられたものであると、寺僧は說明した。節はこれを

手を當てて鐘はたふとき冷たさに爪叩き聽くそのかそけきを

とよんでゐる。又寺を

ざぼん植ゑて庭暖き冬の日の障子に足らず今は傾きぬ

とよんでゐる。とにかく、この寺は餘程彼の氣に入つたらしい。親戚の渡邊源五郎といふ人に送つた手紙にも、太宰府は日本の靈地に有之、觀世音菩薩の像の如き鷲くの外無之候云々といつてゐる。その他之に類した言葉は頗る多いことゝ思はれる。

同じ人に

此地太宰府に於ける古代の佛像天下の珍品に有之候（明治四十五年五月十七日附）

明治四十五年五月福岡より平福百穗氏にあてた手紙には

九州めぐりの最終に太宰府へ來て僕は驚いた。表で見て見すぼらしい觀世音寺が立派な佛像でぎつしりだ。二十體も國寶だ。奈良京都を除いては日本に類がない。値打からいつたら京都より上だらう。梵鐘なども第一流だ、菅公の觀音寺は云々といつた鐘だ。

などあつて、そのあとに馬頭觀世音、不空羂索觀世音、大黑天などを稱讃した批評を書いてある。

それで其後、大正三年、再び福岡へ來た時にも平福氏に手紙をかいて、

觀世音寺の佛も大分修繕が出來てゐるだらうと思ひ乍らまだ見ません

云々とあつて、病院にゐても、福岡にさへ來れば、心は觀世音寺に行つてゐたことを示してゐる。

三　北野天神緣起と風神雷神

平福百穗氏への消息。

……神戸へ上陸してすぐ京都へ來た。博物館の繪を見るためである。かの建仁寺の風神雷神があつた。（東岸いふ。これは宗達の筆と傳へられゐもので二曲屛風一雙である）さうして光信筆といふ北野天神緣起があつたが、菅公の怨靈といふ雷神が、宗達の屛風のと姿勢がちつとも違はない、領布のやうなものゝ靡いてゐる所から、太鼓の撥を握つた手の向き方から、手首足首に金の鐶の篏つてゐるまでそつくりである。宗達は光信からとつたのである。但だ宗達のには二角を生じて金鐶を鉢卷にしてゐる。それが光信のにはない。それと光信のは身體が赭いが、宗達のは胡粉で白く描いてある。金屛風であるのと、風神との配合具合からあゝしてあるのだらう

が、宗達のは氣持が非常にいゝ。それから光信のには、太鼓が九つも描いてそれが中々大きく且つ明瞭に巴の紋まで表はしてある。處が宗達のはほんの太鼓といふ形ばかりに、而も手首から先の大きさ位に薄く染めて數もずつと少ない。餘程考へたものだ。どうしてもこの雷神だけは宗達の方がいゝ。だけれど宗達は雷神だけを全體として取扱つたのに、光信のはそれが長篇の一節に使はれてゐる。そこに大變な相違が生じて來る。宗達も少し功を光信に讓らなければならぬが、より以上のものに成功した點は矢張り偉大である。世間の多くは原本より劣るものを仕出來すのだから、餘計宗達は偉大である。國寶ではないが山樂の葛花の屏風が出てゐたが、宗達とか光琳とかいふ豪傑の事業も、すでにあの頃に胚胎してあるといふことがつくづく觀はれる。朝鮮鐘も大分見た。

この光信と宗達の比較は面白い。博覽會の會場などで、ガラスの外から覗き見つゝ、匆々の間にこれだけの批評を下すことは決して容易でないが、節はそれを爲し、しかもこれを友人に報告してゐる、美術鑑賞のたしかさはいふまでもないが、その親切、努力、驚くに足りるであらう。繪葉書一つだつて、なかなか書けるものではないのである。

四　應擧、若冲、蕭白

伊藤若冲の、今は御物になつてゐる、花鳥三十幅、あれを節が京都で見て、その感想を左千夫に書き送つたのがある。

君はいつかつまらぬといつて居たが、僕はさうは思はぬといふのが、節の前提で、不器用なものではあるが、あれだけの努力とそれに伴ふ強みと厚みと力とは十分に尊敬せねばならぬ、といふのが要點である。この論點は、私も、至極尤もであるとおもふ。節の見方はたしかで正しとも思ふ。さうして、節は竹内栖鳳の畫が四條派の薄つぺらな、才氣だけのもので、とても若冲の三十幅の如き作とは比較にならぬことをいつてゐる。段がちがふといつてゐる。

だん／＼掛替になるのでまだ七幅しか見ないが、大きな牡丹の花を一幅に四十三も書いて、その隙間にはびつしりと小手まりの花を胡粉で畫いてをる。僕が自分で製作するについて暗示を與へられたやうな氣がする。

この繪は私も先年表慶館で見たことがある。私は芍藥だとばかり記憶してゐるが、牡丹であつ

たか。まあ、それはどうでもよいとして、その後に節がつゞけて言つてゐる言葉を引用せぬわけには行かない。曰く

　僕は製作に取りかゝつたら力限り根限り自分の良心が滿足する程に、さうして一つはその作物を尊敬し、讀者を尊敬し、同時にその心は作者自らをも尊敬してかゝらねばならぬと思ふ。

と。これは恐く節の作と生活とを一貫せる主張であらう。彼が若沖を尊敬するゆゑんは、彼の作品にヤマやケレンがなく、只滿腔の精神を傾けて描いてゐる點であつたとおもふ。

　彼が世の有名な南畫家並に南畫にあまり好意をもたなかつたのも主としてその輕薄の氣、遊戲の分子にあつた。蕪村などでさへ謹々の筆意に倣ふといふ。怪しからんではないかと節はいつた。藝術は自己である。自己の表現である。粉本といふものがそも／＼解らぬものである。節はそれを難じた。華山の如きもいさゝか輕佻であると彼はいつてをる。古人の筆意などを氣にするところが、彼には氣にいらなかつた。

　そこへ來ると、若沖や蕭白は眞面目である。掛引もケレンもない。唯だ精いつぱいに努力するだけである。そこが好い。應擧については、節はあまり好まなかつたが讃岐金刀比羅神社の書院の山水を見てから、好意をもつやうになつた。その山水の圖――私は未だ見ないが――には巫山

戯たところがない。輕薄な分子がない。應擧は案外いゝなあと思つたやうである。

大雅堂などもどうも骨を折らぬ。なげやりである。そこがいけないと思つてゐたらしい。但だ高野山遍照光院の襖畫は大に努力してゐるといふので、節も相當に買つてゐる。大分縣中津町自性寺の大雅堂は節も見たらしいが、別に批評してゐなかつたやうだ。

要するに南畫家の心の底には一點の巫山戯たところが蟠つてゐる。もし自分が國寶の調査委員になつたら、應擧や若冲や蕭白には一も二もなく編入せねばならぬものが有るのに、南畫の多くは乾度脊を撚らねばなるまいと思はれる――斯う節は南畫を非難してゐる。

鳥羽僧正のかの有名な鳥獸畫卷並に藤原より鎌倉にかけての極彩色の多くの繪卷物、節はこれ等のものは賞讃してゐる。それは皆氣韻生動して畫が活きてゐるといふのであつた。さうして氣韻生動の因は、畫家がその畫くべき對象物に乘りうつるからであるといふ。作者の對象物に乘りうつらざる作品は藝術として決して優秀なるを得ない。斯う彼は論じてゐる。平福氏の七面鳥の屏風をも彼はその點から口を極めて推賞した。

佛畫や佛像には固より斯うした作品が多い。彼が屢京に行き、奈良へ行つて古寺をたづね歩いた心持が分るとおもふ。

五　齋藤隆三氏へ

日本美術院理事の齋藤隆三氏は節と郷里を同じくし、（全く同じではないかも知れないがさう遠くもない、同じ郡であらう）且つ交際があつた。そこで、齋藤氏宛の消息をこゝに引用することは卽ち節の美術行脚のあとを知るよすがともなり、興味があらうと考へる。

○觀世音寺狛犬の繪葉書

明治四十五年五月九日、福岡より

東大寺の狛犬と比べて此は別種の面白味を感じ申候云々とある。

觀世音寺のこと及びそこの狛犬のことはすべに述べた。又この狛犬について、後に岡麓氏へ、東大寺の狛犬とちがふ所に面白味がある。向つて右の狛犬が左の足で抱へてゐるのは子犬である。實物を見ると恐ろしく線が複雜な彫刻であると、いつてゐる。

×

○芥屋（けや）の大門（おほと）の繪葉書

壁畫のある寺とは大和にては室生寺、法隆寺、山城に醍醐三寶院、日野法界寺、大原三千

院、宇治平等院、近江に石山寺、西明寺、豐後に豐貴寺等にて、更に岩船寺と大和九體寺と有之候も、この二ケ寺がどうしても所在相分り不申、それ故昨日御たづね申上候次第に有之候。

×

○嚴島神社寶物長澤蘆雪筆の繪ハガキ

これには別に美術に關することはしるしてない。明治四十五年七月二十六日宮島からの消息である。

×

○高野山不動の繪ハガキ

大正元年八月十三日高野山より。

天下の靈山に攀ぢて胸すく心地いたし候云々とある。

かの有名な赤不動の繪ハガキであらう。節があの不動に對していかに感じたか、その感想の記述のないのは遺憾である。

×

○西大寺興正菩薩木像の繪ハガキ

大正元年八月十九日。奈良より
長き旅行の終の葉書に有之候。
法隆寺にては夢殿の秘佛を拜し候。

云々。興正菩薩は西大寺中興の上人である。

×

○法界寺本堂繪ハガキ

大正元年八月二十八日、京都烏丸より
法隆寺夢殿の秘佛も二度開帳して貰ひ、東大寺の寶庫も二度見て、大佛殿の土中より發掘したる貴重の壺を手にとつて見た。京都は今日までに太秦の廣隆寺、丹波の穴太寺、醍醐寺は山上山下とも、日野法界寺等を見て廻り候云々。

丸で寺まゐりの巡禮である。寺といへば、彼はたゞ無性にうれしくて、遠きを遠しとせず、たづねて行つたにちがひない。

私はかつて「土の人長塚節」といふ一書を出した時、齋藤隆三氏に一本を拜呈したところ、節

のことはいろ〳〵と詳しく書いてあるが、美術のことがありませんねと注意をうけた。いかにもその通りで、私はそれに氣がつき乍ら、まだはたさずに、そのまゝで一冊にまとめ上げたのであつた。

今齋藤氏への節の手紙を見ると、右のやうに、美術に關することが多い。齋藤氏の私への注意がいかにも尤もなことであると、これを書きつゝも、思ひださるゝ次第である。餘談ながら、この事をも一言して謝意に代へたい。

六　朝　鮮　鐘

節はまた極めて古い鐘を愛し、寺へゆけば注意して鐘をみて歩いたらしく、殊に朝鮮鐘をしらべて見歩いたやうである。そのことは以上の文のうちにも一つ二つ見えた。

こゝに齋藤氏への消息にも、また唐門及大梵鐘の繪ハガキの裏面に

此鐘を手はじめに新に朝鮮鐘を見ることすでに六口、内五口は國寶、明日大阪に赴き更に二口に接すべく、雲州へ志し居候へば、此點のみにても、大分見界をひろめ可申と愉快に有之候

とある。大正二年四月のたよりである。同年七月中村憲吉君に送りしものには

西大寺の朝鮮鐘も一見可然と存じ候、寺の受付へ申込み梯子をかけさせ、歸りに二十錢を投ずれば非常によろこび申候

とある。この西大寺の鐘といふのは、私も去年の春大阪の乾林莊君兄妹の案内で、唐招提寺へ行つた時、西大寺をも訪ねて一見したことであつた。

右に「雲州へ志し居候へば」と齋藤隆三氏へ書き送つてゐるが、恐らくこの時であつたとおもふ。出雲大社から香取秀眞氏へ送つた繪ハガキにやはり朝鮮鐘のことが書いてある。曰く

此鐘が朝鮮製のものとしては第一らしい。少くとも今迄見た十六口の内では第一である。一體雲州のものは霧のためか、緑青の工合が素晴しくいゝ。只雲樹寺のは見るさへなか／＼だから困つてしまふ。盜まれちや大變だといつてかうして置くのである。今日大社へ來た。

鐘に閂打ちたる繪ハガキ。盜まれちや大變云々がこの閂にかゝるのである。

ずつとはじめに述べた大宰府の觀世音寺の菅公の鐘については、明治四十五年に節は鄕里下妻の三浦義晃氏にあてゝ

國寶の佛像二十餘軀、梵鐘の如きも本邦第一なるべく候

と激賞してゐる。

宇治の鳳凰堂にゆき、そこの梵鐘を見て、驚いて福岡の久保より江さんにハガキを出してゐるのがある。

一昨日鳳凰堂へゆき今日また行きました。一昨日行つた時鐘がどうも珍らしく善いのだと思つたら國寳になつて居るんです。私はうれしくてたまりません。

云々。節が立派な鐘をみつけた時の滿足を想像すべきである。

今一つ擧げやう。それは左千夫への手紙である。

（前略）四國を立つた日に書寫山へ登つた。次の朝には同じ播州の鶴林寺といふのへ行つた。太子堂などは品のいゝこと實際何ともいへなかつた。百濟の献納といふ梵鐘がある。寺から田圃一つで高砂の相生の松のある尾上神社で其處に此鐘がある。鶴林寺のよりはずつと大きいし、それに天人の天降つてゐる模樣もある。だが粗末な堂で手がとゞくもんだから參詣人が撫でさすつてつるつるにして塁つてゐる。堂の中へ柵を結つたらよからうといつたら、神社では始めて氣がついたらしかつた。尾の上の鐘といつて昔から餘り有名なので、却つてこんなにしられたかも知れない。其日はずつと和歌山へ越えて、紀三井寺で古鐘を見た。一日のうちに國寳の鐘を三つも見るなどといふのは本當に勿體ないといつていゝと思つた云々。

私には鐘はわからない。併し千年も千年以上も經つた昔の鐘をみると、其色合といひ、形といひ、模樣といひ、いかにも蒼古で、品高く、深い味を有つたものだといふことだけは朧氣ながら解るやうな氣がする。節の心が晩年内へ内へと沈潜してゆくにつれて、古代の建築彫刻を愛し、鐘をみるのをよろこんだのも、それは當然の歸趨であつて、この心境を洞察することによつて、私は彼の藝術の理想が解せられるとおもふ。彼が他人の作物を品評する場合に屢氣韻又は品位といふことをいつてゐるが、これなども彼の古典的傾向が必然にもたらす所の批判乃至態度の標準であると解すべきであらう。

七　建　築

宇治の鳳凰堂の建築については中村憲吉君が批評をなし、節を失望せしめたことがある。大正三年頃のアラヽギに載つてゐたとおもふが、それに就て、節は中村君の批評は書生論である。中村君には未だ古代藝術を論ずる資格はないといつて、中村君を難じてゐた。同時に茂吉等アラヽギの同人達へも忠言を與へてゐたやうに記憶する。節がアラヽギの同人達に對する態度はつねに斯くの如くで、ピシ〳〵行つつけるといふ峻嚴なところがあつた。

鳳凰堂の建築はいたく節の心を捉へたと見える。日野の法界寺と共に屢彼の筆に上つてゐる。
伊藤左千夫への手紙に曰く
日野の法界寺の阿彌陀堂は生粹の藤原時代の藝術である。鳳凰堂と共に本尊は丈六の如來で定朝の作である。而貌の互に光つてゐる處も面白い。堂は檜皮葺で外形の品のいゝこと勿論のことであるのみならず、堂内には須彌壇の四本の柱には曼陀羅が描いてある。煤けたり、剝落したりしてゐるが、模様や佛像の精巧緻密なのが明かに分つてゐる處もある。遙に天蓋を仰ぐと四壁に天人の風に御する處が描いてある。その外側の壁には四方に四體づゝ十六體の如來がある。醍醐と日野を見たのは昨日のこと、今日は鳳凰堂をみた。二度目である。二三日内には歸國するが、も一度宇治（鳳凰堂）へは行く。
これは日野の法界寺の阿彌陀堂の繪ハガキへ小さい字で書いたものである。これには建築の外に、壁畫への興味もある。壁畫のある寺々をたづね廻つて、或時は齋藤隆三氏へ寺の名を問ひ合せなどした。そのことはすでに述べた。
日野の法界寺といふのは山城宇治郡にあり俗に日野藥師と唱へられ、今は醍醐寺に屬してゐる。その阿彌陀堂は宇治の鳳凰堂と前後して建てられた藤原時代の名建築で、本尊の阿彌陀如來も有

名であるが、卷柱（布を卷き漆を塗りしもの）の佛像や唐草模樣がまた美術家や鑑賞家をよろこばす古代美術の資材となつてゐる。節がこの堂に入つて佛像を見、壁畫を見て大滿悦の姿を想像するのは愉快である。

法隆寺へはもちろん度々行つてをる。大正元年久保より江さんへの消息に

> 私は近角常觀さんの紹介で一昨日法隆寺を見ました。三四日のうちに夢殿の秘佛を二度も見ました。中宮寺の如意輪觀音も見せて貰ひました。推古時代で最優秀なものなんでせう。
>
> 三四日のうちに法隆寺を二度も見るなんて、なんといふ幸福なことでせうか。東大寺の大佛殿の土中から發掘した劍や壺も見ました。明日更に今一度手にとつて見ることを許して貰ひました。私は今歌も文章も出來ませんが今度位精神に滋養を供給したことはありません云々

とある。『明日更に今一度手に取つて』――彼の鑑賞心の滿足が跳つてゐる。『今度位精神に滋養を供給したことはない』――實に、彼が晩年の旅行は心の糧をもとめて歩く求道者のそれであつた。

高野山へも登つた。金剛三昧院では小栗宗湛筆の梅花雉子の大襖は大に之を褒めてゐるが、併し國寶五知如來（寺傳運慶作、鎌倉時代）は和尚のほめるに拘らず、彼はあまり感心してゐない。

これ位な作は高野山には幾つもある、と獨語してゐる。又遍照光院では書院の襖十枚に大雅堂の描いた畫を見て、大雅堂を批評し、遂に南畫論に及んで南畫に氣韻のないことを難じてゐる。その原因は南畫家の心におほむね遊びの分子が多過ぎ、輕佻なからであるといふ。斯ういふところにも眞面目な節の面目はあり〳〵と窺はれる。

その外國々の神社佛閣、凡そ彼の足土をふむのところ、建築彫刻繪畫などについて見るべきものさへあれば、彼は決して之を見のがさなかつた。彼にはそれは一つの敎養であり、又禮拜の心であつた。

晩年(大正二年)友人門間春雄氏によせた書簡に、『小生昨年までに京都へ五回、奈良へ四回參り候も、漸く佛像等古代の藝術について、自ら深き趣味を感知したるが如く覺えられ申候こと故此處に申添へ候』とあつて、上野公園なる表慶館の見學をすゝめてゐる。古代藝術の趣味を自ら感知したといふところに意義がある。

表慶館の見學をすゝめては

(前略)本館の方には數體の佛像有之、京都府下太秦の廣隆寺の如意輪觀音の如きは、原始的の製作とも可申ものか、千三百年の古堂中に安置されありしものに候。又室の中央なる吉祥天女

の彩色木像は、山城淨瑠璃寺の出品にて有名のもの、同寺は多田滿仲の建立にて昨夏小生は大暑を冒して訪ね申候が、三重塔と併せて心ゆくばかりの建築にて候ひき。（この吉祥天女像は聖武天皇の御作なりと傳へらる——著者）

播州鶴林寺の金銅聖觀世音は、製作の優秀なる點に於ては全國に卓立すべきものと存じ候。他に小なる金銅佛充法隆寺四十八體の内と稱する三十體ばかりのものも、鑄金家の八ヶ間敷申すものに候。素より奈良には比すべくも候はねど、一應は見逃すまじきものに候。

といつてゐる。節にとつては、何れもこれまでに、二度も三度も見たものであらう。東京へ來さへすれば、表慶館へは必らず行つたものらしい。さうして節の佛教藝術への傾倒は馬醉木の同人であつた平子鐸嶺氏あたりの感化があづかつて力があつたやうである。この人の「佛教藝術の研究」は世に知られた著作である。

第十章　書簡中にみえる歌並懸賞歌

一　戀　十　首

節の歌は長塚節歌集一卷に輯められ、明治三十三年から大正三年まで短歌千三百三十五首、長歌五十七首ある。これは右の節歌集或は節全集中の歌集篇をよむ人の皆知るところである。

然るにこゝに、之等の歌集に見えない歌がある。それは書簡中の歌であつて、人々に與へた消息のうちに散見するのである。就中、上總の人寺田憲氏あての書簡には非常に澤山の歌がある。自分の試作を友に見せて批評を乞ふたものらしく、概ね萩十首、百合十首、凧五首、猿十首といふ風になつてゐる。これは歌想を豐富にするために、一題にて五首又は十首を試みたのであらう。この方法は子規が俳句をさかんに作り、又句會などを催した時に試みたもので「一題十句」といふやうなことをいつたものである。

歌でもそれをやつた。子規の歌をみてもこの形式は中々に多い。修道のためには一つの興味あ

り又有益な方法であらう。

書簡中の歌は謂はゞ未定稿である。從つてこれを嚴格な意味で批評することは作者のために禮を失するであらう。私はそんなつもりは毛頭ない。けれどもその未完成の間にやはり節の特質はあらはれてゐる。取材にも、措辭にも自由自在な腕をもつてゐることがよく分る。このまゝで埋れ木とするには惜しい作品である。依つてその中から少しばかりこゝに拔萃して置きたい。

戀　　十　　首（萬葉にならふ）

岡のへの小松が下の萱原のさやに見なくに人し戀ひしも
むらさきの衣にするちふつき草のうつらふ人を我戀ひめやも
吾妹子はものなおもひそうつそ身の人に反くとも妹に反かめや
やわらかき妹が玉手をしき妙のまきてぬらくとわが血汐わく
吾妹子は事なあらせといはひべをいはひほりする神に祈るかも
天地の神の妹脊の戀力山に火をふき空に立つるかも
うつそ身のいのちは遂に死にぬとも骨し全けば我戀もゆる
吾妹子はさはな泣きそねたまのをのいのち死なずば又も逢はんかも

人にして戀おもふ心あらずせばけものにだにも如かずけんかも

沖つべにしき波立ちてこぐ船のせんすべ知らに戀ひわたるかも

萬葉に倣ふとあるが、いかにも言葉も句法もよく萬葉を眞似たものである。節はもとより萬葉を尊重し、萬葉調をまなんだ。けれども後には單に萬葉に依據するを避けて、本來一個の自己を打ち出さうとした。右に引く如きは萬葉模倣の試作に過ぎないのである。正述心緒あたりの模倣であらう。

二　萩と葡萄

自然の風物をよめるものを引かう。

萩　十　首

足引の山の萱原しけければ萱の中にも萩咲きいづも

ひまあらの垣にしけれる白萩のしらしらみえて夕月のぼる

白き萩は見らくしよろししかながら衣にすらくは赤き萩よし

萩の上に雀とまりて枝ゆれて花はらはらと石にこぼるゝ

竹やぶの草抑しわけて蔓草の蔓斷ちはなち百合の花折る
百合の花折らんと入りし竹やぶの藪蚊を多み手さし足刺す
久方の日入りとほさぬ竹むらの藪のくらきに百合の花あり
竹むらのやぶのしげりの草の中に百合やすやすも長く伸びたり
竹やぶにかくれし百合の二た花のその一花はやゝしほれたり
白百合の花を手折りて手にもてば花を重みか莖折れんとす
白百合のしほるゝ花の花びらの薄くしまればもの透きてみゆ
白百合の花をたをりて夕庭の莚をたゝく庭通りけり

かくの如き多數の歌を手紙に書き送る位であるから、當時いかに作歌に熱心であつたかゞ分る。

明治三十二三年頃である。

三　月　十　五　首

つぎにはやはり寺田憲氏に送つた歌であるが、月の歌を少々掲げる。

月　十　五　首

薄生ふる小徑を栗の畑に入れば栗の實落ちて月しづかなり

冴えわたり水もたるべき月の前をさはらぬ程の雲ぞ過ぎ行く

枝ながら今宵の月に供ふべく田舎の阿爺(をぢ)が柿うりにくる

明けき今宵の月夜おもしろし夜はあくれども月照りわたる

田の中の村の鷄しばなきて月まだのこる稲の穂の上に

ひとり見る高嶺の月はさもあらばあれ今年の月は家にして見る

單衣着て肌冷やかになりにけり月遂にかくれ薄風さわぐ

はらはらと廣葉ふれあふ音はして芋の畑に月さしのぼる

月ゆらゆら垣根を越えてのぼりけり軒につるせしもろこしの穂に

利根川の川原はるけみ桑植ゑしはるけき川原月すみのぼる

日にうとき木蔭にもゆる曼珠沙華ほのかに赤き墓原の月

中　秋　を

女郎花さては穂すゝき吾亦紅(われもこう)小瓶にさして今日の月見る

天雲に月はかくれて供へ物机の上に小さき灯ともる

蕎麥畑の月みにくればほろ／＼と落葉たゝく音かすかなり

去年のけふは病院の窓に歌よみき月なき空をなほぞ仰ぐと

之等の歌悉く村の自然にして、都會的のもの、人工的のもの、技巧的のもの、白粉臭いものは一首として見當らない。過日私は或る農業雜誌の記者の注文で「田園をうたへる詩歌」といふ文を書いたが、その時、この題に對して、節の歌位好適のものは古今東西の詩歌にないであらうと、つくづく考へたことであつた。ではじめは、色々の人の作品から、拔かうと思つたが、中途でそれはやめにして悉く節の歌を引用したことであつた。幾度もいふことであるが、節といふ人間は生れながらの田園詩人であつた。土の子であつたのである。

四　懸賞歌

節が雜誌の讀者文壇の懸賞歌に應募して一等に當選し圖書切符代價金五圓也を貰つたことが二度ばかりある。雜誌は新小說で、明治三十一年頃のことである。即ち彼がはじめて子規の名を知り、「歌よみに與ふる書」をよんで昂奮してゐた頃である。二十歲前後。

一度は佐々木信綱の選で、「五月幟」といふ題であつた。節の歌は

生れしはをのこなるらむあやめ草ふきしのきばに幟たてたり

當選をよろこんで、後は友人の父の家をたづね、大福餅を一圓買つて來てみんなに御馳走したさうである。

今一度は落合直文の選で「千鳥」といふ題であつた。節が一等當選。

昨日こそうしほあみしか大磯のいそふく風に千鳥なくなり

下手な古今調である。明治三十一年十二月の新小説にのつた。この時今の四高教授鴻巣盛廣氏が二等に當選してゐるのもおもしろい。

然るに、それから僅々二年にして、明治三十三年にはかの「東宮御西遊」(八首)「祝御着帶歌」(十一首)の如き佳作を成してをり、三十四年には「秋思」(十首)の如き秀作を得てゐる。彼の進境の速かなりしこと眞に驚くべきである。

いよ〳〵上京して、子規門に入つたのは三十三年の三月であつたことは、既述の通りである。なほ後に左千夫篇に於ても一言するであらう。

五　擬古二首

擬古二首

まくらがの古河の桃の樹ふゝめるをいまだ見ねどもわれ戀ひにけり

紅の下照り匂ふ桃の樹の立ちたり姿おもかげに見ゆ

節が友人横瀨夜雨氏の家へ遊びに行き、或る若い女の寫眞を見て、氣に入つてしまひ、しばらくそれを借りて持つてゐたことがある、この頃この歌を大きな桃色の大高檀紙へ書いて夜雨に送つて來たのであつた。紙のはしの方に「御笑ひくださるまじく候」とある。

或る時夜雨氏が節をその家に訪問すべく約してあつた。それをまちかねて書いて寄越した歌。

我庭の辛夷の雨にそほぬれて松雀も鳴けど待つに來鳴かず

靑桐のすぐなる幹に淚なすしづく流れて春雨ぞふる

うまいものである。因みに夜雨氏の村は大寶村といひ、節の村とは三里位しか離れてゐない。そんな近い所に住んでゐたのである。いな今も夜雨氏はそこに健在で、この頃は著述が屢出るやうである。丈夫さうに見えた節が早く死んで、ずつと前から身體の不自由な夜雨氏がまだ生きてゐる。夜雨氏は鬼怒川べりに、節の歌碑を建てることについて、先年來計畫中であると聞いた。光明寺境內に建てられた歌碑とは別個の計畫である。そのうち公表されるであらう。

第十一章　節と女性

一　節　と　女

節は酒をのまず、煙草をすはず、賭事をせず、女にたはむれず、まことに謹嚴よくその身を持した人間である。生涯妻をもたなかつたのみならず、どうも童貞であつたらしい。少くとも近親の人にはしかく信ぜられてをり、自らも

小生自身に婦女子を知らずと申候ても、人は決して信じ不申、時々他行致し候ことを、人知れず情慾を滿さむがためなりと人の申すことを聞き候て、驚き候ことも有之候。幸にして兩親は小生を信用いたし吳候云々（寺田憲氏への消息）

といつてゐるのであるから、その童貞はこれを信じてよいであらう。併し人間として左樣なことがあるものか、と疑はるれば疑へぬこともない。けれども節に於ては、どうも疑ひ難いものがある。これは藝術家として極めて稀有のことであらうとおもふ。

といつて、女が嫌ひであつたのではない。旅信などにも女のことは可成興味を以て、而も度々友に書き送つてをる。それは、また不思議な位に、知らぬ女に心をひかれてをるのである。

　莊内は美人多しと申せども、三日の旅に一人も美人らしきを見ず、きのふ象潟に來り、田舍臭き宿に、きさくなきれいな女中に會ひ申候。一つは疲れた足をやすめ、田圃の中に昔の島々を見てあるく爲、一日滯在致し候。今夜もこの女中が給仕に出る約束に候。十八かと聞いたら二十だと申し候。若々しい、あどけない子に候。生れは莊内と申し候。手首に灸のあとあるはリユウマチスのためなりと申し候。痛々しく候。（象潟の繪葉書。下妻町、三浦義晃氏宛）

×

　天滿屋は私の宿です。十八になる愛嬌のいゝ女中がゐます。彦山から少し下つた處の者ださうです。名は蔦江といひます。昨夜ねる時に蒲團をかけてくれましたが、お給仕には出ません。（英彦山より。下妻町、中島友彦氏宛）

×

　私の附添は小柄な色白の可愛い子です。生れは上州下仁田の在だといひます。白いのも道理です。私のベットの下でこの間小さな帶をくけました。若い女が傍で針をもつてゐるのはいゝ

ものです。夜は私のベットの側へ寢ます。寢顏も可愛いものです。（久保より江氏宛）

×

（前略）

青森には美人多しと申候。今日青森から非常に美人の嫁さんが乘り申候。弘前にもいゝ顏の女が見えるやうに候。（弘前より平福百穗氏宛）

×

開聞岳へ渡る船の甲板で天草の女の博多節に聞き惚れました。長崎へわたる甲板でも天草の女を多く見た。大隅の山の溫泉で思ひがけぬ美人を見た。（福岡より、齋藤茂吉氏宛）などの如く、擧げれば限りがない。それは全く事の意外に驚かされる位である。更に次のやうなのがある。

×

思ひがけなく京へ來て、思ひがけなく三日も續けて祇園で遊んだ。風流懺法の一力の大廣間で、三千歲、喜子福、松勇に會つた。三千歲は別嬪だ。昨夜は舞子二人に手をひかれて、祇園の夜ざくらを見た。あまり美しい舞子なので、人がぞろぞろ尾いて來た。何んぞいゝもの買つ

てお臭れやすといふから、頭大の風船を買つてやつた。二人はどつちも十二だ。明日は吉野へ行く。(京より、横瀨夜雨氏宛)

私のやうな無風流な人間には、一寸驚かれる光景である。あの荒凉たる節の生涯にも斯樣な華やかな、明るいページがあるのである。何人も意外とするに違ひない。けれども斯樣に女の好きであつた節が、遂に女を知らずに一生を逵つたといふことが信じられるのは、更に、一段の意外事であらねばならぬ。

併し眞相は、私にはわからない。恐らく節自身以外、何人にもわからぬことであらう。

二　一篇の哀史

節の生涯にとつて、語つてつきぬ一篇の哀史は、節と同郡結城郡の山王なる黑田氏令孃眞弓さんとの戀愛の破局である。この婦人とは節は相思の間であり、許婚の間であつた。併し喉頭結核の診斷をうくると共に、几帳面な節は自分の病氣が惡性であることを理由として、みづからその約束を破棄してしまつたのである。その後眞弓さんが何としても他へ嫁ぐことを背んぜず、一室に閉ぢこもり、思ひなやんでをると聞き、それなら、思ひ切つて結婚しやう。短い緣とあきらめ

ることが出來るならば……とその旨を、節は友人をとほして黑田家へ通じたのであるが、遂に結婚するに至らずして止んだのである。婦人の兄などの反對がその原因であつたらしい。

大正三年頃、節は上京して神田の病院に入院してゐたが、その女のひとは遂に家人を欺いて上京し、病院に節を訪ふた。然るにその日節はたま／＼外出中で、面會出來ず、女のひとは置手紙をして、寂しくまた村の方へ歸つて行つたのであつた。「鍼の如く」中に、節はそれを歎き悲しんで歌に詠んでゐる。

この間の消息並にその歌については、私は私の「土の人長塚節」の中にすこしばかり物語つて置いた。ゆゑにこゝにこれを繰り返さぬ。（同書「節と女性」の章參照）

三　緣　談

謹嚴ではあつたが、節といへども木石ではない。否な寧ろ、普通以上の有情多感の男子であつた。たゞ彼の異常な意力が感情を統制して誤ることなからしめただけである。

裕福な地方の農家の長男として年頃になると、もとより緣談はあつた。のみならず節はみづから友人等に托して嫁選びに苦心してゐる。岡麓氏あての手紙を讀むと、この間の消息が可成はつ

きりと了解せられるのである。

その中の一つ――

拜啓先夜は失禮仕り候、其折御願申上候件、先方の住所は本鄕五ノ四七にて、姓は井上と申す子爵に有之候間、いつも乍ら御手數は恐入り候へども逐一御精査なし被下度、姉なる人は千枝子と申し候て二十四、次は艶子、二十一、末は季子十八に候由、井上家は去三十五年まで下妻と申す所に居住致居り、右のうち、二人までこの地の小學校を卒業致し申候。この小學は小生も在學致し候事とて下妻には姻戚も有之、種々問ひ試み申し候處、先々評判惡からず、特に次女がよろしとの事、年齡も十二月生れの二十一故その點よりしても、第一によろしかるべき見込、それも下妻にての評判は五年前のことを申居候ことなれば悉く信を置く譯には參らず候。その邊のことを御含みの上御骨折下され度願上げ候云々。（明治四十年七月二十日附）

文中「下妻には姻戚も有之」とあるが、その一軒は例へば下妻町の醫者中岫友彦氏あたりであらう。中岫氏は私も去年ついでを以て一寸訪問した。節に可愛がられた中岫つや子さんの家である。主人友彦氏はすでに亡く、未亡人とつや子さんに會つたのであるが、その時の話にも、その井上子爵家の二番目の令孃を節は最も好んでゐたといふことであつた。どうしてそれが成功しな

かつたか、よく聞かずにしてしまつたが、何んでも姉さんが緣遠く、姉さんに先だつて妹が結婚することは出來ぬといふ理由で荏苒日を過ごしてゐる間に、節が病氣に罹つたといふやうな事情であつたらしい。

その節の好きであつた令孃は陸軍の軍人に嫁ぎ、その人は久しく宇都宮の師團とかに勤めてゐたといふやうな話を聞いたのであつた。

×

緣談依賴の手紙の二。

それは明治四十三年十二月十五日附にて岡麓氏に送つた依賴狀である、曰く

前略。

小生の旅は最短十日間に候へば其間に左の項是非共御取調べ被下度、年末にて恐入候へども何卒御願申上候。

茨城縣結城郡飯沼村大字崎房

秋葉三太夫次女　きし子

右本年春三輪田女學校を卒業致候者に有之候が、在校中の品行成績容貌等一切の事項、御手

の届き候だけ十分御問質し被下度願上候。此は素より新夫人としての資格調査に有之候。匆々。
然るにこれは駄目だつたとみえて、その翌年卽ち四十四年二月の手紙に次の如くある。
前略。
先日探索方御願申上候件、兩親は至極の贊成なれど、本人が田舍は嫌やと申すことの由にて不調に終り申候。本人の年の足らざることが、無分別ならしむる所にと存じ申候。匆々。
この緣談は、これ切りになつてしまつたものであらう。
この他にも斯樣な話は幾つかあつたことと想像すべきであらうが、今一々、夫れ等を穿鑿すべきたよりもない。又その必要もないであらう。
かくて、明治四十四年頃の、前記黑田眞弓さんとの緣談があり、しかもそれが破局に終つたのである。

四　病　中　雜　詠

その時の一つの出來事――それは入院中の節を婦人が上京して訪問したが會へずして歸つたことで、それは右に一言したが、病中雜詠其二五十一首は這間の消息を詠みあげたものである。

（病中雜詠其一については、節と病氣の章でこれを述べた）

病中雜詠その二のはしがきに右の出來事がのべられてある。歌と共にそれを左に引用する。歌としても病中雜詠は節の傑作に屬するものである。

○

明治四十四年十二月二十四日、ふと出でありくことありて此の日ばかり夜に入りて病室に歸り來れば、むすびし儘に派手なる袱紗の包み一つ電燈の下におかれたり。怪みて解きみれば我が爲に心づくしの品は出できにたるに、赤きインキもて書かれし手紙もそへられつ。四たびまで立ち入りがてに病院の門を行き過して、けふはじめて訪れきといふに思ひ設けぬことなれば待たんやうもなく、今は悔ゆれども及ばずなりぬ。されどわれ生れて三十三年、はじめて婦人の情味を解したるを覺えぬ。我は感謝の念に堪へず、その人一たびは我と手携ふべかりつるに惡性の病生じたれば我に引き止めん力もなく、斯くて離れたるものの合ふべき機會は永久に失はれはてぬ。其夜は更くるまで思ひの限り長き手紙に筆執りて生涯の願ひ今一たび訪れ給ひてんやと書きつゝけけるを、夜もすがら思は掻きみだれて、明くれば痛き頭を抑へつゝ、庭の寒き梢に目を放ちつゝ

四十雀なにさはいそぐこゝにある松が枝にはしばしだにゐよ

――われ生れて三十三年、初めて婦人の情味を知りぬ、といふ、いかに彼が感謝したかゞ解る

であらう、しかもその思ひは遂に達しなかつた。後に平福百穂氏に書をよせて

……はかなき一篇の情史、語つて未だ盡き不申候．小生は齋藤茂吉君の

ひとりのみ朝の飯はむあが命短かからむとおもひて飯食む

の絶唱を解するを得て、同君の前に小生の心理を打明け申度、今日手紙差出し申候。小生の身體をめぐる血液を溯つて數代の前には今もなほ櫟芒の間に尾を揺る雉子の羽ほどの色彩は有之候ひき。小生は今三十四年にしてつくぐ婦人に運なき生涯を歎じ申候。(下略)(明治四十五年一月廿日下谷根岸病院より)

といつてゐるのに見ても、その惱みと歎きは察せられる。生れて三十四といへば、明治四十五年卽ち大正元年（病中雜詠のできた翌年）である。

病中雜詠の歌はつゞく。

×

袱紗の地はつゆ草の花の色なるを、人は鬼怒川のみなかみに我とおなじ西岸に住めれば、想を故郷の秋に馳するに、なよなよとせるつゆ草の馬の腹七たび過ぐれども根は絶えずなど俚言に聞きけることも今はなかなかに懷しく

鬼怒川の篠に交れる鴨跖草は刈る人なしに老ゆといはずやも

鬼怒川の岸のつゆ草打ち浸りささやくことは我はきけども

鴨跖草を岸に復た見ば我が思ふ人のあたりゆ持てりとを見む

いまにして人はすべなしつゆ草の夕さく花を求むるが如

つゆ草の花を思へばうなかぶし我には見えしその人思ほゆ

からまるを否とたれかいふ鴨跖草の蔓だに絡め我はさびしゑ

病みてあればともしきものかつゆ草は馬がはめども枯れなくといふに

鴨跖草は露草ともいふ。朝に咲き、晝に萎む可憐なる野の花で、「つき草の衰へやすく思へかも」「朝咲き夕はけぬるつき草の」など、すでに萬葉の時代から歌はれてゐる。こゝでは、節は、このあはれに哀しい花をかりて、自己の胸奥の悲情をよんだのである。「いまにして人はすべなし」「つゆ草の花を思へばうなかぶし。我には見えしその人おもほゆ」――など、その遣る瀬ない心を想像すべきである。

×

既に五十日にも餘りぬれば我が病院生活も半ば過ぎたらむとおもふに、待つ人の迹に來られば徒ら

におもひを焦すに過ぎず、醫術の限りをつくして後は病はいかに成りゆくべきかと心もこゝろもとなくて、一月二十三日の夜いたく深くる程に筆とりて

わが病いえなばうれし癒えて去なばいづべの方にあが人を待たむ

註。斯樣な歌の眞味は、作者の如き境涯をへた者でなければ解りにくいであらうとおもふが、佳作である。

あまたたび空しく門は過ぎきとふ人はかへしぬ我が思止まず

註。女のひとは病院の門に入りかねて、前を幾度も通つたのであつた。遂に決心して、病院に入り、きけば、訪ぬる人は生憎に他出してゐなかつたのである。

癒えぬべきたどきも知らず病みたれば悲しと來しに我は逢はぬに

註。何んといふ不幸な日であつたことか。はる／＼たづね來た人に、逢へなかつたのである。

こゝにして來なば來なむと待つ人のこゝにも來ねばいつとてか見む

註。その後、待つ人は遂に來なかつた。それを悲しみ、歎いてよめる歌。女は家人の嚴重なる監視の下に置かれたのである。

霜ばしら庭に立てれば石踏みて來とさへいひてやりける人を

註。技巧巧緻を極め乍ら厭味を生ぜず。眞の老錬である。

いたづらに思ひたのめて人待つと氷は閉ぢて解けにけらずや

註。遂に來ぬ人を待ちつゝ、はかない月日はたつのであつた。

さきはひを人はまた獲よさもあらばあれ我が泣く心拭ひあへなくに

註。自分とはなれて行くことは、おもふにそのひとの幸ひであらう。それを願はぬのではない。併し自分のこの涙をなんとしやうぞ。

おほよそは心はかつていはなくに思ひたへねばいひにけるかも

註。思ひを內にひめて、自分は默つてゐやうと決心してゐるものを、また、堪へかねて、言に出てしまつた。この歌も佳作であるとおもふ。

×

以下歌だけを今すこしく拔きがきして置く。讀者諸君は自由にこれを鑑賞せられたい。

又庭にある山茶花のあはれに咲きのこれるに僅に懷をやるとて

打ち萎えわれにも似たる山茶花の凍れる花は見る人もなし

山茶花のわびしき花よ人われも生きの限りは思ひ歎かむ

山茶花は萎えていまは凍れども命なる間は豈散らめやも

尙さまざまにおもひつゞけて

我を思ふ母をおもへばいづべにかはぐくもるべき人さへおもほゆ

我病めば母は嘆きぬ我が母のなげきは人にありこすなゆめ

生命あらば見るよしもあらむしかすがに人やも母といはゞすべなし

一月二十六日、かの袱紗ゆくりなく手にとることありしに、絲卷の型の染めぬかれたるが今更に眼にうつれば

とこしへに解かむすべなし苧環のあまたはあれど手にもとれねば

をだまきといへばすずろに懷しき故鄕の庭なる耧斗菜のうへにも及びぬれば

あまたたび冬には逢へど枯れざりし庭の耧斗菜かれなくてあれな

此の日ひねもすに雨ふる。なにごとにも母のおもひ出でられて

我さへにこのふる雨のわびしきにいかにかいます母は一人して

いさゝかのゆがめる障子引き立ててなに見ておはす母が目にみゆ

張り換へむ障子もはらず來にければくらくぞあらむ母は目よわきに

こゝにしてすすびし障子懷へれば母よと我は喚ぶべくなりぬ

作者は非常なる母思ひである。これは父が政治家なりし家庭の關係上、家のことは萬事母の切りもりする所であり、從つて母との交渉、親しみなどがおのづから強く、深くなつたためであらう。それで、節は實に屢々母を描き、母を詠んでをる。そして、それが何れも惻々として人の胸に迫る底の傑作佳什をなしてをるのである。

それから、こゝの歌にもある如く、節は山茶花を屢々詠んでゐる。諸君も知らるゝ如く、山茶花は寒中に花咲き、小さけれど淨く、高い花である。いかにも清澄であり、引きしまつてゐる。その姿を私は私の想像する「長塚節」といふ一個の人格にひき較べる。そしてそこに、いかにも調和した人と花との統一を發見するのである。山茶色の歌は病中雜詠にはまだ十數首ある。「鍼の如く」の中にもある。

或る時横瀨夜雨氏に送つた手紙には次の如く書いてある。これは山茶花の歌を味ふ上に參考になるとおもふから、序に附け加へて置く。

近頃つくづく考へ申候。小生がもし大兒なりしならば、女子文壇の才媛は、必ず毎日の如く慰藉しくるゝならん。然しながら、櫟の枯木に西風の吹きわたるが如き索莫たる小生の境涯には、婦人の情味は求めて得べからず、病院の庭に、日に疎き山茶花の二三輪凍りて殘れるを、

朝毎に必ず霜を踏んで見に行くことを怠り不申候。山茶花は池のあなたに、人の目にはとまらず、葉がくれに萎んで淋しく候。これを譬ふるに、女子文壇の才媛は溫室の蘭科植物の花なるべきか。しかも小生にはこの花をみるの機會遂に來るべからず、山茶花に心をやるのみに候云々。

○

病中雜詠その二はまだ若干の歌をのこしてゐる。併し以上を以て大體抄し了へたとおもふ。

第十二章　節雜話

一　母を叱る

農家の常として、鷄のうむ卵をためて置き、時々村に買ひに來る卵屋に賣るのである。或る時母が澤山の卵のなかへ、一つ二つすこし腐敗しかけた位の卵を、混入して、賣らうとした。それを節が目つけて

「お母さん、その卵は駄目に成つてゐるのではありませんか」

「いゝえ、ほんの少し、わるくなつてゐるだけだよ」

「いけませんく、駄目になつたとわるくなつたとどこが違ひます」

卵屋のゐる前をも構はず、母を叱つたといふ。これは或る人の直話であるが、節の眞ッ正直な面目があらはれてゐて面白いとおもふ。母の行爲も村の人として有り勝のことであるが、節の嚴格はそれを赦さなかつたのである。

父の死後、父ののこした負債の言ひわけに、債權者の家を言譯し、又わびて歩いたが、その言葉があまりに几帳面で、眞面目なので、債權者の方で却て恐縮してしまつたといふ。

節のぐるりの人は大抵、節から叱られたらしい。それは、いかにも左樣であらう。節のやうな嚴格な者の眼から見たら、大凡その人はへまばかりしてゐる。又不正直な、ずるいことばかりしてゐるに違ひない。

節はかつてうそを吐かなかつた。

二　先生などとは以ての外

節が生來謙讓な人で、かつて人に驕る風を見なかつたことは、今や概ね知られてゐるが、かつて友人胡桃澤勘内氏に送つた手紙に曰く

乍末筆兎角小生を知らぬ人は、小生を先生などと申來り候て、いかにも恐縮に堪へざる次第、選者などにならぬうちは、一人も手紙を送りこすものもなく、素より先生など呼ばれ候こと無之候。此點のみにても選者は決して小生に於て喜ばしきことには無之候。年齡、學問、技術等考へ合せ候ては、大兄より先生などと申され候て快きことは決して無之、小生は左千夫君に對

しても先生とは申さず、左千夫君に於ても小生を友人として目し居候。小生は時々如此年齢に相違ある人に對して對等の交際は憚りある樣思ひ候へども、今更改つて申出ることもなし難く、心中に畏敬いたし候のみ。小生は如此伊藤君（左千夫）に對して對等の交際をなしながら、年齢の相違少なき大兄より先生とよばれ候ては、心に耻ぢざらむと欲するも能はず候。小生の今日は大兄に於て一日の長は有之べく候。二年三年の後に大兄の技倆小生の上にいで候時は如何に候べき。一日の長あるを以て先生と稱すべくば窮り候時は何と申候べき。過分の尊稱は徒に小生を苦しむるに外ならず候。望月君も先生など申來候。以ての外に候。大兄より宜しく御傳へ下され度願上候。頓首。

今の世の自稱先生の大歌人どもは、此手紙の前に赤面しないであらうか。一事は萬事。この心節をして大成せしめたのに外ならぬ。

又節の日頃愛してゐた中晌つや子さといふ人に送つた手紙の中には

私のやうな無學なものには、弟子といふやうなものは一人もありません云々

とある。これは節の令弟鰺四郎氏が日露戰爭に出征した時、節がつや子さんへのハガキの末に私の弟も近く出征しますと知らせてやつたところ、それに對してつや子さんから

弟子様も御出征のよしにて云々

といつて來た。つや子さんのつもりは「弟子」とかいたのは「おとうとご」であつたが、節はこれを「でし」とよんで、右の如く、私のやうな無學なものには弟子は一人もありませんと返してやつたのである。これはあとで聞より氷解したのであるが、「弟御」とかくべきところを「弟子」と不注意にも書いたため、つや子さんは几帳面な節からいたく、たしなめられたのである。と同時に、自分のやうな無學な者には弟子などは一人もないといふ節の言葉から、彼の人格を推して考へることも出來るといふ、一つのゆかしい挿話である。

節の謙遜はかくの如くであつた。從つて彼は世の浮薄な宣傳者流をいたく忌み嫌つた。平福百穗氏は節の友人であるが、節かつて曰く、百穗が名を天下にあげて、多くの門弟を養ひ、宏壯の邸宅に住むやうになつたら、警戒せねばならぬ。繪が下手になるからと。これは百穗氏に於て固より何も心配するところは要らぬ。けれども節の友情と謙遜とはこの短かい言葉のうちにもはつきりと現はれてゐるではないか。

三　坊さんのやうな、けだかい人

節がかつて東北旅行の途次、福島市にある某紡績工場を參觀したことがある。これは有名な工場でそれまでしば〳〵高貴の人達も見えたことがある。夏のことで、節は洗ひされの浴衣を着、粗末な帶をちよこなんとしめて、至つて樺はぬざんざいな服裝であつた。大勢の女工達が立働らいてゐる機械の間を、ずうと、一巡して、彼等の仕事を見ながら、工場を出てしまつた。

後で、工女達のいひ草が面白い。

「今の人、なんだか、坊さんのやうで、氣高い人ね」

「ほんとに氣高い人だねえ」

坊さんのやうな氣高い人!

これが無智な工女たちに與へた節の第一印象である。工女のやうな概ね教養の乏しい人間に「氣高い」といふ印象を與へることは決して容易でない。

節に於ては、その人格の光が、おのづから、そこに彼を引き上げてゐた。これは當時、節を案內した人の直話である。

四　看守を志願

節は或る時、利根川べりの或村に起つた殺人事件を材料にして小說を描かうと思つた。犯人の一人はすでに刑務所に入つてゐた。その犯人の自白がいたく彼の心を動かしたのである。そこで彼はみづから看守となつて、犯人の生活並に刑務所の内部を見んと欲し、下妻刑務所に看守を志願したとか、せんと決心したとかいふ話であつた。

この話は又聞きであるから眞僞のほどは分らない。さう思ひ立つただけで實際志願するには至らなかつたのか、又病氣等のために中途でやめたのか、私はそれを審かにしない。けれどもいかにも節に有りさうな挿話のやうに、私には思はれるのである。

小說「土」の中の人物や事件など、すべて實在したものであり、一つとして噓や空想や作り話はない。

眞實でなくては、節は一木一草の微と雖も、筆に上せなかつた。そこに彼の永遠の力がある。村の若者たちの間に行はれる夜ばひの風習を知らうとして、みづから村の者に扮して、娘のところへ遊びに行き、叔父か誰かに發見せられたことがあるといふ話もきいたが、これは少々作り話のやうだ。恐らくうそであらう。併し節の話として聞けば、まんざら根も葉もないことで無いやうにひゞく。そこが彼の値打である。

眞實にまさつて人を擽つものはない。節は眞實そのもののやうな人であつた。嘘と巫山戯た眞似を蛇蝎のやうに忌み嫌つた。

五　竹林栽培

長塚家の裏の畑つゞきに一帶の竹林がある。これは節のつくつたもので、長塚家にとつては大きな一つの資產であると聞いた。

これをつくるにいかに彼が熱心であつたかは、彼の書簡中にあらはれてゐる。

×

竹林のことにつきては、茨城縣の勸業課などにても無頓着に驚き申候。縣費の林業の項にも竹林の保護奬勵は無之候。京都は全國一の產地なれど、決して恐るゝに足らず、鬼怒川の沿岸の如き絕好の土地はあまり數多くは有之間敷と存候云々。（明治四十五年四月、京都大學病院より、渡邊源五郞氏あて）

×

（前略）尙々美濃國なる坪井竹林翁より、春中本縣へ出張の旨通知有之候ひしが、果して參ら

れ候や其節は私博多にありて出縣することを得ず候ひしが、私の竹林もやうやく緒につき來り申候。今年にて六年目、しかも六町五反歩を算するに、今年まで家の負擔は僅に二百五十圓を越え不申候。下略。（大正二年六月一日、國生より、渡邊源五郎氏宛）

×

坪井竹林翁――竹林翁とは節のしやれにて、實の名は伊助といふ、岐阜の在の人にて、竹林栽培の老錬家であつた。その名を聞き、節はわざ／＼美濃まで出向いて、その敎へをきいた。竹林をはじめたのは明治四十四年、彼が三十三歳の年からである。（喉頭の痛みだした年）なほ竹林に關する書簡を引用する。

×

（前略）

小生は土によりて衣食すべく、竹林は小生が唯一の加護者たるべく候。現下筍の生長時期、日として竹林を巡視せざることなく、近く、形成せらるべき林相を胸裏に描いて獨り自ら樂しみ申候。（明治四十四年七月五日自宅より岡麓氏宛）

「日として竹林を巡視せざることなく――」これで大凡そはわかつてゐる。節の事を録す、熱心

常に斯くの如くである。

×

（前略）

竹も三度の風にて無殘の目に逢ひ申候。竹は小生死活の分岐點にたつて栽培しつゝある處、日としてその土を見ざること無之候。筍の枝漸く開き候處へぢつとして雨蛙の乘つて居るなど、まだ畫工も知らざるにあらずやと思はれ候。夕暮近くなればおどろくべき多量の水を吸收する若竹は、枝の先から玲瓏として透徹せる水珠を止むことなく蓄へては且つ落し申候。雨蛙は冷たき水滴の頭上におつる時、比較的大なる目をぐりぐりと動かし申候。細き若竹の幹を抱いてぢつとして居ることも有之候云々。（明治四十四年七月三十一日、自宅より岡麓氏宛）

かくの如く熱心であつた。したがつて旅先から母堂へあてた書簡などには、竹林についての注意がしばしば有る。

この頃雜誌アラヽギを見るに、安塚千森氏の節追懷談がある。（昭和四年一月號） 中に曰く

私が知つてからも、君は堆肥の研究や、竹林栽培に熱中して岐阜の方まで竹の栽培研究に行つたこともある。當時君はよく私達に會ふと、蕎麥の草藁が堆肥によいとか蠶豆の草藁が最上だ

とかいふのを聞いたことであつた。君が蠶豆をつくるのは全く堆肥のためであつて豆をとる目的ではなかつたらしい。花が咲いて青い莢豆が出來る頃になると、畑から根こぎにして了つてどんどん堆肥とした。この研究と殆んど同時に着手したやうに記憶してゐるが竹林栽培には皆この堆肥を惜氣もなくやつたのである。何町歩だか記憶がないが兎に角町を以て算へられる廣い……尤も皆同一年に栽培したのではなく、逐年に行つたのであるが……竹藪（村人の語に從ふ）の中へ惜氣もなく捨てた（これも村人の語）のである。而もその竹林は農家の人の惜しがる普通の畑地をつぶして、蔬菜でも作るやうに竹の根を植ゑたものである。村人の蔭口には、「若旦那は氣狂ひだ」とまで言つたさうだ。麥畑になる立派な畑をつぶし、水田や畑へつかふ彼等にすれば尊とい肥料をドシ〳〵所謂竹藪へ捨てゝゐるのだもの、さういふのも無理はなかつた。竹林栽培に着手して二年目だと記憶してゐるが、君を訪ふて君の案内で竹林を見せて貰つた時には、拇指ほどの竹が隙間もない程密生してゐた。そして尙他の畑には竹の根が規則正しく列をなして植ゑられて、それから細い篠竹がすい〳〵出て居つた。その年植ゑたのださうな。長塚さんは其時この竹林が何年たつとどれだけ年に伐採が出來て、一町歩から何程の收入があるなどと大ぶ詳しい說明などをせられた。迂濶な私にはそれ等の數字の記憶がないのが殘念であ

る。

縣の一隅に投げたこの栽培事業が有利なこととして數年にして縣が竹林栽培の奬勵をしたのも私がまだ下妻に居つた時のことであつた。右の事實に見ても、君は何事も徹底的にやらねば氣のすまぬ所が見える。大正十三年の晩秋に五味保義君等とこの村を訪ねた時は殆んど村中が竹林のやうな感じがする程太い竹が繁茂してゐたことであつた。それが皆長塚さんの竹林である。さやさやと風になびく竹ずれの音は何ともいへぬ感慨を催ふさしめたことであつに云々。節は幾多すくなからず參考になるとおもふ。竹ばかりではない。その他農事の改良等について節は幾多の試みを實行して、村のためを圖らうとしたのである。

竹林の外、彼は又柿をつくり、梅をつくつてゐた。一般の畑のものの栽培などは勿論のことである。さうして遂に木炭の燒き方の研究をしたり、堆肥の研究に進み、補習學校をはじめて、村の青年を指導するに至つた。

しまひには岡田村の青年會の會長に擧げられた。堆肥は模範肥料として縣から表彰せられ、青年會も彼が會長となつてからめき〳〵と好成績をあげ、たしか一二度郡長から表彰せられたのであつた。

この百姓に熱心な心が彼をして「土」や「芋掘り」を描かしめ、その他多くの短篇小品をかかしめ、又長塚節歌集一卷を生ましめる原因となつた。

まだある――。

今は僕は毎日自分が經營してゐる竹林を一度づゝ廻つてみなければ氣がすまない。筍がぐんぐんと明地へ出て來るのを見るのは愉快である。まだ從來の竹林の中へは出はじまらぬ。今年は少し後れた樣だがそれも十日の內だらう。麥の取入れのためには此處降らない方がいゝが、竹のためにはうんと降つて貰はねばうまく無い。何といづても僕は自己獨特の經營法を案內して、人の一年に出來るものを三年もかゝつてやつてゐる。うんぬん。

これは年月ははつきりしないが、伊藤左千夫への手紙である。なほこの中に

僕は數年前から梅を四反步程植ゑて置く。これはその收入だけを一家の經濟とは別にして置いて、それで村の貧乏な小作人のために色々有利に消費したいと思つてゐる。（中略）百戶の村で一年に百五十圓か二百圓もあればそれがほとんど凡ての者を霑すことが出來る。實に容易なことであり乍ら、富者は決してそんなことをしない。僕はこんな小さな未來を空想しつゝ梅の枝を摘む、幾分の愉快を感ずる云々。

梅を植ゑてまづしき村人のために施設せんとする。卽ち彼のなさんとする所は、口にこそいはね、立派に、今の世の所謂社會政策の實行である。甚だ面白いとおもふ。

節は農村經營や社會政策を、學問的に、大げさに說くことをしないで、ひとり默々として竹を植ゑ、畑をひらいた。これはおのづから今日の社會政策の理想にかなへるもので、此點凡俗の最も及び難いところである。空論を鬪はすのは易い。節の如く、實行するのは決して容易のことではないのである。

六　節の兩親及同胞

節の母方の祖母である渡邊惠以子刀自は大正四年十一月御卽位の大禮ありし時、八十二歲で、天杯並に酒肴料を賜はつた。母堂はこの刀自の第二女で、今年多分七十歲になられたかとおもふ。併し頗壯健で、主人源次郞氏歿後の複雜なる家政を處理し、下女下男を使用して節なき後の農業を經營してをる。

節の父君源次郞氏は長塚家にとりては養子で（母堂も養女、所謂もろ養子）もと筑波郡上菅間村靑木新平次といふ人の子である。夙に縣會議員に擧げられ、後にはその議長となり、縣農會の

名譽會員に推されなどして、時には村にあるよりも水戸にある日が多かつた。從つて一家の整理、子供の教育等はすべて母堂のつかさどるところであつた。

兩親の間に三男二女あり、節はその長男である。次男は順次郎氏、工科大學採鑛冶金科出身の工學士、かつて小布施氏の養子となつたが、今は長塚姓に復してゐる。今年五十歳とか聞いた。東京神田旅籠町に長塚式安全金庫の店舗をもち、盛んに經營してをられる。

順次郎氏のつぎは長女とし子、眞壁郡河間村の醫奥田慶之助氏へ嫁いでをる。

三男は藤四郎氏、陸軍々人。日露戰爭にも從軍し、步兵少佐にまで陞進したが、先年病死した。

二女はな子は栃木縣足利町金井榮一郎氏の妻である。

母方は代々長命の由である。恐らく母堂も惠以子刀自の如く長命せらるゝであらう。

第十三章　節の墓に詣づる歌

昭和二年三月十九日茨城縣結城郡鎌倒村に招かれて講演に赴く。講演の了りしは午後四時頃なりけむ。俄かに思ひたち中久喜村長の案内にてかれて念ぜし節の墓參をはたさんと岡田村に自働車を驅る。岡田村は鬼怒川を隔てて鎌倒村の對岸なり。

國つべのみ墓をろがむとこのゆふべ霜どけ道をなづみわが來し

霜どけ道にゆきなづみつゝ漸くにして村に入る。竹やぶのかげに灯のともれる百姓の家々あり。

村の家の障子明るく灯をともし藪かげ寒きゆふべ來にけり

二三度たづねてやうやく國生なる節の家に着く。古けれど立派なる構へなり。母堂土間にて火を焚きてあり、來意をのべて入り、しばらく語る。

この家を心いちづに支へ來てついにをみなの老いたまひけり

書院の庭にたつ。夕闇あたりをこめて霜凝るひとときあり。

ゆふ闇に君が書院は戸を鎖してくわりんの裸木いやさらに寒き
思ひなしか書院の庭の松の葉もいたくさびしく昏れにけるかも

家のうしろに森あり、竹林のつゞけるがみゆ

家裏の森のたゝずまひに思ひいたり眼をやりし時星流れたり

下男に案内せられて長塚家の墓地にいたる。家より十丁もはなれをらんか。畑の間の小高き丘なり。冬枯れの草朧々として、寒風吹きわたる。

星空の光つめたしこゝにねむる人のいのちを思ひて佇てば
底冷ゆる枯生の風やこの岡に大きみいのちのねむりしづけし
うつゝなる吾と念へや天遠きおもかげの人とこゝに相會ふ
こゝに來ておもひはゆくに現そ身の醉しきかねば竟にかなしも

父君源次郎氏、令弟盤四郎氏の墓に並びて、師の墓標立てり。石は未だ建てられず。

ちゝのみも弟の君も傍にありあはれにおもひたゞにぬかづく

吹き曝(さ)れのみ墓の土のかたくして立つる線香を幾本折りし

掌(たなそこ)のマチの灯かげに奥津城の古りし墓標の文字を讀みけり

暗き風に線香のもゆる赤き秀(ほ)の赤きを見つゝもどり來れり

歸途鬼怒川をわたりつゝ節の村をかへりみて

竹やぶに荒畑つゞく起伏(おきふし)のさびしき里に君は生れし

しもふさのゆふきの里に冬の日暮れ霜さへ凝りて君のあたり見ず

第十四章　菩提樹下の歌碑

一　常陸下妻町

茨城縣眞壁郡（常陸國）下妻町に光明寺といふ寺があり、その庭に菩提樹の古木があつて、去年その下に節の歌碑が建てられた。昨年の夏日本大學創造日本社の講演會が岩瀬町及びその近くの村々で開かれた時、私も出張したので、その歸途この寺を訪ね、住職の三浦義晃氏にもお會ひし、歌碑を見、又節の親戚にあたる中崎友彦氏の家を訪問したりなぞして、一日を下妻の町にすごして歸つたことであつた。

一體、この下妻といふ町は節の郷里岡田村からは約一里半の近くであり、節はこの町の小學校を卒業した。親類の家に下宿して、そこから通學した由である。小學校の圖書室から、發見されたといふ、節が高等科三年生の時の書き方を、今その學校に教鞭をとつてゐる福田政信氏が私に見せてくれた。

節の家と光明寺とはやり縁つゞきであり、節は屢遊びに來て泊つたりした。旅行の時も、行きかへりに必らずこの寺に立ち寄つて行くのを例とした。今の住職三浦氏とは、恰も同じ年輩で、子供の時分からの友人であるさうな。

二　一株の菩提樹

菩提樹は一株であるが、ずゐぶん古木らしく、鬱蒼として茂つてゐる。親鸞上人の御手植とつたへられてゐる。常陸の國は稻田の西念寺など、親鸞上人には縁の深い國であり、下妻にも來たことがあるから、この御手植のことも單なる傳統ではなくて、眞實であらう。節は親鸞上人を追慕しつゝ、この菩提樹を歌によんだ。三十六年のことで、七首ある。即ち

菩提樹

常陸國下妻に古刹あり、光明寺といふ。門外に一株の菩提樹あり、傳へいふ宗祖親鸞の手植せしところと。蓋し稀に見るところの老木なり、院主余に徴するに菩提樹の歌を以てす、即ち作れる歌七首

天竺の國にありといふ菩提樹ををつゝにみれば佛おもほゆ

よき人のその掌（たなそこ）にうけのまばあまくぞあらむ菩提樹の露

世の中をあらみこちたみ歎く人にふりかゝるらむ菩提樹の花

菩提樹のむくさく花の香をかげばかたくな人もなごむべらなり

菩提樹の小枝が諸葉のさや〳〵に鳴るをしきかば罪も消ぬべし

こゝにして見るが珍しき菩提樹の木根たち古りぬ幾代へぬらむ

うつそみの人の爲にと菩提樹をこゝに植ゑけむ人のたふとさ

歌碑に彫られたのは最後の「うつそみの」の歌で、節の原文字を寫眞にうつし、七十倍とかに引きのばしたものである。元々、この一篇の歌は節が、光明寺先住の小さな手帳に、請はるゝままに走り書に書いたもので、二號活字位の細字である。光明寺の先住は和歌俳句を好み、つねに一冊の手帳を備へ持ち、自分の俳句などを認め置くと共に、節が遊びに來ると、その手帳を出して、よく歌を書かせたものださうである。私は右の手帳を見せて貰つた。日本紙の大福帳式につくつた小さな手帳である。まだ外にも節の書きつけた手帳があつた筈であるが、どうしたものか遂に見つからない、と三浦氏は殘念さうに話された。

石に彫られるとは思はなかつたであらうが、併し右の一首が、今は立派に丈餘の仙臺石に彫り

つけられ、菩提樹の木かげに建てられてゐる。口繪の寫眞で見らるゝ如く、なかなか見事である。筆蹟もひきのばしたとは思はれぬやうに、よく出來てゐる。

母堂たか刀自、令弟順次郎氏、今この三浦氏、それから町内の中紬靜子、藤倉新吉共他諸氏の名が石の裏面にきざまれてある。碑の前に佇つてみると、節が少年時代をすごした小學校がすぐ眼の前に見える。

寺の庭にはまだ大きな銀杏がある。口繪の節の旅裝の寫眞は、越後佐渡の旅からの歸途、この寺に立ち寄つた時、この大銀杏を背にしてうつしたものである。手にさげてゐるのは土産にもつて來た獅子葦である。

三　三浦氏、中紬家

私は光明寺で、夕方まで、いろ〳〵と三浦氏と語つた。節の日常などについてもまだ聞かぬ逸話など聞いた。

寺を辭して、町の醫家中紬氏をたづね、未亡人靜子刀自、それから節が度々手紙をかいてしんせつに敎へてゐる、この家の娘さんで、今は若夫人であるつや子さんにお會ひした。福田氏が案

内してくれたのである。

今は亡き主人友彦氏、靜子刀自、つや子夫人などの、それ〲にあてた節の手紙が、この家には澤山にのこされてある。中には節の人を知るにいかにも適當な手紙もある。いろ〱と節の少年時代のことなども刀自から聞いた。私は感慨にたへぬ思ひがした。凡そこれ等のことはまたいつか書き記るすであらう。

なほ、この日、こゝから三里ばかりの大穗村から倉持君といふ青年が、私に會ひに來てくれた。節崇拜の青年である。

歌碑については、この光明寺の碑の建設にあづからなかつた人々の間に、更に、節とは最も關係の深い鬼怒川のほとりに一基を建てたいといふ希望で、計畫中のよしである。

因みに、下妻町は東北線小山乘換、水戸線に入り、たしか五つ目の驛下館町にて再びのりかへ、三十分位の所である。途中に大寶といふところがある。横瀨夜雨氏の村である。常盤線から行けば取手町で乘り換へて行く。餘言ながら、ついでに、一言して置く。

以上で、節篇を終る。「土」についての研究をしかけてゐるが、とうとう本書には發表することが出來ない。自分では少々殘念である。今は他日を期する。

左千夫篇

第一章　左千夫の追憶

一　「隣の嫁」が縁

その頃私は鹿児島高等學校の寄宿舍にゐた。明治四十一年であつたとおもふ。私が高等學校に入學した第二年目である。

舍生は夕食後を大抵町や磯へ散歩に出掛けた。或日の夕方、その散歩からのかへりに、門衞のところの書狀箱を見ると、筆蹟におぼえのない一通の封書が私を待つてゐた。裏をかへして見ると思ひがけなく、それは東京の伊藤左千夫氏からの手紙であつた。それは、私がその少し前にホトヽギスで左千夫の「隣の嫁」を讀み、感動の餘り、一つの感想を書き送つてあつたので、今その返事が來たのである。

その時分の私は將來創作家として立たんとする野心に燃えてゐた。月々の文藝雜誌など待ちかねて貪り讀み、興に任せて批評や感想を書いた。そしてそれを時に、作者の所へ書き送つたものの

であつた。それは別に深い意味がある譯ではなく、單に自分を感動せしめた作者への謝意の心持に過ぎなかつた。譬へば秀れた音樂や演技のすんだ後で思はず知らず拍手喝采するやうな心持であつた。

斯んな手紙を出して、作者から返事を貰つたことは私には數度の經驗がある。即ち左千夫氏から「隣の嫁」について貰つたのや、「煤煙」について森田草平氏から貰つた返事など。

その晩私はうれしくて仕方がなかつた。東京の大家からしたしく手紙を貰ふなどいふことは全く豫期しない事柄だつたからである。で、私はうれしさの餘り、直ぐに返事を書いた。そして外出の門限がすぎてから、書いた手紙を懷中にしてそつと耳門を出で、涼い上の石橋（寄宿舍は城跡にあり、校外に出るには橋を渡らねばならなかつた）を通つて、街路のポストに投函に出掛けたことをいまだにはつきり記憶してゐる。

「隣の嫁」は私のよんだ氏の小說で恐らく最初のものであつた。そして描寫の技巧の上には慊らぬ所を發見しながらも猶其力强い眞摯の筆に知らず識らず引き入れられて行くのであつた。いささか說明にすぎはしないかと思ひながらも猶その素朴と眞情とには動かされざるを得なかつた。その田園の景情や農夫の生活などが田舍の農家に育つた私の胸に何の支障もなくはいつて來るた

めであつたらうと思はれるが、私は非常な感動を以て讀み返すのであつた。
「隣の嫁」の續篇として「春の潮」が間もなく出た、この時も同じやうな心持で讀んだ。九十九里の波の音や、朧ろ夜に女が洗濯しつゝ男をまつところなどうまく描かれてゐた。

その後、私は氏の小說は大抵よんだ。多くはホトヽギスに出たが中央公論に出た「老獸醫」なども面白かつた。東京日日新聞に長篇「分家」の出たのはずつと後のことであつた。氏の小說は決して才氣煥發とか、描寫の生彩とかの理由で秀れたものではなかつた。その上ではむしろ不器用な、冗漫の藝術であつた。併しその愚直な間に一剋な情熱が力を以て人に迫つてゐた。こつこつと描き上げた努力の底からパッショネートな人間の生の力が頭を擡げて來た。そこに偉大な鈍な力があつた。其後、私は度々手紙を出した。氏からもその都度返事を貰つた。今それがあると面白いのであるが、ずつと後年のは有るに、當時のは一つも見當らない。

二　級友憲吉と卓造

鹿兒島の甲突川畔の素人下宿に當時私と同級であつた中村憲吉君が、醫科の堀内卓造君と同宿してゐた。或日私は兩君をたづね、色々話の末に、同君等がアラヽギの社友である關係から、左

千夫氏の話をきゝ、又氏の寫眞を見せて貰つた。そして小說をよんで、かねて心の中で想像してゐた左千夫氏を初めて、寫眞ではあるが、見たのであつた。頑丈な、骨格の逞しい、田舍の百姓のやうな格好の人であつた。

高等學校の學生間にも新らしい歌の會があり私も時々出席したが、中村君等は出席せず、歌の話を交換する機會もなかつたので、私はその日まで中村君と堀内君とがアラヽギの社友であることを知らなかつたのである。

その時分から私は日本新聞の左千夫の選歌を氣をつけて見るやうに成つた。齋藤茂吉氏の歌が一ばん多く載つた。一々左千夫の評が加へられてあつた。

堀内君と中村憲吉君はその後、今度は町はづれの、磯に近い岡の上の或る別莊のやうな家に引越した。そこへ私は二三度たづねたことがある。鹿兒島灣を脚下に見下す景色のよい岡の上の家で、庭園にはいろんな草花が美しく咲いてゐた。

當時私は「明星」の社友であつた。へんな氣取つた歌をつくつてひとりで得意になつてゐた。けれども當時は明星派の歌が大に天下に行はれ、アラヽギの如きは有るかなきかの有樣だつたので、私は心中ひそかに中村君や堀内君の歌を馬鹿にしてゐた。で、歌の話するよりも學校の日課

の話や、でなければ小說の話などの方が多かつた。堀内君は脚本を書き、一度土曜劇場試演用の脚本に採用せられたことがあつた。其後京都の醫科に入學したが卒業しないで死んでしまつた。

三　上　京

其翌年の夏、私は土佐へ歸省することを止めて上京した。その時の私は只東京が戀しかつた。馬車や電車の往き交ふ街路も、煤煙のうづまく大空も、大都會の騷音も、工場の機械の響きも、劇場町の雜沓も、夜店の賑ひもみな私の東京にあこがれる心への刺戟であつた。私は新聞配達でもする意氣込で、東京に行く決心をした。併しその心の底には先輩をたづねたい望みや高名な作家に會ひたい願ひが可成強く動いてゐた。

六月の試驗のすんだ翌日、私は重いバナナの籠を提げて鹿兒島の棧橋にゐる神戸行きの××丸の甲板に立つてゐた。二三の友が棧橋まで送つてくれた。

南方の空を仰ぐと、大隅の山の上にクリーム色の美しい雲がふわりと浮んでゐた。灣の波は夏の太陽の下にギラギラと輝いてゐた。

四　左千夫を訪ふ

上京後、私は本郷弓町の下宿に落ち着いて、神田の獨逸協會の夏期講習に通つた。山口小太郎氏のルードウヰッヒの「山守」の講義が面白くて、暑いのを我慢して毎日通つたものだ。

本所茅場町の左千夫氏へ手紙を出して訪問の都合を問ひ合せると、いつでもよろしいが、出來れば明日午後に來てくれといふ返事であつた。

翌日その時刻に出掛けて行つた。

その時分は本所行の電車は未だ錦絲町までしか開通してゐなかつた。錦絲町と江東橋との間は、今日のやうな廣いきれいな街路ではなく、埃りの多い汚い町を荷車や人力車がいつぱいに往來してゐた。

私は錦絲町で電車を下りて歩いた。此時はじめて知つた壽座の前に森三之助とかいた幟がハタハタ風に鳴つてゐた。

江東橋を渡つてから、ヂリ／＼と脊柱のいたくなる夏の日光を浴びて、左千夫氏の家を尋ね廻つた。

たづねる家は容易に見つからなかつた。茅場町三丁目といふのは巡査も知らなかつた。通りがかりの商人體の男に聞くと、茅場町つたら日本橋でせうといひすてゝ、行つてしまつた。
小半時間もたづねてからやつと其家がわかり、門の前に立つてから、ふと考へると、それは先刻幾度も行つたり來たりした街路であつた。それ程分り惡い場末の家であつた。
通された部室は小さい爐を切つてある、靜かな、八疊位の座敷であつた。爐には茶釜の湯がちん〳〵煮沸つてゐた。
ぢきに主人が座敷に見えた。粗末な木綿衣を、胸をはだけるやうに、無雜作に着て、度の強い眼鏡をかけてゐられた。いかにも健康らしい、肥つた身體で、かつて病氣などにかゝつたことはあるまいと思はれた。一通り挨拶がすむと、私の郷里だの、今の下宿だの、何日東京に着いたかだの、茶をたてながらいろんな事をきかれた。私は茶筌のうごくにつれて次第に多くなる淺綠の泡沫を見ながら、かねて茶を好むときいてゐた氏のことを思ひうかべてゐた。
不意に近くで牛の鳴くのが聞えた。見ると庭前の垣の外に斑のある牛が三四匹ゐる。「先生は牛を飼つてゐるよ」と、いつか鹿兒島で堀内君のいつたことを思ひ出して、牛のゐる方へ眼をやつた。話は漸く小說のことに及び、當時評判だつた「煤煙」の批評なども聞かされた。もつと深い、

奥行きのある小説が欲しいと氏は幾度もいはれた。私は思ひ切つて氏自身の小説のやゝもすれば説明的でやゝ冗長に流れることの缺點を指摘した。

「あなたのいふ通り、私の書くものは説明が多くていけない。自分でも知つてゐるが、中々直らんものでしてね」

斯ういつて笑はれた。「隣の嫁」の作意についてきくと、

「あれは事實です。省作はまづ私自身でせう。併し私は省作のやうな色男ぢやありませんよ」

といつてさも快げに哄笑した。

「二葉亭の飜譯でゴルキーの乞食のことを書いた小説をよんだが大へん面白いものでした」

當時小説に熱心であつた氏は中々ひろく讀んでゐるらしかつた。

話題が歌のことになると、しきりに與謝野氏並に明星を非難した。しまひに晶子氏の當時有名な「舞姫」をもちだして、その中の二三首について可成きびしく非難した。私はその時は未だ明星の社友だつたので、内心少し腹がたつた。あんなにいはなくともよささうなものだと思つた。

森鷗外氏宅の觀潮樓歌會のことも話された。

歌と俳句のちがひ、歌のひゞき、歌會の弊など語られるのをきいて、私は少なからず感服した。

氏の雄辯はいつまでも私を座から起たせなかつた。話はそれからそれへと、移つて行つた。夕暮の日かげが窓の障子に庭木の枝をこまかに描く時刻になつて、私はやつと座を起つた。玄關に下りた時、

「堀内もこの間、國へゆく途中で、立ち寄つて行きました」

と、いはれた。

門を出ると、當時はまだ草地の多い郊外の水溜りなどそこゝにある廣つ場に、汚ない町の子供等が集つて、夕燒の唄をうたつてゐた。私はその日の印象を考へ乍ら、とぼ〳〵と江東橋の方へ歩いて行つた。

蝙蝠が時々空を横ぎつた。

五　左千夫の訃報

大學に入學してからは、私は時々お邪魔した。話は多く小說のことであつた。何時頃であつたか、私は、氏の長篇「分家」の切り拔を持參して、自分の好きなところや、不滿のところを氏の前で指摘した。夜更けまで話つて非常につきない。氏は中々自信がつよくて、私のいふ事に反對

した。併し素直に受け入れるところもあつた。たしか中村憲吉君といつしよであつたやうに思ふ。

その後、或夜、古泉千樫君とも先生のお宅で、落合つたが、古泉君とは一寸挨拶したのみで、多く語らなかつたやうにおもふ。

雑子の御飯を馳走になり乍ら、雑子獵の話を聞いたこともあつたが、いつの事だつたか忘れてしまつた。

或る夏の日厩橋邊の電車の中で、偶然會つたことがあつた。麻の衣の胸をはだけて、そこへ首からかけた財布の紐があらはれてゐた。一見田舎の百姓が東京見物にでも上京したやうな恰好であつた。しばらく話をしてから、氏は不意に下車したが、後で私がいつしよにゐた友に、あれが伊藤左千夫さんだよと語ると、友は驚いてゐた。

大正二年の夏、私は友人野田俊作君と、試験勉強のために、上州の榛名山へこもつてゐた。野田君は大塊氏の息で、中村憲吉君や私と高等學校時代の同窓である。

八月一日の朝であつたとおもふ。隣室で國民新聞をよんでゐた野田君が不意に

「おい、伊藤さんが亡くなつたぜ」

といつた。私は驚いて、その室へ行つた。新聞を見ると、七月三十日腦溢血で死んだことが報

ぜられてあつた。享年恰度五十歳であつた。

その前の年の歌に

おりたちて今朝の寒さを驚きぬ露しとしとと柿の落葉深く

鷄頭の紅古りて來し秋の末やわれ四十九の年行かんとす

今朝のあさの露ひやびやと秋草やすべて幽けき寂滅の光

といふのがある。感慨深きものがある。歌は漸く幽寂なる生命の深處に滲入してゐる。

第二章　根岸へ通つた頃の左千夫と節

一　兩人の子規庵入門

節左千夫兩人の子規に對する關係は恰も俳句の方面に於て虛子碧梧桐の子規に對する關係の如く、譬へば芭蕉に於ける其角嵐雪にも似てゐる。不動明王のわきに二人の童子がゐる形である。不思議な偶然であらうとおもふが、節と左千夫は同年に子規に入門してゐる。左千夫は一月三日（三十三年）、節はすでに節篇に於ていへる如く、三十三年三月二十八日（或は二十七日、節篇第一章參照）にはじめて子規を訪ふて、入門を乞ふたのである。

年齢は左千夫の方がずんと年長で、當時三十七歳、節の二十二歳に比較すれば、正に十五年の年長であつた。

はじめて節と左千夫が顔を合はしたのは子規庵に於ける根岸短歌會の席上で、それは明治三十三年四月一日のことであつた。

根岸短歌會といふのは、その前年卽ち三十二年子規が香取秀眞、岡麓、山本鹿州等を世話人として自宅に開いた歌會で、子規庵が下谷根岸にあつたため、根岸短歌會とよびなされたのである。最初のうちは五百木瓢亭、高濱虛子、松瀨青々等の俳人達もやつて來た。

節左千夫のはじめて顏を合はしたのは三十三年四月一日の例會で、節が根岸庵へ行くやうになつてから三度目の時である。その日は秀眞麓をはじめ、赤木格堂も來てゐた。其日の子規は、

　ひさかたの天つ少女が住むといふ星の都に行かんとぞおもふ

　すがのねの長き春日を言問はぬ小鳥と我とたゞ向ひ居り

など數首の歌をつくつてをる。左千夫にはその日の作かと思はれる「茶の歌」があるが、節にはそれらしい歌が無い。出席はしたが歌はなかつたとでもいふ次第であらう。

　當時子規庵の歌會に集る常連は秀眞、麓、格堂、左千夫、節の外に、森田義郎、安江不空、（當時秋水）、蕨眞、山田三子、柘植潮音、鈴木菊房等であつた。今日概ね健在の人々である。

　節と左千夫は四月一日の例會の時はじめて相識つて後、直ちに親交を結び、その年の夏には相携へて日光に遊んでゐる。「日本」の課題「瀧」の歌を作らんためである。實地に見、實際に感じたことでなくては一首の歌もつくらないといふのが、彼等の信條であつたのである。試みに二人

の瀧の歌をならべ掲げてみやう。

左千夫の作。

つがの木のしみ立つ岩をいめぐりて二尾に落つる瀧つ白波（龍頭瀧）

おちたぎつしぶきの風に岸のへの岩群小草常(とこ)なびきすも

瀧つぼにおりて見まくと苔青きつづ岩群を足讀(ちよ)みてくだる（華嚴瀧）

とことはに雨の横ふる瀧つぼのくしき葉廣の草とりかへる（同）

瀧つぼのよどみ藍なす中つ瀬の黒岩のうへに立てば涼しも（霧降瀧）

節の作。

うちわたす二つの瀧の下つせの落合の瀨は木深み見えず

二荒のふもとを行けば野のきはみ山あひにして瀧かゝるみゆ

二荒の山のつゞきの山もとにたぎつ七瀧七つ並(な)み落つ

あしびきの山の夕立風あれて瀧のとゞろの音もきこえず

杉の木のしみ立つ山の山おくの雲わくところ瀧落ちどよむ

熱心の甲斐あつて、この作調を得た。入門後三ヶ月目にして早くもこの作あるは驚くに足りる

が、それは一に熱心の賜物である。そして、こゝに注意すべきは三十七の左千夫の作品と、二十二の節の作品とが、その技巧に於て、その格律に於て頗るよく似通へる點である。節は年齢の割にいたく老成してをり、左千夫は反對に頗若々しい、それがため年齢は親子ほどの相違があるに拘らず、歌にあらはれたところは、互に馴まし合つてゐる友人の關係である。節は稀に見る早熟の天才であつた。

左千夫の瀧の歌はなほ數首あるのであるが、それは大ぶ見劣りのする作である。遲くして子規風の寫生に入つた人だけに、まだ十分にその初期の桂園調から蟬脱してゐないのである。

○

二人は熱心に勉強した。それは右の瀧の歌をつくるために態々日光まで出掛けて行つた一事に徵しても明らかであるが、これについて節が「竹の里人」と題する追憶談の中で語つてゐるところもおもしろい。

先生を訪問すると、日中行つても晩方行つても、必ず夜更まで居る。自分の宿は不忍池のほとりであつたから、先生を訪問する者の中では先づ一番近いところであつたが、歸つてくると、淋しい通りは益淋しくなつて、家の者はもうぐつすり寢込んだといふ時分であつた。左千夫君

などは家へ着くと三時が鳴つたなどといふことがあつたやうに聞いたが、（左千夫の住居は本所區にあつた）敢てめづらしいことでもなかつた。（中略）

上京中はなんでも無駄に日を過ごすまいといふ考へなので、根岸へ行かなければ本所へ行くとか、どこへ行くとかでさつぱり落着かない。左千夫君と話をはじめるとこれも長くなつてはてしがない。泊り込んでは夜更しである。明くれば連れ立つて根岸へ行く。（圏點は筆者）

このやうな交際は一時的ではなく、後々までも續いたのであつて、明治三十八年八月二十一日附寺田憲氏へ送つた手紙にも

一昨日上京、左千夫君のもとへ泊り申候て、夜ふけまで打ち語り申候

とある。その親交を知るべきである。その他之に類する文言は尠くない。今一々これを掲げる必要もないが、今一つやはり同じ三十八年十二月に右寺田氏に送つた手紙の中にも

家内の狀況など、事の序に伊藤左千夫氏に打ち明け候外は、決して人々に語りしことなく候へども云々

とあつて、いかに節が左千夫を信じてゐたかゞ解る。恐らく無二の親友として左千夫と交はつてゐたのであらう。この手紙は父の借金の整理のために、節が杜堂と相談してつゝ種々苦心して

ゐることを寺田氏に打ち明けたものである。一家の私事など、かつて何人にも語らないが、左千夫にだけ打明けたといふので、二人の交際がいかに密なりしかを思ふべきである。

二　同門の二逸足

子規門に節左千夫の兩人が並行對立して進んだ時代は節も左千夫も最も眞面目に勉強し、從つて進歩も著しかつたやうである。これについて、節は大正二年十一月發行のアラヽギ左千夫追悼號の中で次の如く述べてゐる。

日本新聞で第四回目かの短歌の募集があつた時、故人と格堂君と自分と三人が根岸庵に會合して正岡先生の下見をして置いた應募歌の中から先生の入選になつたものを格堂君が書き拔いて、其一つ一つについて各自に異存があれば苦情を持ち出すことにして、牀上の先生も成るべく數の少くなる方がいゝからどんどん減りますよなどと、唯さへ小さくなつてゐた自分を笑ひながら揶揄(からか)はれたことである。

その頃は自分の製作の善惡などは問題ではなく、たゞ一つでも餘計に選ばれて、晴れの紙面へ印刷されるのを無上の手柄でもしたやうに、よろこんでゐた罪のない、あどけない、併し乍

ら誠實の時代であつた。當時相當の年齢に達してゐて實社會に立つても堂々たる一家の主人であつた故人の如きも全くそれであつた。格堂君が日光山の觀櫻をして一時に數十首を日本紙上に飾つた時故人は矢も楯もたまらなくなつて、結城素明君をそそのかして中禪寺の湖水に舟をうかべて、恐しい長篇の長歌を作つた。それが日曜附錄か何かに結城君の挿畫があつて掲載になつた。たゞそれだけでは何んでもないが、後年自分が根岸庵で先生の手づからこの反古の中で欲しいものがあつたら、選り出して持つて行けといはれた籠の中に知人の手紙類なども幾通かあつて、ふと眼についたのは、故人がかの中禪寺湖の長篇について哀願愁訴した長い手紙であつた。最初あまり先生の氣に入らなかつたものと見えて、手紙の文句によると、この一篇が沒書にならうものならば、自分はどうしても格堂にあはせる顏がない。だから惡いところがあればどこか、指示して貰ひたい。幾十百回の改竄も決して苦しいとは思はないといふ意味のことが熱誠をこめて書いてあつた。先生もこれには困つたであらう。だから紙面の立派に印刷された時の作者の滿足はどんなであつたらうか。僕の長歌一篇は君の短歌百首に匹敵すると格堂君へ手紙で自慢してやつたと、自分に語つたのは此當時であつたと記憶してゐる。（中略）

日本新聞の附錄に課題募集が每號繼續した。短歌も俳句も同題で、根岸の先生も衰弱を極め

て來た頃なので、中々の嚴選であつた。容易なことでは通過しなかつた。從つてそんな所へ無駄骨折らうと甘んじてとつてかゝるものがだんだん減少して、每號必らず欠かすまいと、齒がみをする者は故人と蕨と自分位のものになつて了つた。さういふ時に、故人は四回も續いて入選したことがある。その位のことだから、一時に二人も三人も名を列ねるやうの事は、めつたにあるものぢやない。だから作者として故人の得意はすばらしいものである。ところが、どうした機會か、自分はその後六回も引き續いて、入選した。勿論故人は旗色が殊の外わるいのである。さうすると、根岸庵の席上で、君はもう五度つゞけて出るのか、ときいた。六回だといふと安からぬ樣子である。その頃は大抵自分は故人といつしよに根岸へは行つたものである。その後一人で根岸へ行つた時、先生はだんだんの話の後に「君、あゝいふことをいふのだからな」と單にそれだけ語つた。自分はたゞ默つてうなづいた。

子規を中心に、左千夫、格堂、節の三人が一首でも多く採られやうと互に競爭し、苦心してゐるさまが首肯される。私は現にすでに十年以來、『覇王樹』を經營し、みづから多くの人の歌を選してゐるので、斯うした人々の心持や空氣は、はつきりとわかるのである。

左千夫のなか〳〵功名心のつよい、或場合には我武者羅であつた性格もよくわかる。年少の節

の歌が多く掲載されるのは、左千夫にとつては、一つの苦痛であつたに違ひない。それだけに又勉强もした。

三　二人の初期の作歌

その頃の二人の作品を一見してみる。

まづ左千夫は、前にもいふ如く、子規に首服し、子規を慕ひ、從來の桂園調をすてて、來り、入門したのであつたが、その年の歌を見るに、次の如く、まだ幼稚の域をまぬかれぬ。しかし大體に於て子規調になつてゐる。「新年雜詠」及「森」はともに「日本」に於ける子規の募集歌に於て入選せるものである。詳しくは後にいふとして、(左千夫の歌の章を參照せよ) 先づ歌だけを左に示さう。

新年雜詠

葺きかへし藁の軒端の鍬鎌にしめ繩かけて年ほぎにけり

天近き富士のねに居て新玉の年迎へむとわれおもひにき

ゆたゆたと日蔭かづらの長かづら柱にかけて年ほぐわれは

森

かつしかや市川あたり松を多み松の林の中に寺あり

かつしかの田中にいつく神の森の松をすくなみ宮居さぶしも

森中のあやしき寺の笑ひごゑ夜の木靈にひゞきて寂し

第三回目の課題は「櫻」であつたが、左千夫は之に應じて百首中十八首入選して大に氣を吐いた。そのうち

青疊八重の潮路を越えくれば遠つ陸山花咲けるみゆ

あしびきの山の峽なる一つ家のわら家の檐の花咲きにけり

谷あひの水車の小屋にかぶされる八百枝の櫻花さかりなり

天つ風いたくし吹けば海人の子が網曳く浦わに花ちりみだる

の四首をあげる。子規は之を評して

左千夫の歌は趣向の平淡なるもの（寧ろ趣向なきもの）を好み、之れを運用するに萬葉の文字を以てす。故にその佳なるものは萬葉に出入し、然らざるものは無味乾燥に陷る。

といつてゐるが、この櫻の歌は上手な方ではない。技巧も內容も甚だ幼稚である。けれども同

門の前に左千夫の鼻高きことまさに尺餘であつたであらう。
一方に於て、節はこの年に驚くべき傑作をのこしてゐる。それは時の皇后陛下の御着帯を祝し奉る歌で、合計十一首、悉く重厚にして緊密なる秀歌である。これは到底、常凡の及び能はざる佳什である。

祝御着帯歌

雲の上のよろこびごときのふとのみ思ひはべりしにはや御着帯のことききこえはべれば

むらさきの花をつくりていはひてし月の六かはり秋ふけわたる
神ながら契らす秋の長秋をみこのきさいに玉こもります
すめろぎのみすゑさかゆく大み代に天なる神は玉くだします
こもらせる玉をたふとみやすらかにあらせたまへと祈りたてまつる
をにませば日のすゑとほぎめにませば月のすゑとほぐ玉にいますはや
天なるや神のくだせるうづの玉をことほぎまつることのかしこさ
かがなべて五つのをよび二をりい十かはり月日さきくといのる
こもらせる玉をかしこと山川のきよき河内に宮居せすかも

かしこきや玉くだらせる國原にかがよふ雲の八重たちのぼる
國原に玉くだらせるしるしありてとよの長秋ながくやすらかに
天にまし國にいませるもろもろの神のまもらす玉のたふとさ

こゝに「玉こもります」と節のうたへるみ玉は、畏れ多けれど、今上天皇陛下にましまし、大正天皇の東宮殿下としての御婚儀は明治三十三年五月十日であつたのである。この御着帯の祝歌は、左千夫もやはり之を詠みてをる。即ち

祝御着帯歌

春宮の妃御着帯の御事うけたまはりていはひてよめる

かけなくもあやに畏し　たふとくあやにうれしも
茜さす豊旗雲の　むらさきの八百重の奥よ
天つ風もろゝ神言　千五百の春はあれども
八千五百の秋はあれども　この年をたらしみ年と
天にます千萬神　地にます八百萬神の

神まもりもらすまにまに　高光る天つ日のみこ
神ながらみごもらします　いかし秋の豐榮秋を
天の下四方のみ民ら　家忘れ身もたなしらに
かたまけてほぎよろこべる　ことのたふとさ

反歌

大き世にたぐひなしといふいかし艦つくれる時をみ子みごもらす

今日の若い人々から見たら、かた苦しくて、感情にそはぬかも知れないとおもふが、しかし斯うした題材によくかなつて、らくらくと莊重の調を詠みなしてをる。

いつたい、左千夫といふ人は、明治時代に東京に住んではゐたが、そんな感じの少しもないまるで田舍者のやうな人であつた。或は昔の人のやうな風丰を備へた人であつた。西洋風のハイカラなところは少しもなく、純の純たる日本歌人であつた。忠君愛國の志にあつく、時事を慨して悲憤の言をなす等の氣慨を常にもつてゐた人である。撲吶そのものであつた。

その人を知つて、このやうな歌をみると、いかにも調和よく響いて來る。節になると、同じ日

本固有の歌人といつても、又田園詩人といはれても、左千夫にくらぶれば、新しく、リファインされたところがある。左千夫が前時代の最後の人であるやうな氣がする。私はいつも左千夫から憶良を聯想し、近代では曙覽を聯想する。

○

明治三十五年九月十九日子規逡に起たず矣！

この一つの事實は、彼を中心とする、俳句和歌を通じての、多くの門弟達の上に、實に大きなショックをあたへた。

ならび進んで行きつゝあつた節並に左千夫にとつても、實に呆然たるばかりの大きな悲しみであり、歎きであつた。

第三章　左千夫と節との論爭

一　寫生主義と主觀主義

こゝですこしく、根岸短歌會時代に於ける左千夫と節との歌の上での論爭を紹介して置かう。節は生れながらの自然兒であつたが、歌の上でも、自然を重んじ、客觀を重んじ、寫生を尊重した。みづから歌をつくるに之等の主義によるばかりでなく、他人の作物を批評するにもこの標準を以てした。寫生せよ。自然なれ。天然を愛すべしといふことは、彼が口癖のやうに、主張する主義であつた。

然るに、左千夫は之に反し、主觀を重んじ、感情に重きを置いた。この見地から寫生的な節の歌や作品に就いては、時折手ひどい攻擊を加へた。

節が左千夫の非難に答へつゝ、且つ自らの信條を述べた文が三十八年五月の雜誌「馬醉木」に出てゐる。曰く

予は不圖考へた。直ちに天然に接觸して寫生をするといふのが、現在の急務であると考へた。何だかうれしい氣がする。種々の推測がわいて來る。萬葉調の歌に傑作を出したもので、後に更に聞えないものがあるが、斯ういふ人の傑作といふものは萬葉のつけ元氣に過ぎない。自分といふものにかへらないから、再び奮ひ起ることが出來ないのである。天然を寫生することにつとめたならば、きつとその弊を除去することが出來やう。こんなことも胸に浮んだ。自分で試みる。面白い。すべての天然物がみな面白い。しばらくはこの眞面目な寫生に立脚地を定めやうとした。（歌譚抄を讀みての一節）

これはいゝ思ひつきであつた。偶然思ひついたのかもしれぬが、しかし制作の眞髓を突いてゐる。然るに左千夫は主觀を說いて、之に反對した。左千夫のいふところによれば、客觀とは俳句に於ていふべきことである。主觀は卽ち感情なればこれは歌の上にのみいふべきである。和歌は畢竟するに人間感情の所産である。故に之に寫生の語を以てするはあたらぬといふのである。左千夫はなほ、詳述して曰く、

普通の談話上に寫生の歌とか、客觀の歌とかいふ場合はかるい意味でいふのであるから、敢て差支ないが、一つの議論又は批評の場合にやゝあらたまつての言葉であると、この寫生とか

客觀とかいふ言葉は歌の上では困る。正岡先生の評論が見えない。皆寫生的、客觀的といふてをる。卽ち寫生らしい歌、客觀らしい歌の意味である。寫生々といつてをるがあれも嚴格の意味でいふのではない。寫生といふことは繪畫についていふ言葉で一概に使用する場合は皆寫生的といはねばならぬ。況んや、歌の如き形式の拘束ある上に、調子を以てをるものに對していへる言葉ではない。調子を得やうとすればすぐ寫生でなくなる。寫生らしくやらうとすれば、調子はなくなり到底兩立しないものである。繪の方でさへ流派の調子を重んずれば寫生はつぎになる。寫生を主とすれば流派はなくなる。繪畫がすでにそれであるのに歌の上で寫生をするといふことは殆んど滑稽である。やむことなくんば寫實とでもいつておくがよからう。（中略）もし嚴格な意味でいふならば、寫生もしくば純客觀の趣味といふことは歌の性質上有り得べきものでないと明言し得るのである。

この說は歌に於ける寫生の否定であつて、可成思ひきつた、獨斷的の言葉である。これを茂吉氏や赤彥氏はいかに解し、又之に對しいかに答へるであらうか、聞きたいとおもふが、私には實は解つたやうで十分にはわからぬのである。

左千夫又曰く

呉春や應擧が寫生々々といひながら眞の寫生をやつてをらぬ如く、わが長塚君もさかんに寫生を唱へながら、自分の作中往々寫實すらかけてゐるを發見するのである。

又曰く

長塚君がいくら寫生々々と騷いでも連作の必要を自覺せぬ間は長塚の寫生論には耳はかされぬ。何故なら連作は寫實の上に非常な力あるものである。連作でなければ少しく複雜な詩境を歌でうつし出すことは出來ない。

といつて、連作の主張を述べ、更に

要するに長塚氏の歌は今のところ寫生的即ち寫生らしい歌とも成つてをらぬ。寫生くさい歌といふ位であらう。斯うのべつに辯じられては問ふ者も閉口か、ハハヽヽ。それぢや一服やらう。もう空論はよして、次ぎには長塚先生の選歌について一番精酷なる批評をして見やうか、さうさ、長塚氏も僕の歌を批評して見るがいゝさ。（以上左千夫の文章すべて三十八年五月馬醉木より）

こゝは左千夫の論、少々胡魔化してである。ハハヽヽヽなど、甚だ浮薄で、聞きぐるしい。

しかし節の寫生說は主張といふよりも信念であつた。左千夫のやうな態度の攻擊位で屈服する

ものではない。同じ馬醉木誌上節は左千夫に答へて左の言を吐いてをる。

左千夫氏の論は要するに、寫生は歌に不可能であるといふことである。非難の點も多くは予の制作に向つて試みられてゐるやうであるが、予の制作の不完全であることは、予も亦認めてゐる。制作に向つての非難に次いで來るべき制作の上に警めとなるべきもので予はひそかに喜ぶのである。併し乍ら「感じをあらはす」といふ寫生の目的が歌に不可能であるといふことは服し難い。吾々の歌には未來がある。左千夫氏は或は予を以て沒分曉漢とするかも知れないが、予は暗中に何物かを認めるやうな氣がする。理屈の問題ではない。究極まで進んでみるのもいゝではないか。山の中途で雨に逢つたと想像せよ。自己の周圍は殆ど見えない。着物は濡れる。まことに馬鹿氣てゐるやうである。予の現在がそのやうな趣きがあつたとしても平地よりは高いではないか。（三十八年五月發馬醉木「歌譚抄をよみて」より）

暗中すでに何物かを認めたといふのは、ひそかに信ずる所ありしを語るものである。

節又曰く

左千夫君は予の歌を以て寫生に非ず、寫生らしきものにもあらず、寫生臭いものに過ぎないと言つてゐる。それもいゝ。又いくら寫生々々と騷いでも、連作の必要を自覺せぬ間は、耳は

かされぬと言つてゐる。それもいゝ。まアぢつとして見て居て貰ひたい。夏の短夜でも明けるまでには時間がある。

飽きるまではやるのである。

夏の短夜でも、なんどゝ皮肉をいひつゝ、節はかたい自信を以て如是言をなしてゐるのであつて、讀者はそこを見なければならぬ。

更に曰く

左千夫君は予の歌を以て俳趣味の歌であるといつてゐる。名義はどうでもよからう。容觀の趣味を幾分でも解し得たならば、それだけ俳句と接近して來るのはいふまでもない。俳句に眞似したならば陋劣であらう。趣味を捉へてするに何の悪いことがある。故先生が俳想俳調厭ふべしと或る歌に下した批評を例に引いてゐるが、それは何年前のことであるか。それがどのやうな歌であつたか。俳想俳調厭ふべき歌であつたからさういつたのだ。直ちに容觀の趣味に接觸したものに、何んで厭ふべきものがある。……俳句の趣味を解するものは主として容觀の趣味を解するものである。容觀の趣味を解してつくる歌を俳想なりといふことが出來たら、それもいゝだらうが、その時に用ふる俳想といふ文字の意義は變化して來なければならぬ。俳句が

最も得意とする客觀の趣味を歌にしたものは以前故先生を除いて一人もない。必ずしも俳句獨占の趣味とはいへない。少くとも俳句が得意とする客觀の趣味に接觸するといふことは狹隘なる短歌の上にどれだけ効績があるか。いふの必要はあるまい。（三十八年九月馬醉木所揭「枯桑漫筆」より）

子規はかつて「文界漫言」に於て、吾々の新派の運動は俳句の内容を歌の形式に於てうたふのである、いはゞ三十一字の俳句をつくるのだと主張したが、節が今、之に裏書して、俳句の最も得意とする客觀趣味を歌にしたものは故先生の外に一人もないといつてゐる。子規の世界を最もよく深くし、又擴充したものは實に節であつた。

節は又右と同じ文中で、

我々の爲ることも三年とも五年とも、まだ經過してゐないのであるから、周圍の人々はよろしく培養の心を以て之に臨むべきではあるまいか。鐵槌を以て打ち壞はすやうな態度は冷酷に過ぎるであらう。

といつてゐるが、いかにも、それはさうに違ひない。左千夫が年齢の多いためでもあらうか、常に節を一段下に見下ろして茶化すやうな口の利き方をしてゐるのに對して、節はどこまでも眞

面目である。そこが注意される。

二　左千夫に寄す

しかし作歌を以ておのれの生の歡びとする。おのれの生き甲斐とする。この純心に至つては左千夫も節も同じことであつた。議論はするが、それは同じ高嶺の月をみんとする道程のことであつた。究極の目的に至つては固より相異るところはなかつた。

節かつて左千夫に歌を贈つて曰く、

蒼雲を天のほがらにいたゞきて大き歌よまば生ける驗あり
大丈夫のおもひあがれる心ひらき匂はす花は空も掩はむ
春の野にもえづる草を白銀の雨をふらして濕ほすは誰ぞ
大丈夫は眠れる際にあらなくに凝りとゞこほる心は持たず
春の光到らぬ闇に住みなばかくぐもる心けだし持つべし
大空は高くほろけく限りなくおほろかにして人に知れずけり

大き歌よまば生ける驗あり矣！　この心に至つては左千夫も節も全く同一であつた。そのため

に苦しめばこそ、時には過ぎたる非難なども出て來るのである。最後の大空の歌には、節の自己廣告ぎらひのゆかしい心がはつきりと歌はれてゐる。

これは明治四十年、節が二十九歳の時の詠である。節の一生をみるに、この二十九歳あたりから文も歌も堂々として本格に入つてゐるらしく思はれるのであるが、この大空の歌の如きも一佳調たるを失はぬ。而もこれを左千夫に贈つたところに意味がある。

三　同じく左千夫に贈れる

これは右の大空の歌よりは、ずつと前であるが、(卽ち明治三十五年) 長歌をよんで左千夫に贈つてゐる。その前書に

壬寅の秋、歌の上にいさゝか所見を異にし、左千夫とあげつらひせるころ左千夫におくれる歌

とあつて、卽ちそれは本章の一に述べた節の寫生主義と左千夫の主觀主義との論爭を指すのであるが、それに關聯して所思を左千夫に詠み送つたのである。歌に曰く

みづみづし粟の垂穗の、　しだり穗を切るや小畠の、　生ひ杉菜根の深けく、　おもほゆ

る心もあらねど、　吾はもや相爭ひき、　しかれども棕櫚の毛をよる、　縄のはしさかり
をりとも、　またあはざめや

山菅のそがひに向かば劍太刀身はへだてねど言は遠けむ

節の意のあるところは、これによつて、十分によみ得るとおもふ。當時、子規門の人々は歌の
上ではなかなか盛んな議論をやつたもので、ひとり左千夫と節のみのことではなかつた。
第一議論にかけては、師匠の子規が、誰よりもいちばん盛んにやつたのである。

第四章　左千夫の歌（上）

一　二千五百八十四首

左千夫の歌は明治三十三年にはじまり大正二年に及んで二千五百八十四首（短歌二千四百五十一首長歌百三十三首）ある。外に若干の長詩と旋頭歌がある。これが左千夫全集第一卷一册を成してゐるが、近頃齋藤茂吉土屋文明共選の册子が岩波文庫中の一册として刊行された。

左千夫の歌は今日から見れば擬古に過ぐると思はれる程擬古的又古典的なものであつて、萬葉の如きも、中には甚だ難解なものがあり、調子も概ね佶屈である。自然の寫實よりもむしろ作者の感懷を吐露せる主情的のものが多い。そこにやゝ皮相的な詠歎を見ることもある。その主觀的の立場は節の寫生と對立的に考へられる特質であつて、これについてはすでに說明した。

初期のものは言葉に捉へられてゐるところがあり、全體としてギコチないといへやう。正直すぎておのづからの味に乏しい。併し晚年の作品にはどうすることも出來ないやうな人情の切なさ

が見え、それが深く、澄み湛へてゐる。これは主觀的に透徹せる作者の成功である。實に左千夫の晩年の歌品は人間的な、深い人生のなやみを歌ひあげたものであつて、明治大正歌壇の傑作であらうと思ふ。こゝに私は、彼の作品十數首を拔いて、小見を附する。讀者諸君はこれによつてその一斑を窺知せられたい。

二　牛　飼

牛飼が歌よむ時に世の中のあたらしき歌大に興る

根岸庵歌會席上の作。左千夫が子規に入門した年、卽ち明治三十三年の作で、子規門に入つてからの最初のものである。牛飼とは左千夫自らのことで、左千夫は當時本所錦戸に牧場をもち、牛乳搾取業をやつてゐたのである。これから「牛飼左千夫」と稱せらるゝに至つた。「あたらしき歌大に興る」といふ如き表現は當時にありては最も新しいもので、子規も大にこれを賞讃したといはれる。大膽に率直に詠み下して、苦澁の跡なく、清新の氣に滿ちてをる、左千夫は時に三十七歳であつた。頗晩學であるが、その意氣は青年の如くである。

×

葺きかへし藁の軒端の鍬鎌にしめ繩かけて年ほぎにけり
天近き富士のねに居て新玉の年迎へむとわれ思ひにき
ゆたゆたと日蔭かづらの長かづら柱に掛けて年ほぐわれは

三十三年子規が「日本」紙上で短歌を募集した時、その第一回に、左千夫が應じて入選した新年の歌三首で、歌だけはすでに掲げたものである。子規に入門するまでは、左千夫は春園と號して桂園風の單に優美なだけの歌を作つてゐたが、入門後直ちに右の如き作を成してゐる。その轉換の敏迅なるに驚かざるを得ない。

第一首、藁の軒端の鍬鎌といふこと、私にはよくわからない。作者の郷里たる上總地方にある風であらう。私の國では、鍬や鎌は壁、蔀などに横木をつけて、それに掛ける。

第二首、新年の心持を富士をかり來てあらはさんとせるもの。新年を富士山上に迎へたいといふのである。

第三首、日蔭かづらはさるをがせ。新年のかざりに用ふ。長からんことを祈る心であらう。三首のうちでは、これが最も秀れてゐる。「日蔭かづらの長かづら」といふ句法は上手である。

かつしかや市川あたり松を多み松の林のなかに寺あり

かつしかの田中にいつく神の森の松を少なみ宮居さぶしも

森中のあやしき寺の笑ひごゑ夜の木霊にひゞきて寂し

日本歌壇第二回の募集歌、左千夫の入選せるもの三首である。題は「森」といふのである。「かつしかや」の如きいひ方には研究の餘地があり、第三首目などは佳作とも思へないが、それは今の吾々の鑑賞からいふことであつて、當時これだけの作をなすのは決して容易ではない。

森の歌は子規にも同じ作につくつたものがある。參考のため左に拔いて置く。最も子規は徐一題で三十首もよんでをる。取材のひろく、豊富なところを示して、門弟達に訓へるつもりであつたかと思はれる。三十首中より左に拔萃する。

鏡なすガラス張窓影透きて上野の森に雪つもる見ゆ

うつせみの柩をおくる人絶えて谷中の森に日は傾きぬ

遠く來てかへりみすれば猶見ゆる谷中の岡の森の上の塔

花に來て遊びし今日の日も暮れて鴉啼くなり權現の森

森ふかみ山鳥啼きてたまたまに人に逢ふさへ寂しかりけり

義仲が兎を狩りて遊びけん木曾の深山は檜の木生ひたり

杉むらに白き幟のほの見えて天狗をまつる社ありけり

上野山夕越え來れば森暗みけだもの吠ゆるけだものの園

×

鎌倉懷古

あだつ國蒙古の使時もおかずはや打ち斬れとたけびけむかも

元の使者すでに斬られて鎌倉の山のくさ木も鳴りふるひけむ

これも子規庵歌會の作で、鎌倉懷古といふ題詠である。明治三十三年五月四日の「日本」に載つてゐる。弘安四年北條時宗が相州龍ノ口で元の使者を斬つて、我が態度を示した時の凛然たる勇氣を想像して詠んだもので、時宗の悲壯なる意氣には鎌倉山の草木も爲に震動したのであらうとの意である。斯樣な題を得て、かくまで重厚に詠みこなす力は決して凡でない。子規は之を評して、吾は之を天位に置けり。悲壯の感に打たれたるなり、といつてゐる。赤彦氏はかつて私に「すでに」は「寸斷に」の改作であらうか、といはれたが、これは妥當でない。

三　茶博士

茶　（錄四首）

冬の日のあかつき起きに貰ひたる山茶花いけて茶をたてにけり

いにしへの竹の林にあそびけむ人の畫かけて茶をのみにけり

いにしへの人が燒きけむ樂燒の手づくね茶碗色古りにけり

老いらくの老をたのしむ茶座敷の小窓の上に松の鉢あり

作者は非常に茶が好きであつた。私ははじめて本所茅場町に先生をたづねた時、抹茶を出されて方式を知らず大に面喰つた記憶がある。爐の上に、茶釜がかけられ、ちんちんと湯が煮沸てゐた。議論をすれば容易に人に下らぬ性の、强い意力の作者ではあつたが、又一面には山茶花をいけて茶をのむといつたやうな、靜けさを好む人でもあつたのである。子規は左千夫をよんで茶博士などといつてゐる。卽ち「茶博士をいやしき人と牛飼をたふとき業と知る時花咲く」など消息の歌がある。晩年庭の一隅につくつた唯眞閣は茶室兼書齋であつた。

岡麓氏の言葉。左千夫がもし茶の方を歌や文ほどに心をこめたならば、後世に一つの流儀を成

した事疑ひもない。左千夫君のすることはすべて左千夫流で押通した云々。

岡氏又いふ。

茶が好きなら毎日かかさず呑むがよいと、ある醫者にいはれたとて二三度づゝ碾茶をのんだ。歐の人達と日光へ紅葉見に行つた歸途、根岸の先生へお寄りした。旅に出て茶に飢ゑてゐるであらうと、御母堂がわざわざ坂本通り迄買ひに行つて來られたとて茶を下された。するとと左千夫君はそのお茶を戴きながら、茶は持つて參りましたがもう無くなりましたと小さいブリキ罐を懷から出してお見せした。先生もこれには案外であつたので興に入られた事があつた。（下略）

×

春雨

春さめのふた日ふりしき背戸畑のねぎの青鋒並み立ちにけり

なぐさみに植ゑたる庭の薬廣茶に白玉置きて春雨のふる

うまい。「葱の青鋒並み立ちにけり」の如き句法を當時にあつて示してゐるのは特筆すべきである。實に新鮮な感じがする。

後の歌は、子規の

くれなゐの二尺のびたる薔薇の芽の針やはらかに春の雨降る

霜おほひの藁とりすつる芍藥の芽のくれなゐに春の雨ふる

などと通ふところがある。

四　水害の歌

本所龜戸邊は水害の多いところである。左千夫も屢水害に會つてゐる。そして、それが歌として遺されてをる。皆佳作である。

三十三年の歌にこほろぎ十首がある。やはり洪水の歌である。前書として

八月二十八日の嵐は、竪川の滿潮を吹きあげて茅場町のあたり潮を湛へ、波は疊の上にのぼりぬ。人も牛もにがしやりて、水の中にひとり夜を守る庵の寂しさに、こほろぎの聲をきゝてよめる歌

とあるが如く、これまた水害の歌である。彼の初期の作としてはすぐれたものであり、全集中でも注目すべき歌である。煩をいとはず、全部を左に轉載する。

うからやから皆にがしやりて獨り居る水つく庵に鳴くきりぎりす

牀(ゆか)の上水こえたれば夜もすがら屋根の裏べにこほろぎの鳴く

くまも落ちず家内(やぬち)は水に浸ればか板戸によりてこほろぎの鳴く

只ひとり水(み)づく荒屋(あらや)に居殘りて鳴くこほろぎに耳傾けぬ

牀の上に牀をつくりて水づく屋(や)にひとりし居ればこほろぎの鳴く

ぬば玉の小夜はくだちて水づく屋(や)の荒屋さびしきほろぎのこゑ

物かしぐかまども水にひたされて家ぬち冷かにこほろぎの鳴く

まれまれに外面(そとも)に人の水わたる水音きこえて夜はくだちゆく

さ夜ふけて訪ひよる人の水音に軒のこほろぎ聲なきやみぬ

水づく里人の音もせずさ夜ふけて唯こほろぎの鳴きさぶるかも

併し批評の立場からすれば、之等の歌はまだ非常にすぐれたものであるといふことは出來ない。併し三十三年といへば左千夫が子規に入門した年である。その轉換後の生長の速かなること驚くべきである。しかも之等の歌が純粋に寫實的にして、毫も技巧の臭味と扮飾の厭味がないことを注意せねばならぬ。

明治四十年の作に水籠十首がある。四十三年に水害の疲れ六首がある。之等は右のこほろぎの歌に比較すれば、一段と秀れてをる。先つ前者を掲げる。

水籠十首

八月二十六日、洪水俄に家を浸し、床上二尺に及びぬ、みづく荒屋の片隅に棚やうの怪しき床をしつらひつつ、家守るべく住み殘りたる三人四人が茲に十日余の水ごもり、いぶせき中の歌おもひも聊か心なぐさのすさびにこそ。

水やなほ増すやいなやと軒の戸に目印しつつ胸安からず

西透きて空も晴れくるいささかは水もひきしに夕餉うましも

ものはこぶ人の入り來る水の音の室にどよみて闇響すも

物皆の動きを閉ぢし水の夜やいや寒む寒むに秋の蟲鳴く

一つりのらんぷのあかりおほらかに水を照らして家の靜けさ

灯をとりて戸におり立てば濁り水動くが上に火かけただよふ

身を入るるわづかの床にすべをなみ寢てもいをねず水の音もせず

がらす戸の窓の外のべをうかがへば目の下水に星の影浮く

庭のべの水づく木立に枝たかく青蛙鳴くあけがたの月
空澄める眞弓の月のうすあかり水づく此夜や後も偲ばむ

おなじく寫生の歌ではあるが、三十三年のものに比して、一點に集中する力の漸く強きものあるを見るべきである。

更に四十三年になると、その傾向は一つの特質となつてあらはれてゐる。卽ち「水害の疲れ」六首。左の如し。

水害の疲れを病みて夢もただ其の禍ひの夜の騷ぎ離れず
水害ののがれを未だかへり得ず假住の家に秋寒くなりぬ
四方の河溢れ開けばもろもろの叫びは立ちぬ闇の夜の中に
針の目のすきまもおかず押し浸す水を恐しく身にしみにけり
この水にいづこの鷄と夜を見やれば我家の方にうべやおきし鷄
闇ながら夜はふけにつゝ水の上にたすけ呼ぶこゑ牛叫ぶ聲

第二首目の假住の家といふのは兩國の國技館である。作者は牛をつれて、茅場町から兩國へのがれたのである。それは四十三年八月二十二日附で、當時神田駿河臺に下宿してゐた私に呉れた

走り書のハガキに「兩國ヒナン先左千夫」とあり、表面には次の如く記るされてある。

　御見舞難有存じ候。床上水五尺只人間と牛の生命だけ無事、出水以來今日始めて筆とる。委細は後、二十三日。

床上水五尺、只人間と牛の生命だけ無事云々。前掲(六八)の歌、たすけ呼ぶ聲牛叫ぶ聲がありありと見えるのである。

　針の目のすきまもかかず押し浸す水を恐しく身にしみにけり

と作者はうたつてゐるが、斯う毎年のやうに水害にやられては身にしみるのも尤もである。特に飼牛などつれて、どうなるものか、難澁想像にあまりある。

更に數日經て、歸宅後私に送られたハガキがある。

　大水害に就きて厚き御同情下され、御見舞のものまで難有奉萬謝候。二十六日漸く亂雜のうちに歸復致候。取片つけは是れからにて候。右御禮まで早々。

　　　三十一日

斯ういふ混雜の際であり乍ら、一週間位のうちに、二度までたよりを下されてゐる。左千夫はずゐぶんと筆まめに手紙は書いた人のやうである。

洪水のうたは左千夫の作中注意すべきものの一である。

五　子どもの歌

左千夫は子福者であつた。

歌集を見ると、明治四十一年のところに

　七人の子の親なれば何ごとも手まはりかねつうとしとおもふな

といふ年賀狀にそへた歌がある。四十一年は作者四十五歲の年である。然るに年譜を見ると明治四十三年（四十七歲）の條に

　六月二十七日九女文子生る

とある。四十二年には八女が生れてゐる。毎年生れてゐるわけで、なかなか多產であるといはねばならぬ。しかも九女の生れたのは左千夫が四十七歲の年である。左千夫は五十歲で亡くなつたから、亡くなるほんの二三年前まで子をうんだわけである。强い情熱の人で、肉體は頑丈で頗る肥滿してをり、急いで步けば息がきれて苦しさうであつた。が、感情も肉體も五十近くなつても壯者のやうに若く强かつた。戀をすればば熱烈激くやうな戀をする性質であつたやうに思はれる。

どこか山上憶良を思はせるところがあるとおもふ。

子福者であつたが、又子煩悩でもあつた。従つて子に關する作品が多く、又佳品である。子をよんだ歌では四十一年作「心の動き」三十首のうちに次の如き佳作がある。これは眞に佳作である。

兩親の四つの腕に七人の子をかきいだき坂路のぼるも
かにかくに土にも還かずはぐくめば吾が命さへそこにこもれり
よきも着ずうまきも食はず然れども兒等と樂しみ心足らへり
よき日には庭にゆさぶり雨の日は家どよもして子等が遊ぶも
すこやかに兒らが遊ぶに秋もあらず曇りもあらずうらうら常春
暫くを三間うち拔きて夜ごと夜ごと兒等が遊ぶに家湧きかへる
夜のまもり晝の守りともり給ふ神もゑむらむ兒等が騷ぎに
わくらはに寂しき心湧くといへど兒等がさやけき聲に消につゝ
幼兒は泣くもめぐしき七人の親なるからに然るにかあらむ

吾が命さへそこにこもれりと作者はいふ。黄金も珠も何せむにといつた山上憶良を思ひだすのである。「兒らがあそぶに家湧きかへる」は寫實である。無心にさわぎ廻つてゐる兒らが見えるやうであり、それを又、度の強い眼鏡をかけ、にこ〳〵してゐる作者の顏が見えるやうである。

吾兒がおくつき

おくつきの幼なみ靈を慰めむよすがと植うる鷄頭のはな
秋草のはなのくさぐさ捧ぐれど色は一日をたもたず寂し
幼などち姉と手をひき横歩み舞ひそばひしが目に消えぬかも
數へ年の三つにありしを飯のむしろ身を片寄せて姉にゆづりき
むらぎもの心千切れと破りはてばわが悲しみは少し足るべし

この一聯をこゝに書きそへる。四十二年の作。七女七枝さんの亡くなつた時のものであらう。「奈々子」と題する小説もこの年の作であつた。それは奈々子といふ女の子が池に落ちて死ぬことを描いた小説であつた。併しこの年に亡くなつた七枝さんの死が變死であつたのだか、どうかを私は知らない。年譜には七女七枝夭すとあるだけである。

六　心のゆらぎ

四十一年に「採草餘香」と題する二十三首の、頗主情的な作品がある。その中の二三首。

　吾妹子が歎き明かして腫面に俯伏しをれば生けりともなし

作者の感情には上代人の素朴さと強さがあつたやうに思はれる。「春の潮」の省作の心持がこの歌にはあるやうだ。

　立襖一重のおくにへだたりし君がけはひは人を死なしむ

立てきつた襖一重の奥にゐる君のけはひ。さゝやかな衣摺れの音も聞える。その幽かな君のけはひは遣る瀬ない私の心を殆んど死なしむるばかりに搔きむしる。

「人を死なしむ」は一見誇張のやうであるが、漢詩などにもある句法で必らずしも誇張ではない。併しもしこれを「我を死なしむ」と自分に卽していへば、厭味にもなり、少しく誇張にも聞える。こゝはどうしても「人」と客觀的にいふべきところである。

　花匂ふ君が心の夕闇にほのかに觸れて身をあやまてり

君が心は、ほのかに匂ふ花の香のやうに、我が胸めがけて、しのびかに寄つて來る。私はふと

その香を嗅いだ。そしてその香に醉ふて、あたら生涯をあやまつてしまつた。「夕闇の」は「ほのかに」といはんための序であるが、「心の闇に迷ふ」といふやうな成句が古來あるので、この場合には序であると共に、さういふ一種の効果も有つてゐる。

やさしく哀れに、幽艶かぎりなき作である。左千夫には斯ういふ方面に秀拔な作歌技倆があつた。

第五章　左千夫の歌（下）

一　御題雪中松

四十二年に入る。

先づ最初に勅題雪中松十二首がある。佳作である。すなはち、

御題雪中松

一夕友を招きて相酌む、酒酣にして御題雪中松を詠む、友人筆を採り予口詠進りに十二首を記す、員にこれ作れる歌に非ずして詠める歌也。

わがめづる庭の小松にこのあした初雪ふれり芝の小松に
松の上にいさゝ雪つみ松が根の土はかぐろしけさの初雪
芝原の小松が上にいさゝ積む雪をよろこび兒らがさわぐも
植松のをみな小松は枝たわに雪になやめり掃ひてましも

初雪の松のながめをくはしみと室を清めて友よびあそぶ
年立てば松しなつかし松といへば雪をぞおもふ何故にかも
稚松につめばくはしきしら雪を老松が上にみればいかしも
大君のみ笠の松のさかえまつ今朝は雪ふりあやにたふとき

極めてさら／＼と、らくに詠んでゐるが、初期のひどく硬い、擬古的なものよりもはるかに味が深い。子規の松の露十首（三十三年）を思ひださせるところがある。この一聯の詞書に、「つくれる歌に非ずして詠める歌也」といへるは注意すべきであつて、左千夫は常にこれを口にし、作歌の信條としてゐた。

子規の歌は即ち

五月二十一日雨中庭前の松をみて作る

松の葉の細き葉毎におく露の千露もゆらに玉もこぼれず
松の葉の葉毎にむすぶ白露のおきてはこぼれこぼれてはおく
みどり立つ小松が枝にふる雨の雫こぼれて下草に落つ
松の葉の葉さきを細みおく露のたまりもあへず白玉散るも

青松の横はふ枝にふる雨に露のしら玉ぬかぬ葉もなし
もろ繁る松葉の針のとがり葉のとがりしところ白玉結ぶ
玉松の松の葉毎に置く露のまねくこぼれて雨ふりしきる
庭中の松の葉に置く白露の今か落ちんと見れども落ちず
若松の立枝はひ枝の枝毎の葉ごとに置ける露のしけけく
松の葉の葉さきにぬける白露はあこが腕輪の玉にかも似る

二　九十九里の歌

左千夫は上總成東の人であつた。九十九里の濱は遠くない。左千夫に九十九里の歌のあるのは當然すぎる位、當然のことではあるが、しかもそれは數多い左千夫の作品のうちでも、注目すべき逸品である。歌は明治四十二年二月二十八日九十九里に遊んでよめるものである。

すなはち

人の住む國邊をいでて白波が大地兩分(ふたわ)けしはてに來にけり
天雲のおほへる下の陸(くが)ひろら海ひろらなる涯(はて)に立つ吾れは

天地の四方の寄合を垣にせる九十九里の濱に玉拾ひ居り
白波やいや遠白に天雲に末邊こもれり日もかすみつゝ
高山も低山もなき地の果は見る目の前に天し垂れたり
春の海の西日にきらふ遙かにし虎見が崎は雲となびけり
砂原と空と寄合ふ九十九里の磯行く人ら蟻のごとしも

私はまだ九十九里の濱を知らぬが、しかしこの歌の非常に秀れたものであることは一讀して理解出來る。ぴんと胸にこたへるのである。アラヽギ派の先蹤に於て恐らく節の乘鞍岳を憶ふとならび稱すべき逸品であらう。

島木赤彦氏はこれについて次の如き禮讃言をなしてゐる。

この歌は實に左千夫先生の傑作であつて、同時に歌の世界にあつて千古に絶する底の雄篇であると余は信じてゐるのである。壯大とか嚴かとかいふ感歎的の詞は殆ど使用されないで、捉ふる所、歌ふ所は自ら天地悠遠の性命に合してゐる。斯の如き歌を吾々は寫生の極致なりとすると共に、斯くの如くにして初めて高き意味の象徴歌に進んでゐるものであると解するものである、云々。

この言葉は過ぎてはゐない。尙赤彥氏は右一篇の成るまでに、左千夫が再度九十九里濱に遊んだことの事實並に作歌を引き、その苦心が數年間も意圖的に持續せられたことを述べ、作者の緊張の持續と魄力の大とを稱揚してゐる。前に遊んだといふのは明治三十五年並に四十年の兩度である。兩度ともに歌をつくつてをるが、勿論四十年度のものが三十五年の時のものよりも秀れてゐる。四十年の時の歌を掲げて置かう。「磯の月草」と題し

　上總なる九十九里に暑を避け、一夕磯原に逍遙しつゝ、秋立つ天外の雲を眺めて歌數首を得つ

といふ前書があつて、次の如し。

九十九里の磯のたひらは天地の四方の寄合に雲たむろせり
秋立てや空の眞洞（まほら）にみどり澄み沖べ原のべ雲とほく曳く
ひさかたの天の八隅（やすみ）に雲しつみわが居る磯に舟かへり來る
ひむがしの沖つ薄雲（うすぐも）いり日うけ下邊の朱（あけ）に海暮れかへる
わたつみの磯の廣らに三人居り八隅暮れゆく雲を見るかも
をさなきを二人つれだち月草の磯邊をくれば雲夕燒す

白雲もゆふやけ雲も暮れ色にいろ消えゆくも日は入りぬらし

三　鶯と蓼科山

○

鶯をきゝてよめる歌がある。わづか三首ではあるが、これも左千夫の傑作の一であらう。

あたたかき心こもれるふみ持ちて人思ひをれば鶯のなく

このあした小雨の庭に鶯やわが嬉しみをゆりつゝ鳴くも

をさなげに聲あどけなき鶯をうらなつかしみおりたちて聞く

下思ひがうちに搖いでゐる。つゝましい表現の底をながれる脈動がある。作者の欲情といふやうなものを、美しく聞くことが出來る。斯ういふ方面に左千夫の歌の一特質があることを注意したい。

○

四十二年には、なほ、蓼科山の注意すべき數首がある。蓼科山並にその山麓の巖溫泉へは左千夫は六七回も行つたさうであるが、そこの風景が非常に氣に入つたと見える。

四十一年の秋に、そこへ行つた時は、赤彦や千樫もいつしよであつた。篠原志都兒といふ人は、その山麓の人で、常に左千夫に從つてゐる。千樫は隨行の思ひ出を語つて次の如くいつてゐる。

赤彦志都兒はその翌日山を下りた。僕らは四日ほどその溫泉にゐた。湯に入つては二人山を散步した。山にはもう霜が下りてお花畑の花も見られなかつた。先生は蓼科山に老を籠りたい。どこへ家を建てたらよいだらうと言つては步き廻つた。日當りのよい山ふところを見つけて、こゝがよい。水も近くてよい。こゝに決めやうなどといつた。こゝへ家を建てたら志都兒は每日のやうにやつて來るだらうなと微笑せられた。僕は草の上に腰をおろしてゐると眼の前の萱の穗がそよりと赤く搖いだ云々。

四十二年の歌は

ひさ方の天の遊けくほがらかに山は晴れたり花原の上に
信濃には八十の高山ありといへど女の神山の蓼科我は
吾庵をいづくにせむと思ひつゝ見つゝもとほる天の花原
草の葉の露なるわれや群山をわが見る山といほり居るかも
山深み世に遠けれや蟲の音もあまたは鳴かず月はさせども

さびしさの極みに堪へて天地に寄する命をつくづくとおもふ

吾庵をいづくにせむと云々とあるが即ち前記千樫君の文にあるところである。私はまだ信州のこの邊の風光に接したことがないが、折があつたら一迴行つてみたいとおもふ。この蓼科山の歌は、左千夫晩年に數多い佳什中やはり注目すべきものである。その主觀的詠歎が叙景の中に濃くにじみ出てゐる所に注意すべきである。

四　妻の里籠をいたはる

明治四十三年の歌より。

先づ注意すべきは、妻の里籠をいたはる三首である。これが四十三年の冒頭に出てゐて、而も頗佳作である。

はしけやし我が見に來れば産屋戸に迎へ起ち笑む細り妻あはれ

産屋住みけながき妻が面痩のすがすがしきに戀ひ返りすも

産屋髪假りにゆひ垂れ胸廣に吾兒掻きいだく若き母を實

お産のため村の實家へかへつてゐる妻を見舞に行つた時の歌である。初産する時、妻が實家に

かへるのは關東地方の風習であるらしい。

「はしけやし」はいとしく思ふぞよといはん程の意をこめ、愛情をいひ現はす感歎詞で、萬葉に多い。こゝでは細り妻にかけて言つてゐるのであるが、よく利いてゐる。産屋戸は産室の戸のところ。細り妻、これは産のために痩せ衰へた妻のことで、左千夫の造語である。面白い言葉である。

第一首目の歌、冒頭と結尾とに二つの感歎詞を置き、それを「産屋戸」「細り妻」の如き、愛情をふくめた言葉に照應せしめ、「迎へ起ち笑む」などと嬉しさを、たど〳〵しく表現させて、立派に一首の律動を織り出してゐるところ、頗る老錬であるとおもふ。三首中でも佳作である。

第二首、第三首にも面瘦、胸廣、産屋髪、戀ひ返りするなど、さかんにエロチックな表現を試みて、それぞれに成功してゐる。

この年は子規居士九周忌にあたり、「九」といふ題にて、左千夫は歌をよんでをるが、中に

九たりの親の今なる我になほ人をおもふこゝろ消えずあるかも

といふ歌がある。以てこの作者の感情の若々しさを知るべきである。時には、作者のこの世界は遂に情痴の世界にまで及んでゐたやうに思へる。

五　冬のくもり

四十四年のくだりを見ると、「冬のくもり」といふ一篇がまづ最初にある。

霜月の冬とふこのごろ只曇り今日もくもれり思ふこと多し
我がやどの軒の高葦霜枯れてくもりに立てり葉の音もせず
冬の日の寒きくもりを物もひの深きこゝろに寂しみて居り
獨居のものこほしきに寒きくもり低く垂れ來て我家つゝめり
ものこほしくありつゝもとなあやしくも人厭ふこゝろ今日もこもれり
裏戸いでて見る物もなし寒む寒むと曇る日傾く枯葦の上に
曇り低く國の煙になづみ合ひてさむざむしづむ霜月の冬
天地も通ふ時あるをうつそみとよみとは遂に合はず悲しも

獨居して曇日にある物思ひの歌である。四十四年は左千夫四十八歳の年である。そして五十にして死んだことをおもふと、之等の歌に老いの歎きのこもれることを知る。「人厭ふ心今日もこもれり」と左千夫はうたつてゐるが、十分同感出來る。併し人を厭ふはやがてこの世をいとふのであ

る。老來みづから意氣阻喪したものであり、同時に、深くも生の寂寥に思ひ到りしものである。曇天の重々しい寂し味。獨居の心安さ、しかも遣る瀨なさ、さういつたものがこれらの歌に現はれてゐる。當時は左千夫は堀内卓、望月光の二門弟を失ふて、深い悲歎に沈んでゐた。この歌にはさうした歎きの心もこもつてゐるのである。

かつて詩歌誌上で、私が左千夫の歌を紹介した時、この一篇を掲げずにあつたところ、島木赤彦氏から、「冬のくもり」は左千夫の佳作とおもふから、餘白があらば、ぜひ、載せて欲しいといふ手紙を貰つたことがある。餘談ながらこゝに一言して置く。作者自身も得意であつたと見え、胡桃澤勘内氏に送つた手紙に、「冬のくもり」は少々得意なり、聊か自然の幽玄に觸れ得た心地致し候」と書いてゐる。

六　「吾が命」と「黑髮」

明治四十四年には、又當時問題になつた「我が命」といふ八首の抒情歌がある。

今の我れに僞ることを許さずば我が靈の緖は直にも絕ゆべし

といふのが、第一首で、

生きてあらむ命の道に迷ひつゝ僞るすらも人はゆるさず
わが罪をわが悔ゆる時わが命如何にかあらむ哀しよ吾妹
世に怖ぢつゝくらき物かげに我が命僅かに生きて息づく吾妹
悲しみを知らね人等の荒らゝけき聲にも我は死ぬべく思ほゆ
世の中を怖ぢつゝ住めど生きてあれば天地は猶吾を生かすも

などの歌がある。人には已みがたい心があり「弱い時」がある。それは英雄にも君子にもある。この『弱い時』Schwache Stunde に人はうそを吐き、罪を犯す。それはむしろ有りふれた事である。而も世人はうそを悟み、罪を排斥して、その人を非難してやまぬ。もとより虛僞は罪惡である、けれどもこの世に塵ほどの虛僞もないことを期待し得られやうか。而も罪は依然として罪である。この間の苦悶、懊惱をよんだのが「吾が命」であらうとおもふ。それは第一首の

いまの我に僞ることをゆるさずばわが靈の緒は直ぐにも絕ゆべし

とあるに徵しても明かである。これはアラヽギ第四卷第十號（明治四十四年十月）に載つたものので、當時同人間に種々問題となり、編輯の齋藤茂吉氏は作者の自釋を乞ふて、左千夫氏に注文などした。それについて、作者は翌年一月のアラヽギに、「我が命」に就て、といふ五頁ばかりの

文章を發表した。それには

この歌を作つた時、自分は反覆口誦して見て、自ら我歌に我心の動搖を覺えた。云ひ惡いことを云ふて終つたやうな氣がして、自ら氣持がよかつた。さうして永久に人に示さず、自分ひとりで竊に味つて居たいやうな氣がした。乍併すでに一個の藝術として成立つたものを、世に示さないといふのは藝術本來の性質にもとるものといふ考へから思切つて發表したのである。愈雜誌が出來た時にも猶不安の念が消えやらず、胸騷ぎがした程である。

云々と先づ冒頭にある。これに見てもこの歌が決して尋常一樣の、ふとした思ひつきかなんぞで、詠まれたものでないことだけは解るであらう。

又曰く

人に對つて虛僞をにくむ。彼が虛僞をしたといへば目に角立てゝ之を責めんとする。けれども能く虛僞の恩惠を蒙らないで、安全に生活し得る人が、世の中に果してあるであらうか。自分が全精神を傾けて愛する人であつて、自分に又全精神を傾けて慕つてくる人との間にも、猶不明白な感情を隱して居ることを自覺し且つ容認して、自ら怪しまない程に、自分は僞りから脫することが出來ない。之でありながら人間の僞りは到底惡性のものであること猶

欲情の悪性なるが如きものである云々。

と。之は己れの「我」又は慾を克服する能はざる歎きである。之は何人にもある。いはゞ人間の罪なのである。今作者はそれをこの一聯の歌によつて、告白してゐる。そこに悲痛といふべき或ものがある。斯様な人間的な苦悩をくるしんだ點に於て、私は古風な左千夫に近代人の悩みを見るのである。

愛慾のなやみ。生の煩悶。僞りと爭ふ自己探求の苦しみ。それは昔から聖人君子も英雄も皆な悩んで來た。クリストも孔子も親鸞もみな之を悩みぬいた。いさゝか餘談にわたるが、この人間の苦を背景にしたことを、先づ念頭に置いておかなければ、「吾が命」の如き歌は興味索然たるものであらう。戀の悩み、愛慾の苦痛をうたへる歌であるが、同時にまた人間の悩みをうたへる歌でもある。併し根本は愛慾ゆゑに起つたところの人間の僞りであることは、想像されることである。短歌を以てこの世界に進み入つたのは驚くに足りることである。

作者は元來正直な人である。しかもまた已み難い愛慾情熱の詩人である。そこに矛盾があり、この矛盾に常に苦しめられてゐる。その相剋する心のもがきをよんだものが、この一篇であらう。愛慾、それから來る苦悶、そこに作者の悩みがあるのである。

戀の話は、左千夫は中々好きであつたらしい。中村憲吉君が深川八幡の境内に下宿してゐる頃（そこへは私も一度訪問したことがあつた）は、よく憲吉と戀の話をして、夜遲くなつたさうである。

○

「わが命」八首はすぐ翌年（大正二年）の「黑髮」八首に直ちに連續する。同じ種類の作である。すなはち

世にうすきえにし悲しみ相歎き一夜泣かむと雨の日を來し
日暮るゝ軒端のしけり闇をつゝみかそけき雨の音をもらすも
ぬばたまのはしき黑髮しかすがにおもひ千筋にさゆる黑髮
かぎりなく哀しきこゝろ默し居て息たぎつかもゆるゝ黑髮
燈火のさゆるが下にうち沈む妹がくろかみおもひ穗に立つ
八つ手葉にをりをりひゞく軒しづく人はもだして夜は沈むかも
うらすがしき頰にまつはる黑髮を見るに堪へねど目よは放れず
胸つまるいたき思ひに默せれど默しにも堪へず手をとり起つも

何よりも、私は、この作者のもつヴァイタリチーに畏服する。旺盛極るとおもふ。尙作者自らは「吾が命」と「黑髮」の二作について、次の如くいつてゐる。

「吾が命」と「黑髮」とは、痛切な感情の現實である。作歌當時が痛切な哀傷の當時であるのだ。その聲調が急切で激越なのが自然であるのだ。强ひていふならば、「吾が命」と「黑髮」とは、痛切な哀傷の情趣を味ふべき作といつても差支はない。けれども作者はさういふ餘裕があつてあの歌を詠んだのではない。

そこに進んだも進まないもない。痛切な、激越な感情を歌ふべき機會に接しない人達に、痛切な激越な感情の歌をつくれと決していつた覺えはない。只島木君等が、情緒的から情操的に進み、感激的から冥想的に進んだといふやうなことをいはれたから、一言するのである云々。（四十五年四月一日發行アララギ所揭「强ひられたる歌論」より）

○

大正二年は歿した年であるだけに、作歌も多くない。なかで、「ゆづり葉の若葉」を擧げて、歌人としての彼の紹介を止める。

世にあらむ生きのたつきのひまをもとめ雨の青葉に一日こもれり

ゆづり葉の葉ひろ青葉に雨そゝぎ榮ゆる庭にみどり足らへり
わかわかしき青葉の色の雨に濡れて色よき見つゝ我を忘るも
雲明るくゆづり葉のみどりいやみどり映ゆる閑かを小雨うつなり
みづみづしき葉のくれなゐ葉のみどりゆづり葉汝は戀のあらはれ

七　寂滅の光

大正元年の作「寂滅の光」は、左千夫の歌人としての最後を飾るべき傑作である。左千夫はこの歌の出來た翌年に腦溢血のため俄かに死んだが、その年には多くの作もなく、おのづからこの「寂滅の光」が辭世のやうになつた。腦溢血で死んだこととて、もとより辭世としての作のある筈はないが――

おりたちて今朝の寒さを驚きぬ露しとしとと柿の落葉深く
鷄頭のやゝ立ち亂れ今朝や露のつめたきまでに園さびにけり
秋草のしどろが端にものものしく生きを榮ゆるつはぶきの花
鷄頭の紅ふりて來し秋の末やわれ四十九の年ゆかんとす

今朝の朝の露ひやびやと秋草やすべて幽けき寂滅(ほろび)の光

露しとゞなる晩秋の庭に向つて、老いの寂しさをつくづくと歎いてゐる作者が、いかにも、くつきりと歌ひ出されてゐる。嚴肅にして生命の寂寥境におのづから滲入してゐるのである。これは生の象徴詩といつてよい。而も作者はこの翌年を以て逝いたのである。それをおもへば、この歌は作者が自己の生の終りを自覺してよんだものの如き響きをつたへる。いかにも左千夫そのひとの最後らしい、きびしく、高い歌であると思ふ。

左千夫は日頃、叫び、響きなどといふことを唱へてゐたが、その主張を裏書するに十分なる作品である。

初期の歌とはくらべ物にならない。

第六章　左千夫の人物

一　野　人

私の知れる左千夫は、正直で、無邪氣で、或時は子供の如く、或時は慈父の如く、或時は田舍漢の如く、或時は憂國の志士の如く、又感傷の詩人の如くであつた。

乃木大將殉死の時、左千夫は興奮して、かつて休んだことのないその日の子規忌を遂に不參してしまつたさうであるが、この大將の殉死に我を忘れて同情し、興奮するところに左千夫の一面がある。左千夫歌集を見ると愛國勤王の歌が大ぶ見える。さうした、今の近代文學好の青年などから見れば時代錯誤のやうに見えるところに、左千夫の本領はあつた。乃木大將の殉死に興奮して子規忌を缺席したといふことは、いかにもこの人らしい逸話である。

英語のAの字も知らなかつた作者は、洋風の學問に於てはめづらしい淺學の人といはねばならない。そこに氣のきかない田舍者の、しかしながら愛すべき素撲そのものがあり、同時にどこか

洗練されないもどかしさもあつた。先づ偉さな田舍漢であつた。

平福百穗氏の追憶談――

慥か婚禮の祝宴であつたと記憶してゐる。宴席は或西洋料理であつて、翁（左千夫氏）も私も參列した。食堂に案内されて着席すると丁度翁の面前に林檎の鉢が供へられてあつた。紅い大きな林檎である。翁は林檎が目に入ると直ぐ、その一つを手に取つて、「僕はこれがいゝ」と言つた。ボーイは驚いて急いでその鉢を他に移した。いふまでもなく林檎は食事が終つてから食べるのである。翁はそんな事は無頓着である。食卓について赤い林檎が目に入つたから、喜んでそれを手にとつたのである。手にとつた翁はボーイと周圍の人の驚いたことも、林檎の鉢が他に移された理由も恐らく知らなかつたであらうとおもふ。――翁の一生は無邪氣で一貫してゐた云々。

斯ういつた話はいくらもあつたやうだ。つまり、いゝ意味にも、悪い意味にも左千夫は野人であつた。蠻カラであつた。それを平氣で押し通したところに、愚直の力がある。又人をひきつける愛嬌がある。

二たべもの

古泉千樫君の話――

先生は何を食べてもいかにも甘さうに食べられた。そして隨分大食せられた。先生と一緒に物を食ふのはまことに愉快であつた。先生には嫌ひな食物などは殆どなかつた。

僕が上京して本所緑町にゐた頃には、外出の際は行きか歸りに大抵立ち寄られた。蒸菓子を持つて來て下さるのが常であつたが、今頃だと夏蜜柑を袂へ入れて來られることもよくあつた。大きな夏蜜柑を二つ位ちよろりと食べられた。

いつか先生齋藤中村僕らと集つて食物の話が出た時、君等は赤あんどんを知つてゐるか。赤あんどんを知らないやうでは話せないといつて、早速食傷新道へ案內してくれた。夜おそく先生と二人淺草を散步して、觀音前の蔭簀張の壺燒屋で壺燒を一つ食ひ、酒一合飮んで壺燒屋の老爺と一時間も話してゐたのは僕が上京後間もない時分であつた。長塚さんが上京されて靑山いろはで會をした時、先生はばらを注文した。そして齋藤君ばらといふのを知つて居るか、ばらは通人の食ふ物だといつて先生は得意であつた。（中略）

先生の食事についての趣味及意見は、變つた物を求めよろこぶところにあるのでは無論ない。先生に持論があつた。それは、美味を食物に求めて、うまい物を食はうとするよりも、何でもうまく食ふといふ用意が大切であるといふことである。それには常に攝生と健康とに注意せねばならぬ。このうまく食ふといふ用意がない程では、特別な食物にもその價値相當な美味を感ずることはむつかしいといふのである。

この話は面白い。美味を客觀の食物に求めずして、自己の主觀に求めやうとするのである。これは日頃藝術の上で、主觀主義を唱へてゐた左千夫の議論とも一致する。古泉君の話もやはり、生活論、藝術論につゞく。直ぐに右につゞけて曰く、

この精神は、先生のすべての生活上藝術上の主義主張を通じてうかがはれるのである。日に三度の食事をうまく食ふといふ、尋常平凡な生活の上に深い意義を感じつゝ暮したい。幸福を外に向つて求めやうとする時、自分の家庭に不足を感じたり、自分の現生活を輕んじたりする。自分の幸福は自分の現在の生活の上にある。自ら自分の價値を深く解して、自分の周圍と自分の所有のものゝ價値を解することが大事である。そこに自らの幸福が發見されて來るといふやうなことを屢々言はれたのである。歌の上でも、いかなる物を詠んだかといふより、如何に表

現せられてあるかといふことを注意すべきである。叡智と健かな感覺とがあれば日常の生活にも生き生きした感興を起す筈である。それ故新しき題材を探り、殊更に想を構へ、詞句の配列に苦心するより、作者の精神が能く全首を一貫して居るか、否かといふことを見るべきである云々。

主觀主義であり、又精神主義である。歌の上ではこれが「言葉の聲化」といふ持論や「叫びのこもり」といふ日頃の主張とも通ふのであつて、要するにものの生命を必ず自己に求め、決して材料に求めることをしなかつたのであつた。これはたしかに正論であるとおもふ。

なほ一つ古泉君の話――

先生の生活及藝術を思ふ時、僕の一ばん感ぜしめらるゝのは、あの強い衝動とパッションの力である。それと同時に茶の湯の趣味を最も樂しみ悦ばれた靜かな潤ひのある心である。

先生の偉大な肉體からむく／＼と動いて來る盲目的な力を思ふと恐しくなることがある。長塚さんは先生の名譽心競爭心乃至嫉妬心に就て力説せられた。併し僕は今先生のあくまでも生々的な進歩的な生活を思ふて、先生の創造的衝動の旺盛であつたことを特に感じない譯には行かない。先生は僕より二十歳多かつた。そして五十で死ぬまで常に生き／＼した若い元氣を持つ

てゐた。無雜作で無頓着で、何もかもむき出しであつた。赤裸々であつた。衝動に從つて自由に生きた。誰とでもかまはず激論をする。殊更に衝突を避けるやうなことは決してしなかつた。氣取つたり、えらさうに見せたり、利口さうに婉曲に生悟りに濟して居ることなどは、先生にはとても出來なかつた。寧ろ馬鹿々々しくて堪らなかつたであらう。先生自らも言つてゐられるやうに、先生は關東野人の野性を非常に多く有してゐた。

關東の野人！　いかにもさういつたところがある。私も前に野人といひ、田舍漢と評した。これは失禮であるかも知れぬが、併し事實はそれに違ひないと思ふ。無雜作で、無頓着で、赤裸々であつたといふ古泉君の評語も、いかにもその通りである。そして名譽心野心も相當に强かつたことも否定出來ないやうだ。

三　節の左千夫評

右古泉君の文にある節が左千夫に加へた功名心競爭心乃至嫉妬心云々の批評、むしろ非難は大正二年十一月發行のアラヽギ增刊左千夫號誌上であつて、それは可成の長文であり、右の非難の外に左千夫についての特長や逸話等も述べられてをる。併しその非難にしても左千夫としては甘

受せざるを得ないものである。のみならず非難だからといつて、必ずしも之を排し去るべきでなく、その複雜な性格中に、却て左千夫の左千夫たる特長があるのかも知れないのである。今節の語つてゐる追悼語のうち、二三抄記すれば次の如くである。

○

その始終附纏つた功名心は實質があまりに小さかつた。だから聰明な若い者には看破され易い、さうして默つてこそゐるが、冷笑の目を以て見られ易い。名古屋から出た雜誌「鵜川」の編輯者が故人の原稿を求めた際の事、印刷が成つてから組入れの場所が惡いとかで、僕の短歌數首は他の人々の手に成つた文章の數頁に相當する。だから餘り虐待しては困るといふ故人の手紙を受取つて悄然としたと語つたことがある。自信力の強いのはその長所であつたに相違ないが、見え透いた、餘りに小さな功名心は尠なからず個人として禍する處が有つたであらう。そこが如何にも遺憾の次第である。

○

故人は一見したばかりで威壓され相なあの偉大な體格を有してゐたと同時に恐ろしい蠻勇を有してゐた。敵としたら薄氣味惡い様な容子をしてゐた。そして其顏面にはどこにも寬容の容子

を發見し得ない。眼を一つ放して見ると小さい。鼻を一つ放して見ると小さい。廣い意味に於て藝術家として此等の條件は一切累する事はないが、何處までも一派　牛耳を執つて行かうとするには資格が足りなくなる。古來多衆の上に立つて世と推移つて行く人に知識の秀でて居ない者はない。何處までも矛盾して生れ來た故人は一方に學問して來た人の考へ及ばぬ處を平氣で解釋してゐる豪い驚くべき長所を有してゐると共に誰にも解ることが解らぬ樣な遲鈍な處がある。偶學問のある若い者が訪ねて來て色々な噺をすると一々尤もな噺だから尤もに聞くのも當然だが、直ぐにぐたりと柔かに成つて畢ふ傾がある。根蔕が動搖するから非常に強くて非常に弱くなる。冷靜な眼で傍見すると不安に堪へないことが多い。其處が圓頓な分子を有してゐたに拘らず、何時でも非常に若くて居た所以であるかも知れない。

○

明治三十八年の初夏に自分は房州の清澄山からの歸りに故人を案内して、下總神崎の寺田君を訪問した。故人の本所の家は停車場のすぐ脇である。汽車の時間も極つたので少し早かつたが晝飯を食つて行かうとそれまでの用意は非常によかつた。さうするとふと臺所へ行つた儘幾ら待つても來ない。一列車後れると成田で空しく數時間待たねばならぬ。自分は氣が氣でなかつ

たが仕方がない。其内にあたふたとして出て來て、羽織の紐の鐶が容易に篏らないで、暇どつてゐる。停車場の東口へついた時列車はごうごうと動き出して畢つた。それから二人は龜戸まで歩いて暫く待つて汽車に乘つた。果して成田の薄暗い停車場の待合に不愉快な幾時間を過さねばならなくなつた。見ると、交々手を兩方の袂へ入れて何か探してゐる容子である。さういふ時はぐつと首を垂れてさも困つたといふ樣に見える。どうしたのかと聞いて見ると眼鏡を忘れて來て畢つたといふ。寺田君へは始めてで其上に自分から案て噺をした珍襲の書幅を見にゆくのである。さうして眼鏡が二つなければ細かいものを見ても仕方がないのは極り切つたことなのである。それだから只困つてゐる。自分はふとすると不動尊（成田）の庭先に希望の眼鏡があると心附いたので、走つた。その爲に二三日寺田君の歡待をうけて滿足して歸ることが出來た。然しながら時間の觀念の確でない人を案内した爲に一日寺田君を待ち暮らさせて薄暮に漸く辿りついたのである。斯の如くにして家人を狼狽させることは自分は蛇蝎の如く嫌ひである。だからもう一緒に道行は難かしいと考へた。

○

あの蠻勇と遲鈍とが、眞に痛快極まつた事實として表はされた機會がある。或年の夏、それは

上野に博覽會があつて、それから文展が開催されるといふ頃であつた。北村四海の鐵砲騷ぎがまだ耳に新たであつた。或る夜故人と鷗外博士を訪れたら、間もなく他に一人の客が入つて來て、上席に据ゑられた。吾々に別段話のある譯ではない。從つて多少忙しいと見えたその客が一人で喋舌ることになつた。なんでも、博覽會の審査員になつてゐたのが、更に文展の審査員も囑托されるらしいが、うけてよいか何うか、相談に來たといふ。ずゐぶん妙な相談をしに來る人もあるものだと思つてゐると、審査員などになると、世間から敵にされて、馬鹿々々しいあの北村四海などの石彫でもどこに一つ出來てるところがない。あれで巴里がへりだなどと片腹痛い。といふやうな事が幾分職人肌のべらんめい口調が交りつゝ語られた。自己の進退を相談しやうとする程の人の前だから、餘程のつゝしみがある筈なのにその態度が甚だ高倘な人として許すことの出來ないのに驚いた。藝術家として存在を認められてゐる少壯の人々がさうであらうとは、自分はかつて思ひがけなかつたからである。取次の女中が閾際にあらはれた時、吾々の後からの訪問客は白井雨山といふ彫刻家であることを、女中の口から知つた。さうしてその客が案内された時、自分ははるかの末席に下ることを相當のことと思つた程敬意を表したのである。圓滑の主人博士はいゝ加減に應對してゐる。すると雨山氏と隣りしてゐた故人は思

ひ出した樣に、あなたは彫刻をなさるのですか、と聞いた。何んといつたところで、藝術家として、相當の年處に達して、社會上の地位をも占め得てゐるものには、自信がある。それなのに、あなたは彫刻をするかと聞かれた時、雨山氏の心中には侮辱を感じたであらう。乍併、さういふ點に遲鈍な相手は北村四海の名は記憶してをれど、白井雨山といふ名は忘れない程の人ではない。さうしてだんく話をきいてみると、今までは新聞のいふことばかり信じてゐたから、北村四海ばかりをいゝものと思つてゐたが、大分違ふものである。併しさういふことならば、何故あなたは審査員として、あなたの意見を堂々發表しないのですか、さうすれば世間の誤解もなくなつて、吾々のやうな素人にも幸ひである。私がもし審査員であつてそんな事なら決して承知しない。――昂然として斯ういひ放つた。主人博士は、伊藤君ならきつと行るといつて哄笑した。その時雨山氏の樣子は、氣の毒なほどであつた。それから雨山氏は、中村不折畫伯と懇意だといふことから、いろいろのことを聞かせた。故人はまた、私も懇意だといつて畫伯の書で飾られた扇を出して見せる、主人博士がその書をほめる。雨山氏はその晩甚だ不首尾で、匆々にして歸つた。へんな奴だと思つてみた時に、あのくしやくしやした顏の、あの打つにも突いても動かぬやうな偉大な體格の、さも腕力の逞しさうなあの人物を凝視し、さうい

ふことの勢ひのいゝのをきいては、意外な奴が世間には存在してゐるものだと、思つたであらう。自分の知れる限りに於て、これが故人の最もふるつた逸話である。

○

之等の節の談話は側面からいかにもよく左千夫の面目をうかび出させてゐる。眼鏡を忘れて汽車に遲れた日の左千夫はいかにも人の好い、騷々しい人間をよくあらはしてゐるし、鷗外宅で白井雨山をやつつけた左千夫は形式だけ威を張る似而非藝術家を排斥する野人の反抗的精神そのものである。いかにも左千夫らしい逸話であるとおもふ。

併し何んといつても、左千夫の學問的教養は淺かつた。それでゐて、歌壇的にも文壇的にもあれだけの仕事をしたのは、一にその熱心と自信の強さであつた。殊に自信のつよさであつた。負けぬ氣であつた。だからこの自信の根柢がぐらつき出すと、甚だ他愛がない。節のいふ如く、冷靜な眼で傍見すると不安に堪へないやうの所があつた。

遲鈍と蠻勇といふ評語は、左千夫に對して蓋し適評であるとおもふが、その言葉自身におのづから含有されるところの粗野といふことも左千夫の人並に藝術から取り去るを得ざる要素である。そこに愛すべき稚氣とユウモアとがあつた。けれども又どうしても洗錬しきれぬ、田舍者の

間のぬけたところがつき纏ふのであつた。猜疑心功名心については節の言を信ぜしめる。所詮、左千夫は一個の野性であつたのである。

四　いつまでも若い

素朴で、氣取りも衒氣もない代りに、若さはいつまでも、失はなかつた。元氣が少しも衰へなかつた。年五十に近くして戀をしたといふやうな、若々しさも、つまりはその生の力であつたに違ひない。常に元氣で、進取的であつたことに就いて石原純氏は

> 先生が我々よりも二十年も年上でありながら若い氣分をもつてゐられたことは隨處に見られた。ほんとうに友達のやうに我々を過せられてゐた。歌會のときなど、席上の歌作に苦んでゐると、いつも先生は元氣な聲で、そんなことではだめだ、僕はもう數首出來たと言つては我々を勵まされた。私は物理學を專攻して大學を終へた。先生はよく物質の分子とか電子とか、ラヂユウムとかそれから地球や天體のことなどを非常な興味を以て私に尋ね聞かれた。それらの不思議な現象をいろ〳〵心に描きながら、自然の幽玄な有樣や、人間の知識の究極する處の深さに感嘆してゐられた。これらの事は一面には先生の近代教育を受けない素朴な生立ちからに

も依るが、それだけに却て私は先生が斯様な新時代の知識を解しやうとせられた處に若々しい進取的な素質を觀取しないわけにはゆかない。先生があゝいふ境遇に育つて、あんな素朴な態度を保つてゐながら若い人達に交つて堂々たる歌論を闘はしたり一般の藝術論ばかりでなく哲學や宗教に關してさへ獨自の見解を拓いてゆかれたことに就ても私は同樣の感をもつてゐる。

云々と述べてゐるが、いかにもよく故人の性情を語つてゐる。氣象や天體等に特別に興味をもつてゐたことは、左千夫に星や雲を詠んだ歌が可成多くあるに見ても知られる。これは若さとか元氣とか、いふことでなしに、斯うしたものに對する故人の特殊の興味からであつたのであらう。精神の緊張の持續、魄力の強さ——それが左千夫の藝術の強味であり、特色である。いつまでも若い元氣な心をもつてゐたことは、右の石原純氏の話によつてもよくわかるが、なほ赤木格堂氏は次のやうに言つてをる。

伊藤君に最も敬服するのは、君が常に若々しい氣分をもつて常に若い人達と交はり、若い人の意見を聞いて、身の老いを知らなんだ點にある。別に新しい教育をうけた人でもなかつたのに大學出の人とでも話の反りが會つたのはその若い氣分の賜であるとおもふ云々。（大正二年一月アラヽギ伊藤左千夫追悼號）

腦溢血といふやうな病氣で死ぬ人には斯うした精力旺盛の人が多いのかも知れない。さういふ話もきいたことがある。

五　茶の湯の趣味

あのやうに活潑で、蠻カラで、議論をすれば諤々の論をする故人の一面に、しづかな茶の湯の趣味があつたなどは、一寸不思議に思はれる。茶に對する左千夫の趣味は頗深いものがあつた。それについて古泉千樫君はいふ――

茶の湯については僕は全くの門外漢である。先生が或時、歌の方でも美術の方でも心から共に語る同志はあるが、茶の湯の趣味を眞に共に樂しむ友人は一人もない。全くない。一人位は歌の仲間にもあつてよささうなものだがと言はれて、僕は妙に寂しい思ひをしたことがある。先生の「茶の湯の手帳」の中に『いくら茶室があらうが、茶器があらうが、抹茶をたてようが、そんなことで茶趣味の一分たりとも解るものでない。精神的に茶の湯の趣味といふものを解してゐない族に、茶のはしくれなりと出來るものでない。客觀的にも主觀的にも、一に曰く清潔、二に曰く整理、三に曰く調和、四に曰く趣味、この四つを經とし、食事を緯とせる詩的動作、

即ち茶の湯である』といふ一箇がある。又『茶の湯は趣味の綜合から成り立つ……茶の湯に用ふる建物露地木石器具態度等それ自身のすべてが趣味である、配合調和變化等悉く趣味の活動である……趣味を感ずること非常に鋭敏になる。從つて一動一作にも趣味を感じ、庭の掃除は勿論、手水鉢の水を汲みかふるにも强烈に清新を感ずるのである。客を迎へては談話の興を思ひ客去つては幽寂を新にする……茶趣味あるものには退屈といふことはない云々』といふやうな一節もある。先生の茶の湯といふのは、人事の特別なくどくどしい物でなく、いかにも日常自然な物で無雜作に見えた。利休の法あるも茶にあらず、法なきも茶にあらずといふ趣を體得せられたものであつた。

左千夫の人と藝術とを理解する上に參考とするに足る。師の子規にも、友の節にも茶の趣味は無かつた。自ら歎いてゐるやうに、友人間にも茶のわかる人は無かつたらしい。この點に於て左千夫は明治の歌人中他のその例を見ないであらう。ひとり岡麓氏がある。よくは知らぬがこの人は茶の趣味についても造詣の深い人に相違ないと思はれる。

岡氏のこの點に關する左千夫觀を聞かう。

左千夫君は茶の方でも自得が大部分をしめてゐた。月並の茶と歌とは殆ど同時に同じ人から習

つたのであつたが、ぢきに進んで自由に修業しはじめて、さうして自分のものを出すに勉めた。根岸に行きだしてからは足しげく先生を訪はれた。私も大そう懇ろに往復しはじめた。正岡先生は左千夫君を歌などでは茶博士と呼ばれたが、茶人の茶くさいのはきらはれたので、左千夫君ですら、折衝種々の議論が出た。悟不悟歌をよんで送られた事もあつた。段々に茶の方の考へも變つて行つた。私の家で少し陶器類を見せた後での手紙に

先日はおして參上いたしいろ〳〵御もてなしにあづかり候段奉謝候。茶碗の面白味は忘れ難く候、深沈なる高麗の青磁は殊にめづらしく候。其他宗人もハン入も古備前も皆無疵故ありがたく存じ候。折角の名器夜になりて十分色合などわからず殘念に存じ候。今後は必ず日中に拜見致度候。御約束により杏の歌五首だけ御覧に入れ候。五六枚かきそこなひたれど猶こんなざまに候。御笑被下度候。外にはしばみの黃葉をおもしろく拜見致候故十首作り申候。あたりまへのもみぢは日光にて見あき候故歌になり不申候。はしばみの黃葉とは一寸めづらしく好歌題と存候。是は先生の方へ送りて、「日本」へ掲載を願ふつもりに候。來月二日に何卒御批評願上候。

この手紙の頃でも茶器の鑑賞眼が出來てゐたのであつた。左千夫君は茶器の中で格別に悅んだ

ものは第一陶器第二釜であつた、樂の茶碗は大そう好きであつた。春雨の日の徒然に墨汁一滴に倣ふとて短文の末に、「道入の樂の茶椀や落ち椿」の句を添へた。君の趣好がよく出てゐる。

又曰く

左千夫君がもし茶の方を歌や文ほどに心をこめたならば、後世に一つの流儀を成した事は疑ひもない。左千夫君のすることはすべて左千夫流で押し通した。

さすがに左千夫を知る人の言である。實際、岡氏の言であると、私共もまた他の諸點から押してうなづくのである。何しろ、二十二の年に郷里をいでゝ上京し、はじめ牛乳店に奉公し、二十六歳の時獨立して牛乳搾取業を始めたが、その頃は毎日十八時間も勞働したといふ左千夫である。押し通すことにかけては人にひけをとるやうな事はなかつた。

右の引用中、悟不悟歌といふのは、明治三十三年子規が左千夫に與へた消息の歌である。即ち

茶博士ヲイヤシキ人ト牛飼ヲタフトキ業ト知ル時花咲ク
我ヲ覗ム達磨ノ像ヲタヽキワリ洲崎通ヘバ千鳥鳴クナリ
本所ノ四ツ目ニ咲ケルクレナヰノ牡丹燃ヤシテ惡キ歌ヲ焚ケ
寒山拾得豐干皆非ナリ鉢裁ノ小櫻草ノ花綻ビヌ

頭痛ミ寐コロビテ見ル抱一ノ古繪ノ椿花玉ノ如シ
龜井戸ノ藤ノサカリニ群レ遊ブ振袖少女ウツクシト見ズヤ
一モジノ葱ノ青鋒フリ立テヽ惡歌ヨミヲ打チテシヤマン

子規の斯うした消息代りなどの歌には、特に面白いところがある。全くうまいものだとおもふ。

六　眞面目、熱心

與謝野寛氏が左千夫について語つた言葉の中に

外は粗樸で内は可なり神經質な、且つ涙もろい人であつたこと、勝ち氣で從つて負け嫌ひであつたこと。是等は私にも想像することが出來ました云々

とあるが、これはいかにもよく左千夫の性格をいひあてた言葉である。

寒川鼠骨氏の思ひ出話が又面白い。それは子規の談話を通して左千夫を語つたのであるが、實に左千夫の熱心と眞面目とをよく言ひあらはしてゐる。

曰く

『左千夫といふ歌よみは牛飼だから面白かろがな』

と子規居士が語られた。それを自分も非常に面白く感じた。（中略）何だか會ふて見たくなつて龜戸へ出かけた序に訪ねて見た。折あしく留守であつた。

會ひたいと思ふ由を子規居士に話すと『そんなら、何時々々來宅するから來て御覽、御見たらお驚きらい』といふてクス〳〵笑つてをられた。其日に行つてみると、子規居士の枕上には一人の客があつた。馬鹿に韛黑い肥太つた男であつた。大方田舍の實業家か何かであらうと思ふてゐた。すると子規居士が「これが左千夫ぢや」と紹介して自分の顏をジロ〳〵見られた。自分はその意外に驚いた。左千夫といふやさしげな名前とその體格とは頗る不似合で、牛飼の男としては少し肥り過ぎて、特に歌をよむ男としては餘りに黑きに失してゐる。余は甚だ失望せざるを得なかつた。初對面で、格別何も語らなかつた。（中略）

其翌日子規居士を訪ねた。さうして左千夫君に就て意外であつた感想を話した。子規居士も大に笑はれて、さうして床の横から手紙を出しつゝ、「あれから左千夫は午前一時頃迄も居つてなけふこんな手紙をよこしてな」と示された。見ると、「昨日は午前より翌午前一時までも御邪魔致し、實に古今未曾有の長坐いたし、歸宅して家人にも叱られ、左樣な失禮なる事致すべき物

に非ざる旨母よりも注意せられ、自分乍ら今更のやうに呆れ申候。定めて御迷惑の御事なりしならん、以來は謹愼可仕候間不惡御許被下度候』といふ意味であつた。子規居士は笑ひ乍ら、『古今未曾有の長坐が面白かろがな』と云ひ、又た『時間なんか眼中になく、話が面白ければ何時迄も話すのが彼の熱心なのを現はして居る、俗物ぢやないな』と言はれた。余も其の熱心と藝術に眞面目である點に感服した。

其後幾もなく左千夫君は子規居士を訪ねるの記事を書いた。それは子規居士に面會がしたい、併し自分は余り度々行く、さう度々行つては却つて迷惑であらう、但し面會したい、それで子規庵の裏門迄來た、何だか余り靜かだ。靜かに休み居らるゝを驚かすも心ならずと、更に表門にまはり容子を窺ひ、又た裏門に行き、とう／＼意を決し得ず其儘に歸つたといふやうな意味であつた。其文章を讀みて子規居士は『未曾有の長坐以來馬鹿に遠慮するな、前とは正反對になつた、極端から極端へ行く所が面白いなあ』と言つて打笑ひ、且つ『遠慮の心から自然に山が出來てゐて文章も物になつてゐるなあ』と評された。

「極端から極端に行く所が面白いなあ」といふ子規の評語は肯綮に中つてゐる。これも熱心のあまりで、一旦斯うと思ひ立てば、急激にその方に向く、それは時には熱狂するばかりであつたが

そこに左千夫の性格がある。

山田三子氏の追想談にいふ――

それ以來――三十三年春寒集短歌新年雜詠に當選以來（この歌はすでに抄出した、三首）――君の作歌上の努力は一通りではなかつた。既に作歌上の修養が可成に出來てゐる上に故師を信ずる力の大きかつたために、繁々と故師を訪ひ親しく教をうけた。次の課題「森」（この歌もすでに出づ三六七頁參看―筆者）の時には三首より選ばれなかつたが、この次の「櫻花」の題の時には十八首選に入つてゐる。この時には實に一題百首の多きを詠出してこれだけ入選したのである。その後は益々作歌に熱中して「瀧」の題が出ればわざ／＼日光まで瀧を見に行き、（この時の歌もすでに抄出三四二頁參看―筆者）「海」の歌には大洗まで行き、或は駿河の三保の松原邊へも出かけたのである。他の同人にもかなりの熱心家はあつたが、到底君には及ばなかつた。

伊藤君が故師に教を受けたのは約三年間であつた。然るにその關係は、俳句を以て教をうけた人々、伊藤君よりは數年前から教をうけた人々、それ等の人々よりも深い關係が出來た。又故師の眞價値をも了解したやうである云々。

子規門へ入つた頃の勉強ぶりについては、すでに述べた通りであるが、（本篇第二章二四三頁參照）こゝに引く

山田氏の言葉もなかなか興味がある。題を與へられて、その歌を作るために日光にゆき、大洗にゆくといふ如きことは今日の歌よみ共にはないことである。子規門の人々が新しい歌を叫んで起つた時の勢はそれ位に熱烈なものであつた。左千夫はなかんづく熱心であつたのである。

三十七歳といへば中年であるが、その中年を以て左千夫は子規に入門した。しかも間もなく子規が死んだため眞に教をうけたのはわづかに三年である。けれども歌人としての左千夫の地位は明治歌壇の逡に第一流である。これは一に彼の熱心と眞面目の賜物に外ならない。

因に山田三子氏は名は謙太郎氏、現に福島高等商業學校教授である。私は先年この學校の學生に招かれて子規について一席の講演をしたが、あとで山田氏が學生にまざつて私の講演をきいて居たことを知り、驚き、且つ赤面したことであつた。山田氏が福島にゐられやうとは、少しも知らぬことであつた。

第七章　左千夫の藝術觀

一　主觀主義

左千夫が歌の上で主觀主義を唱へ、節の寫生主義と相爭ふたことはこの篇のはじめに說いた通りであるが、歌のみならず、すべての藝術に對して、左千夫は主觀的又精神的主張をつよく把持してゐた。

つまり作品が藝術として優秀であるか否かはその作品の內容が何んであるか、いかなる材料によつて組織せられてゐるかの問題ではなくして、その素材を作者がいかに活かして用ひてゐるか、作者の生命がその內容にいかに賦與されてゐるかによつて定まるのである。即ち作品の價値は材料又は內容によつて決定せらるゝにあらず、反對に作者の主觀、精神、態度等がその內容を活かすことによつて決定せらるゝものであるといふ主張であつた。故に私はかりに之を名づけて藝術上の主觀主義といはうと思ふのである。或は精神主義ともいへやう。

私がはじめて本所茅場町に氏を訪問した時、氏は與謝野晶子の歌集舞姫をもち出して、盛んに之を批評したが、それは要するに非難、はては罵倒であつた。

非難の要點は新しい歌といふ名に捉はれて、技巧に凝り、精神が留守になつてゐるといふことにあつたやうに記憶する。たゞ單に新しいもの、珍らしいものを搜しもとめるだけで、詩の精神を失つてゐるから、斯くの如きものは、少しも新しいものではない。のみならず、かゝる流行的の歌は眞の文學ではないといふのであつた。

この事は明治四十年九月の中央公論で子規について語つてゐる中にも見える。（明治故人評論中の子規論である）

左千夫曰く

吾々と雖その新しい珍らしい變化とか新思想とかを毫末も嫌ふのではない。只詩其物の價値は思想や材料やそれに存するのではなく、或る種の思想材料に作者の技能が加つた作物の成功、それに存するものと信じて居るのです。いかに珍らしき新しい詩的材料を捉へ得ても、其成功の如何は必ず作者其人の靈能に待たねばならないのです。只新しく珍らしく變つてさへ居れば、直ちに詩として面白いものゝ如く思ふは、詩といふものゝ價値を根本に誤解して居るところから來る誤りでせう。要するに詩の價値は、新舊の如何、思想材料の如何以外に多くの部分があ

るのである。着想がいくらよくとも圖取りが何程よくとも只それだけにては直に良畫とはいへないと同じである。

今の所謂新派の人達と吾々とは以上の意味に於て根本的に相違してゐるのです云々

まことに卓論であるとおもふ。新しい運動は今日も起つてゐる。これに對して私の抱いてゐる考へは保守的であるが、私は新運動についての私の考へをきかれる毎に、まづ之れと同じやうな考へを以て人に答へてゐたのである。左千夫の歌論に全く同感であるとおもふ念を禁じ難い譯である。當時の新しい歌、即ち明星派星菫派などは一時天下の流行となつたが、その後どうであるか。すつかり衰へてしまつたといへやう。その原因は恐らく單なる新奇好みの表面的運動に過ぎなかつたためであらう。

反對に子規や左千夫の主張乃至運動は當時は何人にも顧みられず、極めて不遇であつたが、併し今日に於ては漸く其基礎を固くして、歌壇の主潮となつた。この變化を吾々は注意して考へて見るべきである。

左千夫はその後(明治四十五年)讀賣新聞に「新しき歌と歌の生命」といふ論文を掲げたが、その主意は全く右の意見と同じものであつた。その冒頭に曰く

事件材料それから言語句法などに、少しでも新しみがあれば、一も二もなく讃賞してゐるのが、今の歌界の事實だ。その思想感情と言語句法とが、どれだけ融合統一されて、一首の生命を得べく組織されてゐるかを愼重に吟味して歌を鑑賞し居るものが居ないであらうか。それで新しい歌は多いが、生命のある歌は實に少い。今の樣に新しがつてばかりゐる歌界に、當然隨作してくる弊として、立派に生命ある歌でも何か一寸目につく外形的新しみが無ければ、直ちに古いものとして見向きもしないのである。さうして一方には、思想感情は古い〳〵新古今集あたりの歌と何等異る處もない歌も、僅に外形の少しく變つてる爲に、新しい歌として大に推賞されてゐるといふ有樣である。

云々と憤りを發してゐる。さうして、左千夫の所謂新しい歌、生命ある歌とはいかなるものかといふに、氏は同じ「新しい歌と歌の生命」中にいふ。

作歌感情の興奮した動きが、創作的働きを起して、力ある運動となつた時に、卒然として神意は傳り、すべての思想材料言語句法が融合統一され、同時に生命は一首に附與されるのである。

又曰く

興奮した作者の感情が、遺憾なく言語句法の組織に傳つた時に、その言語句法は悉く聲化して、

その言語句法が作者の作歌感情の興奮を傳へた、直接な作者の聲となるのである。すなはち、思想感情の興奮が聲化して言葉に生命を與へたものが、眞の新しき歌であるといふのである。故にこれを自然、技巧、客觀、材料等に對して、主觀、精神、實感、生命の主張、即ち約言すれば主觀主義、精神主義の主張と呼ぶことが出來るとおもふのである。（本篇第三章左千夫と節との論爭參照）

作者の感情の如實に表現せられたるものを期待して、世の多くの紹介報告記述的雜報的作歌を排斥したのである。

左千夫は又「言語のひゞき」（四十三年）「言語句法の聲化」（四十五年）「叫びと話。叫びのこもり」（大正二年）等の論文を書いてゐるが主意は同樣である。歌の根本義は主觀の發動であるとするの說である。主觀の發動する時、言葉にひゞき、しらべを生ずる。これが歌の調子であるといふことも度々論じてゐる。

「表現と提供」（四十五年六月）といふ論文にもこの事が說かれてあつた。

「今の所謂新派の歌を排す」「與謝野晶子の歌を評す」などといふ文章もあつた。今の所謂新派とは與謝野氏一派を主として指してゐるのである。この兩者の差は、餘程深い、實は根本的のものであつた。

島木赤彦氏が左千夫の歌論を要約して、

一、强き實感に根ざすべきこと

一、强き主觀の動きが、さながらに歌の上に響いて居るべきこと

一、歌の生動は主として歌の聲調に現れること

としてゐるが、要を攫んでをる。

明星派の歌を攻撃する際などにも、常に明星の歌が之等の條件を具備してをらぬことを指摘してゐる。

この說はこれを今日に施しても、また眞實であることといふまでもない。

二　萬葉集の歌の價値

左千夫が最も尊重した歌集はもとより萬葉集であつた。これは子規の傳統によるものであらうと思はれる。何となれば、左千夫もその初期、卽ち春園時代に於ては古今新古今によつて作歌してゐたのであるから――。

萬葉集のどこがよろしいのであるか。それを簡單にいふのは容易でないが、要するに萬葉の歌

には彼の持論たる感情の充實があり、言葉の醇化があり、叫びのこもりがあるのである。つくり物やこしらえ物でなくて、切實なる感動の表現である。そこが萬葉集の特質であり、價値であるとせられた。

萬葉集新釋といふものを明治三十七年二月から四十四年九月まで「馬醉木」に連載した。これは左千夫獨得の評釋で、頗參考とするに足るものであるが、左千夫全集が未完のため、まだ一般に普及するに至らないのは殘念である。之を引用して「左千夫の萬葉評釋」といふやうな一章を加へたいが、はじめの部分を校正しながら、終りの方の原稿を書いてゐる今の私には到底その時がない。殘念だが、他日を期する。

すでに引用した中興公論の子規評論中の左千夫の言說に、彼の萬葉集觀があるから、一寸こゝにそれを借用して置く。

話は外れますが、この頃萬葉集が大變持て囃されますね、萬葉は佐々木君も面白いといふ、鐵幹君も面白いといふ。併し兩君の面白いといふのと吾々の面白いといふのとは殆ど共趣を異にしてゐるとおもふのです、どんなに違ふか、さア一寸說明がむづかしい。萬葉がいゝとして取る點は、詞が蒼古だとか、思想が自然だとか、調子が雄渾だとか、中には只何となく上代の

國ぶりを悦ぶ類であるが、こんな事では眞に萬葉の趣味を解してゐるとはいはれない。吾人の萬葉を偉いとするところは、要するにその歌が生き〲してゐる點にあるが、第一に作者の詩的感懷が高い。材料の觀取が非常に旨い。言語の驅使が自在である。使用の言語が非常に饒多である。今の歌人の作物など感興の幼稚なる、言語材料の狹隘なる、迚も比較になるものでない、之等の諸點に一々實例をあげていへば、面白いが、それはこゝには出來ません、萬葉の歌は死物でなくして活物だ、活物であればこそ今日吾々が見ても陳腐と感じない譯ではないでせうか、此點から見て、僕は今日の新派諸子の作歌を甚だハガユクおもふ一人です。その歌がどうも眞でない。拵へものの感じがしてならぬ。人工的であつて天然流露の趣がない。

作者の詩的感懷の高いことを以て、萬葉を推賞する左千夫は卽ちこゝでもまた主觀主義の論者である。而してこの事も亦正論である。

明治四十年に「田安宗武の歌僧良寛の歌」を「日本」に揭げて、これまで人の多くいはざりしこの二人者の歌を推賞したが、その論旨はやはり以上述べ來りし左千夫の主觀主義の立場からであつた。

三十六年であつたか、「馬醉木」で萬葉論といふ文章を發表した。一體左千夫の論說隨筆はどこ

かで一冊として出版して貰ひたい。春陽堂の左千夫全集が尻切れ蜻蛉に了つたことは返す〳〵も殘念である。餘計なことであるかも知れないが、春陽堂はあれを完成する意圖はないだらうか。小說よりも論說隨筆に大なる價値がある。

三　叫びのこもり

藝術觀、とくに短歌觀に於て、左千夫は叫び、ひゞき、叫びのこもりといふことを力說してゐる。これはすでに一言したが、參考になるとおもふから左に錄して置く。

明治四十五年九月のアラヽギにふじ女氏の作「ある時は」といふ八首の歌が載つた。これについて左千夫が翌々月のアラヽギに雜錄三題といふ雜感をかかげ、「叫びのこもり」の說をなしてゐるのである。

「ある時は」八首をこゝに載せるといいのであるが、私のアララギ合本がたま〳〵右所揭號を欠いてゐる。それでこゝに引くことが出來ない。本書も大ぶページ數を超過してゐるし、右の雜誌をわざ〳〵借り步く時もないので、讀者諸君にお目にかける譯にゆかない。ふじ女は赤彥夫人であらうと思はれる。

「叫びのこもり」について左千夫は曰く、

要するに、この八首が含める思想や題目や、それが特に他に優れてゐる譯でもなく、其詞藻や句法にも取立てていふ程のこともなくて、而も強く讀者の同情を引き、かくも讀者をして眞面目に本氣にならしめるだけの力をもつてゐる。遊戲的分子が少しもなく、技巧を弄するやうな輕薄にも犯されて居ないのが何よりうれしいのである。

咽元から押し出される作り聲でなく、詞の潤ひは稍足りなくとも、胸の奥から自然に湧いて出るやうな、叫びの籠つた歌を突然見られたのが悦ばしいのである。他人の歌を見て、「成程近頃はこんな調子にやるのかなあ」と考へたり、「此詞が面白い、この調子が變つてゐる」などゝ、思ひついたりして、自己の内生活と沒交渉な、人の口眞似に近い歌をつくるやうな人は、この作者の前に正に慙死すべきである。予と雖もこの八首を完全な佳作といふのではない。其外形には幾多の不滿足はあるけれども作歌動機の正しくて、力のこもつた、感情の純眞なその表現を尊重するのである。

やうやくに一と日一と日と疲れつゝ我れらの心はへだゝれりけり

勿論これは作者個人の叫びである。作者が只自分の胸中の思ひを遣るために自然にいふた叫び

に相違ない。乍併其聲は深く人生の問題に觸れて、何人の心池にも響を與ふべき聲である。さういふ意味に於て、此歌は「ふじ女」の作ではあるが、一面に於ては、人間の叫びであるのだ。(略)何かいはずには居られない、餘儀ない訴へを聞くやうな感を與へる。泣いて、叫びたい程の内部生活を、自ら抑制して、僅に歌に漏らして居るかのやうに見える歌である。

云々。

この「叫びたい程の内感を僅かに歌にもらした」といふ言葉はいい言葉である。「自ら抑制して云々」もいゝ。この頃マルクス主義の短歌作者に、短歌は相手を意識してそれに對つて、呼びかけるものでなくてはならぬといふ論をなしてゐる人があると聞いたが、私はそれには反對で、むしろこゝに左千夫のいふ如く、感情を内に抑へて、わづかに歌にもらすといふ行き方が歌の本筋であると信じてゐる。詩はうめきであり、氣息であるといふのが、本當である。

四　藝術は作者の分靈

左千夫はまた、藝術は作者の分靈分魂でなければならぬと論じた。藝術は作者の陰影であると論じた人があるが、藝術はそんな不眞面目な、そんなたわいもないものではない――斯う左千夫

は論ずるのであつた。

それは前田夕暮氏の歌集「陰影」を評した時にのべた說であるが、この立場から「陰影」を左の如くに難じた。

（前略）右のやうな考を以てゐる予の鑑賞には、「陰影」の歌は、只物足りなくて仕様がない。予應へがないために、一首一首味つてみるに苦痛である。どこまで讀んでも思想が平々坦々、昂りもせず下りもせず、走ることもないから、休むやうな感じもない。其聲はいつも平調で、その色はどこまでも淡靄である。

もし、作者がさういふ人であるならば、仕方がないぢやないかといふならば、夕暮氏は詩人としての要素が非常に乏しい人であるといはねばならぬ。

內生活に力が無いから、何事にも感激が弱い。かういふ人は、腹が立つても强くは怒れない。嬉しいにも悲しいにも、强くは叫ばないであらう。驚異にも嗟嘆にも周圍を自分に引着けるやうな力はないに極つてゐる。（略）要するに作者に感情の興奮がないから、聲に力がないのである。

云々。夕暮氏にとつては大ぶ手きびしい非難であるが、「陰影」の價値については異論のある人も

あらう。それはしばらく別として、とにかくこの短い批評に於ても左千夫の藝術分靈說は容易に理解されるのである。

○

昭和四年二月九日。今日は議會では濱口民政黨總裁が不信任案を提げて、議會に大獅吼をやるといふので、到るところで、その評判である。自分も傍聽に行かうかと思つたが、入場までを待たされる時間が長いので、あきらめる。ゆうべ永代橋の水難救濟會で歌謊會があり、出席したので、仕事の豫定が半日くるふ。併し愉快であつた。

正午まで文部省。執務中にK君といふ同鄕の友人から電話で今夜來訪云々と告げ來る。夜は講義がありその後で松波博士の祝賀會に出掛ける筈であつたが、K君の用が急なので、その方を殘念ながら不參する。

岩村君から電話。事務所に行く。午餐の馳走になる。須藤泰一郎君が歌集瑞垣の用で上京中、今日午後一時に印刷所で會ふ約あり、急ぎ行つて會ふ。再び岩村君の事務所にかへる。本由白雲氏に送る挽歌數章をつくりて、共に山陽新聞に送る。

五時より日大講義。七時半歸宅。K君來る。用談。夜に入りて寒さ俄に强し。

補遺篇

第一章　子規と野球

一　野球の流行

當今は實に野球が盛である。五人集れば四人までは野球の話をする。話をするばかりではない。多くは自ら棒をもち、球をとつて、之を遊ぶ。官廳でも、會社でも多くはチームがあつて、土曜や日曜には內部的の、又は對外的の試合をやつてゐる。商店の番頭や小僧、さては御用聞や魚屋に至るまで、春秋の大試合の時などはこれを問題にして大騷ぎをしてゐる。野球專門の雜誌が幾つもあり、各大學などは選手の獲得並に養成には可成腐心してゐるらしい。

然るに私はまだ野球を知らぬ。あまり見たこともない。ところが子規の隨筆「松蘿玉液」を見ると、この野球のことが可成詳しく記述してある。試合の方法、勝負、球のこと、攻者防者、特色などに分けてこれを說明してあるのである。この事は、さきに「正岡子規全傳」を出した時に、私は書きたいと思ひ乍ら、つい書かずにしまつたが、今それを補ふつもりで、こゝに記して置く。

今日はもとより技法についても、當時とは比較にも何にもならぬ位進歩してゐることであらうが子規の說明も史的に見て面白からうと思ふのである。

「松蘿玉液」は明治二十九年の執筆で、二十九年といへば、子規が三十、あの結核性脊髓炎の診斷を受けた年である。

二　勝田文相の子規追想談

子規に

久方のあめりか人のはじめたるベースボールはみれど倦かぬかも

なかなかに打ち揚げたるはあやふかり草行く球のとゞまらなくに

打ちはづす球キャッチャーの手にありてベースを人の行きがてにする

今やかの三つのベースに人滿ちてそゞろに胸の打ち騷ぐかな

などゝいふ歌がある。野球全盛の今日、何故か野球の歌を見ることが少ない。然るに子規は當時、すでにこれだけの歌をのこしてゐるのである。或る時、島木赤彥氏は私に向つて、「久方のあめりか人の、云々と子規はベースボールの歌をつくつてゐますよ」といつて、枕詞の話をしてくれたこ

とがある。私は、實はその時まで、子規に野球の歌のあることを知らなかつたのである。

野球――子規はベースボール、ベースボールとのみいつてゐる――はアメリカの遊戯である。これが明治十四五年頃日本に傳へられたことは、後述の通りであるが、子規は明治二十年頃第一高等中學校に在學して、すでにこの技に習熟してをり、且頗この遊戯が好きであつた。現文相勝田主計氏は子規の鄕友であるが、その著隨筆「ところてん」にいふ――

大學豫備門時代の子規は、どちらかと云へば、無邪氣で活潑な風であつたので、體格も相當によく、テニス、ベースボールなどが非常に好きであつた。殊にベースボールは、運動の中で最も得意であつて、所謂キャッチャーを終始やつてゐた。自分も下手の横好きで、屢フヰールドに立つてやつたことがあつた。

云々。この子規に野球論のあるのは偶然でない。高濱虛子の「子規居士と余」といふ子規追想談を一册の書にした本がある。その冒頭に、或る夏松山の城北練兵場で、虛子が友人達と――碧梧桐等も居たであらう――當時流行しはじめた野球の練習をやつてゐると、そこへ恰も歸省中の子規が通りかゝつた。そこで虛子等は、まだ子規を知らぬ時分ではあつたが、子規に請ふて球の投げ方やバットの持ち方などについて敎へをきいた。子規は二三回球を投げ又取りなどして、一通り

の説明をした後で、得意然とそこを立ち去つた。――といふ意味の一節が、右の虚子の本の冒頭にあつたと記憶する。虚子が子規を知つたのは、この時がはじめてあるらしい。

東京から歸省中、郷友に新らしい遊戯の方法などを敎へて、內心大に得意であつたらうところの子規の面影がしのばれる。

子規全集の第何卷であつたか、口繪に、當時の子規が野球の帽をかぶり、シャツを着、バットを持つて、元氣なキャッチャー振りを見せた寫眞が載つてゐる。晩年病床の子規とは似ても似つかぬ、まるで別人であるが、子規にもあんな時代があつたのである。

その病床六尺時代に、子規が、自分のありし日の寫眞を見つゝよんだ幾首かの歌の中に

球及び球をうつ木を手握りてシャツ着しみればその時おもほゆ

といふのがある。これは恐らく右口繪の寫眞をみての述懷であらうと思ふが、往年の元氣を追想して感慨にたへぬものがあつたであらうと、同情されるのである。これは明治三十二年によんだものである。

三　子規の野球論

さて「松蘿玉液」中の野球論、論といふよりも說明又は紹介であるが、それを左に引用して、かの子規にかくの如き文のあることを示さう。

先づ彼は一般戶外遊戲に就いて、序言風に次の如く述べてゐる。

戶外遊戲といふもの、古へより我邦に存する鬼事、隱れ子、いくさ事、游泳等小兒のすなるものを除きては、其種類極めて少し。其之れ有るは多く上等社會の歡娛に供する者にて、蹴鞠、流鏑馬、笠懸、犬追物、打毬等なりとす。其外の戶外運動は、皆西洋より來りしものにて、中につきて今最も盛んに行はるゝは端艇競漕とす。

端艇競漕は河上、湖上又は海上數町の間占むるを以て、其空間の廣き點に於いて、外觀を壯ならしむべく、又多數の人の觀覽に供するを得べし、唯々此遊戲は多額の費用を要すると、競漕に適せる水面を要するを以て廣く一般に及ぶこと能はず。僅かに隅田川と横濱海上に限りたるを、近來琵琶湖上にても之を試むるに至れり。

〇

いはゆる陸上運動なるものは、端艇競漕を除きて殆ど總ての戶外遊戲を含む者なり。而して普通に陸上運動會又は陸上競技會と稱する者は、競走を主とし、高飛、桿飛、幅飛、槍投、クリ

ケットボール、鐵丸投等の種類之に屬す。これと全く種類を異にする陸上競技あり、之を競馬と爲す。遊戲は多く年少血氣の多人數を驅りて、一場の競爭を試ましむるを常とするに、獨り競馬は其仕掛の大なるに比して少人數の老人を驅り、しかも其の費用はボートレース等よりも遙に多きを要するを以て、こは多く紳士富豪の專有物に歸せり。此技我邦人の嗜好に投ぜぬにや、近來いよ〳〵振はざるが如し。今の競馬は西洋より輸入し來りし者なれども、加茂の競馬は古より行はれて史上に見えたり。田舍にても祭禮の時かあらぬか土地の若者などを集めて、競馬を催す事あり、之等はまことの戶外遊戲なるべし。以上三種の他、なほ幾多の戶外遊戲あれども、最も普通なるをローンテニス及びベースボールとす（中略）

ついで、「ベースボールに至つては」と言つて野球論に入り、在橫濱米人と第一高等中學校との間に仕合ありしこと、及び野球の我國に傳はりしことの簡單な沿革を述べ、それから野球試合の說明を試みてゐる。野球の我國に傳來せしことについては

詳かに之を知らねど或は云ふ元新橋鐵道局技師（平岡凞といふ人か）米國よりかへりて之を新橋鐵道局の職員間に傳へたるを始めとすとかや（明治十四五年の頃にもやあらん）

と子規はいつてゐるが、いかにもその通りで、平岡凞氏がボストン大學で習得したベースボール

の方法とその技具とを携へて、歸朝し、當時未だ極めて幼稚であつたわが野球界に之れを傳へたのださうである。はじめは大學豫備門が盛んで、後駒場農學校がこれに取つて變つたらしい。併しまだ對外的の試合は行はれず、單に內部的に競技するに過ぎなかつた。それでも明治二十年頃になると、大學豫備門や工學部、駒場農學校の間に少しは對外的の仕合をやるやうになり、二十三四年になると試合の方法がやゝ整つて、凡そその方式を備へるに至つたといふことである。

競技法についての子規の說明がまた詳細にして、なかなか面白い。

△ベースボールに要するもの

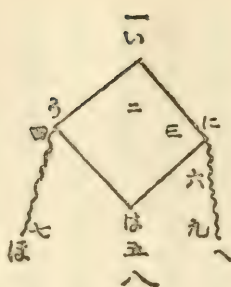
ベースボールに要するものは、凡そ千坪ばかりの平坦なる地面（芝生ならば猶善し）、皮にて包みたる小球（直徑二寸許りにして中は護謨、絲の類にて充實したるもの）投手が投げたる球を打つべき木の棒（長さ四尺許りにして、先の方やゝ太く手にて持つ處やゝ細きもの）一尺四方ばかりの荒布にて、座蒲團の如くこしらへたる基（ベース）三個、本基及投手の位置に置くべき鐵板樣の物一個宛・攫者の後方に張りて球を遮るべき網（高さ一間幅二三間位）競技者十八人（九人宛敵味方に分るゝもの）審判者一人幹事一人（勝負を記すもの）等あり。

△ベースボール競技場　圖によりて之を說明すべし。

（い）本基（ホームベース）
（ろ）第一基（ファストベース）（基（ベース）を置く）
（は）第二基（セコンドベース）（基（ベース）を置く）
（に）第三基（サードベース）（基を置く）

（一）攫者（キャッチャー）の位置（攫者の後方に網を張る）
（二）投手（ピッチャー）の位置
（三）短遮（ショートストツプ）の位置
（四）第一基人（ベースマン）の位置
（五）第二基人の位置
（六）第三基人の位置
（七）場右（ライトフイルダー）の位置
（八）場中（センターフイルダー）の位置
（九）場左（レフトフイルダー）の位置

○

直線いほ及びいへ（實際には線なし、或は白灰にて引く事あり）は無限に延長せられたものとし、直角ほいへの內は無限大の競技場たるべし。但し實際は本基にて打者（ストライカー）の打ちたる球の達する處卽ち限界となる。いろはにには正方形にして十五間四方なり。勝負は小勝負九度を重ねて完結する者にして、小勝負一度とは甲組（九人の味方）が防禦の地に立つ事と、乙組（卽ち甲組の敵）が防禦の地に立つ事との、二度の半勝負に分るゝなり。防禦の地に立つ時は九人各々其專務に從ひ一、二、三等の位置を取る。但し此位置は勝負中多少動搖する事あり。甲組競技場に立つ時は乙組は球を打つ者等一、二人（四人を越えず）の外は悉く後方に控へ居るなり。

▲ベースボールの勝負

攻者（防禦者の敵）は一人づゝ本基（い）より發して各基（ろ、は、に）を通過し、再び本基に歸るを務めとす。斯くて歸りたる者を廻了（ホームイン）と云ふ。ベースボールの勝負は九勝負終りたる後ち、各組廻了の數の總計を比較し、多き方を勝とするなり。例へば「八に對する二十三の勝」と云ふのは乙組の廻了の數八、甲組廻了の數二十三にして、甲組

の勝なりといふ意なり。されば競技毎の任務を云へば、攻者の地に立つ時は成るべく廻了の數を多からしめんとし、防者の地に立つ時は、成るべく敵の廻了の數を少からしめんとするにあり。廻了(ホーム・イン)と云ふは、正方形を一周する事なれども、其間には第一基、第二基、第三基等の關門あり。各關門には番人あるを以て、容易に通過すること能はざるなり。走者が或る事情のもとに通過の權利を失ふを除外(アウト)と云ふ。審判官除外と呼べば走者(ランナー)(又は打者)は直に線外に出で、後方の控所に入らざるべからず。除外三人に及べば、其半勝負は終るなり。故に攻者は除外三人に及ばざる内に多く廻了せんとし、防者は廻了者を生ぜざる内に、三人の除外者(アウト)を生ぜしめんとす。除外三人に及べば、防者代りて攻者となり、攻者代りて防者となる。かくの如くにして再び除外三人を生ずれば即ち第一小勝負終る。彼れ攻め、此れ防ぎ各々防ぐ事九度、攻むる事九度にして全勝負(ゲーム)を終る。

四　野球論の續き

子規の說明は詳細にしてまだ續く。長いけれども面白いから引用する。三十年も前にあつて、しかも俳人子規が、すでに野球論をしてゐるのが面白いではないか。前にすぐつゞいて

▲ベースボールの球

ベースボールの球は只一個あるのみ。而して球は常に防者の手にあり。この球こそ、この遊戲の中心となるものにして、球の行く處すなはち遊戲の中心なり。球は常に動く。故に遊戲の中心も常に動く。されば防者九人の目は瞬時も球を離るゝを許さず。打者、走者も球を見ざるべからず。傍觀者もまた球に注目せざれば、つひに其要領を得ざるべし。今尋常の場合を言はゞ、球は投手（ピッチャー）の手にありて、たゞ本基に向つて投ず。本基の側には必ず打者一人棒を持つて立つ。投者の球正當の位置に來れりと思惟する時は打者必ず之を打たざるべからず。棒、球に觸れて球は直角内に落ちたる時、打者は棒を捨てゝ、第一基に向ひ一直線に走る。此時打者は走者となる。打者が走者となれば他の打者は直ちに本基の側に立つ。然れども打者の打擊球に觸れざる時は打者は依然として立ち、攫者は後（一）にありて其球を止め、之を投者に投げ返す。

○

投者は幾度となく本基に向つて投ずべし。此の如くして一人の打者は三打擊を試むべし。第三打擊の直球、棒と觸れざる者、攫者能く之を攫し得ば打者は除外となるべし、攫者之を攫し能はざれば打者は走者となるの權利あり。打者の球空に飛ぶ時其球の地に觸れざる前、之を攫す

る時は其の打者は除外（アウト）となる。

○

▲ベースボールの球（承前）

場中に一人の走者を生ずる時は、球の任務は重大となる。若し走者同時に二人三人を生ずる時は更に任務重大となる。蓋し走者の多き時は、遊戯愈よ複雑となるに拘らず球は終始只々一箇あるのみなればなり。今走者と球との關係を明かにせんに、走者は只々一人敵陣の中を通過せんとするが如き者、球は敵の彈丸の如きものなり。走者は正方形の四邊を一周せんとする者にして一歩も此の線外に出づるを許さず。而して此の線上に於て一たび敵の球に觸るれば立所に討死（除外）を遂ぐべし。

○

されば走者が此危險の中に身を投じて、唯一の壘壁と頼むべきは第一第二第三の基（ベース）なり。蓋し走者の身體の一部此基に觸れ居る間は敵の球たとひ身の上に觸るゝも決して除外とならず。（此場合に於いて基は鬼事のをかの如し）故に走者は成るべく球の自己に遠かる時を見て疾走して線を通過すべし。例へば走者第一基にあり、これより第二基に到らんとするには投者が球を取

つて、本基に向つて投ずる其の瞬間を待ち合せ、球手を離るゝと見る時走り出すなり。此時攫者は其球を取るや否や直ちに第二基に向つて投ずべく、第二基人は其球を取りて走者に觸れんと擬すべし。走者は匆卒の際にも、常に球の運動に注目し斯る時直ちに進んで險を冒し第二基に入るか、退いて第一基に歸るかを決斷し之を實行せざるべからず。第二基より第三基に移る時も亦然り。

○

走者三人ある時は滿基(フルベース)と云ふ。滿基の時打者が走者となれば、是非とも一基づゝ進まざるべからず。是れ最も危險なる最も愉快なる場合にして、此時の打者の一撃は實に勝負にも關すべく、打者若し好球を撃たば二人の廻了を生ずることあり、若し惡球を撃たば三人盡く立居(スタンディング)に終ることさへあるなり。兎に角走者多き時は、人は右に走り、左に走り、球は前に飛び、後に飛び局面忽然變化して觀者をして要を得ざらしむることあり。

子規は更にベースボールの防者攻者について一々之を說明してゐる。これを簡約して引用することと左の如し。

先づ防者即ち防禦の地にある者は

(二)走者

ランナー。通過しつゝある者。上に説明せる所によりて知らるべし。

以上にて野球の説明に關する子規の文章は盡きてゐるが、兎に角、あの病詩人の精神なり性格なりに、この進取的新遊戯を好む傾向のありしことは、彼の人物と照合して頗興味あることである。今日では歌壇人にしても野球を好むこと松村英一、半田良平、藻谷六郎の如き諸君があるけれども、今から三十年も前に、すでに子規の如き好球家のありしことは、傳へるに足りるであらうとおもふのである。俳史歌史文章史の外に、子規はまた、野球史に於て、その名を後に傳へらるゝ資格がある。これは寧ろ一奇といふべきであらう。

當時の子規の野球の歌

國人と外國人と打ちきそふベースボールを見ればゆゝしも

若人のすなるあそびはさはにあれどベースボールに如く者もあらじ

九つの人九つの場を占めてベースボールのはじまらんとす

九つの人九つのあらそひにベースボールの今日もくれけり

打ち揚ぐるベースは高く雲に入りてまた落ちきたる人の手の中に

雲に入りてまた落ちきたる人の手の中に――など、さすがうまいものである。再びいふが子規がこのベースベールの文を書き、歌をよんだのは明治二十九年のことである。

○

この頃好き天氣つゞきて、去年の十一月頃から雨も降らず雪も來ない。一度も雪を見ないで春が立つた。めづらしいことである。郊外では井戸の水が出なくなつたところもある。併し好天氣は幾日つゞいても嫌にならぬ。

國元の姉から納屋の建直しについて相談の手紙きたる。K君の結婚を媒酌する。職業を求めて依頼にきたるもの多し。世はまだ中々景氣が直らぬ。

高野六郎博士の近著「屎、尿、屁」は標題はきたないが、中味は實におもしろい。(二月十三日)

第二章　東菊の歌、椿の句

一　東菊の歌

子規に
　あづま菊いけて置きけり火の國に住みける君の歸りくるがね
といふ畫讚の歌がある。明治三十二年、當時熊本の高等學校にゐた夏目漱石に送つたものである。これについて、漱石みづからは、かつて東京朝日新聞の文藝欄に「子規の畫」といふ短文をかいたが、その冒頭に
　余は子規のかいた畫をたつた一枚持つてゐる。亡友の紀念だと思つて、永い間それを袋の中に入れてしまつて置いた。年數のたつにつれて或る時はまるで袋の所在も忘れて打ち過ぎることも多かつた。近頃ふと思ひ出して、あゝして置いては轉宅の際などにどこへ散逸するかも知れないから、今のうちに、表具屋へやつて掛物にでも仕立てさせやうといふ氣が起つた。澁紙の

袋を引き出して塵をはたいて中を調べると、畫はもとのまゝ濕めッぽく四つ折に疊んであつた。畫の外に無いと思つた子規の手紙も幾通か出て來た。余はその中から子規が余にあてて寄越した最後のものと、それから年月のわからない短いものを選びだして、例の畫を挿んで三つを一纏めに表裝させた。

畫は一輪挿にさした東菊で、圖柄としては極めて簡單なものである。わきに、「これは萎みかけたところと思ひ給へ。拙づいのは病氣のせいだと思ひたまへ。嘘だと思はゞ肱をついて畫いて見給へ。」といふ註釋が加へてある。自分でもさう旨いとは考へてゐなかつたのであらう、子規がこの畫をかいた時は余はもう東京には居なかつた。彼は此畫に「東菊いけて置きけり火の國に住みける君がかへりくるかな」といふ一首の歌を添へて熊本まで送つて來たのである。

云々。この短文はその後「切拔帖より」といふ單行の小形本に輯められ、漱石全集では第九卷の四〇三頁以下にはいつてをるが、この歌の下句を

住みける君がかへりくるかな

としたのは、漱石の記憶ちがひか、書きあやまりかで、實は冒頭に出した如く、「かへりくるがね」で無くてはならぬのである。「がね」は動詞につく接尾語で、「のやうに」又は「ばかりに」の

意であること申すまでもない。

この歌を、私は、漱石の右の文で讀んだ時にへんだ、とすぐに思つたことは事實である。漱石は熊本にゐる。東京へ歸つた來たのでも何んでもない。それに「かへりくるかな」と斷定するのは變である。さう思つて、どこかに不安があつた。けれども漱石の右の文章には明かに「かへりくるかな」と書いてある。仕方がないから、不安定ではあるが、そのまゝに記憶した。そして去年「正岡子規全傳」を出版した時にも、この東菊の歌のことをかいたが、やはりその儘に歌を引用し、いさゝか言葉を費して置いた。

もう七八年前、三越で漱石の遺墨展覽會の開かれたことがある。其時子規の遺墨も參考品として別室に陳列せられてゐた。私も見に行つて、この東菊の掛物も一見したのであるが、この結句のことには思ひ及ばなかつた。これに氣がついて、注意してみたなら必らず「がね」であることを發見して、漱石全集の校正にあたつてゐた森田草平氏か小宮豐隆氏へお知らせしたであらうものを、實物を見ながら、そこまでは氣がつかず、平氣で見過し、剩さへ「正岡子規全傳」のちに於てすら、これを訂正しなかつたとは、さて〳〵われながら愚なりける次第ではあつた。

ところが、昨三年九月に「日本及日本人」が正岡子規號を出して諸家の研究や追想談などを掲

けたが、中で、柴田宵曲氏といふ人が、この漱石のあやまりを訂正してゐる。柴田氏は、どうも變だと久しく思つてゐたが、『漱石山房に所藏されてゐるこの幅を一覽すると、果して私の疑問を抱いたところが一字間違つてゐた云々』といつてゐる。夏目家へ行つた時、目のあたり注意して見たのであらう。

これで、すつかり疑問はとけた。私は柴田氏に感謝する心から補遺としてこの一節をこゝに記るし置くのである。

因に子規のこの歌は俳書堂本「子規遺稿」中の「竹の里歌」にもなく、アルス本「竹の里歌全集」のなかにも出てゐない。漱石の書きあやまりは漱石全集にもそのまゝで載せられ、改造社版圓本の漱石集にも其儘になつてゐる。これは改版の時、是非訂正されたいとおもふ。

二　椿の句

正宗白鳥氏が碧梧桐の句を子規の句と誤解して文中に引用してゐる。即ちその「子規について」（氏の著改造社版文藝評論三百十六頁參照）に於て

明治時代に文學の上に跟跡を殘した人々の眞價を私はをり〳〵顧みることがある。（略）近年綠

雨をも、透谷をも讀んだ。過去の知名の文豪のうちで、子規だけを、私は知らなかつた。といつてゐるが、白鳥ともいはれる程の人が、子規を知らないとは、何んといふ遺憾事であらう。氏の文名のために惜しまれる。これは小説偏重の日本の文壇の餘弊であつて、小説家の多くは、子規などは病人の俳句よみ位に心得て、見てみやうとも、知らうともしないからの事である。日本の文壇と文士の狹さを曝露してゐる。

そんな始末だから、白鳥氏は、同じ文の中で、

赤い椿白い椿と落ちにけり

といふ碧梧桐の句を子規の句として、平氣で間違へてゐる。この句は子規が「明治二十九年の俳句界」の中で印象明瞭といふことを說いた時、その例として引用したものである。白鳥の文藝批評は近年評判になつてゐるやうであるが、十が十まで正しいとはいへないかも知れない。子規についてこのやうな間違ひをするやうでは、すこし心細いやうな氣がしないでもない。餘計なことであるが、こゝで一言して置く。

白鳥の子規觀といふやうなものを、私は、他日試みるつもりである。新聞などでその後白鳥の子規評を一二度よんだ記憶がある。

第三章　形式と内容とに就いて

一　文壇の形式論

文學に於ける形式と內容との論は古くして新しい問題であるが、この頃既成作家の新興文學への方向轉換などの事實から、この問題が文壇で、大分やかましくなつてゐるらしい。橫光利一、中河與一、池谷信三郎といふやうな人々の形式主義に對して、犬養健氏等に修正說があり、藏原惟人、勝本淸一郎氏等が新興文學の立場から反對した文章などを、よくも讀まないが、ちよいちよい見た。川端康成、石濱金作氏の文もあつたやうに記憶する。

併し乍ら、ひそかにおもふに、この問題は定型詩たる短歌や俳句に於て最も重要なる意義をもつのではあるまいか。今や歌壇にも新興思想は浸入し來つゝある。定型の破壞、內容精神の更改等種々のことが論ぜられてをるが、私はこゝでは、やはり內容と形式との問題が最も緊要であるまいかと考へてゐる。新興の短歌を主張する人々はこゝをどういふ風に考へてゐるか、私はそれ

を知りたいと思つてゐる。自己批判と形式美の矛盾に苦しむやうの結果がすぐにやつて來さうに思はれる。

二　和歌俳句の調和

それは固より深くこゝで論ずべき限りでない。但だ短歌の如き定型詩に於て、とくに重要なる問題であり、これについて、あの聰明な子規がいかに考へてゐたかといふことを、不圖、思ひ出したので、こゝに一言しやうと思ふばかりである。

子規の短歌革新の主張はその當初に於ては俳句の境地を三十一音をもつて歌はんとするにあつた。例へば明治二十七年の「文界漫言」中には和歌改良の論をなし、意匠(心)と言語(姿)との兩點から、和歌の言語を以て俳句の世界をうたふことを說いてゐる。即ち

意匠の上よりいへば本邦普通の和歌程意匠に乏しきものはあらず。言語の上よりいへば本邦普通の俳句程言語の卑俗なるものはあらず。而してこの和歌、この俳句は實に我國固有の純粹なる韻文として他邦に誇るべきものにあらずや。然るに外に對して誇るべき和歌俳句は互に相輕蔑するのみならず、和歌俳句その仲間に於て相反するに至りては遂にこれ國粹を發揮する所以

にあらざるなり。然らば卽ち如何にして之を改良すべきか。曰く、先づ改良の第一着手として和歌俳句の調和を圖らざるべからず。その調和をはかるには先づ和歌の言語に俳句の意匠を用ふるを以て第一とす。和歌の言語とは單に雅言を用ひ、古文法を用ふるの謂にあらず。俳句の意匠とは固より俗情を穿つの意にあらず。一言にして之をいへば三十一文字の高尙なる俳句を作り出さんとするにあるなり云々。

と。三十一文字の高尙なる俳句！　これが當時の子規の主張である。和歌を俳化せしめて、以て墮落の極にある歌道を救はんと志したのである。

この說は後に、主觀と客觀とによつて論爭した左千夫と節との立論を想起せしめる。

又和歌に歐詩の色調を取り入れて、新しい歌の創成を企てた明星派その他の運動を對立的に思ひ出させる。

子規の主張は近年になつてアラヽギが廣く歌壇に行はるゝに至つて、實現せしかの感がある。赤彥氏一派、特に土田耕平氏の作歌等を見れば、三十一文字の高尙なる俳句といふ言葉が思ひ出されることもある。

卽ちこれを形式と內容の問題にあてはめて、考ふるなれば、當時の子規の考へ方は、形式は內

容を支配すべきものにあらずして逆に內容が形式を支配すべきもの、むしろいかなる內容をも或形式に盛り得るものであるといふ無差別論であつた。卽ち俳句の內容をも三十一文字に盛つて成功すべしと考へたのであつた。今の文壇の論爭を以てすれば內容主義の說にあたる。

然るに子規は後には、この主張に疑問を生じ、遂に形式上の差は必然に內容の差を來たすものであるといふに至つた。斯うなればいかなる內容をも三十一文字に盛ることが出來るといふ譯にはゆかなくなる。卽ち歌の形式には歌の內容が伴ひ、俳句の形式には俳句の內容が伴ふ。明かに內容主義を拋棄して、形式主義をとれるものである。

そこで彼は、俳歌(俳句の內容を歌の形に盛れるもの)を排し、俳調を忌むに至つた。この俳調いとふべしなどと、門人の歌の批評の場合などに言つてをるのである。

友人臼井大翼この頃しきりに形式と內容といふ問題について、私に話しかける。この制作上の問題について考へてゐるらしい。これは制作上重要の問題である。私も考へてみたいと思つてゐるが、まだこゝに言ふほど、まとまつて居らぬのは殘念である。

他日を期して考察するであらう。

三　左千夫の言葉

子規のこの思想の變化については、なほ、左千夫が次の如く述べてゐる。參考のために、これも引用して置くことにしやう。

その頃正岡君（左千夫は子規のことを新聞記者等に語るときは正岡君々々といつてゐる）が歌に關する議論の變化ははげしいもので走馬燈の樣でした。昨と今とは全然違ふといふ調子で、議論主張は變るのが當然である、終始一貫などゝは詰らぬ事だと云ふて居られた。

歌よみに與ふる書を發表した時代には俳句も短歌も要するに形式上の差で內容に至つては同一のものであると論じてゐた。それでその頃の歌には、俳句趣味を歌に宿さうとした。否、宿したのもある樣です。それが直ぐ、形式の差は內容の差を伴ふべきものだと呼び、俳調俳歌厭ふべしと罵倒してしまはれたのです。吾々もさう思ふですなあ、同じく詩であつても、俳句は概括的にやつて退ける。和歌は局部々々をうたはふとする、それで俳句では一句で足るのが、和歌では五首も費さなければならぬ事もある。だが五首を一句に盡すから俳句が豪いでもなければ、一句を五首にしたから和歌が劣つてゐるのでもない。詩の價値なるものは全然かゝる數學

的關係を絕して居るのは固よりです。

云々。走馬燈のやうに變つたは、少し言葉が過ぎるであらうが、とにかく、研究心が强く、非常な勉强家であつた子規の世界はひとつ所に停滯してゐるやうな事はなかつた。變化もすれば、從つて進步もしたのである。とくに、未だ草創の時代であり、彼の言說主張には、啓蒙的意義のつよかつた當時として、この事は一層しかく肯定されねばならぬ。

第四章　榮達の宰洲と薄倖の子規

一　郷友勝田主計

餘談をすこし書きつける。

私は今文部省に奉職して、思想問題の調査を擔當してゐる。文部大臣は、御承知の通り、勝田主計氏である。この勝田氏は松山の人で、子規とは同郷の、しかもかつては同じ學校に通ふて、朝夕相共に語り合ふた間柄である。

子規は「筆まかせ」といふ雜筆の中に自分の交友をしるし、

敬友　　竹村　鍛氏

嚴友　　菊地　謙氏

文友　　柳原　正氏

剛友　　秋山　眞氏

高友　米山保氏
少友　藤野潔氏
益友　三並良氏
畏友　夏目金氏
親友　大谷藤氏
直友　新海行氏

など書いてゐるが、中に勝田主計氏を郷友として擧げてゐるのである。同郷にして同學同好の友だつたのである。

このうち、竹村鍛は俳人黄塔、碧梧桐の兄。菊池謙は謙二郎、水戸の人、久しく水戸中學校々長、先年衆議院議員たりしことあり。柳原正は俳人極堂、ホトヽギスの創刊者、今東京中野に住む。秋山眞は眞之、故人、海軍中將たりし人にて、日露戰爭の當時、東郷大將の參謀として、且、皷々相摩の名公報を書いて名を天下に馳せしは人の知る所である。三並良は子規の從弟、哲學者、先頃まで松山高等學校教授たり。夏目金が漱石たることはいふまでもない。

斯うかぞへて來ると、いゝ友人を實に澤山もつてゐるので、羨望にたへないが、更にこゝに言

はんとする勝田主計氏が郷友として之に加はるのである。

この外畫人、文人、政治家、外交官、教育家、僧侶、軍人など、頗多くの友人がある。愚庵や内藤鳴雪や中村不折が友人のなかにゐるかと思へば、陸軍少將現衆議院議員佐藤安之助氏の如きが肋骨と號してまた子規の俳友である。これは門人か。とにかく之等に見ても、その交友のいかに廣かつたかゞ解るであらう。

二　宰洲と子規

勝田氏はかつて再度大藏大臣たり、今は文部大臣であるが、俳句を好み、むかしは明庵と號し、その後宰洲と更めた。子規とは大學豫備門の時代に一緒に遊戯したり、俳句をつくつたりした間柄であつた。宰洲文相はいふ――

明治十九年の暮に自分が初めて東京に出て來て、それから五年目の明治二十三年の元旦に初めて子規を訪ふた。其時子規は相變らず句作に耽つて居つた。元日はめでたい、貴樣も何か一句やらぬかといふやうな話があつて、自分も冗談にそれではやつてみやうといふので一句やつた。其句は今日でも記憶してゐるが

初日の出こゝろにかゝる雲もなし

これが自分の始めての句で、何でも新島先生の和歌から思ひ付いたやうにおもふ。それを子規が見て、これは餘程面白い、一緒にやらうではないかといふことで、自分もッイ賞められたものだから、やる氣になつて數年子規等と共に俳句をやつた。子規は常に簿書堆裏に古人の句を讀破し奇想を凝らした。自分は苟も餘暇あれば山河を跋渉して多く自然的の句をよんだものである。かつて子規と共に上野公園に散歩して居つた。頃は花の盛りと記憶してゐる。五六歳の女の子が母親に手をひかれながら

「お母さん、あんなに花が咲いてるるよ」

と叫んだ。子規は自分を顧みて、あれだ／＼俳句の妙菩にありといつた。子規が俳句に對する理想は此邊にあつたので、今はその聲音が耳にのこつて居る樣な氣がする云々。

勝田氏は明治二十八年に法科大學を卒業して役人になつた。役人で成功して、三度も大臣になつたこと、前記の通りである。俳句は次第に作らなくなつたらしい。尤も酒などの席で扇面や半折などに自作の句を賴まれて書くといふ程度には作つてゐるであらう。

俳友としては、先づこのやうな親しい間柄であつた。

子規は大學を中途でやめて、新聞記者となつた。記者としての手腕を大に發揮したが、病氣のために、物質的には成功しなかつた。成功どころか或時は藥代にも困つた。或る年の如きは大晦日に諸拂ひをすますと、殘すところは五錢にも足りなかつたといふやうな、あはれな生活であつた。

併し彼は業病と貧乏と戰ひ乍らも、文學では大成功をなした。俳句に、和歌に、文章に、彼のなし遂げた貢献は實にエポック・メーキングであつた。わづか三十六歲を一生として、妻もなく子もなく、寂しく死んで行つたが、併し乍ら彼の文學的事業は年と共にその光彩をまして來る。あの尨大な子規全集十五卷を、子規は病苦と戰ひつゝ、書き上げたのである。單にあの分量をみただけでも、頭がさがる。

巨萬の富をつむも偉いし、大臣大將になるもえらい。それをえらくないとは、思はない。しかし、世の中には、人生のもの蔭にかくれて、幽かなる生をいとなみつゝ、斯樣な方面に斯樣な仕事をしてをる人もある。そして報ひられずに死んで行く。これも亦偉いと私は思ふ。子規の仕事の如きは、全く懦夫をして起たしむるに足るとおもふ。

三　二つの運命

勝田氏もさすがに、往年のあの弱蟲の子規が、これほどの仕事をするとは思はなかつたであらう。而も子規をして今日世にあらしめば、彼も亦、昔の俳友明庵が三度も大臣になり、廟堂に立つて政を天下に行ふとは思はなかつたに違ひない。

測るべからざるものは人の運命である。

勝田氏は實に多幸の人である。あべこべに子規位薄倖の人は古來の文人中にも少ないであらう。けれども子規の偉大はその薄倖から生れてゐる。業病と戰ひつゝ、あの貧窮に堪へ、あの孤獨に堪へ堪へた時、そこに恐るべき偉大が生れいでたのである。もし子規が大學病院の特等室に絹布にくるまり、美食して寢てゐたとしたら、決してあのやうな大事業は出來なかつたにちがひない。

藝術家は屢不幸である。乍併、この不幸が屢彼を偉大にすると、西洋の或る哲學者のいつたのは眞理である。

四　財團法人子規庵保存會

根岸（東京市下谷區上根岸町八十二番地）なる子規の舊居をそのまゝに保存し、又公開するために、子規の門人達によつて、財團法人子規庵保存會設立許可願が文部省に提出せられたと聞いてゐたが、先頃許可になつた。その願書には碧梧桐、虚子、鼠骨等門人の名が、いづれも能書家である、それ等の人々の手によつて銘々に自署せられてをる。私も一見したが、中々面白いものであつた。自署の筆蹟は遺憾乍らこゝに掲げることを得ないが、願書の全文を左に寫して置く。何かの參考になるかも知れない。

○

財團法人子規庵保存會許可申請書

今般別紙寄附行爲ニヨリ財團法人子規庵保存會ヲ設立致度候間民法第參拾四條ニヨリ御許可相成度此段書類相添ヱ及申請候也

昭和三年三月十六日

東京市下谷區上根岸町八十二番地
財團法人子規庵保存會設立者

寒川陽光

鑄金科の教授である。五百木氏は飄亭、俳人で、今は日本及日本人の記者である。
正岡律といふのは子規の妹さんで、一生を子規の看護に犧牲にした人である。東京女子職業學校に教鞭をとつてゐたが、今は退いて子規庵を守つてゐる。
さて、正岡家の財産であるが、右の財産目錄によれば、宅地が二萬圓、家屋が二萬圓、書籍が一萬圓、銀行預金が二萬圓、合計金七萬圓也である。七萬圓は必ずしも大金でないが、又必ずしも小額の金圓でもない。實業家になつても、役人軍人になつても、死後七萬圓をのこすことは容易でない。下級の月給取りなどでは夢想にも及ばぬことである。子規庵の餘財としては過ぎたりといふべきであらう。
けれども、子規は生前に於ては、少しもその勞に就て報ひられてをらぬ。大晦日に五錢ものこさなかつたといふ話はすでに述べた。そして死後に於て、この大金を貯へるのである。それも子規に子があり、孫があるなれば、この貯蓄はまだ利用される。それも無い。子規といふ人は死んだ後までも寂しい、氣の毒な人である。
それにしても、有力な門弟を多くもつてゐたといふことは、子規の大きな幸福であつた。

昭和四年三月十八日印刷
昭和四年三月廿一日發行
昭和四年三月廿六日三版

子規と節と左千夫　金二圓七十錢

著作者　東京市外大森八景坂二二九八　橋田東聲

發行者　東京市日本橋區通三の八春陽ビル内　今村隆

印刷者　東京市小石川區諏訪町五六　堀江關武

東京市日本橋區通三ノ八ノ五春陽ビル内
富士書房
電話日本橋五一一

發兌
東京市日本橋區通三ノ八ノ五
春陽堂
電話一五一・六四一
日本橋一三七八八